

---

# 魔法少女リリカルなのは 現代に蘇りし創聖の聖王騎士

蒼妃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 現代に蘇りし創聖の聖王騎士

### 【Nコード】

N2373L

### 【作者名】

蒼妃

### 【あらすじ】

古代ベルカ諸王時代、『創聖の聖王騎士』と呼ばれた女性が居た。名をリヴィアスフィール・ゼーゲブレヒト。古代の英雄の魂は悠久の時を越え、1人の少女に宿った。少女はリヴィアスフィールの名を受け継ぐ。これは英雄の魂を受け継いだ少女、高町なのはの物語。

(注) 作者は文才が皆無で更新は不定期になると思います。

## ブローグ

かつて古代ベルカの国。現代では古代ベルカ戦乱期諸王時代と呼ばれる時代に、武技において最強を誇った1人の女性が居た。

名をオリヴィエ＝ゼーゲブレヒト。

『最後のゆりかごの聖王』と呼ばれた聖王陛下である。

そして、そのオリヴィエを支え、常に背中を守ったオリヴィエの双子の妹が居た。

名をリヴィアスフィールⅡゼーゲブレヒト。

魔導書『創聖の魔導書』を携え、オリヴィエ聖王女の傍に常に存在し、オリヴィエ聖王女を様々な火の粉から守護していた。

古代ベルカの人々はリヴィアスフィールの事を『創聖の聖王騎士』と称した。

しかし、彼女は最後まで姉のオリヴィエを守る事ができなかった。

シュトゥラの霸王イングヴァルトもオリヴィエを止めようと闘いを挑んだ。

イングヴァルトもオリヴィエを止める事ができなかった。

そして、オリヴィエは彼女にこう言った。

『この国が戦で枯れないように……美しい空と自然を取り戻して……』

“美しい空と自然を取り戻す”。それはオリヴィエとリヴィアスフイルが誓った約束であり、2人の願い。

リヴィアスフィールがその願いを叶える事ができたのかは定かでない。

しかし、リヴィアスフィールは泣いた。

大好きだった姉を最後まで護りきる事ができなかったからだ。

ある時、彼女はベルカの国を去って次元世界の放浪の旅に出掛けた。

リヴィアスフィールはベルカで無い次元世界で永遠の眠りについた。

彼女がどんな思いで眠りについたのかは誰にもわからない。

そして、時は流れ、リヴィアスフィールの“魂”はある赤子に宿った。

その赤子の名前は……………■ ■ ■ ■ ■。魔法文化とは無縁の世界に生まれ落ちた者。

これは現代に蘇った『創聖の聖王騎士』が紡いだ物語。

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

始まります。

## プロローグ（後書き）

第4作目となる小説を執筆しました。

これは少し前に書いた小説を書き直した物ですが、私は相変わらず文才が皆無なため大して変わりません。

予定では原作沿いに進んで行く予定です。

## 序章 第1話 出会い

少女は出会う

強き意志をその瞳に宿した少年に。

そして、2人は出会った時物語は始まる。

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

序章 第1話 出会い

とある次元世界。

雪が降り積もり一面が白銀に染め上げられた世界にて1人の少女の命の灯火が消え失せようとしていた。

（ミスった……かな？）

目の前には自分を襲って来たアンノウン兵器。  
いつもならあつという間に倒す事ができる少女だが……

（はは…馬鹿だな、私。

みんなに迷惑掛けたくないから無茶ばかりして……）

少女は自分を嘲笑うように心の中で呟く。

こんな状況になった理由は少女自身にあった。

成長期の真っ只中である幼い身体のキャパを遥かに越えた無茶。  
そんな事を続けて幼い身体に歪みが生じない筈がなかった。

（ごめんね……レイジングハート。私…駄目な主だったね。）

ずっと傍らに付き添ってくれた相棒も主を守るためにその身を削った。

装甲には輝が入り、少女のトレードマークである白い純白の戦闘服  
は自らの血で紅く紅く染まっている。

このまま放置しても出血多量で死に至るだろう。

（あ……目が霞む……。私…此处で死ぬんだ……。）

霞んだ少女の目が捉えたのは、今にも消え失せそうな生命の灯火を  
刈り取るうとする死神の鎌デスサイスだった。

(ごめんね……………みんな。なのは、もう帰れそうにないや。)

「ごめん……………なさい。」

少女は死を覚悟した。

少女はたった12年の人生に幕を降ろされようとしていた。

その時だった。

「謝るなら、生きる事を考えたらどうだ?」

「えっ?」

バーンッ!……!!

男性特有の低い声を少女が聞き取った瞬間、少女の命の刈り取る死神と化していたアンノウンの機械兵がすべて爆散した。

「まったく……君みたいな少女がすぐに命を諦めるもんじゃないぞ？」

【マスターが言っても説得力がないですよ。】

「うるせえぞ、“プトレマイオス”。」

男性……いや、少年の首に掛けられているネックレスから女性の電子音が発せられる。

「まあ、いいや。お前大丈夫か？」

「あつ、はい。（かつこいいな）」

少女の頬はほんのり赤く染まっていた。

「顔が赤いぞ。本当に大丈夫か？」

「だ、大丈夫です!!」

「そうか？ おっと、自己紹介がまだだったな。  
俺はレーヴェンシュルトⅡストラトスだ。お前は？」

「高町。高町なのはです。」

これが高町　なのはとレーヴェンシュルト＝ストラトスの初めての  
邂逅だった。

## 序章 第1話 出会い（後書き）

『冥府の炎王』があるのに書いてしまった……orz。

まあ、（この作品の）ストックがあるからしばらくは大丈夫なんだけどね。

## 序章 第2話 なのはの正体

少女は少年と出会った。

そして、少女が自分の正体を聞く時

物語は加速する。

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

序章 第2話 なのはの正体

（テレビで見た事があつたけど……本当に“エース・オブ・エース”とはな。）

なのはを絶対絶命の危機から救った少年、レーヴェンシュルト＝ストラトスなのはの治療を行いながら、そう思った。

「あの…レーヴェンシュルトさん。」

「レーヴェで良い。みんなそう呼ぶからな。」

「じゃあ、レーヴェさん。レーヴェさんは何で此处に？」

「偶々だよ。」

レーヴェンシュルトは短い返答を返した。

レーヴェンシュルトは本当に偶々、この次元世界に訪れてアンノウに襲われたなのは発見したのだ。

「高町…“リヴィアスフィール”って名前に聞き覚えないか？」

「……！！ どうしてその名前を……！！」

『リヴィアスフィール』という名前に反応するのは。

「（やっぱりか……）高町。リヴィアスフィールという名前に聞き覚えがあるんだな？」

「……………はい。」

なのはが言うには、『リヴィアスフィール』という名前は悪夢の中でなのはが呼ばれていた名前らしい。

五歳の頃から悪夢を見るようになり、年を重ねる事にその頻度は多くなって行ったらしい。

「成る程……な。それはそれとして……近付いて来る魔導師はお前の仲間か？」

「えっ？」

レーヴェンシュルトに言われて視線を向けると10人の魔導師が此方に駆け寄って来ていた。

「あ、教導隊の仲間です！」

なのはは治療が終わっていないのにも関わらず、魔導師の方へ駆け寄って行った。

しかし、その魔導師たちの様子にレーヴェンシュルトは不安を覚えずにはいらなかった。

（仲間というわりには…殺気立っている……！！）

レーヴェンシュルトは思考を強制停止させられた。

後方の魔導師が前方の魔導師の影で魔力をチャージしていたのだ。

そして、矛先を向けられているのは……なのはだった。

「くそっ！！」

【ブリッツアクションー！】

レーヴェンシュルトはすぐさま高速移動魔法を発動させてなのはの

下に急いだ。

私はわけがわからなかった。

助けに来てくれたと思った魔導師に杖を突き付けられ、先端には魔力が集束されている。

レイジングハートの機能が一時的に停止しているからオートプロテクションも発動しない。

それ以前にレーヴェさんに治療されたとはいえ、未だにボロボロな身体ではバリアジャケットすら纏えないだろう。

その魔導師が引き金を弾き、魔法を放った。

【プロテクション！！】

魔導師の魔法を遮ったのは……レイジングハートが張った“虹色の障壁だった。”

「なん……だと……」

俺は驚いた。

高町の下に急いで向かおうとしたが、いかせん距離が離れていた。

そして、魔法を遮ったのはなのはの障壁だった。

しかし、もっと驚いたのは……

「虹色の魔力光……ガイゼル・ファルベ……だと……」

障壁の色が聖王家の証、虹色の魔力光ガイゼル・ファルベだった事である。

【マイスター……！ 惚けてる場合ではありません……！】

プトレマイオスの叱咤によって現実に引き戻される。

「急ぐぞ！！プレマイオス！！」

俺たちは再び駆け出した。

「レイジング……ハート……？」

【はい。間一髪でしたね。】

「ちっ！もう目覚めていたか！！」

「どうして……こんな事を……」

なのはは問い掛ける。

「高町 なのは。貴女が存在していると時空管理局は滅んでしまう。よって、全会一致で貴女に抹殺命令が下されたのですよ。」

「そんな！！」

「死んで貰います。」

10人の魔導師がなのはを抹殺するため、魔法を放つ。

【デイメイションワープ!!】

次元転移魔法が発動し、なのはの姿が消え、なのはを抹殺しようとした魔法はすべて空振った。

「ちっ！しくじったか！」

「まあ、いい。死体はでっち上げれば良いだろう。」

魔導師たちは口々に呟いた。

そして、その魔導師たちの会話を盗み聞きする1人の影があった。

『プトレマイオス、聞いたか？』

【はい。管理局はリヴィアスフィールドの事を知っていたようですね。

」  
念話で会話するレーヴェンシュルトとプトレマイオス。

『ああ。高町の転移した先はわかるか？』

【時間があれば……】

『なるべく急いでくれ。』

【了解しました、マイスター。】

## 序章 第2話 なのはの正体（後書き）

題名に大して意味はない。

そして、さっそく評価してくださった人やお気に入りに登録してくれた人が居ました。

私は感激した！！！！

## 序章 第3話 継承の時（書き直しVer）

少年によって命拾いした少女

そして、少女は出会う。

自らの前世に……

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

序章 第3話 継承の時

絶体絶命の危機から脱却した高町なのは。なのはが目を覚ました時、彼女は何処ともわからない真っ白な空間を漂っていた。見渡す限り広がるのは「無」の空間。音も何もありません。無」。

「此処は……何処……?」

（確か、私はレーヴェさんに助けられて……そうだ!! その後、仲間に殺されそうになって……）

「・・・・・・・・・・は・・・・・・・・・・のは・・・・・・・・・・なのは。」

突然、何も無い筈の空間になのはを呼ぶ声が響く。

「誰?!」

「なのは・・・・・・・・・・やっと会えましたね。いえ、久しぶりですね。」

真っ白な空間を七色の粒子が飛び交い、それらは一つに結合すると一人の人間を形作る。なのはの前に現れたのは美しいハニーブロンドの髪に翡翠と紅玉の虹彩異色——所謂、オッドアイの女性だった。

（私……この人を知ってる……あの夢の中での『私』。そして、私の最初の友達。）

「・・・・・・・・・・リヴィアスフィール。」

「ええ。最近は会ってなかったから、忘れてるかも知れないって思ってたわ。」

「忘れるわけないよ。貴女は私の……一番最初の友達なんだから」

なのはは笑顔で言った。

なのはとリヴィアスフィールが出会ったのは、悪夢に苛まれて精神的に不安定になった頃だ。

まともに会話できたのは過去に一回だけ。それ以外の時は会うことはあってもリヴィアスフィールの声が聞き取れるだけだった。

「貴女を苦しめた悪夢の原因が私にあるというのに、まだ私を友達と呼んでくれるんですね。」

「リヴィアスフィールは好きで悪夢を見させたんじゃないでしょう？なら、私は気にしない」

「……ありがとう。そして、なのは。以前に言った言葉を覚えてますか？」

「うん、覚えてるよ。もう一度話せる時が来たら、貴女にすべてを話す」でしょ？」

“もう一度話せる時が来たら、貴女にすべてを話す”。その言葉はリヴィアスフィールとなのはが友人になった時、リヴィアスフィールが交わした約束だ。

「約束通り貴女にすべてを話しましょう。なのはは幼いころから見ていた悪夢。あの正体は私の記憶です。」

「リヴィアスフィールの……記憶……?」

「はい。貴女の魂と私の魂は密接な関係にあります。なのは、**“輪廻転生”**という言葉を知っていますか？」

「知ってるよ。」

「**輪廻転生**」とは、死んであの世に還った靈魂（魂）が、この世に何度も生まれ変わってくることを言う。ヒンドウー教や仏教などインド哲学・東洋思想において顕著だが、古代のエジプトやギリシャ（オルペウス教、ピタゴラス教団、プラトン）など世界の各地に見られる。（WIKIより引用）

「私の魂は一度生涯を終えました。しかし、何の因果なのか私の魂は貴女の身体に転生しました。つまり、私はなのはの前世ということになります」

「リヴィアスフィールが……私の前世？」

なのは信じられないというような表情を浮かべた。

「これは事実です。だから、なのは私の記憶を垣間見た。そして、貴女は心も身体も成長した。

本当は、なのはにはこんな修羅道を歩んでほしくない。でも、世界は残酷ね」

リヴィアスフィールは悲しそうな表情を浮かべた。

「貴女が魔法に関わった時点でこの運命は決まっていたのかもしれない。だから、私は……」

リヴィアスフィールの身体が再び七色の粒子に分解され、すべての粒子はなのはの身体に溶け込んでいった。

「一体何を……があ、ああああああっっっ！……！！！」

突然なのはが苦しみだした。

（身体が……頭が……こ、壊れる……！）

——お願い！！我慢して！！私の記憶と能力を貴女に献上してるの！——

「う　う　うがああああ！！！！」

四肢を引き裂かれるような激痛がなのはの全身を駆け回る。頭の中も沸騰しそうなくらい大量の情報が一度に叩きこまれる。すると、なのはの身体に劇的な異変が訪れた。亜栗色の髪は美しいハニーブロンドに豹変し、長さも異常に伸びた。瞳も翡翠と紅玉の虹彩異色に変わった。

「はあ・・・はあ・・・」

——ごめん・・・・・・・・。。大丈夫？——

「なんとか・・・・・・・・ね。」

なのはは相変わらず真っ白な空間にゴロリと寝転がった。

「ねえ、リヴィアスフィール。私と貴女は・・・・・・・・もう会えないんだね」

——・・・気付いてたのね。私の魂と貴女の魂は融合して一つになる。——

「・・・・・・・・」

リヴィアスフィールの言葉をなのはは黙って聞いていた。リヴィアスフィールの声は随分と小さくなり、今にでも消えてしまいそうだ。

——会えないけど、私はずっとなのはと一緒に居る。だから、安心して——

「・・・・・・・・うん」

——もう・・・・・・・・時間みたい。じゃあね、『なのは私』——

「・・・・・・・・うん」

リヴィアスフィールの最後の声がトリガーとなって、なのはの意識は再び奈落の底に沈んでいった。

・・・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

ピチャリ ピチャリ ピチャリ

「 ・ ・ ・ ・ ・ つめたい」

冷たい滴がなのはの頬に滴り、なのはの意識を覚醒させた。

なのははゆっくりと身体を起こして周囲の状態と自分の状態を確かめた。リヴィアスフィールのすべてを受け継いだ身体はこの上ないくらいに快調だった。

なのはが眠っていたのは、森の中でもひととき大きな樹木の下。天気は雨。ちょうど樹木の葉っぱが傘の代わりになって雨を退けている。

「リヴィアスフィールと ・ ・ ・ ・ ・ 同じ髪。レイジングハート、鏡を出してくれる？」

【All right】

主の指示に従ってRHは格納空間に量子変換されて保存されていた手鏡を召喚した。

手鏡を持つて、自分の姿を確認するのは。手鏡のミラーに映し出されたのは、リヴィアスフィールドをまったく容姿になったなのはの姿だった。

（予想はしてたけど……リヴィアスフィールドと瓜二つね。）

「レイジングハート、此処は何処なの？」

【ミッドチルダのアルトセイム地方です。マスターの魔力を拝借して、なんとか此処に転移できました。】

「……………」

なのはは右手の指さきに魔力球を生成した。色は桜色ではなく、聖王家の証である虹色。

リヴィアスフィールドのすべてを受け継いだ時になのはのリンカーコアはリヴィアスフィールドのモノと一つになった。RHが《ディメーション・ワープ》を使うために使用した魔力の源は統合前のリヴィアスフィールドのリンカーコアだ。

「取り合えず・・・・・・・・今日は疲れた。レイジングハート、私は少し眠るわ」

【Yes】

なのはは樹木の幹に凭れかかり、静かに眠りに付いた。

「じゃあね、リウイアスフィール私」

完全に眠りに落ちる前になのははそう呟いた。  
そして、完全に眠りに落ちたなのははの目じりに一筋の涙がキラリと光った。

### 序章 第3話 継承の時（書き直しVer）（後書き）

9月1日に書き直しました。次話も書き直します。気長に待っていてください。

## 序章 第4話 秘術、英霊召喚（書き直しVer）

高町   なのはと完全な融合を果たし   現世に舞い戻った聖王騎士

しかし   彼女の居場所は何処にもない。

命の危険と隣り合わせな世界を生き抜くため

聖王騎士は創聖の魔道書を開く。

魔法戦記リリカルなのは   現代に蘇った創聖の聖王騎士

第4話   秘術、英霊召喚

なのは（リヴィアスフィール）SIDE

チュン チュン チュン

「ん・・・・・・・・」

魔法発祥の地、第1世界ミッドチルダ南部にあるアルトセイム地方の森の中に小鳥のさえずりが聞こえてくる。大きな樹木に凭れかかって寝ていたなのは目を覚ました。

【お目覚めですか、マスター】

「レイジングハート、私どれくらい寝てた？」

【10時間ほどです】

（それほど寝てしまったのか・・・・・・・・。どうりで夜が明けるわけね。）

なのはは身体を伸ばして凝り固まった身体をほぐす。

【マスター。起きたなら、此处から移動しましょう。】

「そうね。」

なのははゆっくり立ち上がり、さらに南の方角に進んだ。

・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

森の奥に奥に向かってひたすら歩き続けているとなのはは岩山にぶち当たった。

しかし、切り立った崖のような岩山の麓には岩山の裂け目から流れ出る冷たい水によって湖が形成されている。時折、湖の中でピチャリと音を立てて魚が跳ねる。

「綺麗な湖・・・・・・・・。」

なのはは履いていた靴を脱ぐと湖に足だけをつけた。湖は意外に深

く、なのはの足の長さでは底に着かない。そして、湖の冷たさがじわじわとなのはの身体に滲み渡る。

【これからどうするつもりですか？】

「さあ、ね。私には……帰る場所はないわ」

（そう、私には帰る場所はない。そして、生きる意味も……。まずは生きる意味を見つけることから始めないといけないわ。）

「おいで、創聖の魔道書」

なのはが呼びかけるとなのはの身体と完全に融合していた“創聖の魔道書”が姿を現した。

白いハードブックカバーの分厚い本。表紙には銀色の剣十字が装飾されているその本は、この世のすべての魔道書の原典と謳われる世界最古の最強の魔道書。

現在、存在が確認されている「夜天の書」のオリジナルであり、管理局では最上級のS級ロストログに指定されている。だが、なのはの身体と融合しているため、回収するのは絶対に不可能だ。

「創聖の書、私の剣を」

【J a】

創聖の魔道書のページがパラパラと捲られてちょうど半分を開くような形になる。

そのページから幾何学模様の魔法陣が浮かび上がり、赤黒い柄が飛び出す。なのはは湖から足を出すとその柄を引っっこ抜いた。

「煉獄の魔剣……レーヴァテイン」

なのはが召喚したのは柄に黒いテープが巻かれた西洋剣だ。刀身は1m近くあり、中心の赤黒いがラインが通っており、刀身自体は鮮血のように鮮やかな赤色。なんとも禍禍しい感覚のする剣だが、なのははその剣を愛おしそうに撫でた。

“煉獄の魔剣 レーヴァテイン”。真名は「すべてを浄化する魔剣」。

北欧神話においてラグナロクの際にスルトが振るったとされる伝説の魔剣。創聖の魔道書よりも太古に存在し、一振りで世界一つを焦土に変えるほど強大な力を宿している。

【レーヴァテインを召喚して何をするのですか？】

「創聖の魔道書の主だけが使うことを許された生涯に一度しか使え

ない秘術を使うわ。」

【“英霊”を………召喚するのですか？】

RHの確認するような言葉になのははっきりと頷いた。すると、なのははポケットから黒いリボンを取り出した。それはなのはの親友との友情の証であるリボンだ。そして、なのはは何を思ったのか大切なリボンをレーヴァテインの焔で焼却した。

「これで私は“高町 なのは”としての絆を失った。でも、それでもいいわ。

私はリヴィアスフィールⅡゼーゲブレヒトとして、新たな絆を作り上げるだけだから」

【………私はいつまでもマスターに付いて行きます】

「ふふ、ありがとう、レイジングハート。」

前世からずっと仕えて来てくれた心強い相棒になのは………いや、リヴィアスフィールは感謝した。

「さあ、儀式を始めるわよ」

（たっぷり寝たおかげで魔力は完全に回復した。これなら……）

リヴィアスフィールは右手に創聖の魔道書を持ち、左手にレーヴァテインを握った。

創聖の魔道書の一番最初のページが引き千切れて、千切れたページがゆらゆらと舞ってやがて地面に落ちる。その刹那、5枚の円で構成された魔法陣が地面に浮かび上がった。

「我、創聖の魔道書の主也

古の時代に刻まれし秘術を此処に使用する」

リヴィアスフィールが詠唱を始めると地面に浮かび上がった魔法陣が青白い光を放ち始めた。

「英霊の座に存在する英霊よ

我が声に応えるなら 今此処にその姿を現し給え

我はリヴィアスフィール〃ゼーゲブレヒト

古の聖王の血を受け継ぎ者也!!」

リヴィアスフィールの魔力がこっそりと持っていられる。それと引き換えに魔法陣をゲートにして二人の人物が姿を現した。

一人は白く動きやすい衣装をその身に纏った少女。外見は15歳くらい。

両腰に鞘に入った長剣を一本ずつ携えており、髪はリヴィアスフィールよりも少し濃いめのハニーブロード。

もう一人は黒いゴシック調の衣装に身を包んだ幼女。髪の色はグレイに近い銀色。

「セイバー、呼びかけに応じ参上しました。」

「同じくキャスター、マスターの呼びかけに応じ参上しました。」

「.....」

リヴィアスフィールは召喚されたのが意外すぎる人物なので驚いて酸欠状態の金魚のように口をパクパク開閉させていた。

「「お久しぶりです、マスターリヴィアスフィール」」

リヴィアスフィールが召喚したのは、前世に置いて古代ベルカの戦場を駆け抜けたパートナーだった。  
召喚された人物に驚きを隠せなかったが、リヴィアスフィールは素直に喜んだ。

「まさか貴女たちが召喚されると思わなかったわ。」

【お久しぶりです。アルトリアにナーサリーライム】

「はい。再び見えることになると思いますでした」

『秘術 英霊召喚』

創聖の魔道書の主が生涯に一度だけ使用することができる儀式魔法。創聖の書を通じて“英霊の座”にアクセスし、マスターとの相性が良い英霊を現世に召喚する魔法だ。ただし、“英霊”たちは創聖の魔道書を通じて座よりマスターを見ているので必ずしも英霊が召喚できるわけではない。

そして、“英霊”というのは過去に世界を動かすほどの偉大な功績を持った人物のことだ。（一概にそうとは言えない）セイバー・リイのように普通の人間が英霊にあることやナーサリーライムのように人々の思いが固まって英霊となる時もある。

「それにしても、管理局も腐ったものね」

ナーサリーライムは呆れたように呟いた。

「先代創聖の魔道書の主の頃はまともだったのにね。何であそこまで歪んじゃったんだろ？」

「アリス、組織というものはそういうものです。いつかは腐敗して瓦解するのがこの世の理です。」

創聖の魔道書は自分を扱う資格がある者をランダムに仮マスターに選ぶ。そして、その仮マスターが自分の力を悪用しないとわかったら、正式な主として全機能が開放される仕組みになっている。

管理局員が一度マスターになったらいいが、その人物はかなり良識のある人物だったようだ。

「まあ、安心してよ。マスターに手を出してきたら、私とその友達が喰い尽くしてあげるから」

可愛らしい笑顔と裏腹にかなり物騒なことを宣言するナーサリーライム（愛称：アリス）。

アリスは敵対する者に関しては容赦なく殲滅する。逆に味方は決して見捨てないという少女だ。

前世においてもアリスは王であるオリヴィエを守るために命を投げ

出そうとした兵士を助け出したこともある。

「このアルトリア＝ペンドラゴン、再びこの二振り聖剣を主に預けましょう」

「ええ。再び共に闘いましょう」

リヴィアスフィールとアルトリアは握手を交わした。  
今ここに300年近い年月を越えて“創聖の聖王騎士”、“可憐なる純白の騎士姫”、“幻獣を従える魔女”は再び集まった。

## 序章 第4話 秘術、英霊召喚（書き直しVer）（後書き）

前作を大幅に改訂。なのは（リヴィアスフィール）が召喚したのは、セイバー・リリイとFateExtraのキャスターです。ちなみに、容姿はそのままですが、性格等一部変わっています。

## 序章 第5話 闇（前篇） \*書き直しVer

魔法戦記リリカルなのは 現代に蘇った創聖の聖王騎士

### 第5話 「闇」

秘術 英霊召喚を使用して前世のパートナーであるアルトリアとアリス（ナーサリーライム）を“英霊の座”より召喚したリヴィアスフィール。さらに、「高町 なのは」としての絆もすべて焼き払った。

秘術 英霊召喚は使用する際に膨大な魔力が感知される。いくら管理局地上本部から離れたアルトセイム地方でも膨大な魔力反応を管理局が見逃すはずがない。そう判断したリヴィアスフィールたちはアルトセイム地方をさらに南下していた。

「マスター、これからどうするおつもりなのですか？」

「まだわからないわ。今はベルカの戦乱期でもない平和な時代だし・・・このまま姿を晦ますのもいいかもしれないわね」

「聖王教会に庇護してもらわないの？あそこはオリヴィエさんを信仰してるし」

聖王教会とは、いくつもの次元世界に支部を持ち、古代ベルカの戦乱を終結させた聖王オリヴィエを神と崇める宗教組織である。その規模は管理局に劣るものの次元世界への影響力は絶大でその影響力を恐れているのかわからないが、聖王教会と管理局は同盟関係にある。

一見すれば、この上にならない最善策だ。リヴィアスフィールはオリヴィエの双子の妹。聖王教会に快く迎え入れられるだろう。しかし、アリスの提案にリヴィアスフィールは首を横に振った。

「もし、聖王教会に保護して貰ったら、権力闘争に巻き込まれるのは目に見えているわ。味方が居るならまだしも、孤立無援状態でそんな場所に行くのは得策じゃないわ。」

「そっか。いいアイディアだと思ったんだけど・・・」

「それに私は王よりも騎士の方が性に合います」

（（変わらないな））

アルトリアとアリスは同じことを思った。300年前も次の王をオリヴィエとリヴィアスフィールのどちらにするか意見が分かれたことがあったが、その時もリヴィアスフィールは「私は王よりも騎士の方が性に合います」と言っ、自ら王位を捨てたこともある。そんな300年前とまったく変わらないリヴィアスフィールにアルトリアとアリスは思わず頬を緩ませた。

「それにしても……森から中々抜けられないわね」

【アルトセイム地方の全様は管理局すら把握できていないことで有名ですからね】

ミッドチルダ南部に当たるこのアルトセイム地方はそのほとんどが森に覆われている。

管理局も度々アルトセイム地方の森の調査に乗り出しているが、森に住む魔物によって調査隊が何度も撃退されている。それゆえに、管理局もこの森の全様を把握することができない。

ガサガサ　ガサガサ

茂みが揺れ動く音を聞いたリヴィアスフィールたちは足を止めた。その刹那、茂みから三匹の狼が一斉に飛び出してリヴィアスフィールたちに襲いかかって来た。

「手を出す必要はない」

リヴィアスフィールは剣を抜こうとするアルトリアを制した。代わりにリヴィアスフィールは右腰に携えたレーヴァテインを抜刀した。

ザシュツ

抜刀と同時に一匹の狼の胴体を切り裂いた。レーヴァテインで付けられた傷口から黒い炎が立ち上り、狼の死体を焼く。

「霸道炎帝斬」

再びレーヴァテインを振るつ。レーヴァテインから放たれた焔が残りの狼を焼き尽くした。

「ん。身体の方も本調子に戻った」

レーヴァテインを鞘に戻すリヴィアスフィール。そして、リヴィアスフィールは真っ先に殺した狼の死体に近づいた。狼の死体はレーヴァテインの焰でメラメラと燃えていた。

「どうかしたの？」

「この狼、爪に血が付いてた」

リヴィアスフィールは狼の爪を触る。すると、指先に血液が付着した。

「しかも、動物じゃない。多分、人間。それにまだ乾き切ってない。」

【この森に訪れる命知らずが居るとは思えませんが……………】

「ええ。しかも、こんな森の奥まで来れるわけがないわ」

その刹那、狼の死体はレーヴァテインの焰によって焼却された。そして、再びガサガサと茂みが揺れ動いた。

（獣の気配じゃない。人の気配・・・・・・・・管理局？）

「マスター、気をつけてください。」

アルトリアはカリバーンを抜いてリヴィアスフィールの前に出た。  
アリスも魔法書を開いて、いつでも魔法を使えるようにスタンバイしている。

ガサガサ

「う・・・・・・・・あ・・・・・・・・」

「「「!」」」

茂みの中から出てきたのは、黒曜石のような輝きを放つ美しく長い黒髪を持つ少女だった。

だが、片目には大きな引つかき傷があり、未だに血が流れている。  
着ている衣服も病院患者のような衣服で真っ赤に染まり、ぼろぼろになっている。

「おねが．．．．い、たすけ．．．．て」

黒髪の少女はそれだけ言い残すと突然倒れ込んだ。

リヴィアスフィールたちはすぐに駆け寄り、少女の脈を確認する。弱っているが、少女の身体はきちんと脈を打っていた。リヴィアスフィールはひとまず安心するが、すぐに治療が必要なのに変わりはない。

「検索対象、治癒魔法。検索開始！！」

【Ja】

創聖の魔道書がリヴィアスフィールの傍らに出現し、パラパラと自動的にページをめくる。

最古の魔道書には、古今東西の魔法の術式が記録されている。中には太古の昔に姿を消した魔法系統も記録されており、その情報量は膨大だ。しかも、検索機能付きで魔力を注ぐだけで魔法が発動する。

【検索結果、13件の魔法がヒットしました。】

「絞り込み検索、一番回復力が高い治癒魔法を」

さらに絞り込むと一つの魔法が検索に引っかった。リヴィアスフ  
イールはすぐにその魔法を発動させる。

「聖なる癒しの力を “ キュア ” ！！」

少女の下に魔法陣が展開され、無数の白い光の粒子が舞い、少女の  
身体に吸い込まれていく。

白い粒子が少女の傷口を内側から塞いでいく。瞬く間に少女の怪我  
は完治した。

「んあ……………」

「ふう……………大丈夫？」

「なんとか、大丈夫です」

少女は立ち上がろうとするが、血を大量に流していたために身体が  
左右に揺れる。

「おっと……………」

倒れそうになる少女をアルトリアが後ろから優しく支えた。

「ありがとうございます」

「回復した直後で悪いが、どうしてこの森の居る？」

「わからない。研究所から逃げ出してきたから……」

少女の言葉にリヴィアスフィールたちの顔が陰しくなった。

「貴女、名前は？」

「被検体N O・13番。研究所でそう呼ばれた。」

『二人ともどう思う？』

少女の名前を聞いたリヴィアスフィールはアルトリアとアリスに思念通話を繋げた。

『少なくとも真つ当な研究を行っている可能性は低いでしょう』

『私もアルトリアに同感。人を被検体呼ばわりする研究所がまともなわけではない』

「ねえ、その研究所はどこにあるの？」

「ここからちょうど北東の方角」

「そう。ありがとう。そして、おやすみなさい。」

——蒐集——

創聖の魔道書がページを開く。すると、惚けている少女が光の粒子に分解されて魔道書の中に吸収された。

「さあ、行こうか。」

「はい。」「りょくかい」

・・・

・・・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

数分後、北東の方角に向かって森を駆け抜けけると白い壁塗りの建物が見えた。

「アルトリア、前衛をお願い。私とアリスは後衛。」

「我が聖剣に掛けて主の下には蟻一匹通しません。」

「創聖の魔道書、私の騎士甲冑とACデバイダーとACリアクターを」

虹色の魔力がリヴィアスフィールの身体を包み込み、騎士甲冑を形成する。

リヴィアスフィールの甲冑は赤色を基調にした衣装で一見するとドレスのようにも見えなくない。（赤セイバーの衣装を思い描いてください）

さらに、リヴィアスフィールの両手には？という刻印が刻まれた黒と銀のガンソードとナイフのような赤い短剣が握られていた。

「エンゲージ」

そして、あろうことかリヴィアスフィールは右手にもった短剣で自分の左手の甲を傷つけた。

序章 第5話 闇（前篇） \*書き直しVer（後書き）

霸道炎帝斬…テイルズシリーズの魔王炎撃波の強化版。範囲が広い。  
キュア…テイルズシリーズより

序章 第6話 闇（後篇） \*書き直しVer

魔法戦記リリカルなのは 現代に蘇った創聖の聖王騎士

第6話 闇（後篇）

「エンゲージ」

リヴィアスフィールは突然、右手に持ったACリアクターと呼ばれる短剣で自分の左手の甲を傷つけた。

傷口から赤い鮮血が流れて左手にもったACディバイダーに向かつてゆっくりと血が流れていく。そして、リヴィアスフィールの血がACディバイダーに触れた瞬間、魔力の奔流が巻き起こった。その魔力の奔流が収まるとそこには身の丈以上の西洋大弓を持ったりヴィアスフィールが居た。

「ガンディーヴァ・アポカリプス」

リヴィアスフィールが持つ大弓は騎士甲冑と同じ鮮やかな赤色で統一されており、双剣を繋げたような形をしている。

「じゃあ、私が入り口を作る。アルトリア、敵はカリバーンで応戦して。“切る”対象は――」

「わかっています」

アルトリアは右腰に携えられたカリバーンを抜いた。

「アリスも準備はいいわね？」

「もちろんです。」

アルトリアとアリスの準備が終わっていることを確認したりヴィアスフィールはAC兵器No.？『ガンディーヴァ・アポカリプス』の弦を力づくよく引つ張り、弓を射るような姿勢を取った。すると、虹色の魔力が集束して一本の細身の剣を作り出す。

「穿て」

魔力で構成された剣を穿つ。穿たれた剣は研究所の扉に刺さると同時に魔力爆発を起こした。  
突然の襲撃に研究所内にけたたましいアラートが鳴り響く。

「突入する」

リヴィアスフィールたちは研究所に突入した。

・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

研究所に突入したリヴィアスフィールたちは当然のように警備担当の管理局員に攻撃を受けていた。  
しかし、歴戦の古代ベルカの騎士たちはそんな攻撃をもろともせず、先に進んでいく。

「バースト・アロー」

リヴィアスフィールドの放った矢が管理局員の魔法弾を焼き尽くす。

「はあああああ!!」

ヒュンッ!!ヒュンッ!!ヒュンッ!!

アルトリアは前に出て警備に当たっていた管理局員を切り伏せる。しかし、管理局員に傷はなく、意識だけを刈り取られていた。カリバーンが心臓に突き刺さっていたのにも関わらず。

「それほど警備が厳重というわけでもなさそうです」

「边境の土地だから襲われないって鷹を括ってるんじゃないの」

「あるいは管理局がバックに付いてる……とかね」

リヴィアスフィールたちは会話しながらも研究所の通路を駆け抜ける。  
道案内板など存在しないが、リヴィアスフィールの直感で先に進んでいく。しかし、分かれ道を間違ったようで通路の先は行き止まりだった。

「仕方ない。急いで戻るよ。」

リヴィアスフィールの言葉にコクリと頷いて三人は来た道を逆走する。

しかし、その道を魔力駆動の機械兵が立ちはだかった。巨大な身体を六本の足で支えてあちこちに重火器を搭載している。

【管理局は質量兵器を禁止していたはずですが………】

「そんなのは此処の研究者に聞けばいい。」

リヴィアスフィールは深く息を吸い込んだ。

「マギリンク・ディバイド!!」

リヴィアスフィールは大声でガンディーヴァ・アポカリプスの機能

を開放した。弦が振動して美しい音色を奏でる。  
その刹那、リヴィアスフィールたちの前に立ちはだかった機械兵たちは次々に倒れて機能を停止した。

「便利な力ですね。 “魔力結合分断能力”は」

「それこそがAC兵器の力だからね」

リヴィアスフィールが持っている“ガンディーヴァ・アポカリプス”はAC兵器（正式名称：apocalypse weapon）と呼ばれる特殊な兵器だ。

ディバイダーとリアクターをそろえることで真の力を発揮し、固有能力を発現させる。刻印No.？？？までの個体が存在し、そのすべてが魔力結合分断能力を持っている。さらに、？？？の個体それぞれに魔力結合分断能力とは別の固有能力を持っている。

“ガンディーヴァ・アポカリプス”の固有能力は射たモノを爆発物に変える能力だ。

「この音を聞いた人間はしばらくの間魔力を結合することができないわ。」

今のうちに最深部まで突破するわよ！！」

動かない木偶の坊となった機械兵を飛び越えて再び分岐ポイントまで戻って来た。

当然、三人は先ほどとは反対の通路を選択した。

「この建物、見かけ以上に中が広いですね」

「最新の空間圧縮技術を使ってるのよ。だから、見かけは信用ならないわ」

（だけど、空間圧縮技術を使うには多額の費用が居る。そんなお金を個人経営の研究所が出せるとは思わない。何か大きな組織が裏で糸を引いているはず）

リヴィアスフィールは頭の片隅でそんな予想を立てていた。そして、その予想は見事にヒットすることになる。

.....

.....

.....

.....

リヴィアスフィールが「マギリンク・ディバイド」を放った後の警備は何とも軽いモノだった。

魔法が使えないと何もできない警備兵たちはリヴィアスフィールたちの姿を見ると同時に狼狽して逃げ出す者さえいる始末だ。

リヴィアスフィールたちは逃げる者については特に手を下さず、向かってくる愚か者だけを相手した。

そして、研究所に突入してから約20分。

「この先が最深部なんだな？」

「あ、ああ！！だ、だから解放してくれえ！！」

最深部にたどり着く道順でリヴィアスフィールは警備兵の一人を鹵獲。研究所の内部を案内させたのだ。

必死に命乞いする警備兵をリヴィアスフィールは素直に解放した。解放された警備兵はすぐに逃げ出そうとする。

「アルトリア」

「はい。」

敵に背後を見せて逃げ出す警備兵をアルトリアはカリバーンで背後から突き刺した。

「安心しろ。記憶を切っただけだ。」

カリバーンを引き抜くと警備兵はそのまま倒れ伏した。

アルトリアの二振りの聖剣の一本、カリバーンには特殊な能力がある。それは担い手が指定したものしか切れないという摩訶不思議な能力だ。アルトリアはこの研究所の警備兵の記憶のみを対象にしているため、死人はゼロ。怪我人も皆無に近い。

「アリス」

「はいはい」

アリスが前に出て最深部への扉に左手を付ける。そして、逆の右手で魔法書を開く。

「魔法に対する仕掛けはなし。じゃあ………繋がれ」

アリスの魔法が発動し、最後の守りの壁は無効化された。簡単にいえば、扉の外側と内側の空間を繋げたのだ。扉に出来た黒い穴を通れば、その先は最深部。

「流石ですね、アリス。」

「これくらいお安い御用さ」

「マスター、先に急いだ方がいい。首謀者が逃げてしまつかもしれない」

「そうね」

リヴィアスフィールたちはアリスが開けた扉を通って最深部に突入した。

▼  
▼  
▼  
▼  
▼

「くそっ！！急がなければ！！」

最深部部屋では白衣を着た男性がコンピューターを必死に叩いていた。

あまりにも必死過ぎてリヴィアスフィールたちが最深部に侵入してきたことにまったく気が付いていない。

チャキッ

「動くな」

「!!」

アルトリアは背後からカリバーンを突き付けた。

「さて、ここの研究所で何を行ってたの？」

「正直に答えないと………殺すよ？」

アリスは笑顔でかなり物騒なことを宣告する。その右手にはバチバチと魔法の高圧電流が火花を散らしていた。

「こ、この研究所では………せ、生体兵器の研究を行っていた。」

“生体兵器”という言葉にリヴィアスフィールたちは敏感に反応した。

「Project F・A・T・Eによって生み出したクローンにナノマシンを埋め込み、主人の命令に従順に従う兵器を生み出すつもりだったのだ！！お前たちが邪魔しなければ・・・・私の世紀に残る大実験は成功するはずだったのに！！」

「・・・・・・」

激昂する男性研究者。リヴィアスフィールドは無言でレーヴァティンを抜き放った。

禍禍しい魔剣の刀身に黒い炎が纏う。そして、リヴィアスフィールドはレーヴァティンを振るった。

黒い炎は蛇のように形を変えて、男性研究者に襲いかかった。

「ぎゃあああああ！！！！」

「浄化の焰の中に消え去れ！！」

大きな叫び声を上げて男性研究者は浄化の焰に吞まれて消滅した。焰が収まった後に残ったのは焼け焦げた床だけ。

「ふん」

男性研究者が完全に消滅したことを確認するとレーヴァティンを鞘

に戻した。

「レイジングハート、この研究所のメインコンピューターにハッキングしてくれる？」

【All Right】

リヴィアスフィールの命令に従い、RHはメインコンピューターにハッキングを開始した。  
ハッキングはデバイスであるRHの出番なのでリヴィアスフィールたちはしばらく待つことにした。

「マスターよ、あの少女はどうするつもりだ？」

「拾った手前捨てるわけにはいかないわ。だから、自立できるまで私が育てるわ。」

「でも、お金とかどうするの？」

「創聖の魔道書には錬金術も記録されてるから、それを宝石に変えて質に出せば大丈夫でしょう」

「その前に住む場所を探したほうがいいと思います。」

アルトリアの意見ももつともだ。いくらリヴィアスフィールドでもウィルスや風邪には勝てない。

そのため、最低限でも雨風のしのげる場所が必要となる。

「そうね。研究所を出たら、住む場所を探しましょう。」

【マスター。ハッキングに完了しました。いくつかのデータが削除されていましたが、ほとんどのデータが残っています。】

「ありがとう」

リヴィアスフィールドは椅子に座り、研究所のメインコンピューターを操作し始めた。

RHの言うとおり研究内容に関するほとんどのデータが削除されていたが、いくつか重要なデータが残っていた。

「この実験の成功例は被検体番号13のみ。しかし、13番目は能力を使って脱走。追跡隊を出すか、森の魔物にやられて壊滅。」

「妥当に考えて12人の子供が実験材料になって死んだことになるね」

「胸糞悪いですね」

アルトリアの言葉にリヴィアスフィールとアリスは頷いた。さらに、データを読み進めていくが、残りはかなり下劣な内容の日記だったのでリヴィアスフィールは飛ばした。

そして、実験の概要は削除されていたが、リヴィアスフィールが一番知リたかった情報は辛うじて残っていた。

“ 計画提案及び資金提供、管理局最高評議会。なお、この計画は上層部も承認 ”

そうデータに表示された。Rh曰く、「改ざんされた形跡もなく、十中八九真実」。

その情報を見た瞬間、リヴィアスフィールは思いつきリディスプレイを殴った。

「・・・・・・・・」

リヴィアスフィールは急に立ち上がると部屋の右側を扉を開けた。すると、気持ち悪い死臭がリヴィアスフィールの鼻に届いた。扉の先に居たのはもの言わぬ肉塊に成り果ててしまった被検体の失敗作たちだった。

後からついてきたアルトリアもアリスも顔をしかめた。うめき声が

聞こえることから察するにまだ意識がある被検体も居るようだ。

「今、楽にしてあげるわ」

リヴィアスフィールは再びレヴァティンを抜いた。そして、レヴァティンの浄化の炎を圧縮して一気に解放。瞬く間に火は失敗作処理場を包み込んだ。

その時にリヴィアスフィールの耳に「ありがとう」と囁く声が聞こえたような気がした。

「アルトリア、アリス。私、決めた。」

燃え上がる業火を見つめながらリヴィアスフィールは決意した。

「管理局を……完膚無きに叩き潰す。これ以上無駄な犠牲を作り出さないために」

リヴィアスフィールは両手をぎゅっと握った。すると、右手をアリスが、左手をアルトリアが優しく包んだ。

「マスター、私はマスターのサーヴァントです。」

「リヴィアの命が尽きるまで一緒に戦い続けるよ」

「……………ありがとう、私の最高のサーヴァント（パートナー）」

この日この瞬間、リヴィアスフィールは管理局と敵対することを決めた。

これが世界に激震を走らせる大事件の予兆になることは誰も知らなかった。

## 序章 第7話 名前と新生活（書き直しVer）

魔法戦記リリカルなのは 現代に蘇った創聖の聖王騎士

### 第7話 「名前と新生活」

研究所を制圧し、非人道的実験の実験材料として命を弄ばれた子供たちを吊った後、リヴィアスフィールは研究所のデータをすべて削除してアルトセウム地方の森を南下していた。そして、ひととき大きな湖にたどり着くとひとまず休憩をとることにした。

#### 「創聖の魔道書、解放」

リヴィアスフィールの命令に従い、創聖の魔道書に蒐集されていた少女が再構築された。

衣服は相変わらずぼろぼろだが、傷は完全に癒えていた。しかし、狼に切り裂かれたであろう右目の傷と視力まで回復できず、痛々しい傷跡が残っている。

「良い夢は見れた？」

「はい。とっても幸せな夢を見ました」

少女は穏やかに笑みを浮かべた。

創聖の魔道書は蒐集した者を精神的にも肉体的にも癒す効果を持っている。ゆえにリヴィアスフィールは少女を創聖の魔道書に蒐集したのだ。

「貴女が居た研究所は私たちが潰してきた。これで貴女は自由だ」

「自由………」

「そこで自由になった君に提案があるの。私たちと一緒に来ない？」

「えっ？」

少女は突然の提案にきよとした表情を浮かべた。

「別に強制はするつもりないわ。一緒に付いてくるなら、自立できるまで貴女を育てるつもりよ」

「……………一緒にいきます。私には、それ以外の選択肢がありませんから」

少女は少し考えた後、すぐにそう返答した。

わずか数秒で自分の状況を把握できるほど状況判断能力は年不相応に高いようだ。ちなみに、少女の見た目は9歳前後だ。

「じゃあ、貴女に名前をあげる。いつまでも名無しは可哀想だから」

「なまえ……………?」

「そう。貴方の名前は……………オルセルグ。意味は無垢なる者」

「オルセルグ……………私の名前……………」

「気に入らなかった?」

リヴィアスフィールの質問に少女はプルプルと首を横に振った。  
この日、被検体N o . 13と呼ばれていた少女はオルセルグと名前  
を変えた。

「さすがにその服は可哀想だから……………」

リヴィアスフィールは虚空から「練鉄の英雄」の絵が描かれた長方  
形のカードを取り出した。

「インストール  
夢幻召喚」

リヴィアスフィールがそう呟くとカードから白銀の光の粒子が舞い、  
リヴィアスフィールの身体に吸い込まれていった。

「投影、開始」

リヴィアスフィールは静かに呟いた。

刹那、虹色の粒子が飛び交って一つにまとまり、物質化される。

リヴィアスフィールが作り出したのは、黒を基調とした一式の衣装  
だ。虚空から作り出した衣装をオルセルグに手渡す。

「魔力で編んだ衣装だけど、消滅することはないから、安心してい  
いわ」

「あ、はい。」

オルセルグはリヴィアスフィールが創造した衣装を片手に森の中に入る。

リヴィアスフィールが使った「夢幻召喚<sup>インストール</sup>」というのは、創聖の魔道書の主全員が使える能力で“英霊の座”に居る英霊が持つ能力や宝具を一時的に使用可能にする能力だ。

リヴィアスフィールが使用したのは、「練鉄の英雄エミヤ」の投影魔術だ。この魔術はゼロから物質を作り出すという性質を持っており、創造した物質は永遠に消滅しない。

「ついでだから………小屋も作っておこうか」

「リヴィア、私も手伝う」

「お願い。私一人の力で小屋を作り出すのは無理だから」

・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

「着替え終わりました」

森の中で着替えを終えたオルセルグが戻って来た。

周りに森しかなかった湖のほとりに少し大きな木製の小屋が建てられていた。

「お帰り、オルセルグ。よく似合ってるわよ」

「あ、ありがとうございます」

今のオルセルグの姿は黒いトンがり帽子に白い長ズボンと長袖の黒いローブという何処からどう見ても魔女にしか見えない姿だ。

「あの・・・・・・・・こんな小屋、さっきまでなかったですね？」

「ええ。私とアリスで作ったの」

「作ったんですか!？」

オルセルグは驚いた。短時間でそれなり立派な小屋を作ったを言われたら、誰でも同じ反応を示すだろう。

「古い魔法だよ。世界には色々な魔法体系がひっそり生き残ってるからね」

「は、はあ……………」

「じゃあ、私とアルトリアは少し森の中に入ってくるわ。オルセルグはアリスと一緒に留守番しててね？」

「あ、はい」

オルセルグが了承したのを確認するとアルトリアとリヴィアスフィールは食料集めに森の中に入って行った。

「ふっ」

ガンディーヴァ・アポカリプスで木の実を的確に撃ち落とすリヴィアスフィール。  
落下地点には魔力でネットを張り、木の実が傷まないように受け止めている。

「次は……そこ!!」

矢を樹の枝に向かって放つと見事に少し大型の鳥を射抜いた。射抜かれた鳥は枝から落ちていくが、魔力のネットが優しくキャッチする。

「さてと、これくらいあれば、十分かな？」

「マスター、こっちも獲物を捕えた」

森に入り、リヴィアスフィールと分かれて食料集めに奔走していたアルトリアが合流した。その手には少し小ぶりなイノシシが握られていた。

「ん、御苦労さま。これくらいあれば、今日と明日は持つと思うから小屋に戻るよ」

「はい。」

リヴィアスフィールは投影魔術で作り出しておいた布に採った木の実を包むとアルトリアと共に小屋に向かって歩き始めた。

「レイジングハート、今日制圧した研究所のデータの中に他の研究所のデータがあるって言ってたよね？」

【はい。どこの研究所も胸糞悪い研究しか行ってますが。】

「小屋を建てた場所の付近に研究所はあった？」

【少し待ってください。座標を照らし合わせます】

「研究所があつたら、すぐにでも制圧に向かいますか？」

「そうね。今日は無理だけど、明日にでも制圧に向かうわ」

「・・・・・・・・時代が変わっても人間のやることは変わりませんね」

アルトリアは悲しそうに呟いた。

古代ベルカの時代より人体実験は存在していた。前世においてリヴィアスフィールたちはそんな実験所を片っ端から壊滅させてきたことで有名だ。

「仕方ないわ。絶対的権力を維持するのは並大抵のことじゃないのだから」

アルトリアとリヴィアスフィールがそんな会話を交わしている間に二人は森を抜けていた。

▼  
▼  
▼  
▼  
▼  
▼

同時刻。

リヴィアスフィールが壊滅させた研究所に一人の少年が訪れていた。碧銀の髪を持ち、両手には黒耀石のような黒さを持つガントレット

を装備している。  
間違いなく高町　なのはを助けたレーヴェンシュルト＝ストラトスだ。

「ちっ、遅かったか」

【すいません。私の感知が遅れたばかりに……………】

「お前のせいじゃねえよ、プトレマイオス。それにしても、この手早い行動をみる限りリヴィアスフィールとして完全に覚醒したらしいな」

【そのようですね。感知できる魔力反応も高町　なのはとまったく一致しません】

「取り合えず親父に連絡しておくか。プトレマイオス、通信を繋げてくれ」

【わかりました】

主の命令に従い、実家に居るであろう主の父親に通信を繋げるプトレマイオス。  
数回のコール音の後、目的の人物が通信に応じた。

「どうした、レーヴェ。旅の途中じゃなかったのか？」

空間投影型通信画面に映し出されたのは、レーヴェンシュルトと同じ碧銀の髪を持ったダンディーな男性だった。

「そのつもりだったんだが……とんでもない奴に会ってな」

「誰だ？」

「リヴィアスフィール本人だ。魂が輪廻転生して完全に蘇った」

「……それは本当か……！」

【間違いありません。私も確認しました】

「うむ。“星占盤”の予言が実現するとは……」

“星占盤”せいせんばんというのは、レーヴェンシュルトの実家ストラトス家に伝わる予言を表示する。しかし、その予言はかなり重要な出来事しか表示しない上にいつ起こるかわからないため、大して期待はされ

ていなかった。

「何故かは知らないが、管理局はこのことを知っていたらしい。」

「ふむ。レーヴェ、リヴィアスフィール様を聖王教会にも見つからないように連れてくるのだ」

「？何でだよ？」

「聖王教会に見つかれば、リヴィアスフィール様は権力闘争に巻き込まれるのは確実だ。そんなことは先祖も望んでいないだろう」

「確かにな。わかった。リヴィアスフィールを見つけたら屋敷に連れて帰るよ」

「頼むぞ」

空間投影型通信画面が消滅する。

「さてと、探すか」

【ですね】

レーヴェンシュルトとプトレマイオスはリヴィアスフィールドたちを探して歩きだした。

**序章 第7話 名前と新生活（書き直しVer）（後書き）**

オルセルグという名前とその意味はTORのキャラより引用しました。

## 序章 第8話 覆される運命 \*書き直しVer

ミッドチルダに仲良しの二組の親子が住んでいました。

母親は両方とも管理局員で所謂エリートでした。

二人が所属する部隊の隊長は独断である研究施設に強硬突入しました。

しかし、二人と部隊の隊長は敵の罠に掛かり、死んでしまいました。

さらには、部隊の人間も全員殺されてしまいました。

それが本来の運命。しかし、聖王騎士の登場がその運命を捻じ曲げる。

魔法戦記リリカルなのは 現代に蘇った創聖の聖王騎士

## 第8話 「覆される運命」

被検体No.13がオルセルグという名前を与えられた翌日。ミッドチルダアルトセイム地方の大きな湖のほとりに建つ少し大きな小屋でリヴィアスフィールたちは生活していた。

オルセルグはアリスから魔法を習い、軽い戦闘ならこなせるようになった。たった一日である程度戦えるようになったのは、転写されていた魔法に関する記憶のおかげである。

【マスター、座標の算出が完了しました。】

「ん。御苦労さま、レイジングハート。それで場所は？」

【現在地より北西の方角にある山です。細かい座標は着いてから説明します】

「わかった。アルトリア、行くよ」

「はい。」

「気をつけてね。何かあったらすぐに行くから。」

「すぐに戻ってくるわ」

リヴィアスフィールは一足先に小屋から出た。アルトリアも鞘に入った二振りの剣を携え、リヴィアスフィールのあとを追った。

「北西の方角の山………あれね」

RHが言っていた北西方角にある山はすぐに見つかった。山というよりも大きな崖のような場所のふもとがRHの見つけた研究所のある場所だ。

二人は飛行魔法をつかって目的まで一直線に向かった。

・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

.....

目的の研究所はあつという間に見つかった。

座標はわかつている上にその研究所への扉を隠そうとしてもおらず、さらには見張りの警備兵も居ないので近づくのは簡単だった。研究所は山の洞窟の中に作られているようで洞窟の穴が岩壁にぽっかりと顔を出している。

「アルトリア、今回は私も前に出る。」

「わかりました」

リヴィアスフィールは赤を基調とした騎士甲冑をその身に纏い、レィヴァティンを抜刀する。

アルトリアもリヴィアスフィールが投影した私服から白を基調にした騎士服に着替える。そして、カリバーンを抜刀した。

そして、戦闘準備を終えた二人は研究所に一步踏み込んだ。その刹那、二人は違和感を感じた。

「魔力が結合しにくい。マスター、これは.....」

「アルトリアの思った通りよ。AMFなんて随分面倒なモノを張り巡らせてるようね」

AMF。正式名称はアンチ・マギリンク・フィールド。  
範囲内の魔力結合を阻害するフィールド系の魔法で古代ベルカの戦乱期では頻繁に用いられた魔法だ。  
並大抵の魔導師なら、この空間に居るだけで魔法が使えなくなるが、二人は対AMF用の経験もあるのでまったく意味をなさない。

「でも、邪魔ね。アルトリア、少し下がって。すぐに破壊するから」

主の命令に従い、アルトリアはその場から一步下がる。  
すると、リヴィアスフィールドの持つレーヴァティンが刀身の色を変えた。血のように赤い刀身から暗い深海を彷彿させる深い青色に。

レーヴァティン  
「“魔を狩る剣”！！」

青く染まったレーヴァティンを一振り。すると、パキンツという何かが割れるような音を響かせてAMFは強制的に無効化された。そして、青く染まったレーヴァティンが元の色に戻った。

レーヴァティンのもう一つの顔「魔を狩る剣」。その名称の通り「魔」を払う力がある。

AMFも魔力が動力源なので「魔を狩る剣」から逃れられない。

「行くよ」

「はい。」

二人は奥へ奥へ進み始めた。

「ねえ、アルトリア。さっきから通路に転がってる残がい、どう思う?。」

リヴィアスフィールは並走するアルトリアに尋ねる。

研究所の通路にはその正体はわからないが、何やら機械兵器の残骸がごろごろ転がっている。

「おそらく誰かが研究所に侵入したのかと」

「そうでしょうね。アルトリア、その機械の残骸に見覚えはない？」

走る足を休めることなく、二人は奥へ進む。

通路に転がっている残がいはいはどれも6本足の多脚兵器で鎌のような武器を持っている。

そこまで確認した時、アルトリアの頭にある兵器の姿が過ぎった。

「ゆりかこの……機械兵」

「そう。ゆりかこの機械兵にそっくりなの。」

「ですが、ゆりかごはオリヴィエ様が自身の命と引き換えに葬り去ったはず……」

「ええ。ゆりかごは姉さんが葬り去った。でも、その残骸を見る限りゆりかごが未だに存在している可能性は高い。」

「もし、この時代にゆりかごが存命していたらどうするのですか？」

「壊す。絶対に」

リヴィアスフィールははっきりとそう言った。

二人の言う“ゆりかご”とは、聖王家が保有していた戦舟のことだ。幻の都アルハザードの流出物とも噂され、リヴィアスフィルの姉であるオリヴィエーゼーゲブレヒトがその命と引き換えに消滅させたはずの古代遺産。それが“聖王のゆりかご”。通称「ゆりかご」

「そうですね。もし残っていたのなら、オリヴィエ様が報われない」

「うん。」

その時、二人の耳にドカンツという爆発音が連続で聞こえてきた。魔法で視力を強化すると青いボディの多脚機械兵に取り込まれている二人の女性を発見した。

一人は青っぱい髪で足を怪我してしまったのか床に座り込んでいる。もう一人は紫っぱい髪で怪我を負った女性を庇うようにして大勢の機械兵と戦闘を行っていた。

「管理局員か？でも、管理局が黙認してる研究所を襲うとも思えないが……………」

「どうしますか？」

「……………助けて事情を聞いてみよう」

「了解しました」

二人は走る速度を加速させた。

▼ ▼ ▼ ▼ ▼ ▼

「エクレールラルム！！」

無数のナイフを作り出して周囲を取り囲む多脚機械兵に投擲する紫っぽい髪の女性。

ナイフは多脚機械兵の装甲を容易く貫くが、敵の数がいかせん多過ぎるために倒せど倒せど無限に湧いてくる。

「メガーヌ！！私のことはいいから、逃げなさい！！」

「ほっておけるわけないでしょ！！」

青っぽい髪の女性の頼みを一刀両断するメガーヌと呼ばれた女性は再びナイフを作り出し、多脚機械兵を破壊する。

二人はミッドチルダ首都航空隊に所属している。その中でもエリート部隊であるゼスト隊に。

その部隊の隊長が上層部に不信感を抱き、この研究所に突入したが、それは罠だった。待ち伏せされ、気が付いた時には部隊は散り散り

になってしまった。

もう隊長も魔力反応も他の隊員の魔力反応も感じられない。

「ブラストシューター、ファイア!!」

五つの魔力弾を一斉に撃ち出して多脚機械兵を破壊するメガーヌ。しかし、ついに魔力が限界を迎え、メガーヌは膝をついてしまう。

「はあはあ……魔力が、もう……」

「メガーヌ!!」

メガーヌは孤立無援の状況の中ずっと傷ついたパートナーを庇って奮闘していた。

魔力が限界を迎えるのは当然だった。

「惨めなモノね。信じていたモノに裏切られて……殺されるなんて」

「クイント……」

ゼスト隊がこの研究所に突入することは外部には漏れていない情報

のはずだ。

しかし、罨を張られていたところを見ると内通者が味方の中に居たのだろう。

ジャキッ！！

多脚機械兵が銀色に輝く鎌を振り上げる。それはまさしく二人の命を刈り取る死神の鎌だ。

しかし、運命は覆された。

「約束された勝利の剣――エクスカリバー！」

金色の閃光がクイントとメガーヌの周囲を取り囲んでいた多脚機械兵を飲み込み、駆逐した。

閃光が収まるとうじゃうじゃとうごめく虫の大群のようにいた多脚機械兵は一機残らず破壊されていた。

「間一髪だったわ。」

「本当です。」

二人を助けたのは、リヴィアスフィールとアルトリアの二人だった。

「アルトリア」

リヴィアスフィールはエクスカリバーアヴァロンの鞘をアルトリアに返した。

アヴァロンを受け取ったアルトリアはエクスカリバーを納めると再び左腰に差した。

クイントとメガーヌがエクスカリバーに巻き込まれなかったのは、アヴァロンの空間隔離能力のおかげだ。アルトリアがアヴァロンをリヴィアスフィールに渡してエクスカリバーの余波を防いだのだ。

「大丈夫ですか？」

「あ、貴女たちは……………」

「リヴィアスフィール」ゼーゲブレヒト。管理局に反逆する者よ」

「その従者のアルトリア」ペンドラゴンです。」

【マスター。この研究所の魔力反応を調べましたが、生存者はもういません】

「ちっ、逃げられたか……………」

リヴィアスフィールはレーヴァティンを鞘に納めた。

「それで。貴方たちはどうして此処にいるのかしら？此処は管理局が黙認してる研究所のはずだけど？」

「知ってるわ。」

クイントンも返答にリヴィアスフィールとアルトリアは驚いたような表情を浮かべた。

「私たちは管理局に裏切られたの。部隊の仲間も全員やられてしまったわ」

「事情は後で詳しく聞きましょう。取り合えず此处から脱出します。アルトリア、その女性を背負ってあげてください」

「はい。」

アルトリアはクイントを背負う。魔力で身体能力を強化しているため、アルトリアにほとんど負担はない。リヴィアスフィールとアルトリア、メガーヌとクイントは研究所から急いで脱出した。

## 序章 第8話 覆される運命 \*書き直しVer（後書き）

原作ブレイク。前作と違い、メガーヌが救出され、クイントが生存したまま。

レーヴァテインは特に魔を狩る剣として使われることもあるので、今回それを採用しました。魔を狩る能力を発動するときは刀身の色が変わります。



で素材はオリハルコンと呼ばれる一般には架空の鉱物と呼ばれる鉱物を使っている。そのため、発火の魔法を使っても燃えることはない。

実は、古代ベルカの時代にはオリハルコンが存在し、リヴィアスフイルがそれを投影してアリスが錬金術で杖に変えたのがオルセルグの杖だ。

「クリムゾン・クレセント!!」

杖を振るうと炎の三日月がアリスに向かっていく。しかし、アリスが展開する障壁は突破できない。

「ほらほら。そんな攻撃じゃ障壁を突破できないよ?」

「.....」

オルセルグは目をつぶり、意識を集中させる。

杖の先に纏わせていた炎が大きくなり、巨大な大鎌のような形になる。到底9歳程度の少女が降り回せる大きさでないが、ナノマシンの影響で通常状態でも高い身体能力を有しているので問題ない。

「加速」

オルセルグが静かに呟くと杖に刻まれたルーン文字の一つが光る。すると刹那の内にオルセルグはアリスに近づき、その大鎌を振り上げていた。

（鎌の先端だけ魔法の密度を上げて私の防御壁を切り裂くつもりなのか）。成長速度が異常に速いけど……………）

「経験不足ね」

アリスは少し身を屈めてオルセルグの懐に潜り込んだ。

「はい。これで一回死んだ」

「うっ……………」

オルセルグは魔法を解除する。

今回の模擬戦はどちらかが一撃でも入れた方が勝利する条件だ。よって、寸止めとはいえオルセルグの一撃を入れたことに変わらないのでアリスの勝利である。

「私は魔法使い（キャスター）だけど、接近戦がまったくできないわけじゃないよ。それを読み違えたのがオルセルグの敗因だね」

「アリスさんが接近戦もできるなんて初耳です。」

「いつも敵が情報を教えてくれるとは限らないでしょう？そんな時の観察眼も養わないとね」

「はい」

オルセルグは杖を背中に背負う。

その刹那、オルセルグとアリスは慣れ親しんだ魔力の波動を感じた。しかし、慣れ親しんだ波動の中に見知らぬ波動が混じり込んでいた。

「ただいま。オルセルグ、アリス」

「ただいま戻りました」

森の中からクイントを背負ったアルトリアとリヴィアスフィール、メガーヌがアリスたちに合流した。

・・・

・・・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「うわゝ・・・酷い怪我だね。」

「そんなに酷いですか？」

クイントの怪我を診断しているアリスにメガーヌが尋ねる。

「酷いよ。右足のアキレス腱が完全に切れるし、左足は変に骨が歪んでる。魔導師として戦うのはほとんど不可能だよ」

「そんなー!!」

「マスターの魔法でも無理ですか？」

「創聖の魔道書でも切れた靱帯を治すのは無理よ。」

正確には、古今東西の魔法を蒐集した創聖の魔道書には靱帯を治す魔法も存在する。

しかし、あくまでも切れかかっている靱帯を治す目的で作られているので完全に切れた靱帯を治すことはできない。なぜなら、完全に切れた靱帯を治すのは繊細な技術が必要だからだ。

「なんとかありませんか？」

「うーん……私が知る限り一人だけこんな怪我でも治せる人を知ってるけど、場所がね」

アリスは頬をポリポリと掻いた。

「特別な方法でしか行けない場所で、ある人物しかこの場所に行く手段を持ってないの」

「私も300年前はその人物と交流があったけど……」

「あの……聞いてもいいでしょうか？」

おずおずといった様子でクイントはリヴィアスフィールに一つの質問を投げかけた。

「貴女と古代ベルカの聖王騎士のリヴィアスフィールは同一人物ですか？」

「そうよ。正確には一度死んで転生したのよ」

「……！」

クイントとメガーヌは驚いたような表情を浮かべた。

「輪廻転生した」という話を信じる者は居ないだが、二人はリヴィアスフィールの返答が嘘に思えなかった。

「クイント、メガーヌ。お前たちはどうするのだ？このまま帰っても殺されるのが関の山だと思うが」

「リヴィアスフィールさん、私たちも連れて行ってくれないでしよ  
うか？」

メガーヌの願いは管理局の裏切るということを意味していた。

「・・・・・・・・別にいいわ。戦力が多いに越したことは無い。でも・  
・・・・・・・・」

リヴィアスフィールは鞘からレーヴァテインを抜き、二人に向かって突き付けた。

「裏切った場合は容赦なく命を奪うから、覚悟しておいてね」

「は、はい」

リヴィアスフィールは二人を少し脅すとレーヴァテインを再び鞘に戻した。

その刹那、リヴィアスフィールたちが根城にしている湖のほとりの小屋にある声が聞こえた。

——クスクス。冥界に來ないから何処に居るかと思えば、こんな所に居たのね——

「「「「「! ! ! ! !」」」」」

リヴィアスフィールの目の前の空間に亀裂が入り、その亀裂がゆっくりと広がる。

そして、出来上がったのは真っ暗なスキマ。内部では大きな目が顔を覗かせている。その隙間から出てきたのは六十四卦の沢地萃なる紋様が描かれた衣装に身を包み、ナイトキャップをかぶった妙齡の女性だった。

突然、転移魔法反応もなく現れた女性にリヴィアスフィールたちは驚いた。そして、思わずリヴィアスフィールはその女性の名前を呼んだ。

「紫・・・・・・・・」

リヴィアスフィールに「紫<sup>ゆかり</sup>」と呼ばれた女性はにこつと笑みを浮かべた後、スキマから飛び出してリヴィアスフィールに抱きついた。

「久しぶり。また会えてうれしいわ、リフィル」

「ええ。誰の悪戯か冥界じゃなくて顕界に戻って来てしまったわ」

「随分小さくなったわね。」

「こればかりは仕方ない。」

•  
•  
•

•  
•  
•  
•  
•  
•

[illegible][illegible]

約2分後、リヴィアスフィールはようやく紫から解放された。

「紫、貴女どうして此処が？」

「250年前、冥界に貴女の魂が流れ着いてないことを疑問に思つてね。貴女の魂の行方をずっと追つていたの。そして、12年前にようやく貴女を見つけた。」

「250年間も私のことを心配してくれたのは嬉しいけど……紫、貴女自分の仕事はどうしたの？」

「藍に任せてたわ」

「・・・・・・・・」

堂々と言い張る紫にリヴィアスフィールは頭を抱えた。250年も経てば、少しはマシになるかと思っていたが、その予想は見事に覆された。

「12年間、貴方の魂が完全に覚醒するのを待っていたわ。だから、貴女が置かれてる状況も把握しているわ。」

そこで、リフィル、貴女に少し協力して欲しいことがあるの。」

「珍しいわね。貴女が私の頼みごとなんて」

「そうね。でも、今回ばかりは貴女の手を借りないといけないの。」

目の前に居る女性「八雲 紫はある世界で“妖怪の賢者”と呼ばれるくらい強い力も持つ妖怪だ。」

大抵のことは自分で片付けてしまふのだが、今回ばかりは事情が違ふようだ。

「管理局を滅ぼすのを手伝って欲しいの」

紫のお願いにリヴィアスフィールは何故、紫が自分に力を借りに来

たのか理解した。しかし、それと同時に府に落ちなかった。

「管理局と“幻想郷”はまったく接点がないはずよ。それがどうして」

「それがね、管理局の連中が最近幻想郷のことを嗅ぎまわってるの。理由は……. . . . . なんとなく予想できるわ。それで、協力してくれるかしら？」

紫の質問に対してリヴィアスフィールは……. . . . .

「親友の頼みを断るわけにはいかないな」

と、頬笑みを浮かべながら了承した。

「ありがとう。」

紫も頬笑みを返した。

ここで紫とリヴィアスフィールの関係を説明しておく彼女らは親友同士である。

300年前、オリヴィエを失った悲しみでリヴィアスフィールたちは辺境の地に訪れた。その辺境の地のある神社を寢床にしていたときに紫とリヴィアスフィールは出会った。

そして、色々話す内にリヴィアスフィールは紫と友達を越えて親友になっていた。リヴィアスフィールが死んだ時には紫は大層悲しんだそうだ。

「リヴィア。感動の再会に水を差すようで悪いけど、誰かがこの小屋に近づいてきてる」

「管理局の人間？」

「……敵意は感じられません。ですが、ご用心を」

アルトリアはカリバーンを抜き、オルセルグも杖を構える。そして、リヴィアスフィールもレーヴァティンを鞘から抜いた。

刹那、小屋の扉が開かれた。

「ようやく見つけたぜ、お姫様」

「お前は……確かレーヴェンシュルト、だったか。」

「覚えてくれたんだな。実は、実家からの要請でお姫様を迎えに来たんだ。」



## 序章 第9話 再会、妖怪の賢者\*書き直しVer（後書き）

原作をまったく知らないのに、懲りずに東方とクロス。WIKIとかで一応、キャラクターの容姿などは知っていますが、口調がまったくわからない。  
どうしよう・・・・・・・・。。

序章 第10話 会談と邂逅\*書き直しVer

今より250年前。

古代ベルカの王国よりずっと離れた第97管理外世界 極東地日本。

その日本大陸に山奥にひっそりと存在する神社。

——リフィル、蓬萊の薬を飲んで——

——ダメよ、紫。私が生き残れば、また争いの火種になる——

布団に入ったままの転生前のリヴィアスフィールとそんなリヴィアスフィールにある薬を飲ませようとする紫。しかし、リヴィアスフィールはそれを拒む。

——お願い！！私を……一人にしないで！！——

紫はリヴィアスフィールの手を力づよく握った。

出会った頃は力強かった手もずいぶん弱々しくなっていた。

—— 紫、貴女には内緒にしてたけど、四季映姫とある取引をしたんだ。——

—— え？——

—— 私の魂を冥界に送って欲しいとお願いしたの。だから、お別れじゃないわ——

—— リフィル・・・・・・・・——

—— 少し・・・・・・・・眠くなったわ。紫、冥界で会いましょう——

—— そう言い残して転生前のリヴィアスフィールドは死を迎えた。

魔法戦記リリカルなのは 現代に蘇った聖王騎士

第10話 「会談と邂逅」

「ん．．．．．」

「あら、起きちゃった？」

「ゆかり．．．．．？私、寝ちゃった？」

「ええ。ぐっすり眠ってたわよ」

リヴィアスフィールは紫の背中に背負われて森の中を移動していた。アルトセイム地方の湖畔の小屋から短距離転移を繰り返すこと5回。聖王教会にも見つかることなく、リヴィアスフィールたちはミッドチルダ北西部に到着し、レーヴェンシュルトの実家に向かっていた。何故、レーヴェンシュルトの実家に向かうことになったのかというと、「管理局に反旗を翻すには後盾が必要不可欠だ」という紫の意見を採用して、聖王教会からも管理局からも独立した中立に近いストラスト家を頼ることになったのだ。

「紫、下ろして。もう一人で歩ける」

「そう?」

リヴィアスフィールは紫の背中から降りて地面に足を付ける。

「レーヴェンシュルト、お前の実家はまだなのか?」

「もうすぐだ。ほら、見えてきた」

レーヴェンシュルトは森の入り口に威風堂々とそびえ立つ立派な屋敷を指さした。

レンガ造りの屋敷で貴族の屋敷という言葉がぴったり似合う屋敷だ。若干、古代ベルカ戦乱期の面影を残している。

「ここが俺の実家、ストラトス家だ。」

そう言いながらレーヴェンシュルトはドアノブに手を掛けようとする。

ガチャ・・・・・・・・

その時、扉が一人でに開いて一人の男性が出てきた。レーヴェンシユルトと同じ碧銀の髪をしたダンディな男性だ。

「親父、お姫様を連れて来たぜ。聖王教会にも見つからない」

「そうか。よくやったな、レーヴェ」

レーヴェンシユルトの父親はくしゃくしゃとレーヴェンシユルトの頭を少し乱暴に撫でた。

「お初にお目にかかります。私はストラトス家現党首のアキレウス  
＝ストラトスです」

「聖王騎士リヴィアスフィール＝ゼーゲブレヒトです」

「その従者のアルトリア＝ペンドラゴンです」

「同じく従者のアリスと言います」

「オルセルグ」

「元ゼスト隊のクイント」ナカジマです」

「同じくメガーヌ」アルピーノです」

「八雲 紫よ。」

全員が自己紹介を済ませる。

「じゃあ、リフィル。後で合流しましょう」

「ええ。」

紫はすぐにスキマを開いてメガーヌと一緒に飛び込んだ。  
紫とメガーヌがリヴィアスフィールたちと分かれたのは、メガーヌの一人娘を連れてくるためだ。

「二人のことは気にしないでこちらは話を進めましょう」



「随分返答が速いですね」

「まあ、こちらとしても管理局が潰れることには色々メリットがあるからな。」

「？」

リヴィアスフィールは政治には疎かったのでアキレウスのいうメリットがわからなかった。

「取り合えず今は違法研究所を潰すことに専念します。研究所で保護した被検体のを任せたいのですが……」

「それくらいはお安い御用さ。今すぐには無理だが、早急に受け入れの準備を整えよう」

「ありがとうございます。」

「それと違法研究所の搜索は私たちにお任せください。」

その後、色々話を交わして今日の会談は終了となった。

「それで、どうしてこんな状況になってるのよ？」

ストラトス家の屋敷から出るとすでに紫たちは戻ってきていた。しかし、メガーヌは芝生の上に座り、蹲っていた。

「この子の家に行ったんだけど、管理局の方が行動が早かったみたい。赤子は連れ去られていたわ」

「今は助けようがありません。我慢してください……というのは、残酷でしょうね。」

今の私には時を待てとしか言えません」

リヴィアスフィールの言葉にメガーヌは無言で立ち上がり、涙をぬぐった。

「いえ、大丈夫です。おかげで決意をきちんと固めることができました。」

そう宣言するメガーヌに頬笑みを浮かべた。

「ここで抜けるつもりなら、危うく切り捨てならなかったところよ。」

冗談混じりにそう言うリヴィアスフィール。しかし、その手はレーヴァテインの柄に伸びていたのをアルトリアたちは見ていた。

「紫、私は少し寄る場所ができたわ。みんなを連れて先に幻想郷に向かってください」

「わかったわ。」

リヴィアスフィールのお願いを了承した紫は全員を包むように足元にスキマが開かれた。

そして、足場を失ったリヴィアスフィールを除いた全員はスキマの中に吸い込まれた。

「じゃあ、表の博麗神社で迎えに来るわ」

「ええ。」

そう連絡すると紫自身もスキマに吸い込まれていった。

それを確認するとリヴィアスフィールは首に掛けられたままだった待機状態のRHを握りしめた。

待機状態のRHがキラリと輝き、宝石から槍に姿を変える。しかし、その姿はぼろぼろでフレームのあちこち欠けている。

「すみません、レイジングハート。でも、っ少しだけ頑張っつて」

【All right】

リヴィアスフィールの足元に虹色に輝く円環の魔法陣が浮かび上がる。

目を閉じて生きたい場所を鮮明に思い浮かべる。すると、魔法陣はより一層輝き、リヴィアスフィールはどこかに転移した。

▼  
▼  
▼  
▼  
▼  
▼

リヴィアスフィールが転移した先は墓地だった。しかも、目の前の墓石には「高町家」と深く刻まれていた。そして、その横の墓石には「高町　なのは」という名前が刻まれていた。リヴィアスフィールはその墓石に触れた。

「・・・・・・・・」

リヴィアスフィールはその墓石を優しく撫でる。

「ごめんね。私のせいで。」

リヴィアスフィールは謝った。この墓石の下で眠っているであろう自分のせいでその命を散らされたクローンに対して。なぜ、リヴィアスフィールがそのことを知っているのかということアキレウスに聞いたからだ。

「貴女の方まで私は生きるよ」

それだけ言い残すとリヴィアスフィールはその場から立ち去ろうとした。

その時、カランという乾いた音が静かな墓地に響き渡った。

「なんで・・・・・・・・なんで・・・・・・・・」

墓地に現れたのは、リヴィアスフィールにとってよく見覚えのある顔ぶれだった。

管理局でもその一家が揃えば、無敵の戦力と言われている八神家が全員集結していた。

「なんでお前が此処に居る！？聖王騎士リヴィアスフィール！！」

「こんな時代でも顔を会わせることになるなんて、数奇な運命ね」

「うるせえ！！アタシはお前なんかに会いたくねえよ！！」

「うるさいのはそっちよ。また手足を？いであげようか？あの時みたい」

リヴィアスフィールが殺気を籠めた視線を送るとヴィータは思わず震えあがった。

古代ベルカの戦乱期にヴォルケンリッターとリヴィアスフィールは敵同士だった。しかし、いかに古代ベルカの豪傑であるリヴィアスフィールでも宝具を所有するリヴィアスフィールには一度も勝てなかった。

ちなみに、ヴィータはリヴィアスフィールに手足を？がれたことが

ある。（敵の戦意を削ぐために）

「でも、今は戦わないわ。後ろの騎士たちも戦闘する気満々みたいだけ。」

クスクスと笑いながらリヴィアスフィールドはヴィータの背後に居るシグナムたちに視線を向けた。

騎士甲冑を纏い、デバイスに手を掛けて開戦の合図があれば、いつでもリヴィアスフィールドに襲いかかることができる状態だ。

「それに……魔法で私に勝てると思っているのかしら？」

リヴィアスフィールドはガンディーヴァ・アポカリプスを展開してシグナムに見せつける。

魔力結合分断能力を有するガンディーヴァ・アポカリプスを持ちリヴィアスフィールドにシグナムたちが勝てるわけがない。

『マスター、転移準備が完了しました。』

『発動して』

『All Right』

リヴィアスフィールの足元に虹色の魔力光の転移魔法陣が展開される。そして、そのままリヴィアスフィールはどこかに転移していった。

序章 第10話 会談と邂逅\*書き直しVer(後書き)

内容が薄くてすみません。

## 序章 第11話 幻想郷 そして、蓬莱の薬

300年前、聖王騎士が訪れた幻想が集い土地

かつて、聖王騎士はそこで恋をし、子をもつけた

そして、長い月日の果てに帰還した聖王騎士

彼女が妖怪の賢者から受け取ったのは………

魔法戦記リリカルなのは 現代に蘇った創聖の聖王騎士

第11話 「幻想郷 そして、蓬莱の薬」

リヴィアスフィールが墓地から転移魔法で転移してきた場所は神社の境内の前だった。

周囲は木々に覆われており、到底人が来るような場所ではないのが

見てわかる。神社の本殿はそれなりの大きさだが、植物の蔭が柱に巻きついている。

「・・・・・・250年も経てば、随分変わるものね」

リヴィアスフィールは懐かしそうにしみじみと呟いた。

この神社――博麗神社という名前だが――は300年前、悲しみに暮れた転生前のリヴィアスフィールがアルトリアやアリスを連れてこの世界に初めてやって来た場所である。

その頃から人がまったく来なかったので、三人はここをねぐらに生活していた。リヴィアスフィールが不用意な人との接触を嫌がっていたので、山のふもとに降りたことは一度もない。

【相変わらず参拝客も少ないですね】

「そうね。それだけは250年前とまったく変わらないわ。」

リヴィアスフィールは苦笑いを浮かべながら、そう言った。

その後、リヴィアスフィールはすっかり日焼けしてしまった境内に腰かけた。

「ここから見る夕焼けはやっぱり綺麗。」

博麗神社にたどり着いたときには、もう空は暁色に染まっていた。  
オレンジ色の夕焼けが周囲を照らす光景にリヴィアスフィールは頬  
笑んだ。

「それには私も同感ね」

リヴィアスフィールの横にはいつの間にか紫が座っていた。

「さあ、リフィル。貴女を再び幻想の地にいざないましょう」

紫は立ち上がり、背後にスキマを広げるとリヴィアスフィールに手  
を差し出した。

「ふふ」あの時と同じセリフだね。初めて貴女に連れて行った時と」

——前々から思ってたけど、紫は何者なの？——

——うーん………ある世界の管理者かな？——

——ある世界？——

——そうよ。リフィル、今から貴女をいざないましょう。——

「そうだったかしら？ま、そんなことどうでもいいわ。」

「そうね」

リヴィアスフィルと紫はお互いに頬笑みを浮かべた。

そして、リヴィアスフィルは差しだされた紫の手をしっかりと握りしめた。紫もしつかりと手を握り返してスキマの中にリヴィアスフィルを連れ込んだ。

・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「うひゃく〜」

博麗神社からスキマを通ってやって来たのは畳張りの和室だった。リヴィアスフィールが紫のスキマを通って連れてこられたのは、“幻想郷”の北東の端に存在する八雲紫の屋敷。約300年前に紫がリヴィアスフィールたちを幻想郷に連れてきた時もこの屋敷を寢床にさせてもらった。

「アルトリアたちは？」

「永遠亭で永琳に治療してもらってると思っわ。アリスが付いて行ったから迷うこともないでしょう」

紫はそう言いながら、部屋の隅に置かれた棚をこそごと漁り、小瓶を取り出した。

「さあ、リフィル。永遠亭に早く行きたいのはわかるけど、その前にこれを飲みなさい」

紫は飛行魔法を発動して飛び立とうするリヴィアスフィールを呼びとめた。

そして、紫が持ち出してきた薬を見た瞬間、リヴィアスフィールの顔が引き攣った。

「紫、その手に持ってるのは……………」

「蓬萊の薬よ。今はベルカの国も無いから、飲んでも大丈夫でしょ？」

紫はゆつくりとリヴィアスフィールに近づく。紫が近付けば、リヴィアスフィールは後ろに下がる。

「紫。飲んでもいいんだけど、今はちょっと……………」

蓬萊の薬を現時点で飲むことに難色を示すリヴィアスフィール。紫がじりじりと迫ってきて、気が付けば壁際に追い込まれていた。

「今飲みなさい。」

「でも……………」

「あら、約束を破った上に250年間も待たされた目の前の親友の言うことが聞けないのかしら？」

「うっ」

紫の言葉にリヴィアスフィールは口を噤んだ。

リヴィアスフィールの性格的にそんなことを言われたら、断ることはできない。

リヴィアスフィールはしぶしぶ紫から蓬萊の薬を受け取ると一気に口の中に運んだ。

「くく……くく……うえっ、にがぁ」

「薬なんてそんなもんでしょ。」

「いや、薬よりもはるかに苦いわ。」

リヴィアスフィールは蓬萊の薬が入っていた小瓶を紫に返した。

蓬萊の薬はあの竹取物語に出てくる薬で飲んだ者は不老不死になると言われている幻の薬である。

さらに、追加効果として妖力が操れるようになる。

「それにしても………これが“妖力”ね。やっぱり魔力とは少し違うわね」

「妖力は魔力と違って応用が利きにくいから、その時点で魔力とは似て非なるものよ。それに生み出す元も違うし」

「そうね。」

「それとリフィル。貴女にこれを渡しておくわ」

紫から渡されたのは五枚のカード。しかし、雪のように真っ白で裏にも表にも何も書かれていない。  
ただ、不思議な力が籠められているのは、リヴィアスフィールにもわかった。

「それは“スペルカード”っていう道具なの。今の幻想郷はこれで決闘するのよ？」

「へえ・・・幻想郷も随分平和になったね」

「“吸血鬼異変”の時から広まったのよ。

あらかじめ技の名前と命名しておいた名前の意味を体现した技をいくつか考えておき、それぞれの技名を契約書形式で記しておくことで作られるわ。さらに、あらかじめ力を籠めることで真にスペルカードが完成するわ。」

「解説ありがとう。」

リヴィアスフィールドは紫から初期状態のスペルカードを受け取った。

「さて、永遠亭に行きましょうか」

▼ ▼ ▼ ▼ ▼ ▼

「まったく……250年前に姿を消したかと思ったら、ひょっこり帰ってきて開口一番が“患者連れてきた”ってどうなのよ」

「あはは……ごめん、永琳」

人里から見て「妖怪の山」の反対側にある竹林―迷いの竹林―にひっそりと建っている永遠亭。

その永遠亭の治療室で急にやって来たアリスに永遠亭の住人である月人、八意 永琳は愚痴った。

「それに、ここまで大けがをした患者の治療をするのも久しぶりだ。」

治療台の上ではクイントが寝そべっており、大がかりな手術が執り行われていた。

当然、治療室に居る永琳とアリスは清潔な白衣を着ている。

「……よし。アリス、頼んだ」

「わかった。」

永琳が切れたアキレス腱を器具で固定し、アリスが治癒魔法でつなぎ合わせる。

切れたアキレス腱がアリスの魔法で完全に元通りになったことを確認すると永琳は手早く傷口を閉じた。

「ひとまず左足の処置は終わりね。悪いが、このまま右足の治療に取り掛かるわよ」

「了解」

治療室の外ではメガーヌが扉の前をうろつくと右往左往していた。対して、アルトリアとオルセルグは非常に落ち着いており、緑茶を啜っていた。

「メガーヌ、少しは落ち着いたらどうですか」

「でも!」

「永琳は優れた医師です。それにアリスも付いている。心配する必要はありません」

あたふたするメガーヌを落ちつけるようにそう言うアルトリア。その言葉の中には永琳に対する信頼が見え隠れしていた。

「・・・・・・・・」

その刹那、治療室の扉が開いてクイントの治療を終えた永琳とアリスが出てきた。

「一応治療はしたが、歩けるようになるには時間とリハビリが必要

だ。」

「そうですか……」

メガーヌはひとまず治療が成功したことに胸を撫で下ろす。

「それと久しぶりね、アルトリア。」

「ええ。月からの襲撃は大丈夫でしたか？」

「ええ。リヴィアスフィールドが張ってくれた結界のおかげで、ね。250年以上経っているのにまったくゆるまいから、驚いわ」

迷いの竹林の中にひっそりと佇むこの永遠亭は強力な結界で覆われている。敵意を持つ者には見えず、永遠亭に不利益をもたらす者は近づくことすらできないというかなり特殊な結界だ。

永琳とあと二人の永遠亭の住人は月から追われる身であり、身を隠す為に永遠亭の歴史（時間）を止めていたが、リヴィアスフィールドの能力で永遠亭が発見され、事情を知ったリヴィアスフィールドが結界を張ったのだ。

「この結界はマスターが大事にしていた宝石全てを使って張りましたからね。250年程度で緩んでもらって困ります。」

「それで、肝心の貴女たちの主はどうしたの？」

「そろそろ来る頃だと思います。」

その刹那、スキマが開いてスキマの中より紫とリヴィアスフィールが出てきた。

「久しいわね、永琳」

「ええ。その様子だと紫に渡した蓬萊の薬を飲んだようね」

「ええ。おかげでこの幼い身体からまったく成長しなくなったわ」

リヴィアスフィールは大きくため息を吐いた。

代わりにリヴィアスフィールの制御化を離れた膨大な妖力が全身から滲み出ていた。

「あら、その姿の方がよっぽど可愛いわよ？」

そう言いながら紫はリヴィアスフィールの頭をぐしぐしと撫でた。

「それにしても、250年間も何処に行ってたのよ？」

「えっと……それは――」

少女（幼女）説明中

「――ということよ」

「ふーん。輪廻転生なんてこの幻想郷じゃあ、結構起こることだから驚かないけど。」

「そうですね。」

その後、管理局と大戦を交えることを知らせてリヴィアスフィールたちは八雲の家に戻った。

序章 第11話 幻想郷 そして、蓬莱の薬（後書き）

内容が薄くてすみません。

## 序章 第12話 人里にて

魔法戦記リリカルなのは 現代に蘇った創聖の聖王騎士

第12話 「人里にて」

リヴィアスフィールたちが幻想郷にやってきてすでに二日が経過した。管理局の違法研究所を潰しに行こうにもアキレウスの方で孤児院の修築が終了していないので待ったを掛けられている状況だ。その間にリヴィアスフィールは妖力の扱い方と妖術をマスターしようとう奮闘していた。

ガキンツ！！ガキンツ！！

幻想郷の北東の端——外界との境界線——に建てられた八雲邸の庭で鋭い金属音が断続的に鳴り響いていた。

庭で実戦訓練を行っているのは、アルトリアとリヴィアスフィール。二人とも本物の日本刀で実戦訓練を行っていた。

「はああ！！」

妖力を限界まで注ぎ込んだリヴィアスフィールの日本刀がアルトリアの日本刀としのぎを削る。

しかし、その刹那。リヴィアスフィールが使っていた日本刀に罅が入り、その日本刀は粉々に砕け散った。

「やはりこの程度の刀では妖力の負荷に耐えきれませんね」

「宝具を使うのが少し危険ですから。我慢してください。」

「わかってるわよ。」

リヴィアスフィールは刀身が半分ぐらいなった日本刀を一応鞘に戻した。

ちなみに、二人が使っていた日本刀は250年前にリヴィアスフィールが人里の刀鍛冶師から貰ったものである。どうやら紫が保存していたらしい。

「アルトリア、人里に降りてみない？」

「そうですね。」

アルトリアも日本刀を鞘に戻した。

「<sup>ちえん</sup>燈、私たち少し人里に降りてくるわ」

リヴィアスフィールが声を掛けるとチリン、チリンと鈴の音が屋敷の中から聞こえてきた。

“燈”というのは、紫の式である八雲 藍の式の化け猫のことである。性格は子供っぽく、イタズラ好き。リヴィアスフィールにイタズラしようとしてお仕置きされた過去がある。

「じゃあ、アルトリア。行きましょう。」

「しかし、ここから人里は少し離れていますが……………」

「飛行魔法を使えば問題ないわ。この幻想郷では空飛ぶ人間なんて珍しくない」

・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・・・・・・・・・・・・・・・・

幻想郷に居る一般人は「妖怪の山」と「迷いの竹林」の間に里を作って暮らしている。

基本的に「妖怪の山」の妖怪は人里に下りてくることはないが、人懐っこい妖怪はよく人里に下りてくる。そんな人の里にアルトリアとリヴィアスフィールは降り立った。

「相変わらずここは賑わっていますね。」

「そうね。私が居ない間に妖怪が好き勝手してるかもしれないってびくびくしてたけど、そんなことなかったみたい。」

リヴィアスフィールは250年前と何ら変わらない人里の様子に胸を撫で下ろした。

250年前、転生前のリヴィアスフィールは徐々に人とかかわりを取り戻していき、寿命で他界するまでこの人里をある人物と一緒に悪意ある妖怪や人間から守っていた。

「マスター、人里に悪さをしたら、博麗の巫女に粛清されるのを忘れてですか？」

「ああ・・・・・・・・忘れてたわ」

そんな他愛もない会話を交わしながら、二人は人里を歩いて行く。少し歩くと大勢の人だかりが街中に出来上がっていた。好奇心をそられたリヴィアスフィールはその人だかりに足を運んだ。

「……見えない」

リヴィアスフィールの身長は12歳の少女よりも少し低い。周りは大人ばかりなのでリヴィアスフィールの身長では絶対に見えない。

「仕方ない」

リヴィアスフィールはこの小さな身体に対してため息を吐きながら飛行魔法を発動しようとする。しかし、急にリヴィアスフィールの視点が周りの大人よりも高くなった。

「ほら、これで見えるだろ？」

リヴィアスフィールは見知らぬ人に肩車されていた。

「それにしても、随分小さくなったな。」

「え・・・・・・・・・・？」

リヴィアスフィールは無意識のうちに自分を肩車している人物を見た。

銀色に近い色の長い髪の毛に腕部が白い藍色の衣装を着た長身の女性。リヴィアスフィールには、その声とその姿にとっても見覚えがあった。

「慧音！？」

「そうですね。お久しぶりです、リヴィア」

リヴィアスフィールの肩車していたのは、リヴィアスフィールの知り合いだった。

彼女の名前は上白沢 慧音。人間が好きなワーハクタクと呼ばれる半人半獣の女性。

かつて悪意ある妖怪からこの人里をリヴィアスフィールと一緒に守ってきたリヴィアスフィールの戦友である。

「慧音、貴女寺子屋の方はいいの？」

「はい。この子供たちはこの催し物に夢中ですから」

リヴィアスフィールは慧音が言う「催し物」に目を向けた。

子供たちがきらきらと目を輝かせて視線を向ける先で行われていたのは、人形劇だった。といっても、ただの人形劇ではない。子供たちが見ている人形劇は糸も人の手もくわえられず一人でに動いている。

「人形劇か………。確かに子供が夢中になるのもわかるわ。」

リヴィアスフィールは素直にその人形劇のクオリティーに認めた。

「それにしても、魔力を使った人形劇ね……。慧音、この人形を操作してるのは魔法使い？」

「はい。リヴィアなら、すぐに見破ると思っていました」

慧音に肩車されているため、リヴィアスフィールから慧音の表情は窺えないが、慧音はにこやかな笑みを浮かべていた。

彼女の笑みが喜んでいる子供たちを見てのモノなのか、かつての戦友に再会したためのモノなのかは誰にもわからない。

「最近魔法使いになった少女なんですが、時折このように人形劇を開いて貰ってます」

「ふん………」

・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

結局、人形劇が終わるまでリヴィアスフィールは人形劇を見ていた。人形を操っていた魔法使いのあいさつを以て人形劇が終了すると人形劇を見るために集まっていた人々もチリジリに散った。

「御苦労さま、アリス」

「別にかまわないわよ。こっちもそれなりに見返りがあるわけだし。」

「はい。これがその見返りです。」

慧音は革製の袋をアリスと呼ばれた人形師に渡した。中身は確認できないが、何やら貴重なモノらしくアリスは大切そうにその袋を抱えた。

「では、またお願いします」

「ええ。その時はまた見返りをお願いね」

そう言い残すとアリスは人里から立ち去って行った。

「それにしても、慧音。縮んでるのによく私が見つかったわね？」

「虹彩異色の人間は私の知る限りリヴィアしか居ませんから。それにアルトリアも連れていましたから」

「それもそうね」

「私は家に帰りますが、リヴィアはどうしますか？」

「私も慧音の家に行ってもいいかな？妹紅にも会っておきたいし。」

アルトリアもそれでいいわよね？」

「はい。というより、この場から離れられるならどこでもいいです。」

「？どうかしたの？」

「いえ、その、里の人の視線が……」

「ああ」

リヴィアスフィールと慧音は納得した。

先ほどからアルトリアに尊敬や疑惑の視線が向けられている。

リヴィアスフィールが人里の守り手であったため、その従者であったアルトリアやアリスも必然的に里の守りにつくことが多かった。

その上、アルトリアはリヴィアスフィールが年老いてくると単独で妖怪を撃退した逸話も残っている。

アルトリアは250年前とまったく姿が変わっていないのでそのような視線を向けられているのだろう。

「では、早く私の家に向かいましょう」

「そう言えば、貴女の家に来るにも久しぶりね」

「はい。」

リヴィアスフィールは懐かしそうに慧音の家を見渡した。

普通の民家にしては広く、屋敷にしては少し狭い慧音の家は250年前と何ら変わりなかった。

この慧音の屋敷でリヴィアスフィールたちはよく宴会に誘われたものだ。

「妹紅、帰りましたよ。」

慧音はこの家の同居人の名前を呼ぶが、まったく返事が返ってこない。

「あれ？迷いの竹林の方に行ってるのでしょうか？」

「迷いの竹林で思いだしたけど、妹紅と輝夜は関係はどう？」

「リヴィアが居た頃より少しマシになりました。」

「そう。悪化してなくてよかったわ。」

リヴィアスフィールは頬笑みを浮かべながらそう言った。  
その時、慧音の自宅の扉が開けられた。

「慧音、帰ったよ。」

噂をすれば影は正にこのこと。帰って来たのは、慧音とリヴィアス  
フィールの会話のネタになっていた藤原 妹紅本人だった。

「お帰りなさい、妹紅。迷いの竹林に行ってたのですか？」

「うん。ところで慧音、そこのちびは誰？寺子屋の子供じゃなさそうだけど」

「・・・・・・・・・・」

妹紅の「ちび」という単語にリヴィアスフィールは押し黙った。  
しかし、押し黙ったまま腰に念のため携えておいたレーヴァティンの柄に手を掛けた。

「ちょっと貴女、一回死にましょうか」

リヴィアスフィールは笑顔でとても物騒なことを宣言した。そして、突然の言葉に惚けている妹紅に向かってレーヴァティンを使おうとした。

「ちょっと落ち着いて、リヴィア。」

しかし、レーヴァティンを抜く前に慧音に羽交い絞めされてしまい、身動きを封じられてしまう。

「離しなさい!」

「妹紅、信じられないかもしれないけど、この子リヴィアよ。」

「へ?」

「私が説明しましょう」

騎士王説明中・・・・・・・・

「というわけです。」

「250年前に急に姿を消したと思ったら、そんなことがあったんだな」

ズズズとお茶を啜る妹紅。

「好きでこんな身体になったんじゃないもん。」

「悪い悪い」

四人はしばらく会話を続けた。

## 序章終了時の設定

### 【キャラクター設定】

リヴィアスフィールⅡNⅡゼーゲブレヒト

年齢…12歳（但し、リヴィアスフィールの魂の影響で精神年齢はもっと上）

魔力量…不明

魔導師ランク…SSSオーバー

魔力光…虹色・桜色

レアスキル…マテリアライズ・聖王の鎧

2つ名…創聖の聖王騎士

デバイス…複数

【容姿】金髪に翡翠と紅玉の虹彩異色。顔立ちはなのはと同じ。腰まで届く金髪は首元でツォーテールにしている。↑ようはコロナの髪型。

（騎士甲冑）

『ノーマル形態』

黒いドレスのような服に白い胸当てと腰当てを着けた服装（イメージはオリヴィエの戦闘服）。腕には肘まで覆う青と白のガントレットと黒いグローブ。

肩に黒いマントの付いた白いショルダーアーマー（わかる人はブラツクサレナの装備をイメージしてください）

『高機動形態』

ノーマル形態にあったショルダーアーマーとマントが消滅した代わりに背中に二対四枚の白い翼『フレイヤーウィング』（わかる人はウィングゼロの翼をイメージしてください。）が生えている。

【備考】

高町なのはとリヴィアスフィールの魂が融合した存在。実力は未知数。性格は極めて温厚。しかし、自分が敵と判断した相手には容赦ない。

一人称は『私』もしくは『妾』。公の場や初対面の人には『妾』。

なのは「T」ゼーゲブレヒト

年齢…9歳（精神年齢は12歳。

↑なのはの記憶の影響）

魔力量… Sランク相当

魔導師ランク… S+

魔力光… 淡い桜色

レアスキル… 無し

デバイス… スルト

【容姿】 黒い瞳に栗色の髪の毛。腰まで届く栗色の髪を肩の辺りで一つに纏めている。

（バリアジャケット）

金色の装飾があしらわれた青い軽装の鎧に白いロングスカートが着いた姿。

腕には白いラインが入った青い籠手。

### 【備考】

なのは（リヴィア）のクローンで容姿はまったく同じ。滅多に怒る事はないが、友人や家族を傷付けた相手には冷酷。

聖王邸でリヴィアの補助兼護衛を担当している。また、オリジナルと違い運動神経は抜群。

シルメリアⅡゼーゲブレヒト

年齢…12歳（精神年齢も同じ）

魔力量…S+相当

魔導師ランク…SSランク

魔力光…濃い桜色・虹色

レアスキル…聖王の鎧

2つ名…無し

デバイス…理音

【容姿】黒い瞳に栗色の髪の毛。髪型はショートヘア（イメージは星光の襲撃者）

（バリアジャケット）

オリヴィエが着ていた戦闘服を模した物。色は青と白を基調としている。

腕にはオリヴィエが使っていたガントレットをスリム化した物を装着している。

【備考】

高町なのはの五番目のクローン。オリヴィエの遺伝子が投入され、オリヴィエの魂が宿った存在。

接近戦に秀であり、なのはとのコンビは最強。特殊能力『メタモルフォーゼ肉体変化』を多用する。

リヴィアの家族兼護衛。

リズ＝ヴァレンチノ

性別…女性

年齢…25歳

魔力量…Aランク相当

魔力光…白色

魔導師ランク…所得していないので不明

レアスキル…無し

2つ名…無し

デバイス…無し

【容姿】青い瞳に黒髪。黒髪は肩に掛かるぐらいの長さで顔立ちはリニスに似ている。

（騎士甲冑）

非戦闘員のため無し。

【備考】

リヴィアの側近。シルメリアやなのはとは違い非戦闘員。しかし、ナイフを携帯しているので接近戦も一応行える。

リヴィアの放浪癖に頭を悩ませている。

オリヴィエ「ゼーゲブレヒト

シルメリアに宿るもう1つの魂。

リヴィア（先代）の姉であり、『最後のゆりかごの聖王』と呼ばれる聖王女。

主人格をシルメリアと入れ換えないと外部の人とは話す事ができなかったが、理音を介する事で会話が可能になった。

常にシルメリア、なのは、リヴィアの事を気にかけているお姉ちゃん。

## 【デバイス設定】

### 【レディアントウェポン】

別名『レディアントデバイス』と呼ばれる特殊なデバイス。デバイスにはない特殊な能力がある。

先代リヴィアスフィールの遺産がこれに該当する。

また、擬人化能力を有している。

デュランダル

性別…男性

特殊能力…魔力変換『氷』、『炎』、『雷』、『風』

種類…レディアントウェポン

【形状】黄色の斑模様が入った黒い刀身の大剣。（TOEIのデュラ  
ンダル）

【備考】

鍛冶神ヘファイストスによって鍛え上げられた聖剣。  
見かけによらず質量は軽い。擬人化能力が存在しない珍しいレディ  
アントウェポン。

アロンドイト

性別…女性

特殊能力…魂の物質化・魔力変換『水』

種類…レディアントウェポン

【擬人化】水色の髪の毛に同色の瞳。身長は145cmぐらいの少  
女。髪型はポニーテール

【形状】片刃の長剣。銀色の刀身に水色の装飾が施されている。

【備考】

現在のミッドチルダのとある湖で発見された剣。エクスカリバーの

姉妹剣。

子供ばい性格でムードメイカー。

エクスカリバー

性格…女性

特殊能力…障壁切断・魔力変換『烈風』

種類…レディアントウェポン

【擬人化】澄んだ青色の瞳に金髪。瞳の色以外はオリヴィエと瓜二つ。身長は165cm程。

【形状】透き通るような白銀の刀身に金色のラインが入った西欧剣。金色の装飾が施されている。

【備考】

アロنداイトとは異なる湖にあったアロنداイトの姉妹剣。オリヴィエからリヴィアの手に渡った。

鞘であるアヴァロンはリヴィアの体内にある。

レイジングハート・イクシオン

性別…女性

特殊能力… G・システム

種類… 形状記憶型インテリジェントデバイス

【待機状態】 赤い宝玉

【カノンモード】

先端が音叉ようになり、その先端には白と青の装甲が追加された。

【ブレイドモード】

エクシードの柄が縮んだ物。魔力で刃を形成するので刀身は自由自在。

【バスターライフルモード】

ウィングゼロのツインバスターライフルに青と白の装甲を追加した物。

【エクシードモード】

原作と同じ。

以上の4つのモードが追加モードになる。他にも複数のモードが存在する。

【備考】

レイジングハートの封印が解除され、本来の機能を取り戻した姿。カートリッジシステムは外され、代わりに『G・システム』が追加された。

スルト

性別…女性

特殊能力…無し

種類…インテリジェントデバイス

【待機状態】赤い正六角形のペンダント

【ハンドガンモード】

赤と黒の装甲が着いた白い二丁のハンドガン。（ストライクフリー  
ダムのライフルの色を変えた物）

【ロッドモード】

初期のレイジングハートの基本モードと同じ。

【ライフルモード】

二丁のハンドガンを連結させて銃身が伸びる。長距離援護射撃用の  
モード。

また、大威力の砲撃を放つ時もこのモードを使う。

【備考】

アクエリオンとリヴィア、レイジングハートが協力して作ったデバ  
イス。

カートリッジシステムは搭載されているが、緊急時以外の使用は禁  
止されている。

理音

性別…女性

特殊能力…無し

種類…ストレージデバイス

【待機状態】 青色の菱形のネックレス。

【備考】

格闘戦が主なシルメリアのデバイス。オリヴィエが外部と会話するためにスピーカーのような機能がついている。展開しても青色の菱形のネックレスのままぶら下がっている。

アクエリオン

性別…女性

特殊能力…無し

種類…ユニゾンデバイス

【容姿】 琥珀色の髪の毛にファイアレッドの瞳。髪の毛は背中の中間ぐらいの長さで髪型はストレート。

【備考】

『創聖の魔導書』の管制人格でリヴィアの相棒。  
リヴィアとユニゾンすると髪の毛が琥珀色、右目がファイアレッド

の瞳になる。  
単独で魔法を使用することができる。

### 創聖の魔導書

アルハザードで制作された魔導書で数多の魔法が記されている。また、魔法を創作する事もできる。

### 【レアスキル・特殊能力】

マテリアライズ  
物質創造

所有者：リヴィア

【効果】周囲の魔力素を使用してイメージした武器・防具・宝石を造り出す。

【欠点】創造中に少しだけ致命的な隙ができる。

### 聖王の鎧

所有者：シルメリア、リヴィア

【効果】自分の身体を武器化。もしくは、一定ランク以下の攻撃を無効化。常時展開型のレアスキル

【備考】人によって防げる限界が異なる。リヴィアはA A Aランクまで。シルメリア（オリヴィエ）はSSまで。

G・システム

所有者：レイジングハート

【詳細】闘志をエネルギーに変えるシステム。正式名称はジェネシック・システム。

闘志が尽きない限り無限にエネルギーを生み出す半永久機関。行動の先読みや威力増強などの追加効果をもたらす。

【欠点】術者の精神力が弱いと破壊衝動に呑み込まれる。

メタモルフォーゼ  
肉体変化

所有者：シルメリア

【効果】自分の細胞組織を変質させてイメージしたように身体を変えらる事ができる。

【利点】身体を作り替える度にスタミナを消費するが、魔力を消費しない。

魔力変換『烈風』

所有者：エクスカリバー

【効果】『風』よりもとても強力な『烈風』に魔力を変換する。

魂の物質化

所有者：アロンドイト

【効果】対象者の魂を抜き取って結晶化させる。魂は別の身体に移し変える事ができる。

【欠点】死者にしか使えず、死後一時間以内でないと物質化ができない。

日常編 第1話 学校に行こう（前書き）

時間が一気に経過しています。

日常編 第1話 学校に行こう

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

日常編 第1話 学校に行こう!!

シルメリアとなのはが聖王ゼーゲブレヒト家に入ってから数ヶ月が経過した。

シルメリアとなのはには理音、スルトというデバイスが与えられた。

リズ視点

私はただいま騎士カリムの執務室に居ます。此処に居るのは騎士カリムに呼び出されたからです。

「聖王陛下の様子はどうか？」

「もう仕事にも慣れて来たようです。シルメリアとなのはも居ますから……………心配する事なんてありませんよ。」

「そう。」

騎士カリムがこんな世間話するだけに呼び出したわけではないのは私にもわかる。

「実は…………あの子たちを学校に通わせようと思うの。」

「はあ？」

私は騎士カリムの言った言葉が理解できなかった。

確かに、彼女らは幼い部分も見られるし……………納得はできませんけど、聖王であるリヴィア様を学校に行かすのは問題ではないか？

「言つとくけど、聖王教会系列の魔法学校には入学させないわよ？」

「へっ？」

「聖王女を聖王教会に行かせるわけないじゃない。入学させるのは…………第97管理外世界の学校よ。」

“第97管理外世界”という単語に聞き覚えがあるリズは記憶の棚から情報を引き出そうとする。

「“第97管理外世界”と言うと…………あの騎士はやての？」

「そう。騎士はやての出身世界であり、高町なのはの出身世界でもある世界よ。」

「はあ………理解しましたが、戸籍や住居はどうするのですか？」

私の記憶が正しければ、『高町なのは』は死亡扱いになってる筈ですし……

「向こうの世界に居る聖王教会の騎士に作らせているわ。まあ、正確には地球出身の騎士だけだね。」

「ずいぶんと用意が良いですね。あらかじめ仕組んでいたのですか？」

「そうよ。リヴィア聖王女に伝えてちょうだいね。」

「わかりました。」

リズは了承の意を伝えて執務室をあとにして3人が居るであろう場所に向かいました。

リズ視点 OUT

カリム視点

「騎士カリム。いつの間に騎士を派遣してたのですか？」

カリムの側に控えていたシャツハが訊ねる。

そういえば、シャツハには相談せずに派遣したわね。

まあ、教えておいても良いわよね？

「シャツハ。先代の創聖の聖王騎士リヴィアスフィールドが何処で眠りについたか知ってる？」

「確か……歴史書には今の管理外世界で眠りについた……と記されていましたけど……」

「先代聖王騎士……リヴィアスフィールドは現在の第97管理外世界で眠りについたのよ。」

「!!!!!! それは歴史的発見ですよ!!!」

「でも、完全に決まったわけじゃないの。あくまでも推測の域を出ないわ。」

いや、第97管理外世界で眠りについたのは間違いない。そして、もう1つの推測もほぼ確実。

管理局不屈のエース・オブ・エース・高町なのは。彼女は十中

八九、聖王騎士リヴィアスフィールドの末裔に違いないわ。

カリム視点 O U T

これが数日前の出来事である。

そして、現在……リヴィア、なのは、シルメリアの3人は……

リヴィア視点

こんにちは！！リヴィアスフィールドです！！今、私はシルメリア  
となのはと一緒に遠見市のある学校に入学して来ました！！

「誰に説明してるの？」

「気にしない気にしない。」

今は入学式が終了して自分の教室で待機しています。

ちなみに、私たちはドイツ人と日本人のハーフの三つ子という扱い。

偶々、空いていた家を買収取ってこの世界の活動拠点になっている。本当にカリムにはお世話になりっぱなしだな。

「おーい、リヴィアさん!!」

私に話し掛けてきたのは……腰まで届く灰色の髪の毛をサイドポニーで纏めた少女……名前は……

「えっと……飛燕 刹那じゃったかな？」

「そっだよ」

ほっ。うる覚えだったから、間違えたかな？ と思ったけど、合ってたみたいだね。

飛燕という少女は私のクラスメイトなのだが……どこことなく浮いている存在のようだ。

「それで……妾に何の用じゃ？」

「えっと……友達になってください!!!」

「別に良いぞ。」

「そっだよね……私なんて……って、えええええっつ!!」

飛燕の大声に思わずリヴィアは耳を塞いだ。当然、近くに居たシル

メリアとなのはも耳を塞いだ。

「えっ、良いの！？ 本当に！？」

「別に構わんぞ。というか断る理由が何処にあるのじゃ？」

「いや……………無いけど……………私、全然友達が居なかったから……………」

「ふふ」　まあ、よろしくね。刹那」

「うん」　……………リヴィア、口調が変わってない？」

あはは、大体の人はその事を聞くな。

「この口調の方が地。」

「へえ」。　」

その時、担任の教師がやって来てホームルームが開始された。

日常編 第1話 学校に行こう（後書き）

久々の投稿。だけど、ぐだぐだ。

オリキャラ解説

飛燕 刹那

性別：女性

容姿：右目が黒金色、左目が白金色の虹彩異色。

髪の色は灰色で背中の中間までの髪の毛を先端で纏めている。

リヴィアのクラスメイトで運動神経抜群の少女。

『蒼天飛燕流』という剣術を会得しており、剣術はぴかー。

魔力も持っているが、詳細は今後の物語で明らかになる予定。

日常編 第2話 喫茶翠屋

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

日常編 第2話 喫茶翠屋

なのはが住んでいた町の隣町にある中高一貫校 公立蒼穹中学校に入学したリヴィア、なのは、シルメリア。  
そして、入学式から数週間が経過したある日……

リヴィア視点

入学から結構な日数が経過しました。最初は授業に着いていくのがやっとでした。

何せ、数ヶ月も学校に行ってませんから。まあ、なんとかなりましたが。

「リヴィー」

ガシッ！！

「ひゃあっ！」

帰り支度をしているリヴィアに灰色の髪の毛の少女が背後から抱きつく。

「刹那……いつもいつも後ろから抱きつくの止めてくれない？」

リヴィアはジト目で刹那を睨み付ける。

刹那はよく私に抱き着いてくる。本人曰く、スキンシップの一環だ！！らしい。刹那ってはやてと同類？

あつ、ちなみに『リヴィ』というのは私の愛称です。なのはは『なつちゃん』、シルメリアは『リア』って呼ばれています。

おっと、閑話休題

「今日は何？」

「ん、リヴィ、この後暇？」

うーん……別に聖王教会からも仕事は来てないし……大丈夫かな。

「うん。暇だけど?」

「じゃあさ!!隣町にある喫茶店に行こう!!」

前から行ってみたかったんだけど……1人だと行きずらくってさあ……」

「あゝ、わかった。シルメリア、なのは。2人も一緒に行く?」

「「行く」」

満悦の笑みを浮かべて同意を示すシルメリアとなのはの2人。

そして、私たち4人は向かう先も確認せずに刹那と喫茶店に向かった。

リヴィア視点     O U T

## シルメリア視点

私シルメリアは姉さんとなのはと一緒に喫茶店に向かったわけですが……まさか、此処とは思いませんでした。

『喫茶 翠屋』

お店の看板にはそう書かれていた。

かなり不味いような……。姉さんは……容姿が変わっているから大丈夫だけど、私となのはは問題あります!!!!

『姉さん……どうしよう?』

『大丈夫だよ。』

念話で姉さんに助け?を求めますが、姉さんはそのまま刹那と一緒にお店の中に入って行ってしまいました。

「いらつしゃいます」

何名様ですか?」

「4人です。」

「では、お席に案内します。」

従業員がリヴィアたちを案内する。

「此処はシュークリームが美味しいんだよ」

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「……！」

リヴィアたちの座るテーブルにやって来たのはなのはの姉——高町美由希だった。

「シュークリーム4つとミルクティー4つ、お願いします。」

「かしこまりました。」

しかし、美由希は何事も無いように去って行った。

いったいどうしたんでしょう？ 死んだ妹と瓜二つの人間が目の前に居るのに何の反応も無いなんて……

『“高町 なのは”という存在を知ってる人には別人に見えるような魔法を使ってるの。』

『どんな魔法ですか！？そして、私の心を読まないで……！』

まったく……この人は本当に規格外です。

『そう言う貴女も十分規格外だと思うけど？』

オリヴィエ姉さん……言わないでください。私だって気にしてるんです!!

『まあ、私も十分規格外の部類に入りますがね。』

『自分で言いますか?』

シルメリア視点 O U T

刹那視点

うゝん♪ 噂通り美味しい♪

運ばれて来たシュークリームにかぶり付く刹那。  
その様子はまるでハムスターのようである。

「リヴィー、リヴィーのシュークリーム頂戴」

「ダ・メ」

リヴィー……そんな眩しすぎる笑顔を浮かべるから、ファンクラブができるんだね。

「いいじゃんかよ。」

「ダメ。もう1つ頼めば、良いでしょ。」

「今月は金欠なんだよ……!!!!」

漫画や小説にお小遣いのほとんどを消費すると思わなかったんだよ……!!

「はあ………わかったよ。一個だけだよ？」

ちなみに、リヴィーはシュークリームを3つほど追加注文している。

「ほんと!? いただきます」

ヒョイツ!! パクッ!!

リヴィーのシュークリームをかつさらい、そのまま口に運ぶ刹那。

「うん、やっぱり美味しい」

「誉めてくれてありがとう。そのシュークリームは内の自慢の一品なの。」

リヴィアたちのテーブルにやって来たのは栗色の長い髪が特徴的な女性だった。

ん？この人、確かパティシエの……高町 桃子さん？  
どこことなく、なっちゃんとリアに似ているような……気のせいかな？

「貴女たちを見てると娘を思い出すわ。」

「！……！」

リヴィアの身体がビクツ、と震えたが、誰も気付かない。

「その娘さんは？」

「……数ヶ月前に死んでしまったわ。生きてたら、貴女と同じ歳よ。」

……もしかして、私地雷踏んだ？

「えっと………すいません。辛い事を聞いてしまって………」

「良いのよ。もう割り切ってるから。」

そう言う桃子の顔は笑っているが、その笑顔の奥には悲しみがあっ

た。

## 日常編 第2話 喫茶翠屋（後書き）

更新が遅れてしまい申し訳ありませんでした。最近、どうも忙しいため執筆の時間があまり取れません。少しずつは書いているのですが……

さて、なんとなくですが、桃子さんを出してみましたwww  
もう少し上手に書けたらいいのですが……。やはり文才がほしいです。

次の更新は明日には行つ予定です。

## オリジナル魔法

幻惑の庭園  
イリュージョンガーデン

種類：認識阻害魔法

ランク：SS

リヴィアがなのはとシルメリアの姿を隠蔽するために使用した魔法。設定した存在からの認識をごまかす？効果がある。今回、設定したのは、高町なのはの存在を知る者。そのため、桃子には別人に見える。

日常編 第3話 オレンジ髪の少女

ある日、聖王騎士は出会った。

オレンジ色の髪の少女に。

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

日常編 第3話 オレンジ髪の少女

とある日曜日。

リヴィアは第1世界ミッドチルダの北西部にある小川で魔法の訓練

をしていた。

いつもなら、金魚のフンのように着いてくるのはとシルメリアも刹那と一緒に遊びに行っている。

リヴィア視点

バンッ！！バンッ！！バンッ！！

指先に生成した魔力の弾丸をアクエリオンが操作しているスフィアに命中する。

射つのは桜色の弾丸ではなく、聖王家特有の虹色の魔力の弾丸。桜色のリンカーコアはまだ治療中。

私って……かなり無茶な事してたんだね。

「さすがですね。」

「射撃とかはあまり得意じゃないんだけどね。」

砲撃なら得意だけだね。」

私が放った虹色の弾丸は正確にスフィアを撃ち落としている。まあ、何発か外してるけど。

「謙遜なさらないください。さあ、十個追加です！！」

アクエリオンが新たに十個のスフィアを作り出す。

「纏めて撃ち落とす!!」

リヴィアの周囲に十個の虹色のスフィアが生成される。

「アクセルシューター…シュート!!」

十個のアクセルシューターはリヴィアの操作通りに動き、次々にスフィアを撃ち落とす。

「今日は此処までにしましょう。」

「わかった。」

ふう。久々にアクセルシューターを使ったけど……操作能力は鈍っていないみたいだね。

がさがさ

「!! 誰じゃ!?!」

リヴィアが腰に差していたエクスカリバーを抜刀し、構える。

気配は1つだけ。管理局の人間？ それとも、聖王教会の？

「えっと…怪しい者じゃないので剣を降ろしてください。」

茂みの中から現れたのはオレンジ髪の幼い少女だった。

??? 視点

お兄ちゃんが管理局のお仕事で居ないから私は散歩していた。  
この森は私のお気に入り♪ 空気や小川の水は澄んでるし♪ 何  
より静かし♪

バンッ！！バンッ！！バンッ！！

「！！ 銃声！？」

魔導師が戦ってるのかな？

茂みの影から銃声が聞こえた方を除くと……私より歳上の金髪の女の子と琥珀色の髪の妖精が魔法の訓練をしていました。

「……………」

私はその訓練風景をじっと見詰めていました。

「アクセルシューター…シュート！！」

「凄い………… 十個の誘導弾を一度に操るなんて…………」

「！！ 誰じゃ！？」

！！ 気付かれた！！

………… 正直に出ていった方が良いよね？

「えっと………… 怪しい者じゃないので剣を降ろしてください。」

私はよく見えなかった女の子の容姿を確認しました。金髪に翡翠と紅玉の虹彩異色。

伝説でしか聞いた事のない“聖王の証”を持つ女の子が私の目の前に居ました。

???? 視点 O U T

## アクエリオン視点

マスターがいきなりエクスカリバーを構えるから、どんな人かな？ と思いましたが、普通の女の子ですね。敵意も感じられません。

「何者じゃ？」

「えっと……ティアナ＝ランスターです。此処に来たのは偶々で……」

ふむ。嘘発見魔法を使っても反応なし。嘘は言っていないみたいですね。

「そうか……剣を向けて悪かったな。

妾はリヴィアスフィール＝N＝ゼーゲブレヒトじゃ。」

エクスカリバーを納刀しながら自己紹介するリヴィア。

「私はリヴィアスフィールの従者アクエリオンと申します。」

「はい。それにしても……リヴィアスフィールさんはお強いんですね。」

「妾は強くはない。ティアナは何を基準に強いと思う？」

「えっと……わかりません。」

まあ、歳いかない女の子に答えられるわけありませんね。

「では、ティアナ。汝は力は何のためにあると思う？」

「え……敵を倒すため、ですか？」

えらく、攻撃的な考えですね。正義に憧れる子供には当たり前なのでしょうか？

「それも1つじゃろう。」

「じゃあ、リヴィアスフィールさんは何のためにあると思うのですか？」

「妾は……大切な誰かを守るために力を存在すると考えておる。」

じゃが、妾は大切な人を守る事ができなかった。」

マスター……まだオリヴィエ様を護れなかった事を気にしてるのですか？

ちなみに、今のリヴィアは先代の魂の影響がとっても大きいため、  
‘なのは’としての魂が薄れてきているのだ。

簡単に言えば、‘高町 なのは’の記憶と心を持ったリヴィアスフ  
イールのような状態である。

そのため、先代の悲しい記憶や感情も自分のもののように感じるの  
だ。

「だから、妾は強くないのじゃ。」

……そろそろ帰らないとリズにどやされますね。

今回もリズに黙って出てきましたし……

「マスター……そろそろ……」

「………わかった。」

アクエリオンとリヴィアは転移魔法を使って聖王教会に帰って行っ  
た。

ティアナの頭の中ではリヴィアの言っていたことがテープのように  
何度も何度も再生されていた。

この日からティアナがちょくちょくりヴィアの魔法訓練の場に現れ  
るようになった。

### 日常編 第3話 オレンジ髪の少女（後書き）

予定通りに投稿することができました。

個人的にティアナは好きなので、ティアナはリヴィア陣営にくわえます。

次は 冥府の炎王を投稿するつもりです。

日常編 第4話 バンドやろう!!

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

日常編 第4話 バンドやろう!!

リヴィア視点

こんにちは!! 現・聖王教会最高権力者の聖王リヴィアスフィ  
ール!! N!! ゼーゲブレヒトです!!

突然ですが、今とっーても困って居ます。

「どうするの? 学園祭の出し物。」

リヴィアたちの親友ー飛燕 刹那はそう切り出した。

此处、蒼穹中学校（正式名は蒼穹学園中等部）は学園祭で有名な学校で1人1つの出し物をしなければなりません。

そこで私たちは何をしようかを決めかねています。

「早くしないと準備期間が短くなるからね。早急に決めないと……」

「まったく案が出ないのも凄くけどね。」

「「同感。」」

シルメリアの言葉にリヴィアとなのはは同意した。

「ちょっと3人とも考えてる？」

「「「考えてるよ!!」「」「」

うう、でも……学園祭の定番で4人でできそうな物は……

「バンド……………」。

「「「へっ?」「」「」

「バンドなんてどう? 1人一曲ずつ歌って……………」

「リヴィ、ナイスアイデアだよ!!」

「私も…………やってみたい。」

「右に同じく。」

「でも、楽器はどうしようか？」

そうなんだよね。楽器って一個一個が高いし………カリムを頼るわけにはいかないし……

「それなら大丈夫!! 楽器なら当てがあるよ!!」

「ほんと？」

「うん、私の家の近所に楽器をレンタルしてくれるお店があるから!」

「じゃあ、これから行ってみようか？」

「『オッケー』」

今はもう放課後。私たち4人はカバンを掴むと刹那がよく行くらしい楽器屋に向かった。

刹那視点

私たち4人が来たのはまだ真新しい建物が特徴的なレンタル楽器店『けいおん!』。

……………お店の名前についてはノーコメントで。

「唯さん、居ますか？」

「ん？ 刹那ちゃんか。今日はどうしたの？」

お店のカウンターの椅子に座っていたのは、茶色の髪の毛が特徴的な女性―神楽 唯さん。このお店の店主です。ちなみに、年齢不祥。

「実は、学園祭でバンドをするんだ。」

「あゝ、要件は読めた。」

バンドで使う楽器を安くレンタルして欲しいわけね？」

「そういうこと。」

「別にいいよ。ついでに練習室も貸してあげる。」

「さっすが唯さん。」

「楽器は好きに選んでいいよ。」

唯さんの言葉を皮切りに私たちは自分の楽器を探し始めた。

なのは視点

数分後……なのはたちは『けいおん!』にある練習室で選んだ楽器を片手に楽器の練習をしていた。

「うゝ、難しいのゝ」

「そんなに簡単に引けるわけないよねゝ。」

「キーボードは比較的簡単だけど……曲を引くにはまだまだだよ。」

此处に居るみんなは楽器に関してはまったくの初心者。さすがに、アニメやドラマのように上手く引けません。

約一名を除いて……

「~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪」

歌いながらギターを引くのは私たちの姉ーリヴィアスフィールです。

本当に初心者ですか！？明らかに初心者のレベルを越えていますよ！？

「リヴィって本当に初心者？」

「初心者……には見えないよね。」

「うん。」

説明してなかったが、4人が選んだ楽器は次のようになっている。

ギター↓リヴィア

エレキギター↓なのは

キーボード↓シルメリア

ドラム↓刹那

「いや、最近の子は凄いな。」

むしろ、規格外だよ！！

「…………絶対に神は人のパラメーター配分を間違ったよね？」

「うん。」

刹那の言葉にシルメリアとなのはの2人は揃って頷いた。

ちなみに、唯は楽器を破格の値段でレンタルしてくれた事を此处に記しておく。

日常編 第4話 バンドやろう!! (後書き)

評価があまり伸びない……。

この作品・・・人気ないのかな？

まあ、読みにくいのは自分でも理解してるけど・・・

できれば、感想・意見・評価をください!!

## 日常編 第5話 夏休み

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

日常編 第5話 夏休み ♪

時間はさらに経過して、7月の下旬。（時間が進みすぎなのは気にしないでください。 B y 作者）

各地の公立学校が長期休暇に入るように蒼穹学園もその例外ではなかった。

シルメリア視点

夏の長期休暇に入って数日後……私たち姉妹は飛燕家の所有するコテージに招待されました。

ただ……そのコテージが……

「「でかつ!!」「」

聖王邸も大きいけど……コテージにしては大きすぎだと思う。

コテージにしては明らかに大きすぎる建物が海に面した山の中に存在している。

「刹那の家って……金持ち?」

「ん? 違うよ。普通の家。」

そうだよね……前に行った時の刹那の家は普通の家だったし!! 高町家と同じような道場はあったけど……

「これは飛燕家がまだお金持ちだった時に作られた別荘なのよ。」

「お母さん!!」

ふっ、と現れた女性に抱きつく刹那。

「お久しぶりです、飛鳥さん。」

刹那が抱き付いているのは刹那の母親である飛燕 飛鳥さん。容姿は刹那をそのまま大人したような感じ。

「この前遊びに来た時以来だね、シルメリアちゃん。」

その隣の少女は？」

「はじめましてじゃな。妾はリヴィアスフィール＝N＝ゼーゲブレヒト。」

なのはとシルメリアの姉じゃ。」

「私は飛燕 飛鳥です。貴女の親友、刹那の母親です。」

「ねえ、3人とも！！ 海で泳ごうよ！！ 答えは聞いてないよ！！」

「ちよっ…刹那！！ 引つ張らないで！！」

「歩くから！！ 歩くから引き摺らないで！！」

私となのはは刹那に強制連行されました。そして、姉さんも飛鳥さんも笑ってないで助けて〜！！！！

しかし、シルメリアの願いは叶わず、二人は刹那によって海辺まで連行されてしまった。

リヴィア視点

刹那がなのはとシルメリアを強制連行した後を追うようにして私も海に向かった。

もちろん、水着に着替えて。

私が居るのは岩場の上で眼下には元気よく遊ぶ3人の姿が映っている。

無邪気にはしゃぐ子供ばいを見てると本当に和むの……

「リヴィア、まるでお婆さんだよ」

いつの間にリヴィアの傍らには白いワンピースを着た水色の髪の少女が立っていた。

「アロンドイト……勝手に出てきちゃ駄目だよ。」

「いいじゃんか、折角海に来たのに本の中で待機なんていやだもん。」

「はあ、まあ、人気がない時に出てきてくれたのは感心するよ。」

この少女はアロンドイト。名前からわかるようにレディアントデバイスのアロンドイトの人間形態だ。

アロンドイトとエクスは普段から人間形態で居る事が多い。まあ、いろいろ手伝ってくれるんだけどね。エクスはいつも真面目そうに見えて、時々羽目はずすけど、空気は読んでくれるからありがたい。

だけど、アロンドイトは性格がほとんど子供だから、世話がやけ

る。

「ねえねえ。ちょっと散歩して来ていい？」

「止めても行くんでしょ？」

あまり遠くには行かないようにね。」

「わかってる〜」

本当にわかってるの？

【ふふ♪ まるで母親みたいですネ。】

「レイジングハート……あまりからかわないで。」

【でも、満更でもないでしょ？】

「まあね。元々子供は嫌いじゃないしね。」

【貴女も子供でしょうに。】

「精神は大人だよ。まったく何処のアニメなんだか。」

「リヴィアは混ざらないのか？」

創聖の魔導書から出てきたのは金髪の女性、エクス。服装は水着。泳ぐ気満々だ。

「……そうだね、少し混ざってくるよ。」

「私もお供しますよ。」

私とエクスは立ち上がると勢いよく海に向けてダイブした。

なのは視点

楽しい時間はあっという間に過ぎて今はもう夜。

刹那ちゃんのはしゃぎ疲れたみたいで部屋でぐっすりと眠っている。

本当なら、私も眠る時間なんだけど……ちょっと夜風に当たったかったのでコテージの外に出ています。

「山の中で夜風に当たるのは感心しないよ。」

「お姉ちゃん……………」

「どうしたの？」

「うん……こんな平和の日々がずっと続けば、いいのになって思  
って……ね。」

今日はとっても楽しかった。だけど、この日が嵐の前触れの幻  
想のように思えて仕方なかった。

「いつまでも続くよ。私が続かせてあげる。」

「えっ？」

「風邪を引く前に戻って来なさいよ。」

リヴィアはそれだけ言い残すとコテージの中に戻って行った。

私はしばらくその場を動く事ができなかった。リヴィアお姉ち  
やんの言葉は裏返せば、『自分を犠牲にしても守る』と聞こえたか  
ら………

日常編 第6話 夏休み 弐

山の中……彼女は出会う。

二匹の化け物に。

彼らは古に封印されし者。

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

日常編 第6話 夏休み 弐

刹那視点

二日目、昨日は海に行ったけど、山の中を探検、  
くじ引きで班を別て結果、リヴィと同じ班になりました、

ふふふ♪この山の森は暗いから死角から飛び付いて……

「なんかしたら、容赦なくボコるよ？」

「すいません。」

怖いよ！！ リヴィがむちゃくちゃ怖い！！そして、木刀に手を掛けないでー！！

本当にしないから！！

「ほら、行くよ。」

「了解です、大佐！！」

私とリヴィは森の奥へと向かって行きました。

リヴィア視点

奥まで来たのは良いですけど……予想以上に暗いです。太陽の光がほとんど入って来ません。

刹那曰く、本人もこんな山奥まで来た事はないそうです。  
照明魔法を使えば進み易いのですが……一般人の刹那の前では使えません。

正直、幽霊とかが居そう……熊とかなら、物理攻撃でなんとかなるけど……

「刹那。此処はどんな山なの？」

「私も詳しくは知らないけど……此処は霊山らしいんだ。」

「霊山？ あの霊的存在が集まると言われている？」

「そう。その霊山。」

霊山と言えば、東北地方にある『恐山』が有名だけど……それに此処は魔力とは別系統のエネルギーを感じる。

『レイジングハート。少し周囲に何か反応がないか調べてくれる？』

《もうやっています。》

本当に優秀なデバイスだね。まあ、オリヴィエ姉様が先代のために作ったデバイスだしね。

《マスターも感知していると思いますが、魔力とは異なる別エネルギーを感じます。》

『別系統のエネルギー………詳細は?』

《不明です。》

まあ、流石のレイジングハートも未知なるエネルギーじゃ、わからないのも無理ないね。

「リヴィ、リヴィ。あそこは日光が入ってきてるよ?」

「………本当だね。行ってみよう。」

2人は日光の光差す場所に向けて走り出した。

刹那の言う通りだった。

そこは木々の間がぼっかりと空き、天窓のように光が射し込んでいた。

「行き止まり………だね。」

「うん。………?あれは………祠?」

道は行き止まりだけど………その場所には木製の祠があった。両端には狐と猫の彫像。はつきり言って怪しい。

「刹那は何か知ってる?」

「うっん。お母さんから祠の事なんて聞いた事ないよ。」

「そっか……触らぬ神に祟りなして事で引き返そう。」

「さんせうい。」

刹那とリヴィアは急ぎ足でその場から立ち去ろうとするが……

―待って!! 帰らないで!!―

「!」「!」「!」

念話?……違う。念話じゃない。これは似て非なる物……

—お願い!! 私達を此処から出して!!—

—お願い……こんな暗い場所……いや。—

「刹那……聞こえた?」

「うん……幻聴じゃないみたい。」

でも、“助けて”って……何処から?

ガタガタ、ガタガタ

あつ、祠が動いてる……。あの中に閉じ込められてるわけか……

……

リヴィアは祠に近づき、祠を封印しているお札を剥がした。

ピカッ!!

眩い閃光がリヴィアと刹那の視界を完全に奪った。

???視点

うゝ……………お日様の光が眩しいよゝ。……………って事は私、外に出れたの……………!!

ヤッター……………!! 私達を騙そうとした悪い人間に封印される事300年。ようやく開放されました……………!!

「うゝ、やっぱり光の中は良いものです。真つ暗な祠の中とは大違いです。」

「煉……………起きた?」

「久遠<sup>くおん</sup>？ 貴女も外に出れたのですね？」

「うん……………」

あつ、自己紹介が遅れました。私は妖猫の煉。  
そして、さっき話し掛けてきたのは私の親友、妖狐の久遠です。

「煉……………踏んでる。」

「へっ？」

私の足元（ちなみに、今の私は二尾の猫です。）には……………私達  
を開放してくれた少女がいました。

金髪に翡翠と紅玉の瞳……………この人が現代のリヴィアスフィー  
ル？

煉は飛び下りて少女の様子を確認する

「死んだ？」

「いやいや！！ 死んでないから！」

「うつ……………」

あつ、目を覚ました！！

「貴女たちは？」

「私は妖猫の煉。貴女に助けを求めた者です。」

「九尾の久遠……よろしく。」

はは、久遠は相変わらず無愛想だな。

「妾はリヴィア。リヴィアスフィール＝N＝ゼーゲブレヒトじゃ。」

「まずはリヴィアスフィール様。我等の封印を解除してくれてありがとうございます。」

「……………ありがとう。」

「じゃが、何でこんな場所に？」

「それには色々ありまして……………」

煉は自分と久遠がこの山の祠に封印された経緯を話し出した。

煉と久遠はこの地に封印されてる剣―スサノオの剣（天叢雲剣）―を守護する妖怪であり、ある時、天叢雲剣を手にとろうとした悪い人間によって封印された。

「じゃあ、天叢雲剣は？」

「わかりません。なんせ何百年も前の事ですから。」

「そうか……………君たちは此れからどうするのじゃ？」

もう決まっています。貴女のことを知ってるから。

「貴女に着いて行きます。」

「そうか。じゃあ、これからもよろしくな。」

「こちらこそ。」

「……………よろしく。」

ずっと…一緒に居ますよ、創聖の聖王騎士リヴィアスフィール様。それが先代の願いであるですから。

もともと貴方は私たちを知りませんけどね……………。

私たちが妖猫と妖孤になった時には貴方…………先代のリヴィアスフィールは亡くなってしまったのですから。

ちなみに、刹那はいつの間にか眠っており、リヴィアがおぶさって帰る事になった事を記しておく。

日常編 第6話 夏休み 貳（後書き）

リヴィアたちに妖猫の煉と妖狐の久遠が加わりました。

久遠はとらハの久遠をイメージしてください。ちなみに、作者である私はとらいあんぐるハートを知りません。

煉と久遠について

煉と久遠は先代のリヴィアが助けた猫と狐だった。

死ぬ直前に冗談で言ったお願いを真に受けて、妖猫と妖狐になった。

煉は二尾の白猫。久遠は九尾の狐。

また、人間形態になれるが、それはいずれ……

日常編 第7話 学園祭 開始！！

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

日常編 第7話 学園祭 開始！！

煉と久遠に出会って数多の日々が経過した。飛鳥には山の中になつ  
かれたと言つて連れ帰った。

今は夏休みが終了し、残暑の9月。（毎度言いますが、時間の進み  
が早いのはデフォです。 BY 作者。）

リヴィア視点

夏休みが終わり、9月に入った。今日は待ちに待った学園祭の  
開催日！！

私達の出番は最後の方なので出し物を見て回る事にしました。

「うわゝ賑やかだね。」

「まあ、結構有名な学園祭だからね。」

道の両端には三年生が経営する出店が所狭しと立ち並ぶその光景には圧巻される。

「モグモグ……おいしい。」

「あつ、私も一個ちょうだい。」

「いいよ。」

「ありがとう。モグモグ……おいしい。」

刹那となのはが食べてるのは近くあった出店のたこ焼きなの。

「私達の出番は何時だっけ？」

「5時丁度。まだまだ時間はあるよ。」

「私達の食べ歩きする？」

「うん。」

ちなみに、なのはとシルメリアのお金を管理しているのはリヴィアである。

そして、そのお金は騎士カリムのポケットマネーから出ているが、

余談である。

「すみません。たい焼き2つください。」

「あいよ。200円だよ。」

「はい、200円」

財布から百円玉を二枚取り出し、会計の男性に渡す。

「間違つてたら失礼だけど…君がドイツからの留学生かい？」

「そうですよ。よく知ってますね？」

「噂は三年生の全クラスにまで広まっているよ。」

あゝ……やっぱり噂になってるんだ。金髪に翡翠と紅玉の虹彩異色は私ぐらいしか居ないしね。

「ほら、たい焼き。焼きたてだぞ。」

「ありがとうございます。」

振り返ったりヴィアの瞳が捉えたのは……私立聖祥小学校の制服に身を包んだ金髪の少女だった。

「ん？ あれはバニングス家の令嬢じゃねえか。」

バニングス家の令嬢……アリサ……ちゃん？

「リヴィア姉さん………しっかりしてくださいー!!」

「はっ!!…ごめん、シルメリア。」

そうだ………今の私は高町なのじゃない。今の私は………聖王  
リヴィアスフィール"Ⅱ"ゼーゲブレヒトだ!!

「刹那となのはの所に行こう!!」

「うん!!」

私とシルメリアは刹那となのはが待っている場所に走り出した。

なのは視点

今、私が居るのは学園の丁度中央に位置する時計台の麓です。  
さっきまで刹那と一緒に行動してたんだけど………はぐれちゃ  
いました。テヘツ。

「ん………スルト。シルメリアお姉ちゃんか、リヴィアお姉ちゃん

の魔力反応探れる?』

《少しお時間をいただければ。》

『なるべく早く。』

《了解した、我が主。》

なのはの首から掛けられている赤い正六角形の宝玉・スルトからダ  
ンディーな声が響く。

さて……と。スルトの調査が終わるまでどうしようかな?  
あんまり使い過ぎるとお小遣いがなくなっちゃうし……

「なのは?」

「へっ?」

「なのは!! あんた、なのはよね!?」

なのはに金髪の少女が突っ掛かる。

「え〜と……人違いじゃないでしょうか?」

「んなわけない!! いままで何してたの!?」

マズイことになっちゃったの……。まさか、アリサさんに会  
うことになるなんて……

「私は確かに“なのは”という名前ですが、貴女とは面識はありま

せんよ?」

「はあっ!?! あんた何言ってるのよ!?!」

「どないしたん、アリサちゃん?」

「はやて!?!」

「だから、どうしたん……って、なのはちゃん!?!」

ちよっ!! はやてさんまで!?! 絶体絶命!! シルメリアお姉ちゃん、リヴィアお姉ちゃん、助けて〜!?!?!

「妾の妹に何かようか?」

なのはの絶体絶命の危機に現れたのは大急ぎで駆けつけたリヴィアだった。

「あつ、リヴィアお姉ちゃん!?!」

「あんた誰よ?」

「妾はリヴィアスフィール!! N!! ゼーゲブレヒト。そこのなのは!! T!! ゼーゲブレヒトの姉じゃ。」

「えっ、じゃあ本当に人違い?」

「だから、本当に人違いだって言ったのに!?!」

「ご、ごめん。死んだ知り合いにそっくりだったから……」

「それにしても、ほんま瓜二つやな。見分けがつかんわ。」

瓜二つなのは『プロジェクトF』で生み出されたクローンなんだから当然なんだけどね。

「なのは、リヴィア姉さん。そろそろリハーサルの間だよ。」

「了解。なのは、シルメリア、会場に向かうよ。」

「うん。」

アリサさんとはやてさんはほつといて私達はリハーサル会場に向かいました。

ちなみに、刹那はケータイで連絡しました。

日常編 第7話 学園祭 開始！！（後書き）

投稿が遅れてしまい申し訳ありませんでした。

文章を長くしようと試行錯誤していたのですが、大して伸びず。

誰か、私に文才をください！！

日常編 第8話 学園祭

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

日常編 第8話 学園祭

リヴィア視点

アリサの追究を退けた私達はバンド会場である体育館の控え室に  
来ています。

アリサやはやてが来ているのには本当に驚いた。何せアリサ  
たちが通う聖祥小学校は隣町にあるから、絶対に会わないと思っ  
たのに……………

『リヴィアお姉ちゃん…………ごめんね。迷惑掛けちゃって……………』

『気にしないよ。今回ののはまったくの予想外だったんだし。それに……なのは「T」ゼーゲブレヒトは“高町　なのは”じゃないんだから。』

『でも………』

『そ・れ・と！！　昔の私みたいにいい子ぶるのは止めなさい！！　私は気にしないから。』

今のなのはは昔の私みたいにいい子で居ようとする傾向がある。

まあ、昔の私に比べたら姉妹に甘えてるんだけどね。

『子供は迷惑を無意識に掛けてしまうものです。』

先代のリヴィアも子供の頃は私やクラウスに甘えたものです。』

なのはとリヴィアの思念通話にオリヴィエが介入してくる。どうやら盗聴していたようだ。

『でも………我が儘言っただ事ないから………』

『あゝ、そう言えばそうだった。』』

昔のなのは（リヴィア）はほとんど我が儘を言っただ事がない。我が儘を言っただのは管理局に協力する時や入局する時ぐらいである。

『まあ、おいおいわかっていくよ。我が儘の程度を、ね？』

『うん………』

ガチャッ!!

「時間だよ。」

特に緊張した様子がない刹那が控え室に入って来ました。私でも、少し緊張してるのに……

「さてと……じゃあ、いつこか？」

「「「うん!!」「」」

4人はライブ会場に向けて歩き出した。

なのは視点

ライブ会場である体育館の舞台の上に立った私だけど………足がすくみそうです。

体育館の椅子はすべて埋まり、千客万来の状態なの。

「皆様初めまして。蒼穹学園中等部のリヴィアスフィールじゃ！」

「オオオオオオ！！！」

「妾たちはクラスメイトと一緒に“聖獣たちの宴”というバンドを組んである。」

「ボーカルはリーダーであるリヴィアがやります」

「時間が無いので一曲目に行きましょう」

「タイトルは“鐘を鳴らして”！！」

リヴィアに続くように刹那↓なのは↓シルメリアが言葉を繋げる。

そして、演奏が開始された。

「君と離れて 僕を探して  
幾千の夜を歩いた  
何を目指して 誰を信じて  
誓っては また揺らいだ

夕闇には牙をむけど 強くない そう強くはない  
君に背を向けて久しく 満点の星空が寂しい

光は影の影は光の  
果てまで付いて行くのだろう  
僕が笑って生きていたのなら  
鐘を鳴らして君に知らせよう」

—ワアアアアッ—

拍手喝采。 頑張って練習したかいがあったの。

「では、この熱気が冷めない内に二曲目に行きましょう！—」

「タイトルは“ i n o c c e n t   s t a r t e r ”！—」

ちなみに、刹那は司会進行の役をやって貰ってます。おっと！  
！ 今度は私がメインボーカルなんだった。

説明し忘れてましたが、メインボーカルはリヴィアお姉ちゃんと私が交互にやる事になっています。実は全員が一緒に歌ってるんだけどね。

「膝を抱えて♪ 部屋の片隅

いつも不安で震えてた♪

優しい嘘に居場所見つけて 扉を閉じた♪

寂しさ隠す 一途な思い♪

君の心を傷付けている♪

瞳の奥の真実 吸い込まれそうな笑顔の裏の真実に♪

柔らかな愛 僕が届けに行くよ♪

触れたら壊れそうな 温もりが今 過去を忘れ、溢れ出す♪

ずっと傍に居るから♪

優しい影に♪ 惑わないで♪」

——ワアアアアッ——

——水樹さ〜ん！——

……最後の歓声は聞かなかった事にしよう。

「さあ、三曲目いっちゃうよ!! 続いての曲は……」

「私が好きな“守りたい”です」

そう言えば、シルメリアお姉ちゃんがよく聞いてたな。ちなみに、私が好きなのは『イノセントハート』なの。

「これで終わりそう思ってた遠いあの日」

今は言える 羽ばたける始まりだったと

君の温もりが広がる手のひらと胸の隙間

君と行く先探してる心繋いで

守りたい 守られてる

会えない時もずっと

信じてる 君と私

すべて守るから

「さあ、いよいよ最後の曲だよ」

フルボッコの代名詞“Brave Phoenix”だ!!!

「!

―ワアアアアア！！！！！－

最後はリヴィアお姉ちゃんが締めくくります。  
というか、刹那。曲の説明にそれはないでしょ！！

「手と手の温もりが僕を強くする  
積み重ねた想い空を駆け抜けて

風になるこの願いが涙さえ乾かして  
解き放つ力が剣になり突き抜ける

きつと終わりは始まりの唄

羽ばたいた鳥の唄

戦う意味を見失わないで祈りよ星になれ  
今は共に燃やした焰を明日への灯火にして  
震えてもいいからぐつと前を見よう

この胸に小さな勇気と 奇跡を・・・

気づけば傍にいるなんて暖かいの  
まるで花のようにいつも寄り添って

本当の宝物が何なのか気づいたよ  
もう二度と迷わない君の為に僕の為に

きつと涙は虹に変わって

七色に煌めくでしょう

心と心の架け橋になり刹那でもいいから  
そして大きな翼を広げあの丘の太陽より

とびつきりの顔で無邪気に笑うんだ

ただ空は光を待ってる 飛ぼうよ・・・

やがて僕や君が大人になって夜に泣いてても

このかけがえのない歴史とぎが未来の地図になるだろう  
さあ今生まれゆく新たな道をどうか惑わずに  
ほら見上げてごらん地平線から命が息吹くよ

きつと終わりは始まりの唄

羽ばたいた鳥の唄

戦う意味を見失わないで祈りよ星になれ  
ぎゅつとぎゅつと繋いだ心を絶対に忘れないよ  
確かなことは今旅立つ僕達が

夜明けより輝いている事 笑顔で・・・  
振り返らないで 行こうよ・・・

リヴィアたちのバンド『聖獣たちの宴』は大成功を収めた。  
アンコールが会場に木霊す中、「時間だから」と言って控え室に戻  
って行った。



日常編 第8話 学園祭（後書き）

またまた短くてすみません!!!

選んだ曲は全部私が好きな曲ばかりです。

ほんとはフルで歌詞を載せたかったのですが……なかなか歌詞をコピーさしてくれるサイトが見つからず……

次は刹那が事件に巻き込まれます。

日常編 第9話 非日常の始まり

聖王騎士の親友……………

平凡な日常を過ごしていた少女。

彼女は非日常と出会う。

そして、聖王騎士は親友のために堕天使へと身を落とす。

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

日常編 第9話 非日常の始まり

学園祭のバンドは見事に成功を納め、4人は残りの学園祭を各々で巡る事した。

しかし、それが原因で事件が起こるとは誰も知らなかった。

## 刹那視点

いやゝ、バンドが成功して良かったよゝ！！

あとは遊んだり、食べたりだけ。校舎の方に行ってみようかな？

「そつえば、リヴィたちは何処に行つたんだろう？」

「あんた…ゼーゲブレヒトって奴の知り合い？」

ゼーゲブレヒト？ リヴィたちを探してるのかな？

「はい、そうですけど………あなた方は？」

私が振り向いた場所に居たのは隣町の有名な聖祥中学校の制服に身を包んだ金髪の少女と茶髪の少女でした。

「八神 はやてや。」

「アリサ!! バニングスよ。」

八神にバニングス……………何処か聞いた事があるような……………

「あつ!! 聖祥中学校の四大美女!!」

「……………此処でもその呼び名が広まってるのね。」

「もう慣れやゝ、アリサちゃん。」

『聖祥の四大美女』という呼び名は蒼穹学園でも有名なのだ。

もともとは『聖祥の五大美人』と言われていたが、なのは（リヴィア）が公式には死亡扱いとなっているため、『四大美人』に変わっているのだ。

「でも、何故2人がリヴィアスフィールの事を？」

「いやゝ、せつかくやから聖祥中学校の学園祭に招待しようと思っ  
たんよ。」

へえゝ。此処の蒼穹学園祭と違って一般公開されてない聖祥中  
学校の学園祭かゝ。

私も行ってみたいんだけど……………招待状が無いと入れないんだ  
よねゝ。

「リヴィなら、校舎の方を歩き廻るって言ってましたよ?」

「そうなの？　じゃあ、校舎内を探してみるわ。ありがとうね。」

「いえいえ。」

アリスとはやてが走り去っていく姿を刹那は見詰めていた。

「飛燕　刹那だな。」

「？　そうですけど？　何で…ムゲッ！！」

「お前には人質になって貰う。」

私の背後から現れた黒い服装の男性は私の口にハンカチを当ててきた。

何！！　変態！？　変態なの！？　ロリコンという名の変態なの！？

！！！！マズイ……………眠気が……………このハンカチ…睡…眠…薬……………

私が嗅がされた薬品を認識した瞬間、私の意識はブラックアウトした。

## リヴィア視点

刹那が謎の男性に襲われている頃、リヴィアは校舎内を1人で散策していた。

「時間が時間だから、もうほとんど片付けてるか……………」

まあ、ライブが終了したのは5:30だったし……………無理ないか……………」

うー 明日まで待つしかないか……………」

「リヴィアスフィール!!」

……………この攻撃的な声は……………」

「何のようじゃ、アリサ!! バニングス。」

リヴィアを呼び止めた人物はリヴィアの予想通りアリサ!! バニングスだった。

「その……………さっきはごめんなさい。」

「別に気にする必要はない。居なくなった親友に瓜二つの人物が現れれば、誰もがそうなる。」

「そう言ってくれるのは、嬉しいけど私の気が納まらないの。だから、これ!!」

アリサはポケットから一枚の紙を取り出し、リヴィアに差し上げた。

「隣町の聖祥中学校で行われる学園祭の招待状よ。  
絶対に来なさいよ!!」

アリサはそれだけ言うたとそそくさと走り去っていった。その姿にリヴィアは微笑んでいた。

変わらないな……アリサちゃんは。本当に……昔から。私が死んだから、沈んでいると思ってたのかな。

それとも……私が死んでいないと信じてるのかな。

そう考えた私の目には涙が浮かんでいるのに気が付いた。

~~~~~

「? 刹那からメール? 何だろう?

~~~~~!!!!」

刹那から送られてきたメールの内容を見た瞬間、私は絶句しました。

『リヴィアスフィール』ゼーゲブレヒトに告げる。

お前の親友、飛燕　刹那は私が預かった。

解放して欲しくば、すぐに近くの空き地にやって来い。

もちろん1人でだ。

この約束が守れなかった場合、飛燕　刹那とは二度と会えない事になる。

覚悟しておくことだな。』

送られてきたメールにはそう書かれていた。

まさか刹那を人質に取るなんて……いや、考えられる事が……クソッ！！　もうしばらくは大丈夫だと思ったのに……

しかし、どうして私がこの世界に居ることを？　ここに滞在して  
・  
ることは聖王教会の上層部と騎士カリムしか知らないはず……

そもそも、私が聖王と座に就いてることは聖王教会の騎士と信者

しか知らないはず・・・あーもう！！　訳わかんない！！

「とにかく急がないと！！！」

【シルメリアたちに連絡しなくて良いのですか？】

「それじゃ、刹那が危ない。要求通り私1人で行く。」

【しかし・・・相手も1人とは限りませんよ！！】

「それでも・・・刹那は私の親友で私が招いた事態なんだから・・・私1人で行く」

【「……………わかりました。その代わりにアクエリオンには連絡しておきます。」

「わかった。」

待ってて、刹那。今すぐ助けに行くから！！！！

生徒が片付けを行っている校舎をリヴィアは急ぎ足に駆け抜けた。

フリーサイド

「ふん！！ やつと来たか。」

蒼穹学園の近くにある空き地にやって来たリヴィア。  
親切にも隔離結界が展開されていたため、見つけるのはたやすいことだった。

「甲冑も武器も持たずにやって来るとはな。」

「御託は良い。刹那は返して貰おうか。」

「構わん。」

布切れで口を塞がれ、四肢を拘束された刹那がリヴィアの近くに転移されて来る。

「ンツ！！ ンーツ！！」

「ごめんね……………もう大丈夫だから。すぐに此处から出してあげる。」

バキューン！！！！

一発の銃声が鳴り響いた。

「質量兵器……………どうりで聖王の鎧が発動しない筈だ。」

「聖王の鎧が防げるのは魔法だけだからな。」

リヴィアの制服は心臓付近を中心に真っ赤に染まっていた。

そして、10人程の隠れていた魔導師が姿を現す。1人はリヴィアを撃った拳銃を握っていた。

「レイジングハート……………騎士甲冑を高機動形態で装着。」

【オーライ……………フライヤーウイングを展開。】

リヴィアの背中には白い翼が展開され、リヴィアの右手には虹色の刀身が特徴的なブレイドモードのレイジングハートが握られている。

「サークルプロテクション。」

【サークルプロテクション】

刹那の周囲を虹色の結界が覆った。

「此処に住れば、安全だからね。もうすぐしたら、私の従者が迎えに来てくれる。」

「ンッ！！ンッ！！ンッ！！」

「…………行くよ、レイジングハート。」

【オーライ。】

親友のため、創聖の聖王騎士リヴィアスフィールⅡⅡゼーゲブレヒトは殺戮の堕天使になった。

「妾は聖王教会最高権力者、聖王リヴィアスフィール。妾を倒し、名誉を得たいのなら、死ぬ気で掛かって来るのじゃ！！！！」

リヴィアの言葉を皮切りにリヴィアと魔導師たちは激突した。

「急がないと…………マスターの生命反応が弱まっている！！！！」

【我が主が魔導師<sup>ぬし</sup>ごときに不覚を取る筈がない。】

【となれば、不意討ちか……。おそらく“聖王の鎧”の影響を受けない質量兵器を使用したのでしょうか。】

【むゝ！！ 刹那を人質にした上に不意討ちするなんて！！  
絶対に私が許さないんだから！！】

「急ぎますよ。手遅れになる前に！！」

【【【うむ！！（うん！！）】】】

（マスター……………私が行くまでどうにか耐えていてください。）

レイジングハートから連絡を受けたアクエリオンたちは天空を疾走しながら、戦闘地点に向かっていった。

久遠と煉も当然戦闘地点に向かっていった。

「煉……………急ぐ。」

「わかってるよ！！！！！！」

二匹はアクエリオンたちよりも先に恩人であるリヴィアの救援に向かっていた。

「久遠！！ 着いたら、でかい一発を敵に喰らわしてやろっぜ！！」

「うん。」

煉の言葉に短く答える久遠。速度は増していき、もはや2つの弾丸のように駆け抜けていた。

日常編 第9話 非日常の始まり（後書き）

最近、冥府の炎王の執筆が進まない・・・orz

こっちのほうは嫌と言うほどシナリオが浮かんでくるのに・・・

まあ、頑張るか。

日常編 第10話 煉獄の騎士

聖王騎士が窮地に陥る時

太古より蘇りし騎士が現れる。

祖は……聖王騎士の従者。

称号は『煉獄の騎士』。

魔法少女リリカルなのは  
現代に蘇りし創聖の聖王騎士

日常編 第10話 煉獄の騎士

リヴィア視点

「パワースラッシュー!!」

リヴィアが1人の魔導師に攻撃を仕掛ける。

「ブリッツキャノンー!!」

リヴィアに向けて緑色の砲撃が襲い掛かる。

【パンツァーシルトー!!】

レイジングハートがオートで障壁を展開して魔法を防いでくれる。

かなりキツイ状況だね。魔導師一人一人の錬度はそれほど高くない。寧ろ、低いぐらい。

でも、それをチームワークで補ってる。

「セイクリッドバスターー!!……!!」

「フアランクスバリアー!!」

なるほど……全員で障壁を展開して防いだのか……

【感心してる場合ではありません！！攻撃が来ます！！】

「くっ！」

リヴィアはフライヤーウイングを羽ばたかせて迫り来る砲撃を間一髪で避ける。

『レイジングハート……ファントム、どれくらいなら使える？』

【今のマスターの身体では5分間が限界です。】

5分間……相手の魔導師の数は15人。ということは1人あたり20秒程で倒さないとダメってことか……

リヴィアの奥義 高速移動歩法ファントムは身体のリミッターを強制的に解除する裏技であり、身体にかなりの負担が掛かる歩法である。

ただでさえ、重傷を負っているリヴィアでは5分間が限界なのだ。

「ファントム……」

私の視界は白黒の世界に突入した。

魔導師たちは反応できない。だから、心臓に剣を突き刺すだけで……みんな倒れていく。

ズキッ

頭が痛い。

心が痛い。

だけど、止めない。私の親友に手を出したんだから。

ズキッ      ズキッ

痛みが増してくる。

私は痛みを気にせず、魔導師たちを刺していく。

ズキッ      ズキッ      ズキッ！！

「ぐっ！……！」

【マスター！？】

視界が元に戻る。頭痛のためにファントムが強制解除された？

ファントムを使用して5分間も経過していないのにファントムが強制解除された理由……それは生存本能が働いたからである。

「一体どんな手品を使ったかは知らんが、チェックメイトだ。」

駄目だ……血を……流し過ぎた上にファントムの使用。目が……霞む。

「止めてーッ……！」

リヴィアの灯火が消えそうになった時、非力な少女の叫びがこだました。

刹那視点

止めて……………

刹那の視界に映ったのは死にかけの親友と止めを刺そうとする男性。

その人は私の親友なの。私のかけがえのない存在なの。

お願い……止めて……

どうして私には力が無いの？ どうして親友を助ける事ができないの？

ー力が欲しいか？ー

ー欲しい。誰かを守る力が！ー

謎の声に無意識に答える刹那。

ーその力が原因で虐げられてもか？ー

ーッ！ー

フラッシュバックするのはリヴィアと出会う前……私が小学生だった時の記憶。

髪の色と瞳の色が原因で虐められていた私。

私は…………孤独だった。

友達も居なくて…………唯一の安らぎが自分の家。

外の世界に意味を見出だせなかった。だけど…………リヴィアとの…………リヴィアたちとの出会いがそんな私を変えてくれた！！

親友という存在を初めて知った。

教えてくれたリヴィアが危険な目に会ってる。なら、私の取るべき道は一つだけ…………！！

！私には親友が居る！！途切れる事ない絆で結ばれた親友たちが！

…………

…………

！みんなが居れば、寂しくなんかない！！私はそう信じている！

…………

！……………汝の心、しかと見させて貰った！！ならば、受け取れ！

！煉獄の力を…………

！我は守護する者。

我が意思は変わる事なき、不変の意思。

太古より蘇りし煉獄の力よ、此処に顕現せよ！！

この手に…………守るための力を！！

守り抜け、魔剣レヴァンティン！――

私の身体を焰が包み込み、力を与えてくれる。

焰の中から現れたのは刹那であり、刹那でなかった。

制服は明るすぎる赤色の鎧に変わり、赤色と黒色の腰巻きが下半身を覆う。

右手には赤いカイトシールド。

左手には煉獄の剣――レヴァンティン。

長かった髪は黒いリボンで1つに纏めあげられたその姿は………まさしく騎士であった。

「止めてーッ！」

ドカツ！！

「ガハッ！！！」

刹那はリヴィアに手を掛けようとしていた男性を力一杯殴り飛ばした。

「リヴィー！！ 大丈夫！？」

「せ……つな……？ ガハッ！！ゲホッ！！」

リヴィアは逆流して来た血液を吐き出した。

これは………本当にマズイかも………。早く病院に連れて行かないと！！

「霸道滅封！！」

私がレヴァンティンを一振りすると最近ハマったゲームの技が再現できました。

やっぱ、アス。ルだね。おっと。敵はまだ居るんだった。

「くそっ！！ 喰らえ！！」

「遅い！！ 飛燕蒼天流抜刀術 蓮華！！」

私の十八番『蓮華』は高速の抜刀術。一撃の間に数回の斬撃を繰り返す技。

私が放った蓮華は敵の杖を細切れにした。

「そのまま眠ってて!!」

ガコンッ！↑剣で叩く音

バタッ！

「残りは4人!!」

というか、私普通に戦ってるよね？魔法を使って。

「くそっ!! 一旦、退くぞ!!」

「私のマスターを痛めつけてくれた相手を見す見す逃がすと思う?」

「久遠……絶対に……許さない。」

残りの4人は仲間を捨てて逃げようとする。

「「裁きの雷!!」いかすち」

「「「ぎゃあああッ!!」」」

何か雷が落ちてきました。私は何もしてませんよ？

ついさつき、声が聞こえたような気がしますが、無視します。  
今はリヴィの事が先決です！！

「リヴィ！！ リヴィ！！」

「そんなに大声で叫ぶな。聞こえている。」

「良かった……………生きてる。」

「マスター！？」

琥珀色の髪にファイアレッドの瞳が特徴的な幼女が駆け寄って  
来ました。

「急いで聖王教会の治療室に！！」

「その必要はないわ。」

「お母さん！！」

結界が張られており、一般人が入る事のできない空間にやって来た  
のは刹那の母―飛燕 飛鳥だった。

飛鳥は刹那に微笑むと真っ直ぐにリヴィアの元に歩み寄った。

「久しぶり、聖王騎士。」

「貴女もね。煉獄の騎士アスカ＝ヴァーミリオン」

えーと……………まったく話に着いて行けません。リヴィがお母さんをアスカ・ヴァーミリオンって呼びました。もうわけがわかりません！！

「リヴィアスフィール様！！」

「リヴィア……………」

「煉……………久遠……………私は大丈夫……………ゲホッ！！　ゴホッ！！」

「傷が深いわね。急いで家に運びましょう！！」

「……………はい（うん……………）……………！！……………」

えっ？ちょっとー！！置いてかないでー！！！！！！

日常編 第10話 煉獄の騎士（後書き）

刹那が戦闘メンバーに参入〜

日常編 最終話 少女の選択

日常を生きていた少女は選択を迫られる。

親友と共に修羅の道を行くか？

親友と別れ 日常の道を進むのか？

少女が選ぶ選択は……………

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

日常編 最終話 少女の選択

管理局員に襲われた刹那とリヴィア。  
不意を突かれ、重症を負うものの煉獄の騎士として覚醒した飛燕  
刹那によって窮地を脱した。

そして、重症を負ったリヴィアは飛燕家に運び込まれた。

### 刹那視点

お母さんがリヴィを治療している間、私達は別の部屋で待たされていきます。

『その間にその人から事情を聞きなさい。』とお母さんに言われたけど…………

「……………（むすっ）」

アクエリオンという名前の小人が仏頂面で座っています。  
イライラしているのがひしひしと伝わって来ます。

こんな状態で事情を聞けるわけないよ……！！

「おい。」

「ひゃいー!!」

急に話し掛けられた刹那はビクツと身体を震わせた。

「何か聞きたい事があるんじゃないのか？」

「えっと……………」

聞きたい事が一杯あるんだけど………一番聞きたいのは………

意を決した刹那はゆっくりと口を開いた。

「リヴィって何者なんですか？」

「……………それを説明するには次元世界について話さなくてはいけないね。」

「次元世界？」

「そう。隣り合いながら、次元の壁に阻まれ、交わる事のない無数の世界の事だ。」

??? それって平行世界の事じゃ……………

「言っておくが、平行世界とは違うぞ？」

平行世界は……………説明が難しいな。

行くことができるのが、次元世界、行くことが不可能なのが平行世界と思っておいてくれ。」

ふむふむ。なんとなくだけど理解したよ。つか、貴女、さつき私の心を読まなかった？

「話を戻すよ？ 無数の次元世界の1つにベルカという国があった。その国は争いが絶えなかった。しかし、その国を統一した人物が居た。

後に聖王と呼ばれる人物だ。」

歴史書を読み上げるように話すアクエリオンの話をじっとして聞く  
刹那。

「聖王の家系において最後とされる聖王の名はオリヴィエⅡゼーゲ  
ブレヒト。

そして、オリヴィエには常に一緒に居た双子の妹が居た。聖王騎士  
と呼ばれたその女性の名前は……リヴィアスフィールⅡゼーゲブ  
レヒト。」

「……!」

「貴女の親友、リヴィアスフィールⅡNⅡゼーゲブレヒトは……  
…語らずともわかるでしょう?」

「リヴィは……転生者なんだね?」

「その通りです。  
マスターがリヴィアスフィールとして覚醒したのはほんの数カ月前  
の事です。」

「じゃあ、何でリヴィは狙われたの?」

「そんなに偉い人なら殺気立って襲って来る必要があるの? と  
いうか、あの人たちは誰だったんだろう?」

「マスターを襲ったのは……聖王の復活を快く思わない管理局が手先  
を差し向けたのでしよう。」

管理局？ またわからない単語が出てきたよー！！

「まあ、管理局について説明すると無数にある次元世界を管理する組織です。」

「えっ！ ちょっと待ってよ！！　なんでそんな組織がリヴィを狙うわけ！？」

「聖王教会が目障りだからだよ。」

刹那の質問に答えたのはアクエリオンではなく……

「なっちゃん………リア……。」

アロンダイトに連れられたのはとシルメリアだった。

シルメリア視点

私となのははアロنداイトが言っている事が最初は信じられなかった。

私達の姉であり、絶対無敵と言われた姉が……重症を負ったなんて……

「殺りそこねた魔導師は刹那とアクエリオンが倒しました。」

「そして、今は煉獄の騎士の下で治療中……と。」

「それにしても……飛鳥さんが煉獄の騎士の転生者だったなんて……」

『煉獄の騎士』アスカ・ヴァーミリオンの事は私もなのはモオリヴィエから聞いたことがある。

先代リヴィアスフィールの忠臣、“不屈の四騎士”の1人であるリヴィアスフィールを治療していたらしい。

まあ、そのことを知ってるから、あんまり焦ってないんだけどね……

「……アクエリオンが事情を説明してるみたいだね。」

「ちょっと待ってよ！！なんでそんな組織がリヴィを狙うわけ！？」

「聖王教会が目障りだからだよ。」

シルメリアは扉を開けた瞬間、そう言った。

「なっちゃん……………リア……………」

「管理局は自分たちが絶対正義だと思ってる。

だから、数多の次元世界に影響力を持つ聖王教会が目障り。  
そして……………聖王教会の最高権力者は姉さん。」

「だから、管理局はリヴィアお姉ちゃんを殺そうとするの。」

シルメリアの言葉を引き継ぐようになるのはが述べた。

「そんな……………」

パンツ！！　パンツ！！

「暗い話はそこまで。リヴィアが起きたわよ。」

飛鳥さんの言葉を聞いた瞬間、全員がリヴィアの居る隣の部屋  
に押し掛けた。

リヴィア視点

刹那………巻き込んだな。初めて会った時から、私の記憶が過剰に反応した。

灰色の髪に黒金と白金の虹彩異色は煉獄の騎士に受け継がれる遺伝形質だ。

管理局は煉獄の騎士の事を知らない。今ならまだ………刹那は日常に戻るかもしれない!!

「マスター!!」

「リヴィア!!」

「リヴィ!!」

「姉さん!!」

「リヴィアお姉ちゃん!!」

リヴィアがそんな事を思案していると隣の部屋に居た5人が押し掛けて来た。

「マスター！！ お怪我は！？」

「安心して、アクエリオン。飛鳥さんが治療してくれたから、傷は完全に治ってるよ。」

さすがは煉獄の騎士の転生者。あれだけの怪我を瞬く間に治しちゃうんだから…………

「リヴィ……………」

「刹那…………… 事情は聞いたね？」

「うん……………」

「刹那。貴女には2つの道がある。私達と一緒に戦いの道を歩むのか。すべてを忘れて普通の日常をおくるのか。」

私は刹那の運命の選択を迫った。

「私は……………」

刹那はすぐには答えなかった。2つ目の道はまた刹那を孤独に

してしまう。

だけど、私は刹那には日常を歩んで欲しい。

偽善……………なんだろうな……………。

「もう一度聞くと、飛燕 刹那。私達と一緒に来るか。別れるのか。」

「私は……………」

## 刹那視点

「私は……………」

私はどうしたらいいんだろう？ 戦場のせの字も知らない私が

……………リヴィたちの足手まといになるのは当然。そんなのは嫌だ！！  
だけど、孤独から解放してくれたリヴィたちと別れるのも嫌。

《主よ。何を迷っているのだ。》

『えっ？』

今まで沈黙を貫いてたレヴァンティンが口を開いた。

《主は我に親友を守る力が欲しいと言ったな？ それは偽りだったのか？》

『違う！！』

《ならば、答えは決まっているはずだ。足手まといになるのが嫌なら、鍛えればいい。ただそれだけの事だろ？》

『ッ！！！！　そうだよ………力が足りないなら、補えば良いんだ！！』

ありがとう、レヴァンティン！！』

《フツ、世話の掛かる主だな。》

レヴァンティンの言葉に私は苦笑いした。

うじうじ悩むなんて私のキャラじゃないもん！！

「私の答えは決まったよ。」

私は右手をリヴィに差し出し……………

「これからもよろしく、リヴィ」

闘いの道を歩む事を表明した。

「できれば、刹那には日常に戻って欲しかったんだけど……………」

「私は一度決めたら、梃子でも動かないよ?」

「知ってるよ。だから…………こちらこそよろしく。」

リヴィアは左手を差し出し、互いに握手した。

フリーサイド

「さてと…………刹那を聖王教会の騎士として登録しないと。」

「聖王陛下は休んでいてください。騎士カリムへは私が連絡してきます。」

「あの…………何故、飛鳥さんが騎士カリムの連絡先を知ってるんですか?」

「私が聖王教会の騎士だからよ？」

——えええええっ！！——

リヴィアを除く全員の心からの叫びが木霊した。

「あら？　言つてなかった？　貴女たちの住居の手配をしたのは私よ？」

「言つてません！！」

リヴィアは治療中に聞かされたため、ほとんど驚いていない。初めて聞かされた時は驚いたらしいが……

「普段は此方に住んでるんだけど、騎士カリムからの依頼でミッドチルダに行くことがあるの。」

聖王陛下はしばらくは無茶しないでくださいね？  
結構な重症だったんですから。」

「わかつてる。」

それだけ言い残すと飛鳥は部屋から出ていった。

ちなみに、リヴィアの傷だが、弾丸が心臓を掠れていた。

リヴィアの体内にあるエクスカリバーの鞘——『アヴァロン』の治療能力が働いてくれたおかげでなんとか命が助かったような状態である。

そして、飛鳥の手配によって刹那は『セツナ＝ヴァーミリオン』という名前で聖王教会の騎士に登録された。

空席の『不屈の四騎士』の一席が埋まった。

## 日常編 最終話 少女の選択（後書き）

日常編は今回で終了です。

次回からは、戦力強化の『四騎士編』に突入します。

ちなみに、飛鳥がレヴァンティンに選ばなかった理由は後々明らかになります。

誤字を修正しました。

四騎士編 第1話 魔銃の騎士（1）

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

四騎士編 第1話 魔銃の騎士（1）

『魔銃の騎士

不屈の四騎士の1人で唯一の銃の使い手。

契約獣の背中に乗り、戦場を駆け巡り、圧倒的な戦力差を覆したとされる。

右手にはすべてを撃ち抜く黒銃を握り、左手にはナイフを持っていた。

ベルカ史から抜粋』

## リヴィア視点

学園祭が終了してから、数日が経過した9月のある土曜日。私は騎士カリムに呼び出されて聖王教会まで来ていました。

「今回はどうしたんですか？」

「実は………… “ハーデイス” が盗まりました。」

「なっ！！」

【ほんとですか！？】

リヴィアとレイジングハートは絶句した。

ハーデイスが…………盗まりました？

「急いで取り返して来ます！！」

「えっ、ちょっと！！」

カリムの静止も聞かず、リヴィアは転移していった。

「レイジングハート!! 近くにハーデイスの反応は!？」

【少し待ってください!!】

先代の時代から300年も経ってるけど……ハーデイスの魔力反応はちゃんと記録してあるんだよ!!

【発見しました!! 此处から9時の方角です!!】

「オッケー!! デュランダル!!」

【私の出番か。】

私は創聖の魔導書からデュランダルを引き出して背中に背負う。

「レイジングハート!! 騎士甲冑を高機動形態で展開!!」

【オーライ!!】

衣服が分解され、騎士甲冑を纏うとリヴィアはフライヤーウイングを羽ばたかせて高速で移動を開始した。

「！！ 見つけた！！」

黒いフードを被ってるから顔はわからないけど……右手に持つ  
てる独特のフォルムが特徴的な装飾銃は間違いない！！

「止まれ！！」

「あん？」

「その手に持つてる銃を返して貰おうか。」

「誰が渡すか！！ 苦労して手に入れたんだ。」

まあ、最初から素直に渡してくれるとは思ってないけどね。

「ちょうど良い。このロストログアの性能を試してやるぜ！！」

……………勝てると思ってるのかな？ 真の主でないあなたが。

「魔力変換『雷』及び、『風』を同時発動。」

ドウンッ！！ドウンッ！！

ハーデイスから魔力弾が放たれる。けど、遅いね。

リヴィアは魔力弾を避けると一気に加速した。

「風雷神剣！！」

雷を風を纏ったデュランダルで犯罪者を突き刺そうとするけど、ハーデイスで防がれました。

反応は悪くないみたいだね。

え？ ハーデイスは壊れないのかって？

壊れるわけないじゃん。四騎士の武器の中で一番頑丈なんだから。

「魔力変換『氷』を発動。変換した魔力を右手に収束。（ボソッ）」

距離を詰められた瞬間に離れなかったのが運の尽きだよ！！

「氷華拳撃！！」

リヴィアは氷の魔力を纏った右手でハーデイスを持つ右手を殴り付けた。

「っ、つめてえ！！」

「隙あり！！」

完璧な隙を作った瞬間、鳩尾を身体強化付きの拳を強打してやりました。

仲間の相棒を勝手に使った罰なの。当然、ハーデイスは回収してるよ？

「魔力変換『氷』及び、『風』を同時発動！！  
凍てつけ ブリザード！！」

デュランダルから放たれた氷の烈風が犯罪者を凍り付けにした。

「これで出てこれないから、カリムにあとは任せよう。」

さてと……………ハーデイスは回収したし、帰ろうかな？ ……  
…あれは……………人？

リヴィアの視界に人の姿が飛び込んで来た。

リヴィアは瓦礫にもたれ掛かっている男性に近づいた。

「冷たい。」

死亡して一時間程……………さっきの犯罪者を追跡して振り返ちに  
あつたって事かな？

【マスター。この魔導師のデバイスに音声メッセージが記録されています。】

「再生して。」

【了解しました。】

メッセージが再生されて行く。

『このメッセージを聞いている人へ。

初対面の人に対してこんな頼みをするのは正直、気が引けるけど僕の頼みを聞いて欲しい。

僕にはティアナⅡランスターという歳の離れた妹がいる。実は…ティアナは天涯孤独になってしまった。

だから、お願いだ！！ティアナを………保護してください！！そして、出来れば聖王教会にいるリヴィアスフィールⅡNⅡゼーゲブレヒトのもとへ、連れて行ってあげてください。』

メッセージはそれで終了した。

ティアナって………やけに私になついてるあの女の子だよね？

この人はティアナの兄なんだ………

「ハーデイスを取り返そうとしてくれた事に感謝するよ。」

リヴィアはそう言い残すと聖王教会の方に歩き始めた。

翌日……………

ティアナ視点

ティード兄さんが死んだ。私の唯一の肉親が……  
その知らせを聞いた時、私はひたすら泣いた。

兄の葬式は筒がなく行われた。でも、その時兄さんの上司が言った言葉が私の心の中でずっと響いてる。

『役立たず』 『恥さらし』

兄さんは命懸けでこの街を守ろうとしたのに……………兄さんは役立たずなんかじゃない！！

ピンポン♪

？ 誰だろう？

「ティアナ＝ランスターさんですね？」

「あ、はい。」

「はじめまして、私はリス＝ヴァレンチノ。聖王陛下の命により貴女を迎えに来ました。」

いきなり現れた女性、リスさんの車に乗って私は聖王教会に向かっています。

「あの……どうして聖王陛下が私なんかを？」

「さあ、私にも知らされておりませんから。  
今の聖王陛下は天真爛漫なお方ですからね。」

天真爛漫って……聖王陛下がそれで良いのか？  
でも、私は聖王陛下の知り合いなんて……

「ほら、着きましたよ。」

「わあ……………大きな屋敷……………」

「此処が聖王陛下の居城、『聖王邸』です。」

聖王邸……………噂でしか聞いた事がなかったけど……………やっぱり大きい。

「こちらです。」

少し歩いて連れてこられたのは、執務室と書かれた表札が掲げられた部屋の前でした。

「陛下。ティアナ＝ランスターさんをお連れしました。」

「うん。入って良いよ。」

なんだか聞き覚えのある声だけど……………気のせいだね？

そんな事を考えつつ入室するティアナ。

「久しぶりだね、ティアナ。」

部屋の中に居たのは私が慕っている人……リヴィアスフィールさんでした。

フリーサイド

「えっ！？ リヴィアスフィールさんがどうして此処に!？」

「私が今の聖王陛下だからだよ。」

「えっ、えええええっ!!」

ティアナの驚きの声が聖王邸執務室に響いた。

「落ち着いた？」

「あつ、はい。見苦しいところを見せて申し訳ありません。」

m (——) mと頭を下げるティアナ。

「気にしないよ。」

さてと本題に入ろう。

ティアナを呼び出したのは……ある相談を持ち掛けるためだ。」

「ある相談？」

「単刀直入に言うよ。ゼーゲブレヒト家の養女にならない？」

「えっ？」

「実は君の兄、ティーダ・ランスターにティアナを保護して欲しいという伝言を受け取ってね。」

「でも……私なんかで良いんでしょうか？」

ティアナにとつてリヴィアの申し出は嬉しい限りだ。

自分が慕っている人物と四六時中一緒に居れるのだから。

しかし、凡人である自分が高貴な家系に入る事に抵抗があるのだ。

「文句がある者が居たら、権力で押し伏せるから大丈夫だよ。」

「職権乱用ですよ、陛下。」

リヴィアを示唆するリス。  
対して……………

「権力は乱用するためにあるんだよ?」

開き直るリヴィア。

「違います!!」

「ふ……ふふ……ふふふ。」

ティアナそつちのけで漫才するリスとリヴィアに思わず笑ってしまうティアナ。

「そこで返答は?」

「喜んで引き受けます!!」

ティアナは笑顔で養子縁組を引き受けた。

#### 四騎士編 第1話 魔銃の騎士（1）（後書き）

新章に突入したのはいいのですが、グダグダです。  
もう少しシリアスな話にしたつかたのですが・・・

さて、魔改造キャラの記念すべき一人目はティアナさんでした。  
個人的にティアナは好きなんですよ。（どうでもいいけど。）

そして、ふと思った。

スバルの相棒どうしよう・・・

四騎士編 第2話 魔銃の騎士（2）

兄を失った少女

少女が受け取ったのは黒き魔銃

少女が魔銃を手取る時

四騎士の1人が目覚める

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

四騎士編 第2話 魔銃の騎士（2）

ティアナ視点

「さてと、ティアナには渡す物があるの。」

「渡す物？」

養子縁組の書類にサインして正式にゼーゲブレヒト家の養女になったティアナです！！

私が了承した瞬間、あっという間に書類を用意してサインさせられました。

私が養子縁組を断らない事を確信していたみたいです。

まあ、気にしませんけどね。

「これだよ。」

「これは？」

リヴィアスフィールさんから渡されたのは……六連リボルバー式の黒い装飾銃でした。

ただ形が特徴的で銃身が縦方向に三角形状に伸びていて真ん中には白く『??』と刻印されています。

「『ハーデイス』。ティードゥランスターが回収しようとしたデバイス。」

「これ、デバイスなんですか!？」

「そうだよ。握ってみて。」

ティアナがハーデイスのグリップを握った瞬間、白い刻印が光り出した!!

【300年ぶりのお目覚めだぜ!!】

喋ったあ!! これ、インテリジェントデバイスなの!?

【俺はインテリジェントデバイスなんかじゃあねえよ。】

こ、心を読まれた!!

【いや、普通に顔に出てんぞ?】

「はっ!! それより!! 貴方…インテリジェントデバイスじゃないっていうなら、何なの?」

【俺はレディアントデバイスに分類される銃型のデバイスだ。詳しくはそこに座ってる姫っちに聞きな!!】

『姫っち』って………リヴィアスフィールさん?

「ティアナが……魔銃の騎士だったなんて……」

「『魔銃の騎士』？」

「そこからはマスターに代わり私が説明しましょう！！」

琥珀色の髪の毛とファイアレッドの瞳が特徴的な小人、アクエリオ  
ンがティアナの目の前に現れる。

アクエリオン、ティアナに説明中……………

「つといた感じです。」

「えっと……………なんで私が選ばれたんでしょうか？」

【お前は初代に似ているからな。ちなみに、姫っちは転生者だからな。  
】

はあっ！！ リヴィアスフィールさんが転生者！！

「そうだよ。私は先代の魂を受け継ぎ、転生した存在だよ。」

「り、輪廻転生って本当にあるんですね……」

「まあね。さて、騎士カリムに報告しに行かないとね。リズ、ティアナの荷造りを手伝ってあげて。」

「はい。」

私とリズさんは荷物を取りに行くために私が住んでいたマンションに戻りました。

「ねえ、ハーデイス。レディアントデバイスって何？」

再び、リズさんのオープンカーの中に戻ってハーデイスと会話しています。

「レディアントデバイスっていうのはな、特殊能力と擬人化能力を持ったデバイスの事を言うんだ。」

まあ、ロストロギア級のデバイスみたいな物だよ。」

「付け加えますと陛下の持つてるエクスカリバーやアロンドイトなども該当します。」

「へえ……じゃあ、ハーデイスも何か特殊能力を持つてるの？」

【魔力変換『豪雷』と消費魔力半減の2つだぜ。】

2つもあるんだ。消費魔力半減は魔力量の少ない私にとっては嬉しい限りね。

『豪雷』は……『電気』バージョンかな？

【初代もな……魔力量少なかったんだ。下手したら、ティアナよりも少ないぐらいだ。】

「そうなの！？」

意外……リヴィアスフィールさんの側近だから、かなりの魔力を持つてると思ってたのに……

【だから、あまり魔力を使わない戦術を編み出したんだ。まあ、それは追々教えてやるよ。】

「うん」

『魔力消費を極限まで抑えた戦術』か……一体どんな戦術なんだろう。

リヴィア視点

ティアナとリズを見送った私は騎士カリムの執務室に訪れていました。

「まったく……貴女は拾い物が好きですね。」

「否定はしませんよ。」

「煉獄の騎士セツナ」ヴァーミリオンに続き、魔銃の騎士ティアナ「ランスター」。

伝説の“不屈の四騎士”が短期間で2人も揃うのも不思議ですね。」

そうなんだよね……煉獄の騎士アスカ「ヴァーミリオン」は先代に着いていったから、見つかり易かったただけなんだけど……

魔銃の騎士は転生してないから、今回の一件は完全に運なんだよね。

「ティアナ」ランスターはティアナ「L」ハートネットの名前で騎士登録しておきます。」

「ありがとうございます。」

ハートネットは初代魔銃の騎士トレインのファミリーネームです。

普段はティアナ「L」ゼーゲブレヒトとなっています。

「それと……管理局のロストログア庫には『ガラドボルグ』も『ブリューナク』もありませんでした。」

「そうですか……となると地道に探すしかない……か。」

リヴィアは騎士カリムに頼んで管理局のロストログア庫に先に述べた2つのデバイスがないか調べてもらっていたのだ。

『ガラドボルグ』は四騎士の1人―『黄昏の騎士』のレディアントデバイス。

『ブリューナク』は四騎士の1人―『蒼天の騎士』のレディアントデバイス。

「一応、聖王教会の方も調べましたが………」

「ない……か？」

「はい。」

「四騎士全員が揃うのには少しばかり時間が掛かりそう。」

「こちらでも探してみますよ。管理局にないという事は管理外世界でしょうから。」

「すまない。」

【マスター。リズとティアナが戻って来たみたいです。】

ん？ もう戻って来たんだ。思ったより早かったね。

「騎士カリム。私はそろそろ戻ります。」

「わかったわ。」

そう言うとりヴィアは執務室をあとにした。

四騎士編 第2話 魔銃の騎士(2) (後書き)

ティアナの魔改造が完了。もはや原作のなのにも勝てる。

四騎士編 第3話 魔銃の騎士（3）

『魔銃の騎士』の称号を得た少女

真の主を得た黒き魔銃

そんな主従の修行風景

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

四騎士編 第3話 魔銃の騎士（3）

ティアナ視点

私がゼーゲブレヒト家の養子になってから、丁度1週間が経ちました。

姉さんたちとなのはは平日の間は第97管理外世界に在住しているから、休日には会えません。

平日の間、私はリズさんに勉強を教えてもらっています。

よって、平日の間はリズさんにアクエリオンさん、そして、私しか居ません。

【ティアナ。そろそろ訓練始めつぞ？】

「OK!!」

私が居るのは聖王邸の庭。私の訓練場所。

正直、私はハーデイスとの訓練が待ち遠しい。だって、自分が強くなってる事を実感できるんだもん♪

【身体強化魔法は身に付けたか？】

「バッチリ♪」

【なら、そろそろ魔法訓練に入るぞ。最初は“エレミネートバレット”だ。】

「エレミネートバレット」？」

【少ない魔力を極限まで圧縮して放つ魔法だ。貫通力・威力ともに優れた魔法だ。】

「わかった。アクエリオンさん、ターゲット頼めますか？」

「了解。障壁を付加したターゲットですから、普通の魔法で破壊できませんよ？」

上空に3つのターゲットが浮かび上がる。

「エレミネートバレット！！」

ハーデイスの銃口に橙色の小さな魔力弾が形成される。

圧縮……圧縮……これぐらいなら！！

「シューートっ！！」

ティアナの放ったエレミネートバレットはアクエリオンの障壁付きターゲットを容易く撃ち抜いた。

「すごっ！」

この魔法、貫通力がハンパないんですけど？ アクエリオンさんの障壁を紙切れみたいに撃ち抜いたよ。

しかも、ほとんど魔力は使ってないし……

【おし。十分だな。じゃあ、ちょっとした応用だ。術式を固定してハーデイスの中に待機させておくんだ。数は計4つな。】

えっ？ いきなり難易度が上がりすぎない？ 4つの術式を同時固定なんて高等技術だよ！！

まあ、やってみるんだけどね。

マルチタスク……思考を四分割して……

パンツ！！ パンツ！！ パンツ！！ パンツ！！

あっ、できた。

【おいおいおいおい。お前って天才かよ？】

「私は凡人だよ。」

【いやいや！！ お前が凡人なら、世の中の人全員が凡人だぜ！？】

そう………なのかな？ ずっと私は魔力も少ない凡人だと思っ  
てただけど………

【まあ、いいや。正直、此处まで順調だと逆に怖いな………。】

次は…… “サンダーバレット” だな。」

「サンダーバレットって事は豪雷を使うの？」

【ああ。豪雷を使う時は“魔力変換『豪雷』発動” と言えば、すべての魔力を豪雷に変えてくれんだ。】

「うん、わかった。

魔力変換『豪雷』発動。」

試しに魔力を流してみるとハーデイスから蒼白い電気の放電が起こった。

じゃあ、今度は魔力弾を形成して……

「サンダーバレット!!」

ゴウンッ! ! ! !

は、反動が!! 私腕が折れそうな反動なんですけど!!

ちなみに、サンダーバレットの着弾地点には小さなクレーターができていました。

【わりい。身体強化魔法使ってねえと腕が折れるぞって言い忘れた。】

「忘れないでよ!! そんな大事なこと!!」

うゝ…まだ腕がジンジンするゝ。何で最初に身体強化魔法を覚えさせたか理解したよ。

【まあ、代わりに威力は強力だ。防がれてもものすごい衝撃波で吹っ飛ぶからな！！】

…………フルパワーで使わないでこつ。

「治療しましょうか、ティアナ？」

「すみません、アクエリオンさん。お願いします。」

「頼まりましたゝ」

【さてと…………次はどんな魔法を教えるか…………】

「特殊弾の作り方を教えて上げたらどうですか？」

ティアナの両腕を治療しているアクエリオンが提案した。

「特殊弾？」

【カートリッジに刻印を刻んで特殊な効果をもたらした弾丸のことだ。

ハーデイスにも何発か入ってるはずだ。】

リボルバーから装填されてる弾丸を抜き取り、確認してみると明らかに普通のカートリッジとは違うカートリッジが四発入っていました。

【蒼いのが“氷結弾”。

赤いのが“火炎弾”。

緑色のやつが“烈風弾”

紫色のやつが“炸裂弾”だ。

同じ刻印を刻んで魔力を込めたら、特殊弾の完成だ。  
試しに普通のカートリッジで作ってみるよ。】

「うん。でも、どうやって刻むの？」

「これを使って。」

アクエリオンさんから手渡されたのは刃渡り20cmぐらいの  
ナイフでした。

折角なので、“氷結弾”を作ってみることにしました。

数分後……………

「よし、完成。」

案外簡単でした。刻印も単純な形でした。

【じゃあ、撃って性能を確かめてみるよ。】

「うん。」

腕は完治してる。アクエリオンさんの治療の腕は優秀ですね。

「最前線で闘うマスターの従者ですから、これくらい朝飯前ですよ。」

……心の声が読まれているけど、ツツコマない。

「氷結弾!!」

ハーデイスから氷結弾が打ち出されて射線上にあった樹に命中した。

カキンッ!!

樹は見事に凍り付いた。

「おおっ!!」

十分、闘いに使えそう。

「お見事♪」

アクエリオンも賞賛の言葉を述べる。

「作り置きしてたら、便利そう。魔力も使わずに済むし……………」

本当に…………魔力の少ない私にはピッタリのデバイスね。暇があつたら、転送魔法とか会得しようかな？

【今日はこれくらいで終わろうぜ。初代の技は全部が一朝一夕に会得できるやつばかりとは限らないからな。】

「そうね……………」

右手に付けてる腕時計は4：30を指していた。今日の授業は全部終わってるし…………みんな、帰って来て恒例のティータイムの時間だね。

「ちょうどいい時間だし、戻ろうか。」

ハーデイスを腰に付けてるホルスターに戻して、私とアクエリオンは聖王邸に戻りました。

はあ…………いつになったら、リヴィア姉さんに届くんだろう…

……

四騎士編 第4話 黄昏の騎士（1）

少女たちが向かうは幻想の国。

少女たちはそこで虐げられし1人の少女に出会う。

常に孤独だった少女はかけがえのない友に出会う。

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

四騎士編 第4話 黄昏の騎士（1）

時は2ヶ月ほど進み、現在は地球で言う11月。  
学校は四連休中で休み。

そんな時、刹那・なのは・シルメリア・アクエリオン・飛鳥の5人はある次元世界に集結していた。

### 刹那視点

私を含めた5人は第67管理外世界 現地名称『テセアラ』へと来ています。

惑星の名前からわかるように此処は『シン・オニア』の世界なんですよ！！

私はテンションはマックスです！！

### おっと、閑話休題

なぜ、私たちが此処に居るのかというと此処は『黄昏の騎士』が眠りについた場所なんだって。

だから、リヴィアから『ガラドボルグ』の回収を頼まれました。肝心のリヴィアは聖王のお仕事があるので、不参加です。

だけど、心配性なリヴィアは強力な助っ人、アクエリオンを寄越してくれました♪

「私ね……疑問に思っただけど、リヴィアお姉ちゃんは四騎士を集めるのに必死なんだろう？」

「そういえば、そうだね。誰かと争うわけでもない。し……………」

『リヴィアは……………仲間が管理局に取り込まれるのが嫌なんですよ。』

その声は……………オリヴィエさん？ 最初は驚いたけど、今となつてはもう慣れちゃったよ。

「管理局からすれば、ちょうど良い実験材料でしょうからね。」

オリヴィエの言葉に続けるように飛鳥はそう言った。

……………私が煉獄の騎士となって最初に教えられたのが、管理局の闇。

同じ人間がする事とは思えなかった。

「その話は此处で終わり。時間はそんなにないんだから。」

「さっさと宿屋に行こう。」

現在地は王都メルトキオ周辺の森。いや、間近で見ると大きいね。

「ねえ、この世界のお金は？」

「『『『あ。』』』」

シルメリアの言葉で4人はある事に気付いた。

5人はこの世界では無一文なのだ。

「ゲームだと魔物がお金を落としてくれるんだけど……………」

「魔物ってあんなやつ？」

なっちゃんが指さした先には黒い狼のような動物がいました。  
そうそうあんな感じをやつ……………って魔物じゃん！！

「レヴァンティン！！」

刹那は腰からレヴァンティンを抜刀した。

次の瞬間、五頭ほどのウルフが襲いかかってきた。

「魔王炎撃波！！」

煉獄の炎を纏ったレヴァンティンが振るわれ、攻撃が命中したウルフはマナに戻っていた。

「獅光剛波掌！！」

リアは両腕に獅子を型どった魔力を纏わせて、殴っていく。  
教えたのは『獅子戦孔』だったのに……………

刹那は心中で嘆いた。

「アサルトバレット!!」

いつの間にかスルトを展開したなのはは、殺傷設定の魔法弾で三頭のウルフを撃ち抜いた。

「魔物が銀貨になったね。」

わっはー!! ゲームと同じだけど、正確な金額はわからない  
やゝ

「しばらく魔物を狩って金稼ぎね。」

私たち5人のモンスターハンターが始まった。

シルメリア視点

モンスターハントを始めてから、約一時間。5人が別れて魔物を狩ったおかげで大量の銀貨が集まりました。

「これくらいあれば、十分でしょう。」

「早速、メルトキオの宿屋に行こう!!」

「ちょっと待って!!」

アクエリオンが制止の声をあげた。

「近くに……『ガラドボルグ』がある!!」

「『つ!!』『つ』『つ』」

「こつち!!」

アクエリオンは急ぎ足で森の中に入って行った。私たちもそのあとを追いつきました。

そして、アクエリオンを追いつけた私たちが目にしたのは……  
…樹に凭れかかる1人の少女でした。

【……………懐かしい顔ですね。久しぶりです、アクエリオン。】

「300年ぶり……ガラドボルグ。」

【久しぶりだな、ガラドボルグ。】

【ああ……レヴァンティンも居たのね。】

少女が抱き締めるように抱える布の中身がガラドボルグなのか  
な？

その時、今まで眠っていた少女がはっ！と目を覚ました。

「……………貴女たちも…私を殺しにきたの？」

刹那視点

「……………貴女たちも…私を殺しにきたの？」

はっ？ いきなり何を言い出すの？

【レムルス。彼女たちはそんな人ではありません。】

……あの銀色の髪の毛から少しだけ見える尖った耳……  
殺しにきた……なるほど。

「君、ハーフエルフなんだね？」

「っ！……！」

『刹那。ハーフエルフって？』

念話でシルメリアが尋ねてくる。

『この世界には人間のほかにエルフって言う種族がいるんだ。  
そのエルフと人間の間に生まれてくるのがハーフエルフなんだよ。』

『だけど……この子……殺しに来たって……』

ん？ なっちゃんも聞いてたのか……

『ハーフエルフはね……魔術って言う特殊で強力な力が使えるんだ。』

だから、迫害の対象にされてきたんだ。』

『そんな……人間と同じでいきてるのに……！』

ゲームだとハーフエルフ迫害の理由って明言されてないけど魔

術なんだと思うんだよね・・・

というか、マーテルだってハーフエルフだったのに迫害するなんておかしくない？

「別に身構えなくても良いよ。私たちは君を傷付けに来たわけじゃないよ。」

「どうということ？」

うーん…………警戒されてるか…………まあ、ハーフエルフが受けて来た仕打ちを考えたら当然か…………

刹那は少女の視点に合うようにしゃがみ込んだ。

「私はセツナ・ヴァーミリオン。『不屈の四騎士』の1人。後ろに居るのは私の親友たち。」

「私は…………レムルス…………です。」

「レムルスか…………いい名前だね。」

ちよつとは警戒心が薄れたかな？ それにしても、翻訳魔法って便利だね。

「あり…………がとう。」

顔を赤らめて俯く姿がとーってもかわいいよー♪お持ち帰りしたいよー♪持ち帰っちゃうけど、良いよね！？ 答えは聞いてな

い！！

【主よ、今は自重しろ。】

はっ！！ いけないいけない。思考が別方向に行っちゃったよ。

「レムルス。私は君を助けに来たんだ。」

「えっ？」

「私たちと一緒に来ない？」

刹那は優しく手を差しのべた。

レムルス視点

「私たちと一緒に来ない？」

私がこの世に生まれて、そんな言葉を掛けてくれたのは誰も居

なかった。

唯一……………ボルグだけが私と一緒に居てくれた。

ボルグは私に色んなことを教えてくれた。次元世界のことや異なる魔法のことを……………

《レムルス。彼女たちは私の旧友です。

貴女を傷付けることも裏切ることも絶対にありません！！ 私が保証します！！》

『うん。この人たちは今まで私が会ってきた人と違う。

私もこの人たちなら、信じられる。』

私は差しのべられた手を握って……………

「よろしく……………」

無愛想な言葉でそう呟いた。だけど……………あの人たちはみんな笑っていた。

“こんな……………暖かい日だまりの中にずっと居たい”と私は……………初めて心の底から願った。

## ガラドボルグ視点

まさかこの世界に居る時にアクエリオンたちと出会うとは思いませんでしたね。

まあ、おかげでレムルスに少し笑顔が戻ったのでよしとしましょう。

私はレムルスが生まれた時からずっと側に居ました。彼女の母親と父親はレムルスと一緒にオゼットに隠れ住んで居ました。

しかし、マーテル教会の騎士がやって来てレムルスの両親を殺しました。

私は擬人化してレムルスと一緒に逃げました。デバイスの私が母親の真似事をする事になるとは思いませんでした。

レムルスの両親は彼女にある置き土産を置いてくれました。それは……初代黄昏の騎士が後世に残した『黄昏の魔術書』です。

初代が生涯を通して書き記した魔術がすべて載った魔術書。それが『黄昏の魔術書』です。

教会の騎士は執拗に私たちを追い掛けて来ました。私は擬人化してレムルスのために闘いました。

しかし、微々たる魔力供給しか受けていない状態の私では力尽

きるのも時間の問題だった。

だから、私は藁にすがるような思いでエクスカリバーに救援信号を送った。

アクエリオンが居るということは私の救援信号が届いたみたいね。

【マスター！】

「どうしたの、スルト？」

【多数の生態反応が此処に接近しています。おそらく、彼女の追っ手かと。】

「うそ……………もう来たの……………」

クソッ！！ 退却したと思ったら、仲間を呼びに行ってたのね！？

「これは……………気を引き締めて掛からないとダメみたいだね。」

飛鳥の言葉に頷いた4人は己の相棒をその手に握り、臨戦体勢をとった。

四騎士編 第4話 黄昏の騎士(1) (後書き)

ご都合主義満載の回でした。

四騎士編 第5話 黄昏の騎士（2）

絆を手に入れた異端の少女。

絆を与えた少女。

異端の少女は絆を守るため 太古の剣を手取る。

そして、目覚めるは『黄昏の騎士』

魔法少女リリカルなのは 現代に蘇りし創聖の聖王騎士

四騎士編 第5話 黄昏の騎士（2）

『黄昏の騎士』

“不屈の四騎士”の1人にして聖王騎士の背後を守った騎士。  
蒼き鎧に身を包み 金色の双剣をその手に持ち 一騎当千  
の力を発揮した。

彼の者が放つ魔術は千の軍勢を打ち砕き 千の軍勢に勝利を  
もたらした。

の項より抜粋』

ベルカ史四騎士

シルメリア視点

レムルスとガラドボルグに出会ったのは良かったのですが……

「そのハーフェルフを渡して貰おう。」

緑の重装備を身につけた騎士の軍勢でした。

「ハーフェルフは居てはならぬ存在。ゆえに、滅殺しなければならない。  
ない。」

………こいつら、何て言った？

存在してはいけない？滅殺しなければならない？

ふざけるなよ……！

騎士の言葉に滅多に怒らないシルメリアが怒った。

「断る!!」

「なんだと!!」

「断ると言っただ。さっさと失せろ!!」(怒)

「貴様!!マーテル様に逆らうのか!!」

うるさい……喋るな!!

「トランス……」

ズブッ!! ブシャッ!!

シルメリアの手が鋭利な刃物になり、シルメリアは1人の騎士を殺した。

突き刺した箇所からは鮮やかな鮮血が滴り、シルメリアの腕と服を鮮血で染めていった。

「こ、こいつらも滅殺するのだ!! マーテル様の名の下に!!」

「いいよ……纏めて相手してあげるよ!!」

世界に存在してはいけない人なんて居ないんだから!!

『オリヴィエ…………手を出さないでね。』

『わかりました。ピンチになったら、手を出しますよ?』

『うん、わかった。』

『聖王の鎧』があるから、槍は恐くない。この世界に質量兵器があれば別だけど…………

問題は…………あの頑丈な鎧にどうやって打撃を与えるか……………トランスの剣も突き刺さり難かった。

「獅子戦孔!」

獅子を型どった魔力が騎士の1人をぶっ飛ばす。

「ブレイクスラッシュ!」

剣状になった右手が魔力を纏い、騎士を鎧ごと切り裂いた。非殺傷設定を解除しているので、騎士は血を流して絶命した。

即興で作ったわりには結構効果的だね。

『いったいどうやったのですか?』

『右手に纏わせた魔力を振動させて切れ味を極限まで高めたの。』

『よくそんな物騒な魔法を思いつきましたね。』

防御の上手いリヴィア姉さんの相手するのに必要不可欠だったんだもん。

なのは視点

うわゝ…シルメリアお姉ちゃん、完全にキレてるの……。この状態のお姉ちゃんは阿修羅だから、援護しにくいんだよね。まあ、ちゃんと考えて動いてるんだけどね。

「でも、援護しないわけにはいかないよねゝ。  
スルト、ライフルモード セット!」

二挺のハンドガンが合体してライフルへと姿を変える。これなら、援護射撃できる!!

普通の魔力弾なら、鎧に防がれて終わりだから……スパイラルバレットが妥当かな?

「スルト。弾丸セレクトはスパイラルバレットに固定。」

【了解。操作は主に任せます。】

「うん。第一射目、いくよー!!」

【スパイラルバレット!!】

スルトの銃口から貫通力に特化した桜色の弾丸が放たれる。

ぐわっ!! ウワッ!!

私の放った弾丸は2人の騎士の心臓を貫きました。一直線に並んでいたのが、仇になりましたね。

「しかし、数が多いですね。」

「ハーフェルフと戦う時は百人ぐらいの騎士を用意しろって言われてるらしいですから。」

「ふ〜ん……でも、レムルス。よくそんな事知ってるね?」

「何年か前に騎士が会話してるのを盗み聞きしただけです。」

「なるほど……ねー!」

レムルスと会話している間にもマールテル教会の騎士を狙撃して次々に倒していく。

ふう………だいたい10人は倒したかな? でも、2人で相手してるわりには……敵の減りが激しいような………

「というか！！ 刹那さんも手伝ってください！！」

「うん。どうやら、私も闘わないといけない状況だね。」

「えっ！？」

いつの間にか反対方向からも騎士の軍勢が迫って来ていました。

### 刹那視点

ハーフエルフの迫害は知識では知ってたけど、ここまで酷いとは思わなかったね。

そして、リアとなっちゃんが闘ってるのは陽動。真打ちは……  
……こっちか。

ちよっと怒りを抑えきれなくなりそうだから、傍観しようと思  
ったのに………

これじゃあ、怒りを抑えきれないじゃない…………

「はてしなく霸道滅封！……！」

刹那お気に入りの魔法―霸道滅封が放たれ、騎士たちを呑み込む。

「私はシルメリアの援護に行ってくるわ。怒りで我を忘れかけてるみたいだし。」

「うん。リアをお願い、母さん。」

飛鳥はシルメリアの方に向かった。

「私も手伝いましょう。」

破壊の雷を猛き騎士にさらなる力を。

ブーストアップ 属性付加『雷』……！」

アクエリオンさんのブースト魔法がレヴァンティンにさらなる力を与えてくれる……！」

「蹴散らせ……！ 業魔剛雷斬……！」

刹那は騎士に接近してレヴァンティンを降り下ろした瞬間、周囲に火柱と落雷が立ち上り、騎士たちを駆逐していく。

私の新技『業魔剛雷斬』はアクエリオンさんとのコンビネーション技。広範囲に渡って火と雷の攻撃を繰り出す。

ただ……結構な魔力を使うんだよね。しかも、さっきはフルパワーで放ったから、魔力の五分の一は持ってたよ。

「レヴァンティン。残りの敵戦力は？」

【ふむ、少し待て。………む？ さっきの一撃でかなり減ったが、また増えて来ておる。】

「ちっ！！ 増援か！？」

「どうする？」

「全部叩き潰すだけ！！」

アクエリオンと刹那は再び騎士の軍勢に突進して行った。

レムルス視点

……どうしよう……みんな、私のために闘ってくれてるのに……私……何もできない。

「ボルグ……お願い！！力を貸して！！」

【……………】

ボルグは何も言ってくれない。何年も前からずっと……力を願っても……一緒に闘うって言ってもボルグは何も言ってくれない。

「何で……何で何も言ってくれないの！？」

【……………】

「答えてよ……ガラドボルグ！！」

森にレムルスの叫びがこだました。

【……………私には……先代の主、ロムルスとの約束があります。】

お母さんとの……約束？

【貴女が15の歳になるまで、契約はしないという約束です。】

じゃあ……ボルグが何も言ってくれなかったのはお母さんとの約束があったから？

でも……それじゃあ、あの人たちが守れない！！守るため

の力がすぐ目の前にあるのに！！

【ただし、貴女が絆を手に入れ、絆を守るために力を取るなら、契約してもかまわないと言っていました。】

「えっ？」

【問います、レムルス。貴女はあの人たちを助けるために私を手に取りますか？

絆は手に入れれるでしょう。しかし、生涯を戦場で過ごすことになるかもしれませんよ？】

「それでも……絆が手に入れれるなら、誰かが必要としてくれるなら、私は仲間と闘い抜いてみせる！！」

【……貴女の覚悟、しかと聞き届けました。

レムルス……新しい我が主よ！！ 我を手に取り契約の呪文を！！】

「うん！！」

ボルグの柄を握った瞬間、私の頭の中に不思議な呪文が浮かび上がる。

私はこの呪文が契約の呪文なんだと直感した。

「夕暮れに浮かぶ茜色の空

天より降臨せし 金色の剣

二つが集い 交わる時 黄昏の天使は目覚めん

空は茜色に染まり 夕焼けが街を包み

不変の思いはこの心に

意志を貫く力はこの腕に！！

ガラドボルグ セットアップ！！」

【ja！！】

眩い茜色の閃光が一帯を支配した。

そして、閃光の中より現れたのは……… 1人の天使だった。  
所々に黄色の装飾が施された蒼いフルプレートの鎧。

下半身は黒いレギンスに覆われ、腰からは茜色の腰巻き。

両腕には蒼いフルプレートの籠手と黒い手袋。

右手には茜色のハードカバーの本―黄昏の魔術書 左手には前後

で刃の長さが違う双剣―ガルドボルグ

そして、背中には六枚三対の茜色の天使の翼。

「空………飛んでる？」

本当に私が飛んでる………森や人が小さく見える………

「レムルス。感動してるところ悪いですが、刹那たちが持ちません。」

はっ！！ いけないいけない。ただでさえ、みんな疲弊してるのに。

「ボルグ。マーキングをお願い！！」

【わかりました。】

“マーキング”というのは味方に魔術が当たらないようにするもので魔術を使う私たちにとっては当たり前の技術なのです。

レムルスは魔術書を捲って現状を打破する魔術を探し始めた。

「天光満つるところに我はあり

黄泉の門 開くところに汝あり

出でよ 神の雷

これで終わりです！！インディグネーション！！」

レムルスの周囲に蒼白い雷球が形成され、それは騎士の軍勢に降り注いだ。

王都メルトキオ周辺の森に騎士の断末魔の叫びがこだました。

四騎士編 第5話 黄昏の騎士(2) (後書き)

テストが終了してようやくペン?を握ることが出来ました。  
レムルスたちの設定は四騎士編が終わったときにまとめて載せます

四騎士編 第6話 黄昏の騎士（3）

窮地に覚醒した黄昏の騎士。

少女は新天地に向かう。

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

四騎士編 第6話 黄昏の騎士（3）

なのはたちがマーテル教会騎士の軍勢に囲まれて居ること……………依  
頼人であるリヴィアスフィールは……

「リズ」。書類整理終わったよ。」

使用人リズ「ヴァレンチノの書類整理を手伝っていた。

リヴィア視点

「すみません、陛下。お手を煩わせてしまつて……………」

「かまわない。私も暇だからな。」

聖王陛下としての仕事をさつさと終わらせた私は忙しそうなり  
ズの手伝いをしてました。

「それにしても…………騎士セツナたちは遅いですね。」

「結構遠い管理外世界だからね。」

ガラドボルグからエクスカリバーに救援要請を送られて来た時は、本当に驚いた。ガラドボルグはエクスカリバーの原型って呼ばれているから、ほかのレディアントデバイスとは違い、特殊な繋がりがある……というのが私の推測だ。

まあ、おかげで管理局に見つかる前に『黄昏の騎士』の搜索が行えるんだけどね。

「陛下…………あの子たちだけで行かせてよかったのですか？」

「リズは心配性だね。私の娘と刹那は強いよ?」

そう……………なのはとシルメリア、刹那は強い。数ヶ月程訓練しただけで私に匹敵するくらいに……………

まあ、まだ負けるつもりはないけどね♪

「それに万が一に備えて飛鳥さんとアクエリオンを付けたんだから。

」

飛鳥をつけたのは派遣するメンバーの中で高度な回復魔法を使える魔導師（騎士）が居なかったからだ。

刹那も回復魔法は優秀な部類に入るが、いかせん修練が足りないため飛鳥ほど高度な回復魔法は使えないのだ。

ちなみに、リヴィアもアロンダイトの恩恵で高度な回復魔法を使えるが、飛鳥に比べると消費魔力の効率が悪いため、めったに使わない。

閑話休題

コンッ    コンッ    コンッ

「開いておる。入ってよいぞ。」

「ただいま帰りました、リヴィア姉さん。」

帰って来たのはレムルスを連れた刹那たちだった。

「無事だったみたいだね。」

「まあ、シルメリアお姉ちゃんが暴走しちゃったけどね。」

シルメリアが暴走するのは当たり前か……………こっそりアクエリオンを経由して映像は見てたからね。

どの世界でも人間の闇は変わらない。強大な力を持つ者を恐れ、自分たちと違うものを虐げようとする。

リヴィアは心の中でそんなことを考えていた。

「その子が…………現代の『黄昏の騎士』?」

「はい。」

リヴィアは立ち上がり、レムルスに近付いた。

「はじめまして。私はリヴィアスフィールⅡNⅡゼーゲブレヒト。ハーフェルフの騎士。」

「!!!!!!」

レムルスの身体がビクツと震える。

「大丈夫だよ。私は何もしないよ。私は貴女が普通と違うからって何もしないよ。私だけじゃなくて、此処にいる人は貴女に何もしない。ようこそ、聖王邸へ。」

黄昏の騎士レムルス。」

リヴィアはレムルスに向けて微笑んだ。

なのは視点

「さてと……レムルス。服脱いで。」

えっ？ リヴィアお姉ちゃん、いきなり何を言い出すの？

素直なレムちゃん（愛称）はお姉ちゃんの言う通り服……とい  
うか、巻き付けていた布を脱ぐと背中には火傷の跡がありました。  
多分、数年前ぐらいの火傷。私たちはまったく気づかなかったのに。  
・・・。

そういえば、リヴィアお姉ちゃんってたまに鋭いんだよね〜

「布の間からチラッと見えてたからね。アロンドイト。」

リヴィアの右手に銀色の長剣が顕現する。

「静かなる水よ 彼の者に癒しの恵みを与えよ 『キュアライト』」。

「

アロンドイトから水色の光が放たれると瞬く間にレムちゃんの傷が治っていきました。

これがアロンドイトの真骨頂の治癒魔法。ほとんどの傷をすぐに癒しちゃうの。本人は消費する魔力が多いから使わないらしい。

「凄い……… 傷が……… 一瞬で………」

【相変わらず治癒魔法は一流ですね。】

【あつ、久しぶり〜、ガラドボルグ♪】

「再会を喜ぶのは後にして。リズ、レムルスに服を着せてあげて。」

「わかりました。」

リヴィアの命を受けたリズはレムルスを連れて退室していった。

「まずはお疲れ様。思ったより早かったね?」

「別にトラブルに会いませんでしたからね。」

アクエリオンさん……… お金が無いからモンスターハントしたのはトラブルじゃないんですか?

「まあ、無事で何よりだよ。これで四騎士の内三人が揃ったしね。」

「そう言えば、ティアナはどうしたんですか？」

シルメリアの言う通り、聖王邸のメンバーの内ティアナだけがこの場に居ない。

「庭で訓練中だよ。」

「真面目だよね。」

ティアナは真面目過ぎると思うんだけど……………

「あ……………なのは、シルメリア。戻ってたんですね。」

「ティアナ。今日の訓練は終わったの？」

【ティアナは本当に才能に溢れてるぜ。俺が教えた魔法を片っ端から覚えていくんだからな。】

「もう……………誉めすぎだよ、ハーデイス。」

会った最初の頃は自分を卑下してばかりだったのにな。

今は素直に称賛を受け取るようになったちゃって……………私は感激だよ……………

「ティアナ、頑張るのは良いけど度が過ぎるとリヴィア姉さんみたいになるよ?」

「シ…………シルメリア。それはどういう事かな?」

「そのままの意味だよ。」

「あの……それってリヴィア姉さんの転生前と関係あるんですか？」

ティアナ視点

私達ゼーゲブレヒト姉妹の長女にして、聖王教会最高権力者リヴィアスフィール。

彼女の転生前に興味が無いと言えば、嘘になる。だから、私は思い切って聞いてみることにした。

「そうだね。そろそろティアナには話しておこうか。」

私の転生前の名前……“高町 なのは”が前の名前。」

「高町 なのは“！？”」

「ティアナ、知ってるの？」

そっか……刹那さんは管理外世界の出身だから、知らないのか……

「管理局において最強と謳われた『エース・オブ・エース』の称号を与えられた少女……それが高町なのはです。」

「よく知ってるね。」

高町　なのはは地上でもかなりの有名人。私が知らないほうがおかしいです。

「だけど、高町　なのはは一年前に死亡した……」

いや……死亡してたら、リヴィア姉さんは存在してないはず……

……

「キーワードは『プロジェクトF』。簡単に言えば、クローン製法。」

「あの……話に着いていけないんですけど……」

クローン製法……クローン……同じ遺伝子を持った人間……  
まさか……！

聡明なティアナは『プロジェクトF』というキーワードだけで真相までたどり着いた。

「あの事件の死体は……クローンなんですネ。」

「そうだよ。私はたまたまレイジングハートに助けられて生き延びた。」

そして、リヴィアスフィールとして今を生きてる。」

「転生前の話はわかりました。だけど、それがどうして無茶と関係あるんですか？」

「管理局のエース・オブ・エースがどうして墜ちたとおもう？  
度重なる疲労が蓄積されて、私の動きを鈍らせたの。」

「だから、無茶だけは絶対にしちゃ駄目…ってこと。」

リヴィアの言葉に続けるように口を開くのは。

「き…肝に銘じておきます。」

あれ？　じゃあ、“高町　なのは”にそっくりなのはとシルメリアは？

「私とシルメリアは“高町　なのは”のクローンだよ。」

「また心読まれた！！」

「ティアは正直者だね。思ってることが顔に出てるよ。」

「からかわないでください、刹那さん！！」

「はいはい。詳しいことは四騎士全員が揃った時に話すよ。」

レムルスがおめかしして戻って来るまでこのやり取りは続いたらし

い。

レムルス視点

リズという女性に連れられてやって来たのは沢山の衣装がある部屋でした。

「それにしても……君のような幼い子供が闘争の道を歩むなんてね……」

「ボルグを手にする時に覚悟は決めました。」

「陛下も……かなり幼い時に闘いに身を投じたらしいけど……」

陛下って……さっき私の火傷の跡を治療してくれた人？

「あの……リヴィアスフィールさんってどんな人ですか？」

「……私から話せないわ。直接、陛下に聞いてみて。」

「…はい。」

「さて、お着替え終了。陛下の下に行きましょう。」

リズはレムルスと喋っている間にもレムルスを着替えさせていた。さっきまで着ていたみすばらし布切れではなく、あまり飾り気のない蒼いドレスである。

私はリズさんから差し出された手を握り締め、刹那さんやリヴィアスフィールさんが待っている執務室に向かいました。

四騎士編 第6話 黄昏の騎士(3) (後書き)

気づかない間に総合評価が約300ポイント超えてました!!!

読みにくいし、グダグダだし・・・読んでくれる人はあんまり居ないと思ったんだけどな

作者である私は嬉しい限りです!!

では、これからも蒼妃の作品をよろしくお願いいたします。

四騎士編 第7話 蒼穹の騎士（1）

最強と謳われた四騎士

その四席の内、三席が埋まった。

その時 蒼き聖槍を携えた青年が現れた。

魔法少女リリカルなのは 現代に蘇りし創聖の聖王騎士

四騎士編 第7話 蒼穹の騎士（1）

レムルスの『黄昏の騎士』就任から数週間後………聖王教会に1人の青年がやって来た。

「此処が聖王教会か……長い道のりだったな。」

【迷子にならなければ、もっと早く着けたのにね。】

「あのな……誰のせいで迷子になったと思ってるんだーっ！！  
！！（怒）」

青年は突然大声を上げた。

【まあまあ。落ち着きなさいって。つか……注目されてるわよ？】

聖王教会に参拝しに来ていた信者たちはジーツと青年を見詰めていた。

「は……恥ずかしい……」

「どうかなさいましたか？」

青年に声をかけて来たのはピンク色のような髪の色 of 女性だった。

「えと……あなたは？」

「あ…申し遅れました。私はシャツハⅡヌエラと申します。」

「僕はリーネⅡバルクⅡアレイスターです。」

実は、聖王陛下にお会いしたいのですが……」

「聖王陛下は特別な権限を持つ者しかお会いできません。」

ちなみに、聖王陛下……リヴィアスフィールとの面会権限を持っているのは、騎士カリムと教会の上層部の人間、聖王ゼーゲブレヒト家の個人的な友人ぐらいである。

「あ………それなら、大丈夫です。

陛下にお伝えください。

“蒼穹の騎士が悠久の時を越え、貴女に会いに来た”と。」

〈第97管理外世界      ゼーゲブレヒト家〉

リヴィア視点

レムルスが聖王教会に来てから数日後………此处地球ではもう12月です。

そして、私たちは何をしてるのかというと………

「リヴィー、此处教えて。」

「ハイハイ。」

テスト前のテスト勉強会の真っ最中です。

「もう……もうすぐ冬休みなのにどうしてテストがあるのさーッ！  
」

「「いや、冬休み前だからあるんだろ。」」

ゼーゲブレヒト姉妹が同時につっこむ。

「毎回思っけどさ……どうして、リヴィたちは三人揃って頭がい  
いわけ？」

「「普通だよ？」」

三人の声が見事にハモった。

ちなみに、私たち四人を学力順で並べると私↓シルメリア  
なのは↓刹那という配列になる。

私の順位は上の上。シルメリアとなのはは上の下。刹那は中の

下。

クローンでも結構な差が出ることが実証された瞬間だった。

おっと、閑話休題

「まあ、私は予習・復習を欠かさないからね。」

「ちょっと待って！！ リヴィー！！ 聖王としての仕事もあるのにそんな時間あるの！？」

「ん？ 聖王の仕事ってそんなに大変じゃないし、ティアナも手伝ってくれるし。」

「ティアナって……よくリヴィーの隣に居る女の子だよね？」

「そつ。ティアナⅡⅡゼーゲブレヒト。私達ゼーゲブレヒト姉妹の三女で現・魔銃の騎士。」

ティアナはよく私の仕事を手伝ってくれるから、かなり楽しんだよね♪

ちなみに、私・なのは・シルメリア・ティアナの四人は聖王家四姉妹と呼ばれている。

また、長女が私で次女がシルメリア、三女がティアナで末っ子なのはという配列になっている。

まあ、肉体年齢順に並べただけだけだね♪

「ふん……」

「多分、刹那よりも頭はいいよ。」

「グフッ!!」

刹那に9999の精神的ダメージ!!

刹那は倒れた!!

実は、こっそりと学校で受けたテストを実際に解かせてみました。

もちろん、歴史は抜き。結果はなのは・シルメリアに少し劣るくらい。

私もびつくりしたよ!!面白半分で解かせただけなのにあんな結果がでるなんて……………

「だから、安心して仕事は任せられるし…こっちは大助かりだよ」

「ほら、刹那。いつまでもグズってないで勉強しなよ。」

「リア」。私のライフはもう0だよ!!」

ははは、なんと微笑ましい光景だね」

こんな光景を見てると……………私が高町なのはだった頃を思い出すよ。

みんな……………どうしてるかな?

リヴィアは外の景色を眺めながら、そんな事を考えていた。

くくくくくくくく

リヴィアのケータイから着信を知らせるメロディーが流れる。

「？ ティアナから電話？」

なんだろう？

「もしもし。」

『あつ、リヴィア姉さん。実は……リヴィア姉さんに会いたって人が来て……』

「私に？ 今日は何にもなかったはずだよ？」

騎士カリムなら、あらかじめ連絡を入れるし……

『その人……蒼穹の騎士って名乗ったの。』

ティアナの言葉に激震が走った。

こつも都合よく四騎士が揃うなんて……いや、蒼穹の騎士である確証はないけど………

「ティアナ。今すぐそっちに行くから、転送ポートの準備しといて。」

『もう終わってる。いつでも転送可能だよ。』

「さすが」

転送ポートはミッドチルダの聖王邸と此処地球のリヴィアたちの住居に備え付けられている。

双方の転送ポートが起動していないと使えないのがたまに傷だが…

………

「というわけで私は聖王邸に戻るよ。」

「私たちも行こうか？」

「いや、蒼穹の騎士が偽者だったら、無駄足だからね。

5分後に合流しよう。」

これで蒼穹の騎士が本物だったら、神様が仕組んだイタズラにしか思えないね。

リヴィアはそんな事を考えながら、聖王邸に向かった。

四騎士編 第7話 蒼穹の騎士(1) (後書き)

ご都合主義万歳

四騎士編 第8話 蒼穹の騎士（2）

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

四騎士編 第8話 蒼穹の騎士（2）

ティアナに呼び出されて急いで聖王邸に帰還したリヴィア。

聖王邸の執務室には護衛としてティアナ・レムルスの2人とアクエリオンが控えている。

「陛下。客人をお連れしました。」

「入れ。」

入室の許可をだす。

「失礼します。」

はじめまして リーネ＝バルク＝アレイスターです。」

リヴィア視点

青い髪に碧銀の瞳……………初代蒼穹の騎士と同じだな。

「お前が蒼穹の騎士を語るものか？」

「はい。」

「証拠はあるのか？」

「はい。」

すると、リーネは背中に背負っていた布巻をほどく。

「蒼穹の騎士の証……………ブリューナクです。」

蒼白い三叉の矛に碧銀のコア。リヴィアスフィールの記憶と完全に一致する。だけど……………

『アクエリオン、偽物っていう可能性は？』

『ブリーナーナの波動を感知しました。間違いなく本物です。』

言っただけ、エクスのようなレディアントデバイスは独自の波動を持っている。

エクスたちはこの波動を頼りに仲間を探すのだ。

「疑ってごめんね。これも四騎士が揃うと偽物かな？って疑い深くなってる……」

「いえ、僕は別にかまいません。

もしかして……四騎士が揃っているのですか？」

「まあ、ちょうど全員が揃ったみたいだし……自己紹介といこうか？」

ちょうど刹那たちが聖王邸執務室に到着したみたいだね。

レイジングハートに頼んで呼んでもらったけど……超特急で来たみたい。

はじめまして、蒼穹の騎士リーネ＝バルク＝アレイスターと言います。

僕が蒼穹の騎士として覚醒したのはほんの数年前。まだまだ初代には及ばないけど、そこら辺の騎士には勝つ自信があります！！

おっと、閑話休題

「私は煉獄の騎士飛燕 刹那。まあ、こっちではセツナ＝ヴァーミリオンって名乗ることが多いかな？  
よろしく。」

「よろしくお願いします！！」

セツナさんか……………なんとなく仲良くなれそう。

【久しいな ブリューナク。】

【およ？ レヴァー！！ 久しぶり！！】

腰に差してるのが煉獄の魔剣レヴァンティンか……………

「魔銃の騎士ティアナ＝ル＝ゼーゲブレヒト。ゼーゲブレヒト姉妹の三女。」

養子かな？ 髪の色とか違うし……………でも、ちょっと怖い。

年下に睨み付けられて怯むリーネ（15歳）だった。

【ブリューー！！久しぶりだな〜】

【あら、久しぶり。ハーデイス。またいびってあげましょうか？】

【え…遠慮させてもらうぜ。】

さっきの発言からわかるようにブリューナクはドSだ。

本人はハーデイスと僕に対してだけだって言うけどさ…………余計に酷いよ！！飯にも主なのに…………（泣）

「黄昏の騎士レムルス。」

「よ…よろしく…………」

今度の娘は見た目可愛いけど、むちゃくちゃ無愛想な少女でした。

【すいません。レムルスはある事情で初対面の人には感情を面に出さないんです。】

「そうですか…………事情については聞かないでおきましょう。」

【ありがとうございます。】

「私はナノハートゼーゲブレヒト。ゼーゲブレヒト姉妹の末っ子だよ〜」

「シルメリアゼーゲブレヒト。ゼーゲブレヒト姉妹の次女。」

次はよく似た少女2人。違いは瞳の色ぐらいだけど……顔立ちがリヴィア陛下と瓜二つのような気が……次女のほうはリヴィアさんと同じ翡翠と紅玉のオッドアイか……

「こちらこそよろしく。」

「さてと……筒がなく自己紹介が終わったところでさっそく仕事があるの。」

「」「」「仕事？」「」「」

「そう。それと蒼穹の騎士よ。」

「はい。」

「汝は再び妾に忠誠を誓うか？」

「もちろんです。」

僕は貴女に仕えるためにはるばるこの世界にやって来たのですから。

「ふふ」ならば、我に従う四騎士よ。私に着いて来い。四騎士としての最初の仕事じゃー！」

## ティアナ視点

「ふふ♪ ならば、我に従う四騎士よ。私に着いて来い。四騎士としての最初の仕事じゃ!!」

あれ？ リヴィア姉さん、四騎士がそろったら自分のことを話してくれるんじゃないの？

「………と言いたところじゃが、その前にみんなが気になっていると思う私のことについて話しておく。」

よかった……忘れてなかったみたいだ。

リヴィア姉さんは偶にどこか抜けてるから……

「ティアナ。お前は後でお仕置きだ。」

「えっ!!ちよっ!!」

「顔に出てたよ。」

慌てるティアナに苦笑いする刹那。

「私は幼い頃から、前世の記憶を見る事が多かった。」

えっ！！  
リヴィア姉さんの前世って血潮が飛び交う戦国時代で  
しょ！？

普通の子供なら、正気を保ってられないよ！！

「悲しい夢ばかりだった。最初の頃は悪夢にしか思えなかった。さらに、親にも相談せずに自分の中に抱え込んでばかりだった。」

リヴィアは自嘲するように語る。

「あるときから……確か、ジュエルシード事件と呼ばれる事件が起こり始めた頃だった。」

初代リヴィアスフィールが夢の中に現れるようになった。

いつも悲しい顔をして……私に謝ってばかりだったよ。

そして、今から約1年前。任務中の私はアンノウンに襲撃され、傷を負った。

偶々、聖王教会の人間が助けてくれたお陰でそれほど酷い怪我にはならなかった。

そして……仲間だと思っていた局員が私に杖を向けた。」

リヴィアの語りに全員が驚愕した。

「管理局はリヴィアスフィールが邪魔だったんだよ。」

間一髪レイジングハートのお陰で私は難を逃れた。そして、私はリヴィアスフィールとして覚醒した。

大体、こんな所……ってみんな、どうして泣いてるの!？」

リヴィアの語りを聞いていた全員が泣いていた。

あんな話されたら、誰だって泣きますよ!!

リヴィア姉さんが不憫すぎます!!

「とにかく！！ さっさと仕事するよ！！！」

早足で出て行ったリヴィア姉さんを私たちは急いで追いかけた。

そういえば、リヴィア姉さんは悲しくないのかな？  
築いてきた名誉も絆も全部失ったのに……

ティアナの頭の中はそんな疑問でいっぱいだった。

四騎士編 第8話 蒼穹の騎士(2) (後書き)

前話と同じぐらい短くなりました。

四騎士編は次回で最終となります。

四騎士編 最終話 犠牲者の聖域

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

四騎士編 最終話 犠牲者の聖域

刹那視点

不屈の四騎士全員が揃った直後、リヴィは私たちを聖王教会の外に連れ出しました。

もちろん、なっちゃんもリアも一緒に。2人はこれから行くことを知ってるみたい。

あと、リズさんも知ってるみたい。いつもなら、必ず止めるリズさんが止めなかったもん。

「着いたよ。」

リヴィアが立ち止まった場所は………薄暗い森の中とは思えないくらい太陽の光がさんさんと降り注ぐ場所でした。

「ノルン、ホロン。出てきて。」

― 此処に来たということは……… ―

― 四騎士が全員揃ったんですね。 ―

リヴィアの呼び掛けに応じて現れたのは背中に二枚一対の天使の翼を生やした女性と紅いドレスに身を包み、背中に八枚四対の光の翼を生やした女性だった。

## レムルス視点

リヴィアさんに連れられてやって来た場所は形容しがたいくらい美しい野原でした。

ただ……ハーフェルフである私はこの場所は膨大な魔力で満ち溢れているを感じました。

「ノルン、ホロン。出てきて。」

リヴィアさんの呼び掛けに応じて出てきた存在に私は吃驚しました。

「何でこの世界に精霊が……………」

レムルスの呟きを聞いたのはガラドボルグだった。

ボルグはこの世界には精霊は居ないって言ってたのに……………

リヴィア視点

皆を連れて来たのは『犠牲者の（ウィクテム）サンキユチュアリイ聖域』と呼んでいる場所。

「リヴィア姉さん、此所は一体……………」

「……………あの石に書かれている文字を見ればわかるよ。」

リヴィアは宙に浮かぶノルンとホロンの足元にある石を指さした。

その石にはこう書かれていた。

“『シスターズ』、此处に眠る。” っと……………

「此所は……………私の妹たち……………ナノハのクローンたちが産み出され、殺された場所。」

「……………!……………!……………」

四騎士全員が驚いて目を見開いた。

「そして、我らはこの聖域……………『フェアリーゲート精霊門』を守護する者。」

ノルンがゆつくりと口を開いた。

ついでにノルンとホロンについて説明しておくとなルンは何千年前からこの地を守護していたらしい。

だけど、時空管理局が出来た頃、その強大な力を恐れた管理局がノルンを封印したらしい。

そして、皮肉にもシスターズの大量の血液によって封印が解除されたらしい。

ホロンはシスターズのリンカーコアをノルンが集めて精霊化されたのだ。

そのため、ホロンはナノハを成長させた姿をしている。

「ねえ、精霊門って何？」

「精霊門は人間界と精霊界を繋げる門だ。煉獄の騎士、飛燕 刹那よ。」

「えっ？ 私の名前を……………」

「お前たちのことはリヴィアスフィールから聞いている。」

あの……………そろそろ作業に入りたいんですけど……………

「むっ。すまん。」

「さすがは『心』の精霊ですね。」

ノルンは『心』を司る精霊。だから、人の心を容易く読み取ってしまふ。

ウイクテムサンキュアリイ……犠牲者の聖域に連れて来られた私たちは聖域の東西南北に配置されました。

「なんでもこの聖域の結界を強化する寄り代としてちょうど良いらしい。」

ちなみに、今までの聖域の結界はリヴィア、なのは、シルメリアの三人を寄り代にした結界だった。

しかし、同じ存在を寄り代にした結界はその場しのぎで脆いため、四騎士を寄り代とした結界を新たに張ろうとしているのだ。

「聖なる領域に許されざる者を拒む聖なる結界を」

「4つ魂を寄り代に 許されざる者を拒む聖なる結界を」

「「聖なる領域を守護する絶対的な結界を。」」

「「四点結界 聖なるバリア ミラーフォース!!!!!!」」

ノルンとホロンがティアナたちを寄り代により強固な結界を展開する。

うう…………私の魔力のほとんどが無くなった…………リヴィア姉さんの総魔力からしたら半分ぐらいだろうけど……

「あれ？ 何、これ？」

気が付けば私の首には黒真珠のような宝石が付いた首飾りがあった。

でも、ただの首飾りじゃないことはすぐにわかった。

「それは結界の要です。一つでもそれが破壊されれば、強度は極端に低くなってしまいます。だから、絶対に守ってください。」

「…………はい（うん）！！…………」

「その首飾りには特殊な力がある。それがあれば、何時どんな場所でも精霊界に行くことができる。」

ホロンに後付けするように説明を付け足すノルン。

「やることは終わった。聖王邸に帰るよ。」

私たちは首飾りを見詰めながら聖王邸に戻って行った。

## 四騎士編 最終話 犠牲者の聖域（後書き）

短くてすいません。

ご都合主義満載だった四騎士編は今回で終了となります。

次はSTS編に入る下準備の章となります。

次章からほとんど出ていない原作キャラクターが出てくる予定です。

その前に冥府の炎王を2話連投しますが、かなりの急展開となっています。

## 四騎士終了時の新規参入キャラクター設定

キャラクター設定

飛燕 刹那（セツナ＝ヴァーミリオン）

性別：女性

年齢：13歳

容姿：灰色の髪。瞳は左目が黒金、右目が白金の虹彩異色。髪型はストレート。

魔力量：A A A

魔力光：黒が混じった赤色

特殊能力：魔力変換『獄炎』

デバイス：煉獄の魔剣レヴァンティン

使用術式：古代ベルカ式

### 【騎士甲冑】

紅い軽装の鎧に黒と赤の腰巻き。左腕には黄色で縁取りされた紅い

カイトシールドを装備。

長い灰色の髪を首元でひとつに纏めている。

【備考】

リヴィアたちと同じ学校に通うクラスメイト。

初代『煉獄の騎士』アスカ・ヴァーミリオンの末裔で現在の四騎士の一人『煉獄の騎士』の席についている。

今は明るい性格だが、昔は根暗。趣味はゲームなど。そのため、刹那の魔法はゲームの技を元にしたものが多い。

家族構成は母と父、祖父の四人暮らし。しかし、父親は海外に出張中。

ティアナ・リーゼ・ゲブレヒト（ティアナ・リー・ハートネット）

性別：女性

年齢：10歳

容姿：原作と同じ

魔力量：B+（成長の可能性あり）

魔力光：橙色

特殊能力：なし

使用デバイス：黒き魔銃ハーデイス

使用術式：ミッド式、古代ベルカ式

【騎士甲冑】

原作のバリアジャケットの上着がなくなり、代わりにBlack catのトレインの黒いロングコートを羽織った姿。腰のホルスタ―にはハーデイスが入っている。

【備考】

ゼーゲブレヒト四姉妹の三女、『不屈の四騎士』の一席『魔銃の騎士』の席を担う少女。

原作に比べてかなり強くなっている。

趣味は新しい特殊弾の製作や買い物。

レムルスⅡウエスペリーナ

性別：女性

年齢：10歳

容姿：Angel Beatsの奏

魔力量：AA+（成長の可能性あり）

魔力光：茜色

特殊能力：魔術

使用デバイス：黄昏の双剣ガラドボルグ

使用術式：古代ベルカ式

【騎士甲冑】

茜色の腰布が付き、所々に金色の装飾が施された青色のフルプレート  
の鎧に黒の手袋と青いフルプレートのカントレット。背中には六  
枚三対の茜色の魔力翼が展開される。右手に黄昏の魔術書を持って、  
左手にガラドボルグを持っている。

【備考】

『不屈の四騎士』の一席『黄昏の騎士』に就くハーフエルフの少女  
人見知りが激しく、初対面の人に対しては無表情。

家族には父と母が居たが、レムルスを守るために死去。

聖王邸のメンバーの中でも刹那にとってもなついている。

リーネ＝バルク＝アレイスター

性別：男性

年齢：17歳

容姿：SO2のディアスの目つきを穏やかにした感じ。

魔力量：AAA

魔力光：空色

特殊能力：なし

使用デバイス：蒼穹の聖槍ブリューナク

使用術式：ミッド式、古代ベルカ式

【騎士甲冑】

S O 2のディアスの衣服。

【備考】

『不屈の四騎士』の中で唯一の生身の男性で『蒼穹の騎士』の席に付いている。

趣味は雑談・食事。

家族は母、兄、妹の四人家族。父は死去。

ノルン

性別：女性

年齢：？？？

外見：黒髪に黒い瞳。背中には二枚一对の純白の翼が生えている。

【備考】

『犠牲者の聖域』に住む『心』を司る精霊。

何十年も前に時空管理局の最高評議会によって封印されていたが、なのはのクローンの血によって自由の身になった。

現在は半身であるホルンと一緒に『精霊門』を守護している。

ホルン

性別：女性

年齢：1歳以下

外見：容姿はなのはと瓜二つ。背中に紅く輝く八枚四対の光の翼が生えている。

【備考】

なのはのクローンのリンカーコアを使って生み出されたノルンの半身。

ノルンのしゃべり相手として誕生させられた人工？精霊。露出の少ない紅いドレスを着ている。

【デバイス設定】

レヴァンティン

二つ名：煉獄の魔剣

性別：男性

特殊能力：威力強化（LEVEL3）、消費魔力軽減（LEVEL

1)

【形状】

黒い刀身を赤黒い刀身で覆った鍔無し西洋剣。（イメージはSO3のレヴァンティン）  
カイトシールドが鞘になっている。

【擬人化】

紅い髪と紅い瞳が特徴的な老人。黒い法衣を身にまとっている。かなり高齢だが、若い姿にはなれる。

【備考】

四騎士の中でもっとも博識なレディアントデバイス。魔法などは超一流で中でも治療魔法はアロنداイトの上に行く。

ハーデイス

二つ名：黒き魔銃

性別：男性

特殊能力：魔力変換『豪雷』、消費魔力軽減（LEVEL3）

【形状】

Black Catのハーデイスのまんま

【擬人化】

Black Catのトレイン＝ハートネット

【備考】

元は非人格型のレディアントデバイスだったが、初代の魔銃の騎士が自分の人格を投影した特殊なデバイス。

【特殊弾】 火炎弾：火属性の弾丸

氷結弾：氷属性の弾丸

烈風弾：風属性の弾丸

氷結界弾：氷属性の広域殲滅弾。半径100M周囲の空間を凍結させる。ティアナ製。

ガラドボルグ

二つ名：黄昏の双剣

性別：女性

特殊能力：魔術強化、消費魔力軽減（LEVEL2）

【形状】

白い刀身を金色の刀身で覆った両刃大剣と両刃短剣を合体させた剣。大剣と短剣は分離できる。

【擬人化】

薄めの金髪に銀色の瞳が特徴的な17歳ぐらいの少女。髪型はポニーテールで身長と同じぐらいまで伸びている。

【備考】

エクスカリバーの原型と言われている双剣のレディアントデバイス。エクスカリバーとは特殊な繋がりがあり、次元の壁を隔ててもお互

いの位置を確認することができる。

しかし、その繋がりは弱くなってしまい、救難信号の送受信が限界らしい。

また、アクエリオンとは親友である。

ブリューナク

二つ名：蒼穹の聖槍

性別：女性

特殊能力：魔力変換『重力』、威力強化（LEVEL1）

【形状】

蒼白い三叉の槍。

【擬人化】

水色の髪と同色の瞳が特徴的な10歳程度の少女。髪型は肩にかかるぐらいのセミロング。

【備考】

アレイスター家に伝わる秘宝。

【特殊能力設定】

魔力変換『煉獄』

所有者：飛鳥、刹那

【説明】ヴァーミリオン家に伝わる魔力変換資質。魔力変換『炎』よりも格段に温度が高い。

また、わずかな魔力で発生させることができるのが特徴。

魔力変換『豪雷』

所有者：ハーデイス

【説明】魔力変換『電気』の強化版だが、威力は比べ物にならない。

魔力変換『重力』

所有者：ブリューナク

【説明】魔力を消費して重力を操る能力とされているが、詳細は不明。

威力強化

攻撃魔法・防御魔法・治療魔法の威力（効果）を上昇させる能力。上昇度合いによって三段階にわけられて居る。

LEVEL 1 : 25% 上昇  
LEVEL 2 : 50% 上昇  
LEVEL 3 : 75% 上昇

#### 消費魔力軽減

魔法を使う際に生じる消費魔力を軽減する能力。  
軽減度合いによって三段階に分かれている。

LEVEL 1 : 25% 軽減  
LEVEL 2 : 50% 軽減  
LEVEL 3 : 75% 軽減

#### 魔術強化

所有者：ガラドボルグ

すべての魔術の威力（効果）を上昇させる能力

**間章 第1話 祝福の風（前書き）**

新章突入です。

## 間章 第1話 祝福の風

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

間章 第1話 祝福の風

四騎士集結から数週間後。

四騎士が集結したからといっても何か起こるわけでもなく平和な日々を過ごしていた。

そして、第97管理外世界『地球』の日本は冬休みの真っ只中のクリスマス。

## リヴィア視点

テストも無事に終わり、無事に冬休みに突入した。

四騎士も4人全員が揃い、平和な時を過ごしている。ティアナやレムルスと一緒に勉強して一緒に訓練して…よく一緒に居るのを見掛けます。歳が近いから話し易いのでしょうか？

リーネとリズはそんな2人の面倒をよく見てくれています。

リヴィアは護衛も付けず、単身で海鳴市内にある……八神はやての家の近くにある丘を訪れていた。

「……………懐かしいね。」

【はい。】

雪が降り積もる中、私が訪れたのは1人の従者の墓場。もちろん墓場と言っても墓石が立てられているわけではない。

初代 祝福の風リインフォース

此処は主を守るために命を投げ出した管制人格が旅立った場所。

「リインフォース…さん。お久しぶり……………って言ってもわからないか。」

「貴女が旅立ってから、いろんなことがありました。

はやてちゃんは貴女の約束通り二代目のリインフォースを産み出しました。

守護騎士…ヴォルケンリッターの4人も元気そうです。  
最も……………直接は会っていません。」

はやてちゃんやフェイトちゃんの活躍は聖王教会にも入って来ている。

2人共元気そうだなによりだった。

「今日は……………忙しいはやてちゃんの代わりに……………現状の報告に来ました。  
私はそろそろ帰ります。」

私が方向を変え、来た道を帰ろうした時でした。

チリーン チリーン

鈴の音が静寂な空間に響き渡る。

―待つて……………くれ……………小さな勇者の……………片割れよ―

「……………」

リヴィアは思わず振り返った。

振り返った視線の先には壊れかけのテレビが映し出す映像のように霞んでいるが、確かに存在していた。

銀髪に紅い瞳、黒い衣装。

「リイン……………フォース……………さん。」

―久しいな……………小さな勇者片割れ。その姿を見ると覚醒したのだな。

―

「！！！！！」

リインフォースさんは……………私が聖王の魂を受け継いでることを知っていた？

―かつては敵対した好敵手ライバルの魔力を忘れるわけがない。―

そっいえば、先代は戦場で夜天の書と戦った事があるんだっけ？

―すまないが、時間があまりない。本題に入らせてもらおう。

今、主はやてに再び闇が襲い掛かろうとしている。私の力ではどうすることもできない。

お願いだ。主はやてを……………助けてやってくれ！！―

「リインフォースさん！！」

リインフォースはそれだけ言い残すと光の粉となって消滅した。

「アロンドイト！！」

【了解！！ “魂の物質化”！！】

飛び散った光の粉が集まり銀色の結晶となる。

【ふ……………危ない、危ない。】

「魂だけの存在を物質化させるのはかなり難しいからね。」

死者にしか使用することのできない『魂の物質化』は魂だけの

存在を物質化させることができる。

「ただ、魂だけの存在は消滅するほんの一緒しか物質化できない。」

「……………レイジングハート。変身魔法…容姿を“高町なのは”に設定。」

【行くのですか？】

「例え、絆が切れても……………はやてちゃんは私の親友だから。」

【わかりました。変身魔法行使、騎士甲冑を展開。】

リヴィアの容姿が“高町なのは”の姿に変わる。

「アーマーパージ、フライヤーウイング展開!!」

リヴィアの背中に純白の翼が生える。

「高町なのはとレイジングハート・イクシオン、行きます!!」

純白の翼、フライヤーウイングを羽ばたかせて私は大空へ飛び立った。

親友を助けるために……………

はやて視点

何でこんなことに……………

「追い詰めました、闇の書の主。」

「諦めて、僕に倒されろ!!」

「塵芥がいくら足掻こうと無駄だなことだ。」

私を追い掛けてくるのはなのはちゃんそっくりの奴とフェイトちゃんそっくりの奴、そして……………私にそっくりの奴。

闇の書のマテリアルって言ってたけど……………狙われる覚えはないで!!!!!!

『まずいですよ!! マイスターはやて!!』

「でも、やるしかないやろ。念話は通じひんし……………誰かが気付くの待つしかないやろ。」

「そんな暇を与えていると思いますか?」

【パイロシューター】

「くっ！ブリューナク！！」

剣状の魔力弾と桜色の魔力弾がぶつかり合い、互いに相殺する。

「後ろが空きだ！！ 雷刃衝！！」

「くっ！」

はやてはスレイプニールを羽ばたかせて間一髪避ける。

「アロنداイト！！」

「クラウソラス！！」

直射型魔力砲がぶつかり合い、爆発を起こす。

今の内に離れんと！！

「逃がしません。」

「バインド！？」

私の四肢は桜色のバインドで拘束されていた。

「これで終わりです。」

私は気付いた。3人が私たちの合体最強魔法、トリプルブレイカーを放とうとしていることに。

『リイン！！ バインドの解除を！！』

『やってるですけど、このバインド固くて中々壊れないですー!』

『バインドの強度までなのはちゃんと同じなんか!』

「ルシフェリオンブレイカー!」

「エクスカリバー!」

「雷光滅殺極光斬!」

はやてがバインドを解除するのに四苦八苦している間にマテリアルのトリプルブレイカーが放たれた。  
はやては目をつぶった。

? あれ……………いつまで経っても衝撃がこうへん……………。

私がそう思って目を開くと……………驚愕の光景が映し出された。

「なのは……………ちゃん…?」

今から一年前に死んだはずの親友が……………金色に輝く剣を持って3人の砲撃を防いでいた。

リヴィア視点

「なのは……ちゃん……？」

砲撃の音で聞き取りずらかったけど、私を呼ぶ声が確かに聞こえた。

「切り裂け、エクスカリバー……！」

【OK……！ 久しぶりの全力全開……！】

エクスカリバーから黄金の光が放たれ、トリプルブレイカーを打ち消した。

「なのはちゃん……ほんまに……？」

「……久しぶりだね、はやてちゃん。」

「なのはちゃん……！」

はやては涙を流しながら、リヴィアに抱き付いた。

「……はやてちゃん、しばらくじっとしててね。」

「……うん。」

「やはり出て来ましたね、創聖の聖王騎士。」

「お前を取り込んで僕は最強の存在になるんだ!!」

「塵芥が持つには過ぎた力だ。」

マテリアル3人が一斉にリヴィアに襲い掛かる。

「パイロ…シューター!!」

「デイベインシューター!!」

桜色の魔力弾と虹色の魔力弾がぶつかり合い、相殺する。

「虹色!？」

はやてちゃんがびっくりしてるみたいだけど、今は目の前に集中しないと!!

「風王結界!!」

烈風の弾丸がなのは似のマテリアルに直撃する。

「唸れ 烈風の剣!! ターピュランス!!」

フェイト似のマテリアルに向けて烈風の刃が放たれる。

「そんな物当たるわけないだろ!!」

ブスッ！！

「な……に……ッ！！」

フェイト似のマテリアルに胸からエクスカリバーが突き出ていた。

「幻影魔法。」

やっぱり便利だね、幻影魔法。創聖の魔導書に記述されてたから、覚えてみたけど……ティアナに比べたら、かなり精度は落ちるけどね。

「僕は……死ぬ……のか……」

「有るべき場所に還りなさい、『力』のマテリアル……雷刃の襲撃者。」

雷刃の襲撃者は光の粒子となって……消滅した。

「あと……2人……！！」

「エクスカリバー……！！」

「約束された勝利の剣……！！」  
エクスカリバー

同名の魔法が同時に放たれ、相殺される……わけがない。

「な…なんだと!!」

リヴィアの放った『エクスカリバー』はマテリアルの『エクスカリバー』を呑み込み、はやて似のマテリアルに直撃した。

「ば…バカな……我は…王…だぞ……」

「他人を必要としない王が私に勝てるわけない。

闇の彼方に消滅しろ、『王』のマテリアル…闇を統べる王!!」

闇を統べる王も雷刃の襲撃者と同じように消滅した。

闇の書の残塵……リンフォースさんが言ってた闇……正  
直、拍子抜けだね。

「あとは貴女だけ……『理』のマテリアル、星光の殲滅者。」

「さすが、と言わざると得ませんね。古代ベルカの時に於いて無敗を誇った騎士……リヴィアスフィール。

貴女を取り込めば、最強の力を手に入れることも可能なんですが…

……」

「貴女の目的は何？ 他の2人は明確に私を取り込もうとした。だけど、貴女はまるで別の目的があるかのよう。」

なぜかこのマテリアル…星光の殲滅者は他のマテリアルが闘つて最中に襲つて来なかった。

何かを品定めするようにずっと……

「確かに他のマテリアルは貴女を取り込もうとした。

しかし、私は違います。

私には強者と正々堂々闘いたいという願望があります。  
貴女なら、絶好の相手です！！」

星光の襲撃者はレイジングハートによく似たデバイスを構えた。

それに応じるようにリヴィアもエクスカリバーを構える。

「闇の書のマテリアルが最後の一騎、星光の殲滅者。」

「創聖の聖王騎士…リヴィアスフィールⅡⅡゼーゲブレヒト。」

「いざ尋常に…勝負！！」

マテリアルとの全力全開の真剣勝負が始まった。

## 間章 第1話 祝福の風（後書き）

せっかくなのでマテリアルを登場させてみました。  
そして、リインフォースのリボーンフラグがたちました。

間章 第2話 星光の殲滅者VS聖王騎士

創聖を司る騎士 リヴィアスフィール

『高町 なのは』を元にして産み出された星光の殲滅者

極めて近い存在がぶつかり合う

魔法少女リリカルなのは 現代に蘇りし創聖の聖王騎士

間章 第2話 星光の殲滅者VS聖王騎士

周囲の空間から隔絶された閉鎖的空間の中で虹色の閃光と桜色の閃光が衝突し、火花を散らしていた。

はやて視点

目の前で繰り広げられる戦闘光景に私は目を疑った。接近戦が苦手な筈のなのはちゃんか……まるでシグナムが闘ってるようや。

『マイスターはやて……あの人は誰ですか？』

「そつか……リンは知らへんねんな。」

そういえば、リンが産まれて間もない頃に死亡報告が来てんから……

「今から一年前……管理局屈指の実力者で奏ちゃんの前のエース・オブ・エースや。」

『ええ！！ 奏さんの前にエース・オブ・エースって呼ばれてた人が居たんですか！？』

「そや。だけど……なのはちゃんは接近戦は門外漢やったはずやねんけど……」

一体、どうなってんねや？ 虹色の魔力光にあのマテリアたちが言ってた『リヴィアスフィール』っていう名前。

あゝもう!! わからん事ばかりや!!

リヴィア視点

「風牙一閃!!」

「プロテクション!!」

エクスカリバーとプロテクションがぶつかり合い、火花を散らす。

私を元にしてるだけあって防御が硬い。エクスカリバーでも切れないなんて……

「叩ききれ、エクスカリバー!!」

「!!」

エクスカリバーの能力―障壁切断によってマテリアルの障壁に亀裂が走る。

【フラッシュムーブ】

「ちっ!!」

互いに距離が離れる。

「……………いい相棒を持ってるね。さすがはレイジングハートのコピ  
ー……………ってことかな？」

「ルシフェリオンは確かに最高の相棒です。しかし、それは貴女も  
同じです。」

2人は互いに微笑み合った。

「ブラスト……………ファイアー!!」

ストライク・エア  
「風王結界!!」

風の砲撃と桜色の砲撃がぶつかり合い、火花を散らす。

「カートリッジロード!!」

ガシュンッ! という無骨な音が響くと同時に拮抗していた魔法は  
その均衡を崩した。

「マズッ!!」

ダウンッ！

「あ……危なかった……」

【間一髪だったな。】

「まったく……昔の私を元にしてるからって馬鹿にできないね。」

マテリアルの攻撃が当たる寸前にデュランダルを取り出して防御。間一髪だったよ。

ちよつと……油断し過ぎたな。気を引き締めない。

「デュランダル。魔力変換を『氷』に設定。」

【承知した。】

「凍てつく風……」

氷属性を付加された烈風が放たれる。

「プロテクション……」

マテリアルはプロテクションを張るが、プロテクションごと凍り付けにされる。

「……まさかプロテクションも凍り付けにすると……」

「感心してる暇があるの？」

「くっ！！」

エクスカリバーを収納してデュランダルを両手に握ったリヴィアが襲いかかった。

ザシュッ！

「なっ！？」

切り裂いたマテリアルは陽炎のように消滅した。

幻影魔法！！ いつの間に！！

「プロテクションを張る前に発動しといて正解でした。」

マテリアルはリヴィアから結構離れた地点に居た。

「まったく……………同じ存在を相手するのがこんなに面倒なんてね。」

「私としてはそろそろ決着をつけたいので、次の一撃で決めませんか？」

「その提案、乗った。」

マテリアルは飛び散った魔力を集めて行く。間違いない……  
『スターライトブレイカー』のコピー。

ならば、スターライトブレイカーと同系統の魔法で向かい撃つ  
てあげるよ!!

「集え、明星。」

「集え、絶氷の剣。」

「ルシフェリオンブレイカー!!」

「セルシウスキャリバー!!」

互いの魔法がぶつかり合い、拮抗する。

「ぐううううっ!!!!」

「うううううっ!!!!」

「リミッター解除!! フルバースト!!」

【いいのか!! 我はなんともないが、主の身体が持たんぞ!?!】

デュランダルには最大出力を抑えるリミッターが掛かっている。  
フルバーストはそのリミッターをすべて解除するコード。

もちろん、私の身体には使用時間によるが、負担が掛かる。

「ほんの一瞬ぐらいなら、大丈夫!!」

【むう……………我はどうなっても知らんからな!!】

パキンッ！ という音が響いた瞬間、私はありたっけの魔力をデュランダルに注ぐ。

「なっ!!」

拮抗していたルシフェリオンブレイカーをセルシウスキャリバーは押し返して行った。

「セルシウスキャリバー・フルバースト!!」

結果、セルシウスキャリバー・フルバーストはルシフェリオンブレイカーを撃ち破り海上に巨大な柱を生成した。

「はあ……………はあ……………はあ……………さすがに……………強かったな。」

いくらアクエリオンが居ないからって此処まで苦戦するとは……………私も鍛錬しないといけないかな？

「なのはちゃん!」

「……………はやてちゃん。」

「なのはちゃん!! 今まで何処行つててん!? フェイトちゃんとかヴィータがどれだけ心配したと思つてんねん!」

はやては今まで貯まっていたものをすべて吐き出すかのように問い詰めた。

「……………今の御主に話すことはできんのじゃ。」

「な…何でそんなこと……………」

『レイジングハート、変身魔法解除。』

《了解》

リヴィアの容姿が金髪のオッドアイに変わる。

「え……………なのは…ちゃん……………」

「御主に……………妾のことを話すには時期が早すぎる。それと……………今の私は“高町なのは”ではない。」

「ちょっと待って!! どういうことや!」

「……………そこまでして…真実が知りたいのか?」

「当たり前や!」

……これは…私が真実を話すまで開放してくれなさそうだね。仕方ないけど、少し痛い目を見て貰うよ？ はやてちゃん。

「ならば、妾を倒してみろ！！ 妾に勝てたなら、真実をすべて話してやるう。」

「やったるやんけ！！」

2人は再び自分の相棒を構えた。

### 間章 第3話 夜天の王VS聖王騎士

呪われた連鎖を終極させた最後の夜天の王

連鎖の終極を手助けしたかつてのエース・オブ・エース

親友同士譲れない考えがある。

故に 2人は激突する。

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

間章 第3話 夜天の王VS聖王騎士

はやて視点

ガキンッ！！ ガキンッ！！

シュベルクロイツとデュランダルがぶつかり合って火花を散らす。

うっ！！ ヤバい。接近戦やったら勝ち目は無い！！

でも、距離を空けて離れようにも……………あの速度には敵わん。

フェイトちゃん並みの速度とシグナム並みの接近戦能力。

私にとってはこれ程にまでない厄介な相手や。

「刃にて 血に染めよ、ブラッディダガー！！」

「ブレイブダガー！！！！」

同系統魔法がぶつかり、相殺される。

『夜天の書と同系統の魔法！？』

「私の魔導書…創聖の魔導書は夜天の書の元になった魔導書だよ？  
夜天の魔導書と同系統の魔法が使えない筈がないでしょ？」

『とにかく、相手の足を止めへんと!! リイン!!』

『ハイです!! 凍てつく足枷!!』

「ムッ!!」

リヴィアの足が『凍てつく足枷』によって止まる。

あつさりと引つ掛かってくれたな。まあ、チャンスや!!

「クラウ・ソラス!!」

銀色の砲撃がリヴィアに命中した。

『やった……ですか?』

「フルパワーのクラウ・ソラスや、手傷ぐらいは……」

『はやてちゃん!!』

「えっ? ガッ!!」

はやては首根っこをリヴィアに掴まれていた。

そして、リヴィアはまったく傷を負っていない。

うそ……やろ? 渾身の魔法が……無傷やなんて……

「私には『聖王の鎧』っていう特殊能力……つまりはレアスキルがあるの。

まあ、破られたけどね。

それはダメージを緩和したんだよ。」

「ガッ……アッ……」

呼吸が……意識が遠退く……あかん……意識を失ったら

……

「大丈夫。殺しはしないよ。

ただししばらくの間……前線に出れないようにするだけだから!!」

リヴィアはデュランダルを高く振り上げて……はやてに引導を渡そうとした。

私は……………護れないのですか？

大好きなマイスター1人さえ……………

カチリつと歯車が噛み合う音がリインの頭の中に響いた。

貴女は……………敵なんですね。私とマイスターを殺そうとする……………敵。

リインの目に写ったのはデュランダルを振り上げるリヴィアの姿だった。

敵は……………タオサナイト……………

リインの意識は暗転した。

はやて視点

私は目を瞑って痛みに耐えようとした。

ガキンツッ!!

でも、聞こえて来たのは金属と金属がぶつかり合う耳障りな金属音だった。

そして、恐る恐る目を開けたはやての視界に写ったのは驚愕の光景だった。

銀色の長い髪を風に棚引かせ、黒と白の双剣でデュランダルを防いでいた。

「リン……………」

それは……間違いなく私の知ってる二代目祝福の風リンフォース・?（ツヴァイ）やった。  
だけど、何処か違う。

白かった肌は日焼けしたような褐色に染まり、白い騎士甲冑は黒い胸当てと短いスカートに血のような赤いジャケットと腰巻きだけの露出の多い姿。

一見、まったく別人見えるのに……発せられる魔力はリンそのものの魔力だった。

リヴィア視点

「褐色の肌に陰陽を体現する双剣……覚醒したか、アーチャー！  
！」

「これが……アーチャー……。」

かつて、ヴォルケンリッターたちと敵対した初代と数多の剣を交わした者……それがアーチャー。

『デュランダルはアーチャーが管制人格だって知ってたの？』

《半信半疑だったかな。》

そう。アーチャーは突然現れて私たちを退けるとすぐに戦場から立ち去る。

だから、誰もアーチャーの正体を知らなかった。

「マイスター……………護る。」

ガキンツッ！！ ガキンツッ！！

双剣とデュランダルがぶつかり合って火花を散らす。

クッ！！ 手数が多い双剣に大剣のデュランダルは不利か……………

リヴィアはデュランダルを創聖の魔導書に直す。

「久々だけど……………マテリアライズ スタート 開始！！」

あんまり使ったことないけど……………双剣には双剣だよ！！

「マテリアライズ コンプリーター 完了……………此れ、双竜剣『天地』。」

リヴィアの手には赤と青の双剣が握られていた。

ガキンツッ！！ ガキンツッ！！

2人は魔力を使わず、純粹な剣術だけで戦っている。

一体、何回剣を打ち合っただろうかという時に異変は起こった。

ズキッ

?? なんだろう……両手に違和感が……

「ハッ!」

「グッ!」

リインの攻撃によってリヴィアは自分の双剣を落としてしまう。

「止めます。黒陽双斬。」

魔力を籠められた双剣がリヴィアに襲い掛かる。

「パンツァヒダネス!!」

ズキンツッ!!

ツッ~~~~!! こんな時にフルバーストの反動が来るなんて…

……

しかし、その痛みでリヴィアは障壁の強度を緩めてしまった。

リインの双剣はリヴィアの障壁を容易く切り裂き、リヴィアの身体すら切り裂いた。

ブシャッ!!

リヴィアの肩から胴体にかけてアーチャー・リインの双剣によって切り裂かれ、傷口をなぞるように鮮やかな鮮血が騎士甲冑を染めていく。

……自分の血を見るのは久しぶりだね。  
アウァロン

“すべて遠き理想郷”……起動。待機魔力を傷の治療に消費。

痛みを気にする事なく冷静に判断するリヴィア。

【主よ！！ 此処は退くべきだ！！】

【そうだよ！！ アクエリオンが居ない状態じゃあ、創聖の魔導書は全ての力を発揮できないんだよ！？】

デュランダル……………アロンドイト……………そんなに簡単な話じゃないんだよ。

私の魔力のほとんどはアヴァロンによる治療に使っている。結界を破壊して転移する程の魔力は残ってないの。

「かなり深手だった筈ですが、よく立てますね？」

「昔から防御力には自信があるからね。」

【今の状態では説得力がありませんよ？】

言わないでよ、エクス。

「どっちにしろこの結界からは出る事は不可能できません。」

「クッ！！」

その時だった。

ピキピキピキ……………！！

結界にヒビが入り、そのまま結界を破壊した。

リヴィアとアーチャー・リンのちょうど中間の位置に傷ついたり  
ヴィアを守るようにして巨大な火柱が立ち上った。

「不屈の四騎士が1人、『煉獄の騎士』セツナⅡヴァーミリオン  
参上!!」

突然立ち上った火柱から現れたのは紅き鎧をその身に纏った飛燕  
刹那だった。

「セツナ!!」

【今は逃げるぞ!!】

レヴァンティンは直ぐ様、あらかじめ準備しておいた転移魔法を発  
動し、逃走した。

「……………逃げられましたか……………マイスターを守れたので良しと  
します。」

気がつくともリンは倒れ込んだ。

「リン!!」

リンの姿は元の騎士甲冑と元の姿に戻っていた。  
倒れたのは、単なる急激な魔力消費が原因であった。

はやて視点

なんとか見逃してもらったけど……あのリインの姿はなんや  
ったんだろう？

シグナムやったら、何か知ってるかも……

「主はやて！！」

「シグナム！！」

「はやてちゃん！！」

「はやて！！」

シグナムを筆頭とする八神家の面々が我先にと駆け付けて来た。

おそらく、結界を感知したが、あまりにも結界の強度がかたいため、  
足止めを食ってしまったのだろう。

「主はやて、お怪我は？」

「まったく。リヴィアスフィールっていう女の子がな、助けてくれ  
てん。」

ピシッ!!

『リヴィアスフィール』という名前を聞いた瞬間、その場の凍り付いた。

「……………えっと…主はやて。今、なんとおっしゃいました？」

「えっ…………“リヴィアスフィールっていう女の子が助けてくれた”  
って…………シグナム、リヴィアスフィールって誰か知ってるん？」

「ええ、知っています。

詳しい話はクロノ提督の家で話しましょう。」

「う…うん。」

### 間章 第3話 夜天の王vs聖王騎士（後書き）

おもわずネタにはしってしまった作者蒼妃です。

わかる人はわかると思いますが、アーチャー・リインの元ネタは『プリズムイ○ヤ』です。

ブックオフで立ち読みしてハマッちゃいました♪

いや〜・・・イリヤもリインも髪の色が似ているから・・・

## 間章 第4話

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

## 間章 第4話

アーチャー化したリインの猛攻を受けたリヴィアは刹那のお陰で窮地に一生を得た。

アーチャー・リインにつけられた傷はアヴァロンの能力で完治。もちろん、聖王邸の面々に怒られたのは言うまでもない。

リヴィア視点

うゝ……みんなにこっぴどく怒られたよ。確かに、フルバーストっていう無茶はしたけど………一時間も説教なんて酷いと思う。そんな事を心中で愚痴りながら、リヴィアはある場所に向かっていった。

「アクエリオン、居る？」

「ええ。その様子だとお説教は終わったようですね？」

ちなみに、アクエリオンだけはお説教に参加していない。

「なんとかね。」

それから………これ。」

リヴィアは懷から銀色の結晶を取り出した。

「………貴女は私を過労死させたいのですか？」

ようやくこの人の状態も安定状態に入ったというのに………」

「そんなに働いてないでしょ？」

アクエリオンの城………もとい、実験室にはいくつものカプセルがあり、その中の一つに青い髪の女性が入っていた。

「………魂の定着までもう少し掛かりそう？」

「うん。それでも元の身体に近いから馴染み易いみたい。」

「そう……………じゃあ、この子もお願い。」

リヴィアは銀色の結晶をアクエリオンに手渡した。ちなみに、聖王邸の面々でアクエリオンだけは実験ばかりしている。偶に、ちびっ子たちと一緒に鍛錬しているらしいが……………

「この子は私の娘ですからね。」

それに……………ちょうど良い素体が手に入りましたし……………ね。」

アクエリオンが目を向けたカプセルには私が倒した筈の『星光の襲撃者』が入っていました。

いや、正確には凍り付けにいただけか……………

あれ？ 私戦闘地点に置き去りにしてきた筈だよね？

「マスターが凍り付けにしてくれたお陰ですよ」  
ティアナに言って回収してもらったんですよ」

「ティアナも来てたの!？」

私が魔力反応を探す余裕がなかったのもあるけど……………まったく気付かないなんて……………

「はい。幻術魔法を使って魔力を隠蔽しながら、やってくれましたよ」

「ハハハ……………」

リヴィアは自分の不甲斐なさに苦笑いした。

「それはそうとして……どうやってリインフォースの魂を定着させるの？」

星光の襲撃者は不安定な存在だよ？」

「この身体は魂の脱け殻のような状態ですからね。

すぐに定着しますよ。だって………星光の襲撃者はリインフォースの一部には違いありませんから。

身体の維持については“レリック”を使います。」

「なるほど………確かに、レリックから魔力を供給すれば、存在を安定させるぐらいは容易いね。」

『レリック』。それは超高密度の魔力結晶で聖王家には欠かさないアーティファクト。

創聖の魔導書には2つのレリックがある。オリヴィエ姉様と先代が使っていた物だ。

「それより………自動人形の方はどうなんですか？」  
オートマター

「もう少しで完成。」

人格プログラム？と武装が完成したら、終わり。」

「思ったより進行が早いですね。

人格は気を付けてくださいよ？

あんなひねくれた性格は嫌ですからね。」

「それは私だって同じ。」

「同感です。」

私は早速、この娘の復活に取り掛かります。  
マスターはどうしますか？」

「こつちも作業だよ。」

さてと……………今日は人格の方に取り掛かるかな？

リヴィアは実験室から退室するとリヴィアも自分の実験室に向かった。

「まさか、私たちを幾度となくピンチに陥れたアーチャーの正体が  
この子とは……………」

アクエリオンは悲しそうな瞳を銀色の結晶 リンフォースの魂の  
結晶に向けながらつぶやいた。

↓第97管理外世界　ハラウン邸↓

はやて視点

私は事情聴取という扱いでハラウン宅にやって来ました。珍しくフェイトちゃんやクロノくんもいました。

ちなみに、リインはまだ眠っています。

「じゃあ、シグナム。リヴィアスフィールっていう人物について話してくれるか？」

「はい。」

リヴィアスフィール。フルネームはリヴィアスフィールⅡゼーゲブレヒト。

古代ベルカ……聖王家の人間です。」

「古代ベルカの聖王……確かに金髪と虹彩異色の瞳に虹色の魔力光の説明がつくわね。」

「アイツの下には四人の騎士がいて“不屈の四騎士”って呼ばれた。

あたしらも何度も闘った事がある。

だけど……………」

「ほとんど勝った事はないわ。」

「良くて引き分けだったな。」

シグナムに続くようにヴィータ、シャマル、ザフィーラが順に話す。

そして、全員が守護騎士の言葉を疑った。

管理局では無敵の戦力と言われる守護騎士が勝てなかったという事実が信じられないのだ。

「話を続けます。」

リヴィアスフィールには『創聖の魔導書』と呼ばれる魔導書があります。

夜天の書は創聖の書を元に作られましたから、謂わばこの二冊は母娘のような物です。」

「創聖の魔導書はリヴィアスフィールにしか扱えねえ。だから、改変されたこともない。」

しばらくの間を置いてはやてはゆっくり口をひらいた。

「実はな……………リヴィアスフィールは最初、『高町 なのは』として現れたんよ。」

私の言葉に全員の顔が驚きに満ちていた。

「偽物……………という可能性は？」



「なのはが………聖王の末裔？  
本当ですか！？シグナム！！」

「真実だ、テストロッサ。」

でも、なのはちゃんがリヴィアスフィールの末裔なんと今回のことが何の関係があるんや？

「……………輪廻転生。」

ザフィーラが静かに呟いた。  
全員がザフィーラに注目する。

「創聖の魔導書にはある機能があります。  
創聖の魔導書は持ち主の魂と共に血縁者の元に現れるという機能  
です。」

「なのははリヴィアスフィールの末裔……………初代の魂となのはの  
魂が融合したってことか？」

「そう考えるのが妥当だろう。」

「じゃあ、何でなのはは私たちに会いに来ないの？」

「それは我等にもわからん。  
高町にどのような思惑があるかはわからん。  
直接本当に聞くしかないだろう。」

その場に暫しの沈黙が流れた。

「じゃあ、もう1つの疑問や。アーチャーについてや。」

『アーチャー』という単語を聞いた瞬間、守護騎士の肩が震えた。

「アーチャー……………それは夜天の書の主と我等ヴォルケンリッターを守るための防衛プログラムです。」

「ちょっと待て！！ 防衛プログラムはあの時に破壊された筈だ！！」

いつもは冷静なクロノくんが珍しく焦ってる。

「我等が破壊した防衛プログラムとアーチャーの防衛プログラムは独立しています。」

「多分……………初代リインフォースはアーチャーの防衛プログラムだけをはやてちゃんに残したんだと思います。」

「リインフォースが……………」

リインフォース……………あんたもかなりの心配性やな。私にホンマ色んな物を残して逝ってくれたわ。

間章 第4話（後書き）

グダグダ

## 間章 第5話 水銀燈と青髪的女性

管理局によって殺された女性

護衛のために生み出された自動人形オートマター

その2つが聖なる王の屋敷にて目覚めようとしていた。

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

間章 第5話 水銀燈と青髪的女性

???視点

ゴポッ　ゴポッ　ゴポッ

あれ…………意識がある…………此処は…何処？

私は…………戦闘機人プラントにゼスト隊長やメガーヌと乗り込んで…………あつ、返り討ちに合ったんだっけ…………

じゃあ、此処は天国？　それとも、地獄？

そう言えば…………スバルとギンガはどうしてるかな…………

そんな事を考えながら、カプセルに浮かぶ青髪の女性「クイント」ナカジマは辺りを見回した。

周りは似たようなカプセルがいくつもあった。見る限り実験室のようだ。

とにかく、此処は天国でも地獄でもなさそうね。  
何かの実験場かしら？

『どうやら目を覚ましたようですね。』

誰？

気が付くとクイントの目の前にはアクエリオンが立っていた。

『待っててください。  
すぐに出しますから。』

カプセルの液体が抜かれてカプセルから脱出したクイントはそのままその場に倒れ込んだ。

上手く立てない……………ちゃんと感覚はあるのに……………

「あちゃ〜……………やっぱり、筋肉が衰退してますか……………」

「あ……………う……………あ……………」

えっ！？ 声も上手く出せない！？

「声帯の筋肉も同様ですか……………なら、『これはどうですか？』」

アクエリオンはクイントが上手く喋れない、と理解すると会話方法を念話に切り替えた。

『あ、大丈夫です。』

『よかった！！ 念話まで使えなかったら、どうしようかと思いましたがよー！！』

『あの……………此処は何処なんですか？』

『あ……………まず貴女には何処まで記憶がありますか？』

何処まで、って言われても……………メガー又は連れてかれて、私は戦闘機人に殺されそうになって……………

あ、そう言えば……………

『金髪の少女が私を助けてくれて……………少し話をした所までだと思います。』

『そこまで記憶がハッキリしてるなら、ありがたいですね。まず、貴女は私の主であるリヴィアスフィールに助け出されました。』

しかし、助けた段階で貴女は死亡。

そこで、マスターは貴女の魂を引き剥がし、新しい肉体であるその身体に定着させました。

まあ、最後の方は私がやりましたけどね。』

私が…………一度死んでる？

『まあ、すぐには信じられないかもしれませんが、事実です。』

『あの…………私以外に助けられたのは……………』

アクエリオンは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

『あの後…………現場を調べましたが、生存者はいませんでした。』

『そんな『しかし!!』』

『奇妙な事がありましたね。』

遺体がまったくありませんでした。

もしかしたら、生き延びているかもしれせん。

何にせよ、今の貴女は生まれたての赤ん坊のようなものですから

ね。

しばらくは此处でお世話しますよ。』

『えっと……命を助けていただいた拳げ句、衣食住が提供されるのは嬉しいですが、いいんですか？』

『此处はマスターの屋敷ですから、気にする必要はありませんよ。』

余談だが、クイントはアクエリオンにお姫様抱っこで部屋まで運ばれ、死にたいくらい恥ずかしい思いをしたそうだ。

くリヴィアの実験室く

アクエリオンの実験室の近隣にあるリヴィアの実験室ではティアナとリヴィアが忙しそうに作業をしていた。

「ごめんね、ティアナ。

手伝わさせて………」

「気にしないでください。

オートマター  
自動人形の製作は私も興味があります。」

私とティアナが作っているのは護衛用自動人形の最終調整だ。  
元は刹那が『ロー。ンメイ。ン』のアニメを見て同じ物を作れないのか聞いてきたのが始まりだ。

最初は遊び半分で製作してたんだけど………ね。

ッ  
いつの間にかありえないくらい高性能になっちゃった♪ テヘ

「人格プログラム…問題なし。

ユニゾンシステム、及び魔力炉も正常稼働。

コアのレリックにも問題ありません。」

「ご苦労様。我ながら、会心のできだね♪」

「もはや、護衛用だけでなく、殲滅戦も可能ですがね。  
かなりのハイスペックになっちゃいましたね。」

「今さらだよ。さあ、起動させるよ。」

リヴィアはコントロールパネルを叩く。

すると椅子に座らせた人形の瞳が開かれた。

「おはよう、水銀燈。」

「おはようございます、母上。」

「水銀燈、異常はない？」

「はい。レリックも正常稼働しています、マイスター。」

水銀燈のコアには超高密度魔力結晶のレリックが使用してある。  
そして、ユニゾンシステムは私が本気で全力を出すために付けたシステムだ。

リヴィアやオリヴィエはレリックと融合してこそ本来の力を発揮する事ができる。

そして、聖王家の秘宝“聖王のゆりかご”が揃えば天衣無縫の力が手に入る。

「武装の方はどう？」

「“黒鳥の護り手”及び“堕天使の細剣”、正常稼働しています。」

「そう。とりあえず、ユニゾンを試してみたいの。  
行ける？ 水銀燈。」

「もちろんです！！ 母上！！」

「よし！！ ティアナ、転移魔法！！  
場所は第８８管理外世界の孤島！！」

「りょくかい♪ ハーデイス、超長距離転移魔法発動！！」

【OK！！ 超長距離転移魔法発動！！  
目的地 第８８管理外世界！！】

リヴィア・水銀燈・ティアナは第８８管理外世界に向けて転移した。

間章 第5話 水銀燈と青髪の女性（後書き）

文字数が伸びない・・・orz  
水銀燈は某第1ドールそのままです。

間章 第6話 飛翔

聖王騎士のサポートのために産み出された自動人形

黒い翼を持つ墮天使を模した人形は羽ばたく。

守るべき王と共に……………

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

間章 第6話 飛翔

『第88管理外世界』

聖王教会が所有する無人世界で教会騎士団の訓練場として活用されている。  
独自の生態系を持っており、凶暴な肉食モンスターが数多く生息する場所である。

## リヴィア視点

周りの三面を山に囲まれ、残りの一面を海に囲まれた地点…まるで、鎌倉の幕府のような場所にリヴィア、ティアナ、水銀燈は居た。

ティアナは普段着だが、リヴィアは高機動形態の騎士甲冑を来ている。

「水銀燈。」

「はい。」

「ユニゾン スタート!!」

水銀燈が光の球体となり、リヴィアの体内に入っていく。

やっぱりアクエリオンとのユニゾンと違って 違和感があるね。  
これが体内にレリックを入れる感覚かな？

「大した変化ありませんね。」

「だね。」

リヴィアは手鏡を見ながら返答した。

ユニゾンすると瞳の色と頭髪の色が変色するのだが、リヴィアの容姿はまったく変わっていない。

唯一の変化といえば、白いフライヤーウイングが黒くなっているくらいだ。

「魔法を使うから、魔力コントロールは任せるよ？」

『わかりました、母上。』

さて……………久しぶりに使うか、私の十八番の魔法を！！

「デイベインバスター！！！！」

リヴィアの手から虹色の閃光が放たれる。

リヴィアのデイベインバスターは天まで届くくらいまで上って消失した。

……………テクステンションを同じぐらいの飛距離に通常版と同じ威力。

【かなり強化されてますね。

チャージ時間も非融合時に比べて短縮されています。】

レイジングハートから分析結果が述べられる。

レリック融合時のデイベインバスターでこの威力なら、スター

ライトブレイカー撃ったらどうなるんだろ？

「クイックアロー。」

リヴィアは近くの岩に向けて音速の矢を放った。

結果……………

うわ……………威力がほとんどなかった『クイックアロー』で岩を砕いちゃったよ……………

リヴィアは心中で自分の放った魔法に戦慄した。

ちなみに『クイックアロー』は速射性・連射性だけを追求した牽制用の魔法なので威力は皆無。

【無駄な魔力消費も極限まで抑えられています。】

「はあ……………はあ……………」

「水銀燈、大丈夫？」

「はあ……………はあ……………大丈夫…じゃないです。

母上の魔力が……………多すぎて…コントロールするのが精一杯です。」

水銀燈はかなり疲労が貯まっていた。

無理もないか……初めてユニゾンしただけだからね。

「ユニゾン アウト。」

リヴィアがユニゾンを解除すると現界した水銀燈はふらつき、倒れそうになる。

ガシッ！！

倒れそうになった水銀燈の身体をリヴィアは抱えた。

「少し日陰で休もう。」

【そうですね。】

ティアナ視点

水銀燈が倒れたため、近くにあった大きな樹の麓で3人は休息していた。

ティアナは休息しながらもキーボードを叩いて作業していた。

レリックと融合………水銀燈とユニゾン時、休止中だった筈の桜色のリンカーコアが一時的に稼働した。

かつて負った傷の治療が終わってるかはリヴィア姉さんも知らない。

「どうということなの？」

「何が？」

ティアナの独り言はリヴィアの耳に届いていた。  
ちなみに、水銀燈はリヴィアの膝の上で静かに眠っている。

「いえ、水銀燈とユニゾンした時にリヴィア姉さんのもう1つのリンカーコアが一時的に稼働したんです。」

「おかしいね。」

桜色のリンカーコアは予想以上に傷を負って数年間休止中の筈だよ。」

「ですよ〜。」

「一応………解析 開始。」

リヴィアは目を閉じて解析魔法を発動させる。

「解析 終了。」

桜色のリンカーコアの傷の回復速度が速くなってる。

多分、レリックと融合したせいでリンカーコアの回復が早まったんだと思う。」

解析魔法の結果のあとに考えられる推測の中でも一番確率が高い推測を述べる。

まあ、レリックの影響と考えるのが一番妥当だな。

でも、ほんの1分ぐらいしか融合してないのに影響が出るものなの？

リヴィアそっちのけで思考の海にティアナはゆっくりと沈んで行った。

まさか、先代の魂がこんなかたちで私の中で眠ってるなんてね……

まあ、まだ決まったわけじゃないし、何より一番確率の低い推測だからハズレてる確率のほうが高い。

リヴィアの推測は先代の魂を欠損が生じたリンカーコアが取り込んだのではないか？というオカルト的な推測だ。理由は体内にリヴィアのものではない魔力の波長を感じたからだ。

「ティアナ、そろそろ戻っておいで。」

「ぶつぶつ………」

「ティアナ？」

「ぶつぶつ………」

ティアナに呼び掛けるもぶつぶつ言うだけで思考の海から戻って来ない。

「……………マテリアライズ 開始。」

リヴィアがその手に創造したのは……………太陽の光に反射し、煌めく、真っ白の……………ハリセンだった。

そして、リヴィアはハリセンを高く振り上げ

「いい加減正気に戻れーッ！！！！」

スパーンッ！！

ティアナの脳天目掛けて降り下ろした。

「いっつったーッ！！」

頭を抱えたまま転げ回るティアナ。

「痛いじゃないですか、リヴィア姉さん！？  
つか、そのハリセンは一体どこから出したんですか！？」

「しょうがないじゃん。  
ティアナ、何回呼んで反応しないんだもん。

それとハリセンはマテリアライズで作った」

ハリセンを作ろう思った時、なぜかはやて……もとい、狸の顔  
が思い浮かんだのはなんでだろう？

「そんな事にレアスキルを使わないでくださいー！！」

「う……うん……あれ、私眠ってた？」

近くで騒いでいたせいか、安らかに眠っていた水銀燈が目を覚ました。

「ごめん。起こしちゃった？」

「あ……大丈夫です。」

「これからどうしますか？」

「水銀燈の個人戦闘能力をチェックしたいんだけど………相手がいないからね。」

水銀燈に見合う実力者はこの世界には居ない。

しかし、ちょうどこの世界には獰猛な肉食モンスターが居るのだ。

そして、遙か上空から一匹のモンスターが飛来した。

新緑の鱗に強靱な体躯。

爪のついた巨大な翼。

現地名称 『リオレイヤ』

水銀燈の初戦の相手になる雌火龍が姿を表した。

#### 水銀燈視点

母上に産み出されて数時間。私の目の前には初戦にしては強敵過ぎる火龍『リオレイヤ』が居る。

対するリオレイヤは威嚇したり、咆哮を上げるだけだ。まるで、闘うのを待つように……………

「水銀燈、あの火龍と一対一で闘ってみて。危なくなったら、私が助けるから。」

「はい。」

水銀燈は腰に挿していた長剣・墮天使の細剣を抜くとリオレイヤに突進していった。

「ハアッ!!」

リオレイヤの足に目掛けて一閃。  
しかし、リオレイヤは気にする事なく尻尾で水銀燈に攻撃を仕掛けるが、空振りに終わった。

身長が低くて良かった。危つく尻尾が当たるところだったよ。

水銀燈は幼稚園児より少し高いぐらいの身長だが、リオレイヤは大人の身長と同じぐらいの高さなのだ。

やっぱり大きいから、ダメージが通り難いか……………

「ガアアアッ!!」

「ッ! プロテクション・パワード!!」

リオレイヤが全速力で突進してくるが、薄い黒色の壁によって阻まれる。

剣に魔力を集めて強度を強化して障壁の一部に穴を開けて……………

……………

スーパーコンピューター並の性能を持つ水銀燈の頭脳が勝利するために最適な行動を計算する。

細剣には薄い黒色の魔力が集まり、攻撃の時を待っている。

「穿て!! 黒耀!!」

黒い刃はリオレイヤの頭に突き刺さり、リオレイヤは怯む。

リオレイヤと水銀燈の闘いは始まったばかり。

間章 第6話 飛翔（後書き）

グダグダですいません。

間章 第7話 水銀燈VSリオレイヤ

気高き雌の火龍 リオレイヤ

黒き守護天使 水銀燈

2人の闘いに決着がつく。

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

間章 第7話 水銀燈VSリオレイヤ

## リヴィア視点

リヴィアとティアナはさっきまで休んでいた樹の下で水銀燈の闘いを見守っていた。

リヴィアの手にはすでにデュランダルが握られ、今にも駆け出しそうな状態である。

【少しは落ち着いたらどうだ？ 主よ。】

「だって…水銀燈は産まれたばかりなんだよ？

心配になるのは当たり前だよ。」

顔からはいつもの笑顔が消え、ずっと真剣な表情で水銀燈の闘いを見守っている。

水銀燈はリヴィアに大切にされている事を裏付ける光景である。

水銀燈は圧倒的に威力が不足している。元々、ある程度の高威力の魔法は私が教えるつもりだったから……今の水銀燈は一撃必殺の魔法を持っていない。

やっぱり……あの火龍相手に1人で闘わせるのはまだ早いかな？

そんなリヴィアの心配などまったく知らない水銀燈は全力全開でリオレイヤと闘っていた。

## 水銀燈視点

水銀燈はリオレイヤに対して巨大な身体を支えている足に集中攻撃を仕掛けていた。

何回斬り結んだだろうか？ 数えるのが馬鹿になるくらい足に攻撃を仕掛けたのに……………

「ガアアアッ！」

何でこいつはこんなに元気なの！？

水銀燈は内心でそう思っていたが、リオレイヤは確実にダメージを蓄積していたのだ。

それでも、まるで元気なように振る舞うのは女王としてのプライドであろつ。

「いい加減に……………倒れて……………」

足に一撃入れた瞬間、蓄積されたダメージは限界を越え、女王は遂に膝を付いてしまった。

よし！！ 動けない今がチャンス！！

水銀燈はポーチを漁り、缶ジュースサイズの赤い缶を取り出した。

「えい！！」

赤い缶をリオレイヤ目掛けて投擲し、自分の羽根を缶に投擲した。

ゴウンッ！！

缶は破裂し、リオレイヤを巻き込んで大きな爆発を巻き起こした。先ほど水銀燈が投げて爆発させたのは、ティアナ特製の炸裂缶である。

魔力を極限まで圧縮して缶のどこかに穴を開けた瞬間、魔力大爆発を起こす代物である。

いわゆる、魔力爆弾である。

わお。 凄い威力。

マイスターがこっそり私のポーチの中に忍ばせていたから、試しに使ってみたけど……………こんな代物とは思わなかったよ。

リオレイヤがいた場所にはゴミ焼却場の煙のように巨大な煙がもくもくと立ち上っていた。

「ふう……………この爆発じゃあ生きていないでしょう。」

しかし、水銀燈は完全に甘く見ていた。

『久遠の女王』と呼ばれたリオレイヤの実力を。

- ギャオオオオンツ!!! -

「!!!!!!」

煙の中からリオレイヤが雄叫びを上げ、今までとは比べ物にならない速度で突進してきた。

「プロテクション・パワード!!!!!!」

リオレイヤの突進は再び薄い黒色の障壁に阻まれる。

しかし……………

ピシッ！！　ピシッ！！

嘘！！　障壁に罅が……………まさか突進の威力が上がってる！？

パリンッ！

障壁は破壊され、水銀燈は後ろにあった樹に叩きつけられる。

い……………た……………い……………。まさか……………あれだけの爆発の中で生きてるなんて……………

黒いドレスは土で汚れ、頭から血を流していた。幸いにも四肢は無事であった。

そして、リオレイヤは水銀燈目掛けてプレスを吐き出してきた。

水銀燈はすぐには動けない。しかし、リオレイヤのプレスはある者によって阻まれた。

「調子に乗るな、このトカゲが。」

額に青筋を浮かべ、怒りの形相でリオレイヤを睨み付けるリヴィアが居た。

#### ティアナ視点

リヴィアは水銀燈の元に駆け付けたが、ティアナはその場に留まった。

いや、正確にはリヴィアを信じていたのだ。

リヴィアの性格上水銀燈が怪我を負ったら、すぐさま助けに行くのは目に見えていた。

うわゝ……………完全に怒ってるね。予定ではあの火龍が怒る前に水銀燈を救出して撤退だったのに……………。

それだけで十分な個人戦闘能力を測定できた。だけど、あの缶……………まあ、私が面白半分で入れたんだよね。予想以上の威力だったから、喰らったリオレイヤが怒り状態に……………。

「あれ？　もしかして、この状況の原因って私？」

ティアナは樹の下で1人呟いていた。

「水銀燈……………見ておいて。

これが貴女に教えたかった私の魔法。」

リヴィアの足元に虹色のベルカ式魔法陣が展開され、周囲に魔力が迸る。

リヴィアが放つのはリヴィアの魔法の中で上位に分類される魔法。

「しじりゅうめいは四神龍孔霸！！」

魔法陣から魔力がデュランダルの特殊能力によって変換された四色（オレンジ、深緑、黄色、水色）の龍が顕現する。

えっ！！　リヴィア姉さん！！まさかその魔法を水銀燈に教えるの！？

確かに使えない事はないけど……………いや、スパコン並の演算能力を持つ水銀燈なら、あの魔法を改良して自分の物にしちゃうか

……………

四色の龍はリオレイヤに向かって行き、リオレイヤを蹂躪した。

風の龍は外装を切り刻み

炎の龍は体内を焼き尽くし

氷の龍は翼を凍り付けにし

雷の龍は鱗を剥がした。

蹂躪が終わったりオレイヤの姿は見るのも無惨な姿に変貌した。

「水銀燈！！ 大丈夫！？」

先程とはうって変わって感情的な表情を浮かべるリヴィア。

「はい……………なんとか……………」

「もう……………倒したと思って油断したら、ダメだよ？」

「すいません……………」

捨てられた仔犬のようにシュンツと縮こまる水銀燈。

「まあ、無事でよかったよ。」

測定完了。剣術は知識で知ってるだけだから、ちょっと粗いわね。

体術も同じ。でも、管理局の魔導師にはよっぽどな事がない限り十分闘えるわね。

今後の訓練次第………が測定結果ね。

そう思い、ティアナは水銀燈の戦闘記録を自分専用の端末に記録した。

## 間章 第8話 母と娘

魔導書の原初と謂われる『創聖の魔導書』

人の欲望によって狂わされた『夜天の書』

今 永き時を経て

母と娘は再開する。

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

間章 第8話 母と娘

アクエリオンの実験室の奥……いや、正確には隣の部屋はアクエリオンの自室となっている。  
そのアクエリオンの自室で1人の少女が静かに寝息を立てて眠っていた。

リインフォース視点

「うん……うん……此处は……」

閉じていた瞼が開かれ、ハイライトの消えた紅い瞳が露になる。

私は……確か、最後の力を使って小さな勇者に主はやての危機を知らせた後、消滅した筈だ。

なのに何故、私に肉体がある？

リインフォースは今の状況に混乱した。  
満足して消えた筈だったのに消滅していなかったからだ。

リインフォースが眠っていた部屋には少し大きめのサイズのベッドに何かのレポートが高く積まれた机。  
さらに、本がぎゅうぎゅうに詰め込まれた本棚。その横……ベッ

ドの真ん前には等身大の鏡。

なんと飾り気のない部屋でリインフォースは眠っていた。

「……………縮んでる。」

ベッドの前にある鏡に映し出された自分の姿を見て呟いた。

道理で視点が低い筈だ。身長を見る限り九歳ぐらいの身体か？

リインフォースは縮んだ身体に悲観することなく、冷静に分析していた。

ガチャッ！

「久しぶり……………フォルテシモ。いや、リインフォースと呼んだ方が良いかな？」

扉から現れたのは……………私に初めて名前をくれた人……………いや、私の産みの親で母親。

アクエリオン母様が入って来た。

## アクエリオン視点

魔力反応がしたから、戻って来たけど……起きてたか、フォルテシモ。

『フォルテシモ』という名前はアクエリオンが何百年も前にリインフォースに与えた名前である。

「母……様……何故、此处に……」

「私の部屋だからに決まっているでしょ？」

「違います!!」

リインフォース（めんどくさいので、フォルテシモと表記します。）は怒鳴り付けるような口調で言った。

「何故……穢れてしまった私を……助けたのですか……」

ああ…………この娘は心にこんな闇を宿してたんだ。

「主にフォルテシモという名前を教えなかったのも同じ理由？」

フォルテシモは無言でコクリッ、とうなずいた。

「フォルテシモという綺麗な名前は……………穢れてしまった私には名乗れません。」

フォルテシモは布団の端を握り締め、涙を流した。

おそらく、フォルテシモはアクエリオンに会わないと決めていたのだろう。

「穢れてしまった私には母親に会う資格なんてない。」  
そう思ったのだろう。

それを聞いたアクエリオンはベッドに座るフォルテシモに近づき……………優しく抱き締めた。

「辛かったんだね。」

でも、私はそんな事は気にしない。」

「ッ!」

「穢れてようが、そうでなかろうが貴女……………フォルテシモが私の

娘である事に変わりはないよ。」

「私は……………母様と一緒に居て良いのですか？」

アクエリオンは返答せずにただフォルテシモに向けて優しい笑みを浮かべるだけだった。  
それは肯定の印であった。

「う……………う……………うわあああんツ!!」

フォルテシモは大声で泣き始めた。それはもう母親に甘える子供のように……………。  
張りつめていた糸が切れたのだろう。

フォルテシモは数分間泣き続けた。

「落ち着いた？」

「はい。こうして母様に抱き締められるのも久しぶりですね。」

まあ、数百年もこんな感じで会う事もなかったし……………戦場で会う時は敵同士だったもんね。

「そういえば、身体の方に異常はない？」

「していうなら、この身長はなんとかならなかったのでしょうか？」

「無理。」

アクエリオンは即答した。

「容姿は素体の遺伝子を弄くってなんとかあったけど、身長は遺伝子で決められないから無理。」

ちなみに、アクエリオンは素体である『星光の殲滅者』の遺伝子を改変に四苦八苦していた。

何日も徹夜して試行錯誤を繰り返し、やっとこさフォルテシモと同じ容姿に改変できた。

まあ、私も意地張らずにティアナたちに協力して貰えたら、すぐにフォルテシモに会えたんだけどね。

アクエリオンはティアナたちの協力の申し出を頑なに断った。

『フォルテシモは私の娘だから、私が助ける!!!』と言ってアクエリオンが譲らなかったからだ。

その熱意に白旗を揚げたティアナたちはおとなしく引き下がった。

「しかし……………小さな勇者…いや、今は聖王陛下か。二度も助けられるとはな。」

「マスターは助けられる人間を見捨てる非情な人間ではないからね。  
“助けられるのなら、必ず助ける。”それがマスターのポリシーだよ。」

まあ、そのせいで色々拾って来てカリムやリズに怒られるんだけね。

「それとフォルテシモの身体を維持するのにレリックの魔力が使われているの。」

「レリックを！！」

「そ。だから、もしレリックが生成する魔力よりも多い魔力を使ったら、身体組織が隔離を始めるから気をつけて。」

「ようはヴォルケンリッターと同じ体組織という事ですか？」

「そうだよ。」

シグナムたちヴォルケンリッター四騎は魔力でその身体を構成している。

そのため、核でリンカーコアを失うと身体を保てなくなるのだ。  
だから、かつて闇の書にリンカーコアが蒐集された時、身体が消滅したのだ。

「それでね、レリックはかなり膨大な魔力を生成してくれるから、滅多に越える事はないと思うけど……」

フォルテシモはマスターと同じですぐに無茶しちゃうからこれを渡しておくよ。」

アクエリオンはフォルテシモに三日月形のアクセサリーが付いた銀のネックレスを手渡した。

「超高性能デバイス、ルナトーン。  
マスターと魔銃の騎士が協力して作ってくれたデバイスだよ。」

本当はこのルナトーンも私が作る予定だったんだけど……  
遺伝子の改変で精根尽き果てた私には不可能だった。

そこでマスターとティアナが可能な限り高性能なデバイスを作ってくれた。

あ、ルナトーンっていう名前は私が付けたよ？

夜天↓夜↓月夜っていう単純な発想だけだね。

「さて、目覚めたばかりで少し疲れたでしょ？  
少し眠りなさい。」

「うん……………わかった。」

フォルテシモはベッドの上に寝転がり、布団を被ると瞳を閉じた。数秒すると安らかな寝息が聞こえ始めた。

「……………今度は絶対に守ってみせる。」

もう人の醜い欲望に汚させたりさせない。

だから、安心して眠って。フォルテシモ。」

赤子を寝かしつける母親のように優しい声で話し掛けるアクエリオン。

いとおしい我が子フォルテシモの寝顔を見ながら、決意を固めるアクエリオンがいた。

## 間章 第8話 母と娘（後書き）

というわけでリインフォース復活。

この小説では基本的にフォルテシモと表記します。  
いい加減 s t s 編に入りたいな。

## 幕話 第9話 精霊の瞳

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

間章 第9話 精霊の瞳

周りは深緑の木々に囲まれた聖王邸にある広めの庭。

いつもなら、四騎士たちの訓練場になっている広場に1人でひたすら拳を振るう十代前半の少女の姿があった。

薄い青色の髪を黒いリボンで1つに纏めて真剣な眼差しを放つ瞳は『碧銀』の色をしている。

## クイント視点

私が此処、聖王邸でお世話になるようになってから数ヶ月が経過した。

衰退していた喉などの声帯の筋肉もなんとか元通り。 だけど、体力が落ちたり、腕の筋力を元に戻すのが大変。

「はあ…… はあ…… はあ…… これくらいで…… 息切れするなんて……」

クイントは拳を振るうのを止め、呼吸を整えるために近くにある深緑の葉っぱがついた樹にもたれ掛かった。

今の季節は四季でいう春。

庭の周りの木々は深緑の艶やかな葉っぱを枝一杯に付けて悠然と立っている。

「…………… ゼスト隊長やメガー又は大丈夫かな？」

遺体は見付かってないから、生きている可能性はあるって言うだけ……」

いや、例えばゼスト隊長やメガー又が生きてても今の私の身体じゃあ………ね。

クイントの身体は元の身体と同じ遺伝子を使っているが、1つだけ……正解には2つだけ違う箇所があった。

それは瞳の色とリンカーコアの大きさである。

前はA A A - 程度の魔力量だったのに今はA + 相当。

「そう言えば、アークは私の瞳の事を“魔眼”って言ってたけど……効果はわからないから、使いようがない。」

クイントは はあくど溜め息を吐きながら、雲1つ無い青空を見上げた。

ちなみに、“アーク”とはアクエリオンの愛称である。

バチンッ！

クイントは両頬を叩き、気合いを注入する。  
なんとも男らしい仕草である。

「くよくよしてても仕方ない！！  
今はできることをしよう！！」

「クイント。」

鍛練を開始しようと立ち上がった時、女性特有の高い呼び声が響いた。

「アーク？ どうしたの？」

「ちょっと………ね。」

“魔眼”の事で話があるの。だから、着いてきて。」

「あつ、うん。」

鍛練を中断してクイントはアクエリオンの後に着いていった。

く犠牲者の聖域く

アクエリオン視点

クイントの魔眼が発現したのはクイントが目覚めた翌日だった。最初は遺伝子のミスかと思ったけど、その眼が魔眼とわかった。

のは1週間後だった。

アクエリオンはクイントの魔眼について資料……創聖の魔導書のライブラリー機能で探していたが、見つからなかった。  
そんな折、ノルンから心当たりがあるという報告？受けた。

「アーク。 此処は一体……」

「此処は聖王教会の中でも聖王邸に住む人しか入る事を許されない場所……犠牲者の聖域。」  
ヴィクテム・サンクチュアリ

「ヴィクテム……サンクチュアリ……」

中心には神殿にあるような台座。そして、神聖なる台座を中心して広がる草原。

草原の端には来るものを拒むような暗い暗い森の入り口となっている。

「ノルン、連れて来たよ？」

聖域を眩い光が包み、光が収まると台座の真上に白い天使の翼を持った緑色の髪の女性が浮かんでいた。

「すまないな。 我らは此処から離れることができないからな。」

「承知しますよ。」

ノルンはアクエリオンに一瞥するとクイントに近付いて行き、クイントの瞳をまじまじと見詰める。

「……………やはり…『フェアリーアイ精霊眼』か。」

「フェアリーアイ精霊眼？」

聞いたことはありませんね。

「当然だろう。」

精霊眼を持った人間は私が知る限り三千年前から現れておらん。」

「なるほど。」

創聖の魔導書が生まれる前から現れていないなら、ライブラリー機能に記載されていないわけです。

それで。肝心の能力は？」

「精霊眼の能力は精霊との融合。  
実際にやってみた方が早いと思うから……………」

その時、『フェアリーゲート精霊門』が開かれ、四人の精霊が飛び出して来た。  
1人は赤いドレスと赤い羽根を持った精霊ホロン。

大剣・弓・盾の三種の武具を持ち、妖精のような羽根を付けた風の精霊シルフの三姉妹。

「ノルン、連れて来ましたよ。」

「ご苦勞様。」

ホロンが居なかったのは精霊界からシルフを連れ出すためだったらしい。

「ノルン、何故私たちを呼び出したのですか？」

「実はな、この者と契約して欲しいのだ。」

ノルンはクイントを指さした。

「……………精霊眼を持つ人間ですか……………良いでしょう。契約しましょう。」

「指輪を出してね。」

契約の指輪の事ですね。ノルンに頼まれて作りましたが、結構時間が掛かりましたよ。まあ、幸いにもマスターがルーン文字を知っていましたから時間は少し短縮できましたけどね。

ちなみに、契約の指輪……………正式名称はルーンリングというのだが、それは管理局が創設されるよりもっと前、大体創聖の魔道書が活動し始めた頃に製造された指輪で作ることができるのはアクエリオンだけである。

「クイント。この指輪を嵌めて。」

「うん。」

躊躇なく指輪を付けるところを見ると私たちに対する警戒心が

薄まっているようですね。

最初の頃は警戒心丸出し状態でしたからね。

「では、私のあとに続いて契約の言の葉を述べてください。

我 今 風の精に願ひ奉る。」

「我 今 風の精に願ひ奉る。」

ノルンの契約の言の葉を一字一句間違えずに唱える。

「指環の盟約の下 我に精霊を従わせたまえ。」

「指環の盟約の下 我に精霊を従わせたまえ。」

クイントの嵌めた指輪が緑色の光を放ち始める。

「我らシルフの三姉妹、汝との契約を結びましょう。」

シルフの長女が手を翳すとオパール指輪に紋章が刻まれる。  
契約が成立した証だ。

「さて。契約も成立した事ですし、精霊眼の能力を確かめてみましょう。」

心なしか…ノルンが一番張り切ってるような気がするのは私だけ？

「うん……………」

シルフ三姉妹とクイントの足元にミッド式でもベル力式の魔法陣で

もない魔法陣が展開される。

正方形の頂点に円が接してその4つの円を繋ぐように円を囲んでいる図形である。

緑色の光が聖域を埋め尽くし、穏やかな風が吹きすさぶ。

光の中から現れたのはクイントであってクイントでなかった。

青色の髪は春の木々を思わせる深緑の髪に。

背中には計四枚の妖精の羽根。

手には大剣と盾。腰には折り畳まれた弓。

風の精霊シルフとクイントが融合した姿である。

「凄い……………力が湧き出てくる……………」

「精霊眼は精霊と融合することで力を発揮する。

多くの契約を交わせば、バリエーションは増えるが、他の精霊はシルフと違って簡単には契約してくれん。注意しろよ?」

「はい。」

「契約した精霊は指輪を媒介として召喚することができる。  
助けが必要な時には召喚するとよい。」

——クイントの能力が開花した——

―クイントはオパールの指輪を手に入れた！！―

―クイントは『精霊召喚・風』を習得した！！―

―クイントは『精霊融合・風』を習得した！！―

幕話 第9話 精霊の瞳（後書き）

クイントがようやく戦闘員の仲間入りです。

クイントにカイザーアーツを習得させようと思つのですが……  
どう思いますか？

## 間章 第10話 研究所制圧

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

## 間章 第10話 研究所制圧

クイントがシルフと契約して『精霊召喚』・『精霊融合』を習得している頃。

聖王家の現当主 リヴィアスフィールⅡⅡゼーゲブレヒトは森の

奥を疾走していた。

「レムルス！！　ちゃんと着いて来てる！？」

「なんとか……………」

後ろからは騎士甲冑を纏い、茜色の翼をはためかせてリヴィアのあとを追っていた。

## リヴィア視点

私とレムルスは時空管理局が研究所で何かを研究しているという情報を受け、研究所に急行している。

ちなみに、情報源はカリムの義理の弟だったりする。

「着いた！！」

「此処が情報にあつた研究所……………ですか？」

2人がたどり着いたのは比較的クラナガンに近い、森の中に建っている白い建物だった。

クラナガンと密接しているため、違法研究（違法とは決まってい  
ないが……）を行っているとは思えない。

「孤児を集めてるって情報だけど………養うための組織には見え  
ないね。」

「うん。 どうしますか？

突入しますか、それとも………潜入？」

「違法って決まったわけじゃないからね。」

レイジングハート、オクティブハイド 展開。」

「ボルグ、此方もオクティブハイド 展開。」

魔法を展開した瞬間、2人の姿はまるで初めから存在して居なかつ  
たように透明になった。

『オクティブハイド』はティアナが使う幻影魔法だけど、色々  
と便利だから教えてもらった。

当然、ティアナと仲の良いレムルスも教えて貰っている。

もっともティアナのオクティブハイドに比べたら、燃費は悪い  
けどね。」

2人は見えなくなった状態で正々堂々と正面玄関から入って行った。

幻影魔法『オクティブハイド』を使用して研究所内部に侵入した2人はデータベースにレイジングハートを接続してハッキングを仕掛けていた。

真つ暗な中央管制室でリヴィアはキーボードをものすごい速さで叩いている。

【パスワード解析完了。

第3障壁を突破しました。

続けて第4障壁………どうやら最後のセキュリティのようです。

】

「普通の研究所にしては嚴重すぎるセキュリティだね。」

これだけ頑丈なセキュリティを四枚も重ねてる所を見ると……

………他人には見られたくない事をしているみたいだね。

【最終パスワード解析完了。 第4障壁 突破。

全体図を表示します。】

空間ディスプレイに研究所の立体図が表示される。

「……………ビンゴ」

「見つけた？」

見張りをしていたレムルスが近寄って、立体図を覗き込む。

「うん。この研究所の最下層……………そこに子供たちが囚われている。」

レムルス視点

レムルスとリヴィアは順調に子供たちが囚われてる研究所最下層にたどり着いたが……………

「……………これまた頑丈な鍵ですね。」

私たちの前に立ちはだかる扉には魔法式の四重ロックに加えて、ごつい金色の南京錠で、ご丁寧<sup>ごとうじん</sup>に封鎖されている。

解除するのは容易いけど……………警報システムが備え付けられてたら面倒だな。

「レムルス、なんとか出来そう？」

「もちろん♪ 私は四騎士の1人『黄昏の騎士』ですよ？」

レムルスの右手に黄昏の魔術書が現れてページを自動的に捲って行く。

「我が行く手を妨げる物無し ほどどけ 封じられし扉よ “<sup>アンロック</sup>解錠

”」

パキンッ！！

レムルスの魔術『<sup>アンロック</sup>解錠』に嚴重すぎるセキュリティはすべて解錠させられた。

ゴウンッ！！

扉のロックが外れた瞬間、リヴィアは扉を蹴っ飛ばし、扉を粉碎した。

リヴィアさん……………わざわざ壊す必要はなかったんじゃない？

……………

扉の先は真つ暗な部屋で光は一筋も入らない部屋に十歳前後の少年が2人、その少年と同じぐらいの少女が3人、計5人の子供が閉じ込められていた。

5人ともみすばらし布切れを纏っているだけでとても養われているように見えない。

「大丈夫？」

「誰？」

「レムルス」ウェスピーナ。

時間が無いから単刀直入に聞くけど、此処から出たい？」

見渡すとレムルスの「此処から出たい？」という質問に5人の子供たちは頷いていた。

「レムルス、退いて。」

「？」

なんだろう？

レムルスは疑問符を浮かべながらも退ける。

リヴィアは子供の後ろに回ると……………

「照らせ 日輪よ!!」

創聖の魔導書から取り出されたエクスカリバーが強い光を放ち、真つ暗な部屋を照らし出す。

そして、エクスカリバーから放たれた光が隠れていた物を照らす。

「……………鎖？」

子供たちの両足には頑丈そうな銀色の鎖が巻かれていた。

「大方、無理矢理脱走しそうになったら、警報が鳴るようになってるんですよ。」

いつの間にかリヴィアの右手にはエクスカリバーではなく、デュランダルが握られていた。

リヴィアはデュランダルで鎖を1人ずつ切断していった。

「よし。逃げるよ!!」

全員が逃げようとしたとき、警報が鳴り響いた。

「……………しまった!! 監視カメラの存在を忘れてた!!」

「リヴィアさん!!」

「わかってる!!」

2人は5人の子供たちを連れのまま全速力で出入口を目指した。

リヴィア視点

リヴィアたちは出入口前まで順調に進んでいたが、出入口は魔導師の軍勢によって塞がれていた。

「レムルスは子供たちを守って。」

「リヴィアさんは？」

「出口を抉じ開けてくる。」

リヴィアはポケットから黒い仮面を取り出すと自分に着けた。仮面は口回り以外を隠すようなタイプである。

魔導師は…………二十人ぐらい。魔力量から推測すると全員がAランク越え。

Aランク魔導師二十人を一度に相手するのは私でもキツいから

……仕方ない。

「エクス、アロنداイト。少し手伝って。」

「うゝ………久しぶりの地面だゝ。」

「アロنداイト。油断しているとやられますよ?」

擬人化して騎士甲冑も纏ったエクスカリバーとアロنداイトが現れた。

あんまり時間をかけると他の支部から増援が来るから、なるべく早く決着をつけないと!!!!!!

「行くよ、2人とも!!」

「了解!!」

3人は魔導師の軍勢に突進していった。

「まずは数を減らす!!」

出でよ 氷雪!!

轟け 雷光!!」

左手に持つデュランダルは氷の龍を纏い、右手に持つレイジングハートは雷の龍を纏う。

「サンダー……ブリザード!!!!!!」

両手から魔力で作られた二頭の龍が魔導師の軍勢を蹂躪していった。

「はっ!! ていつ!!」

「ふっ!!」

「いつくよ」

3人は『サンダーブリザード』を避けた魔導師たちを駆逐していった。

数分後……… 出入口は血の海に染まっていた。

人を殺す覚悟を持っているリヴィアと非殺傷設定という甘えを持っている管理局員では力の差は歴然だった。

「急いで聖王教会に向かうよ!!」

子供たちも頷いた。

意外だね。こんな殺人現場をみたら、毛嫌いして着いて来ない  
と思ったのに……………

パキンッ!!

リヴィアの着けていた仮面が音を立てて砕けた。

鉄球? そうか……………

「腕を上げたようじゃな、鉄槌の騎士。」

「おめえは腕が鈍ったんじゃないのか?」

出入口には赤いゴスロリ服を来た少女―鉄槌の騎士ヴィータが数人の管理局員を連れて立っていた。

「……………後ろの奴はお前が殺ったのか?」

リヴィアスフィール……………いや、高町なのは!!」

怒鳴るような口調でヴィータは叫んだ。

何処で私の正体を……………あつ、そういえば、はやてに正体を明かしたんだっけ…………

「はやてから聞いたのか……………」

「うんな事を聞いてるんじゃないやねえ！！！！  
何でこんな事をするんだ！？

あの頃の優しいお前は何処に行ったんだよ！？」

「……………管理局の闇を知らないからそんな事をいえるのじゃ。」

リヴィアは俯きながら言った。

「そこを退け。」

妾はこの子たちを聖王教会に連れて行かなければならないのじゃ。

「

「退かねえ！！」

「そうか……………ならば、無理矢理通して貰おう！！」

ヴィータはグラーファイゼンを。

リヴィアはデュランダルを。

2人は己の得物を握りしめて激突した。

「紅蓮蹴撃!!」

炎を纏った左足がヴィータに襲いかかるが、ヴィータは簡単にかわす。

しかし、リヴィアは外れることを前提に戦術を考えていた。

「でやあっ!!」

ヴィータはグラーファイゼンをリヴィアに降り下ろそうとする。

【ホールディングシールド】

虹色の盾がグラーファイゼンを拘束する。

当然、アイゼンを握ってるヴィータは動けなくなる。

そんな致命的な隙をリヴィアが見逃すわけがなかった。

「襲爪雷斬!!」

凄まじい雷撃を仲間であったヴィータに容赦なく放った。

「がっ……あっ……」

「妾の襲爪雷斬を受けても気絶しないとわな。

さすがは鉄槌の騎士を言うところか。」

しかし、紅い騎士甲冑は所々黒く焼け焦げ、満身創痍な状態であるのには見てとれた。

その時、先ほどリヴィアが殺した筈の守護魔導師がポケットから正六角形の赤い宝石を取り出した。

「く……そ……せめて……こいつらを道連れに……」

まだ生きてたんだ……あれ、あの手に持つてる宝石って確かマズイ……！！！！

死にかけの魔導師が手に持っている宝石の正体を瞬時に理解したりヴィアの行動は早かった。

ヴィータを蹴っ飛ばして効果範囲から脱出させ、せめて子供たちとはぐれないように移動した。

「次元の彼方に消え去れ！！」

大きな地震が起こった。

そして、研究所は……極小の次元断層に呑み込まれた。

## 間章 第10話 研究所制圧（後書き）

題名に意味はないです。

ふと思つたら、テイルズネタが多いことに気づいた作者です。

最近、なかなか筆が進まず困っています。

まあ、ストックがあるからしばらくは大丈夫なんですけどね。

間章 第11話 脱出、そして・・・

空間が極めて不安定な場所 次元断層

脱出不可能と思われる無限廻廊

しかし 聖王騎士の不屈の心は潰えず

聖王騎士は精霊王から与えられた剣を抜く

次元断層から脱出した先に広がっていたのは……………

魔法少女リリカルなのは 現代に蘇りし創聖の聖王騎士

間章 第11話 脱出。そして……………

次元断層に呑み込まれたリヴィアたちは断層からの脱出方法を模索していた。

前も見ても闇一色。

後ろを見ても闇一色。

右を見ても闇一色。

左を見ても闇一色。

前後左右すべてを闇が埋めている空間。さらに、極めて不安定な状態なため、何時消滅しても不思議ではない。

幸いにもレムルスや子供たちとは離れていないので心配する事はなかった。

リヴィア視点

ちっ！！ まさかロストロギア『終末の世界』を使ってくるなんて予想外だった！！

リヴィアは自分に毒づいた。

ロストロギア『終末の世界』

周囲に存在する魔力を媒介に次元断層を発生させる恐ろしい代物である。

今回は周囲に存在する魔力が極めて少なかったため、研究所が次元断層に呑み込まれるだけに留まったのだ。

「転移魔法は無理だし……………」

「ちなみに、脱出方法が見付からなかったらどうなるの？」

【次元断層ごと消滅します。】

レムルスの質問にガラドボルグは簡潔な答えを言った。

「マジ？」

【本気と書いてマジと読む。】

「リヴィアさん！！　なんとか脱出できないんですか！？」

レムルスが慌て始めた。

自分が絶対絶命の危機に陥っているのに慌てない人間なんてそうそう居ないだろう。

子供たちも心配そうな瞳でリヴィアを見詰める。

「……………しょうがない。“アレ”を使おう。」

「こんな所で使う予定はなかったんだけどな……………」とぼやきなが

ら、リヴィアは創聖の魔道書から一振りの剣を取り出した。

白く煌めく美しい白銀の刀身に二枚の羽根のような金色の鍰。  
そして、中心には蒼き宝玉が。

ノルンの封印を解いたお礼として精霊王オリジンがくれた剣。  
時間と空間…すなわち、時空を制する剣。

こんな空間が不安定すぎる場所で使うと何処に飛ばされるかは  
わからないけど、転移魔法よりはかなりマシだ！！

「時空の剣よ！！ 我らを望みし場所へ！！」

さっきまで真っ暗闇だった空間に白い光が灯ったかと思うとその光  
はリヴィアたちを包み、何処かへ連れて行った。

〈時空管理局 本局〉

「ヴェロッサ！！」

「どうしたんだい？ クロノ。」

「君に聞きたい事があるんだ。」

聖王リヴィアスフィールドに関してだ。」

すると緑色ばい髪の男性は顔をしかめた。

「クロノ、その情報を何処から仕入れたんだい？」

「知り合いから聞いたんだ。」

それで。 ヴェロツサ、リヴィアスフィールドのことを教えてくれな  
いか？」

「それは無理な注文だよ。」

聖王リヴィアスフィールドの情報は特Aランクの秘匿情報だ。  
いくら僕でも知らないよ。」

「そうか……………君でも無理なのか……………」

「すまないね。」

時空管理局 本局の通路でそんなやり取りが行われていた事は誰も  
知らない。

レムルス視点

うゝ………

【レムルス！！ 起きてください！！】

もうちょっとだけ……

【……………ライティング！！】

ガラドボルグは中々起きないレムルスに業を煮やし、雷の魔術（弱め）を放った。

「ぎゃにゃあああぁっ！！」

痛い！！ 痛い！！ 痺れる！！

【なら、さっさと起きてください。】

「ボルグ？ 此処は……………どこ？」

次元断層から脱出したのはわかるんだけど……………此処は雪山かな？

レムルスの視界に映ったのは一面白銀の雪が降り積もった銀世界だった。

「みんなは!？」

【リヴィアはレイジングハートが騎士甲冑を調整しているので大丈夫でしょう。

問題は子供たちです。】

!!!!!! そうだよ!!! 子供たちはまともに衣服も与えられてないのに、こんな極寒の地に投げ出されたら……………

「ボルグ!!! 近くに洞窟がないか探して!!!」

【わかった!!!】

ガラドボルグの姿が剣から美しい女性の姿に変わると洞窟を探すために駆け出した。

ガラドボルグがレムルスの傍を離れるとほぼ同時に雪を踏みしめる足音、しかも複数、が聞こえてきた。

「レムルス、大丈夫だった？」

「リヴィアさん!!! 大丈夫なんですか!？」

「うん。魔力をこっそり持ってくれたけど、大丈夫だよ。」

リヴィアの周囲には桜色の膜が展開され、5人の子供たちすら包んでいた。

どうやら、聖王のリンカーコアでなく、桜色のリンカーコアを稼働させて緊急結界を張ったようだ。

「今、ボルグが休める洞窟を探してくれてるから!!」

「レム!! 見つけた!! こっちだよ!!」

数分も経たない内にガラドボルグが戻ってきた。

「わかった!!」

ガラドボルグの案内でリヴィアたちは発見した洞窟に向かった。

## リヴィア視点

ガラドボルグが見つけて来た洞窟はそれなりに広い洞窟だった。幸い、レムルスの居た場所からかなり近かったため、すぐに発見できたらしい。

洞窟は深く、太陽の光は少ししか入ってこないが、小さな薪がいくつもおいてあった。

「ファイヤボール!!」

ボツ!!

パチパチッ!!

組み上げた薪に火が灯る。

よく渴いていた薪はすぐに燃え、周囲を温かくしていった。

眠い…… エターナルソード一回使っただけなのに聖王の魔力をほとんど持つてかれるなんて……

でも、眠る前に一仕事しないといけない。少し休んだら、狩りをしよう。

【マスター。】

「ん？ 解析が終わったの？」

【はい。】

この世界の地形・魔力環境を照らし合わせた結果、第88管理外世界ミナガルドと一致しました。】

ミナガルドっていうと……この前、水銀燈と一緒に訓練した場所か……

転移反応をアクエリオンたちが見つけてくれたら、早く戻れると思うんだけど……………今は考えても仕方がないか。

「レムルス、私はちよつと洞窟の外で狩りをして来るよ。」

「えっ！？ 私がいきますよ！？」

「レムルスは子供たちを守ってあげて。」

そういうやいなやレムルスの返答を聞かずにリヴィアは洞窟の外に出ていった。

洞窟の外に出たリヴィアが真っ先に見つけたのはトナカイによく似たガウシカという生き物だった。

「ガウシカの毛皮は暖かいから、ちょうど良いや。」

【角は薬になるしね〜】

リヴィアの右手にはアロンドイトが握られている。

「はあっ！ せいっ！」

ガウシカの背後に回り込み、二閃。耐久力の無いガウシカはそれだけで絶命した。

「剥ぎ取り♪剥ぎ取り♪」

ナイフでガウシカの身ぐるみを剥いで行く。

ガウシカの身包みを剥いで取った毛皮が少しだけ積まれていた。

「さてと……これで一人分かな？」

【そうなるかとあと四匹は狩らなければならんな。】

「だね。」

リヴィアが新しい獲物を探そうと立ち上がった時だった。

——くうゝん……リヴィア、見つけた。——

子供ばい声が聞こえた。

この声……かなり聞き覚えがあるんだけど……

リヴィアが目を向けた先には金髪に頭のとっぺんに生えた2つの狐耳。

リヴィアの……『高町　なのは』の故郷“地球”の赤と白の巫女服を着た人間形態の久遠が立っていた。

「久遠！！　どうして此処に！？」

「鈴……反応した。」

！！！！　鈴！！

リヴィアは気づいて鈴を探し始める。

………無い。久遠から貰った鈴が無い。

「落ちてた……。」

久遠が手を開くとその中に久遠が胸に付けている大きな鈴をミニチュア化した2つの鈴があった。

拾ってくれたんだ。エターナルソードで転移した時に落としちゃったんだろうな。

そして、魔力が枯渇した状態になったから鈴が反応して久遠を呼び出したんだ。

「ありがとう、久遠。」

リヴィアは鈴を受け取ると手首に巻き付けた。  
風が吹く度にチリーンツと綺麗な音を鳴らす。

久遠から貰った鈴……『久遠の鈴』と呼ばれているが、これにはリヴィアの魔力が枯渇状態になると久遠を召喚する力があるの

だ。よく無茶をするリヴィアのために久遠があげたのだ。

「久遠、手伝って欲しい事があるの。」

「なに？」

愛らしく小首をかしげる姿は全世界の男を魅力する。

「ちょっと狩りを手伝って欲しいの。」

「わかった。久遠……リヴィア……手伝う。」

リヴィアと久遠が洞窟に戻って来る頃には日は傾き、黄昏時に差し掛かっていた。

久遠の手には大量のガウシカの毛皮が入った袋が握られている。

「レムルス、戻ったよ。」

「お帰りなさい」

あれ、久遠？」

「うん。」

「衣服の材料になりそうな毛皮と食料になりそうな生肉を捕ってきたよ。」

雪山に飛ばされたにも関わらず食事はそれなりに豪勢だった。

間章 第11話 脱出、そして・・・（後書き）

あまり出番の無かった久遠が登場です。

久遠は原作の久遠とらいあんぐるハートをイメージしてください。

最後に感想・評価をお待ちしています。

## 間章 第12話 雪山生活

く聖王邸く

リヴィアとレムルスが次元断層に吞み込まれて行方不明になったという報告は聖王邸にも入っていた。

しかし……………

「ティアナ、書類。」

「またですか？」

「カリムから孤児院『アタラクシア』についての書類。」

「了解。すぐに終わらせる。」

聖王邸にはいつもと同じような光景が広がっていた。

いや、書類仕事をしているのはリヴィアではなく、ティアナなのだが……………

アクエリオンが書類を持ってきて、ティアナが整理していく。

ちなみに、会話の中にあつた『アタラクシア』とは聖王邸の裏手に

ある山と聖王邸の間に建設中の孤児院である。

「まったく………リヴィア姉さんは何処に飛ばされたのかな？」

《ふむ。 忙しそうだな。》

執務室の中に男性とも女性ともわからない独特な声が響いた。

執務室の中に居たりーネと刹那は思わず己の得物を引き抜いた。  
シルメリアやなのはも戦闘体勢を取るが、アクエリオンは何もせず  
溜め息を吐いた。

「何の用ですか？ オリジン。」

「エターナルソードの反応を感じたからな。」

執務室に現れたのは黒い衣服を身に纏い、腕は四本。  
四本の腕のうち二本は胸で組み、残りの二本には槍を握っている。

オリジンと呼ばれたその男性は悠然と浮かんでいた。

「さて、我とて現世に顕現するのは疲れるのでな。

本題に入ろう。リヴィアスフィールの居場所がわかった。」

「……どこ！？」

全員が激しく反応した。

どうやら内心ではかなり心配していたらしい。

「第88管理外世界ミナガルド。そこにエターナルソードの反応がある。」

十中八九そこに居る筈だ。」

「次元断層の影響で転移魔法は使えないから……………最低でも5日は必要ですね。」

「水銀燈？」

扉から入って来たのは水銀燈だった。

水銀燈は孤児院 アタラクシアの建設に携わっている。

「まあ、リヴィア姉さんが帰って来る前に色々と片付けておきましょう。」

「……………了解。」

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

間章 第12話 雪山生活

く雪山生活 二日目く

リヴィア視点

雪山生活二日目。

今の状況は極めてマズイ。薪が無くなりかけているのだ。  
いくらふさふさなガウシカの毛皮をふんだんに使ったコートを  
着ているとはいえ、子供たちは寒いだろう。

「あの……………お肉焼けました。」

グレーの髪の毛を腰あたりまで女の子がリヴィアにこんがり焼けた  
肉を持ってきてくれた。

「ん？ ああ、ありがとう。」

えっと……………」

「メルです。」

「ん。 ありがとう、メルちゃん。」

最初の方はあまり話してくれない……………というか、警戒されて  
たけど、心を許してくれたのか5人ともよく話し掛けてくるようにな  
った。

私としても嬉しいけどね♪

メルが持ってきたこんがり肉にかぶり付くリヴィア。

「モグモグ……レムルス、食べ終えたら薪を探してくるよ。」

「モグモグ……リヴィアさんは休んでください。」

薪は私が集めてきますよ。」

「えっ……いや、お願いできる？」

最初は引き受けようとしたリヴィアだったが、レムルスの真剣な表情を見たので大人しく引き下がった。

「はい」

メルたちの世話は頼みます。」

レムルスは立て掛けてあったガラドボルグを背負うと洞窟から出ていった。

「まさか…気付かれているなんてね。」

【『黄昏の騎士』には代々“超直感”というスキルが遺伝子レベルで受け継がれていますからね。

その直感が教えたのかもしれないね。】

「くうーん……リヴィア、疲れてる。」

「ちょっと……ね。」

私は少し休むから、エクスに久遠。子供たちの世話をお願い。」

【任せてくださいー！】

「任せて。」

リヴィアは微笑みを浮かべたあと、目を閉じた。

しばらくすると安らかな寝息が聞こえて来たのは言うまでもない。

〵雪山生活 三日目〵

レムルス視点

食料がないから探さないと……………麓の方は植物が自生してるから、そこから探そう♪

肉はさすがに飽きるしね♪

採取の方針を決めたレムルスは雪山を滑り降りて行った。  
危なくなったら翼が展開されるので安全だ。

「……………マンモス？」

【マンモス……………じゃなくて、確か現地名称はポポだったと思いますよ？】

レムルスが着地した地点は黒い体毛を被ったマンモスのような生物——ポポが生息していた。

「……………美味しいのかな？（ボソッ）」

レムルスが呟いた瞬間、ポポの群れは一目散に逃げ出した。

あゝあ。逃げられちゃった。意外とマンモスって速いんだ。

【本能的にレムに恐怖を感じたんでしょっかね】

私そんなに怖くないもん！！！！

そんな漫才してる場合じゃないや。早く食料を探さないと！！

雪山の麓は草原のような光景が広がっていた。

麓の方は比較的暖かいらしい。しかし、雨風を凌げる洞窟がない。

レムルスは食べれそう、もしくはガラドボルグが安全と判断した植物を摘むと雪山の中にある洞窟に帰還した。

## く雪山生活 四日目く

### リヴィア視点

朝早くリヴィアと久遠は鍛練ついでに雪山に生息するガウシカやポポを狩っていた。

その日の天気は快晴。

雪山に降り積もった雪が太陽の光を反射して銀色に輝いている。

「さてと……… 久遠、昼食だよ。」

「リヴィア、ありがとう。」

リヴィアは久遠に小さめの骨付き肉を渡した。

久遠はすぐさまかぶり付き、リヴィアもおしとやかに骨付き肉を食べ始める。

雪山生活も今日で四日目。 明日には聖王邸の誰かが迎えに来てくれる筈。

エターナルソードがもう一度使えたら、良かったんだけど………  
…使うだけの魔力は回復してないしね。

リヴィアはそんな事を考えながら、骨付き肉を食べていた。

ふと空を見上げるとさっきまで快晴だった空が曇天に覆われている事にリヴィアは気付いた。

「吹雪… 来そうだね。」

リヴィアは単なる気候の変化だと思った。 山の気候が変わりやすいのはリヴィアも知っている。

だから、天気が崩れかけているのだと判断した。

しかし、久遠は違った。

子ぎつねの状態から大人の姿に変わるとリヴィアを守るように前に立った。

「これは自然現象なんかじゃない!!」

「どういうこと?」

「わからない。けど、私の本能が警鐘を鳴らしている。」

そして、リヴィアと久遠の前に“ソレ”は現れた。

鋼色の鱗に強靱な四肢と尻尾。

さらに、背中に生えた二対の翼はまさに鋼そのもの。

畏怖の念すら抱かせる怖い顔と凜々しい角。

人間よりも遥かなる時を生きる古龍　クシャルダオラが2人の前に姿を現した。

—ギャオオオツツツ!!!!——

「くっ!!」　「うっ!!」

怖い。今までこんな感覚を味わったことなんてない。

シグナムたちのプレッシャーとは比べ物にならないくらいのプレッシャー。

リヴィアは恐怖で身体が縮こまっていた。

それは久遠も同じだ。  
足がガクガクと震えて恐怖を顕著に現していた。

【何をしてるの！？】

それでも、『リヴィアスフィール』の名を受け継いだ者なの！？  
先代はどんなに強い相手にも負けない強い心を持っていた。

それは貴女も同じよ！！

貴女の心は……絶対に折れない“不屈の心”でしょ！！】

「っ！！！！」

エクスカリバーに叱責され、リヴィアの胸に再び不屈の闘志が燃え  
上がった。

「レイジングハート！！ T-linkシステム ドライブ！！」

【オーライ。 T-linkシステム ドライブ。】

リヴィアの身体から膨大な魔力が溢れ出す。

『T-linkシステム』

正式名《ツインリンカーコアリンクシステム》

2つのリンカーコアが互いに干渉し、相乗効果をもたらすシステム。  
膨大な魔力が産み出されるが、制御が極めて困難になり、制御に失  
敗すると自らの肉体を崩壊させてします。

リヴィアはこの問題をデバイスに魔力制御を任せることで解決した。  
リヴィアが持つ4つのデバイスの内3つを魔力制御に担当させるこ  
とで膨大な魔力を制御することができるようになった。

【制限時間は10分です。】

【しっかり制御してくださいよ？】

【わかってるよ。】

【我に任せておけ。】

頼もしいね。

「行くよ、エクス!!」

【ええ!!】

クシャルダオラは悠然と構えてリヴィアを待ち構えていた。

「烈風斬!!」

風の刃とクシャルダオラの身体がぶつかり合うが、鋼の龍鱗を傷付けることはできない。

「襲爪雷斬!!」

クシャルダオラに雷の一撃がヒットした。

「リヴィアが戦ってるのに私が戦わないわけにはいかないよね？」

大人形態になった久遠が妖力を雷に変換した剣を握り、クシャルダオラを睨み付けていた。

久遠に笑みを向けるとリヴィアはクシャルダオラに向かい合った。

「行くよ、久遠!!」

「うん!!」

間章 第13話 聖王騎士&妖狐VS古龍

風纏う古き龍 クシャルダオラ

古の九尾の妖狐 久遠

古き王の末裔 リヴィアスフィール

主従と古の風翔龍が激突する

魔法少女リリカルなのは 現代に蘇りし創聖の聖王騎士

間章 第13話 聖王騎士&amp;妖狐VS古龍

リヴィア視点

くそっ！！ 噂では聞いたことはあるけど……………予想以上に硬

い！！

そう心の中で呟きながらもクシャルダオラの身体をエクスカリバーで斬り付けて行く。

しかし、エクスカリバーの刃は所々刃零れしている。

エクスカリバーの刃はかなり硬い鉾石でできているが、クシャルダオラはそれよりも硬い鎧を有しているのだ。

「ごめん、エクス！！

聖王邸に帰ったら、ちゃんと研いであげるから！！」

【私の事は気にしないで思い切りやりなさい！！】

「ありがとう！！」と感謝の言葉を述べながら再びクシャルダオラに突進して行く。

「真空破斬！！」

真空の刃がクシャルダオラに向かっていく。

「ガアッ！！」

しかし、真空の刃は強靱な爪の前に散った。

私の攻撃は囷。本命は………久遠による雷撃！！

「轟け、神鳴！！」  
かみなり

上空で待機していた久遠から放たれた蒼き雷はクシャルダオラに直撃する。

「ガ……ガアッ……」

「チャンス――！」

雷撃によってクシャルダオラが怯んだ隙に止めを刺そうと接近して行く。

「ガアアアアアアッ――！」

調子に乗るな――！と言わんばかりに咆哮をあげる。

そして、リヴィアはクシャルダオラから発せられた風に尻餅をついた。

“龍風圧”と呼ばれる風にさすがのリヴィアも勝てなかった。

【残り時間 あと2分――！】

「風には風――！」

レイジングハートが警告するが、無視するように烈風を纏ったエクスカリバーを構え、突進して行く。

対するクシャルダオラもリヴィアに向けて突進してくる。

そして、激突。

「はあああああつ！！！！！」

風と風がせめぎあう。

風と風による摩擦が静電気をお越し、プラズマを発生される。

薄暗い曇天の下、蒼白い閃光が雪山を覆った。

閃光が収まった戦闘地点ではリヴィアとクシャルダオラがすれ違うように立っていた。

ドサッ！！

クシャルダオラが音を立てて倒れて……………

パリンッ！！

エクスカリバーの刀身が粉々に砕け散った。

エクス視点

蒼白い閃光の中、リヴィアは迷わず『聖王剣術最終奥義 冥空斬翔剣』をあの古龍に向けて放ちましたが、私の刀身も砕け散ってしまいました。

まさか……………此処まで硬いとは私も想定外です。

「ごめんね、エクス。  
大丈夫？」

【大丈夫。コアに傷1つないし……………どこにも異常ないよ。】

はあ……………しばらく戦闘参加は不可能ね。

エクスカリバーは心の中でため息を吐いた。  
エクスカリバーはバトルマニア……………とまでは行かないが、強敵と闘うのが好きなのだ。

「ふう……………」

「大丈夫？」

“T-linkシステム”が解除され、一気に押し寄せて来た脱力感にペタリ、と座り込んでしまうリヴィア。

「久遠もお疲れ様。」

「久遠は大丈夫だよ。少し力を使っただけだから。」

「私もエクスもぼろぼろ。また皆に怒られるかも。」

リヴィアの騎士甲冑はマントが破け、所々に土の跡がついている。

リヴィアの言葉に「ふふふ」と久遠は笑った。

その時

倒れ込んでいたクシャルダオラがムクリツ、と立ち上がった。

「「！！！！」」

2人は拳を構える。

嘘でしょ…………？ “真空斬翔剣”をまともに受けたのに立ち上がれるなんて…………

【安心しろ。我に闘う意思は無い。】

「……………へっ？」

クシャルダオラが喋った事に気付いた2人の思考回路が停止した。

【我とまともにやり合ってひれ伏させる人間はそうは居ないぞ？】

「貴方は一体……………」

【我はクシャルダオラの長、グラムⅡダオラだ。  
汝の名は？】

「妾はリヴィアスフィールⅡNⅡゼーゲブレヒトじゃ。」

「私は久遠。リヴィアの従者だ。」

【リヴィアに久遠か……………我はお前たちが気に入った。  
お前たちに力を貸そう。】

ちよっ！！ 古龍クシャルダオラの長がそんなにホイホイと着いて行っているのですか！？

「よろしく願います、グラム。」

「よろしくっ」

リヴィア一行にクシャルダオラの長、グラムⅡダオラが加わった。

【さすがにこの環境で長時間過ごすのは骨だろう。  
元の世界まで我が送ろう。】

「グラム、魔法が使えるのか？」

リヴィアが尋ねる。

【肯定だ。 転移魔法だけなら、誰にも負けん。】

「なら、ちょっとだけ待っててくれないか？  
連れを連れてくるから。」

【良かるう。】

久遠はグラムとリヴィアに一瞥するとレムルスたちの居る洞窟に向かった。

数分後、レムルスと5人の子供を連れ、久遠が戻って来た。

【これで全員か？】

「ああ。 グラム、頼む。」

【承知！！】

子供たちと久遠（子狐形態）はグラムの中に入り、リヴィアとレムルスはグラムの両端に立った。

グラムの足元に大きな銀色の円形魔法陣が展開される。

【転移先を。】

「第1世界ミッドチルダの聖王邸広場！！」

リヴィアが転移先を述べると魔法陣はより一層輝き、リヴィアたちはミッドチルダに転移した。

く 聖王邸広場 く

リヴィアが目を開けるとそこは見馴れた聖王邸だった。

そして、聖王邸の入口には聖王邸に残っていたメンバーが横一列に並んで立っていた。

―おかえりなさい。―

アクエリオンたちは口を揃えてそう言った。

「ただいま」

迷わずリヴィアは返答した。

リヴィアたちは四日ぶりに聖王邸に帰還した。

### 間章 第13話 聖王騎士&妖狐vs古龍（後書き）

しばらく日にちが空いてしまい申し訳ありませんでした。

さて、新たにグラムが仲間になりましたが、グラムは戦闘には参加しません。

ようは、移動手段です。

そして、ストックがとうとう無くなってしまいました。

なので、書置きがたくさんある冥府の炎王を先に完結させます。

## STS編 第1話 予言

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

## STS編 第1話 予言

リヴィアたちが聖王教会に戻って来てから、数年が経過した。  
数日前にとある空港で大火災があった以外はおおむね平穏な日々が続いている。

聖王邸裏には立派な教会型の建物『アタラクシア』が建造され、リ

ヴィアが助けた子供たちの世話をしている。

リヴィア視点

リヴィアはいつものように書類を整理していた。

ティアナやなのははアラクシアの子供たちの世話に奔走中。

リーネやクイント、他の聖王邸メンバーのそれぞれの仕事に就いている。

「ふう………今日は静かだね。」

【ええ。空港火災のせいでバタバタしてましたから、ちょうど良いと思います。】

「ふう」

コンッ コンッ

扉のノック音が響いた。

リヴィアが「どうぞ」と入室の許可を出すとカリムとシャツハが入って来た。

「騎士カリム、今日はどんな用事で？」

「実は解説をお願いしたい物があります。」

騎士カリムが手渡して来たのはわけのわからない文字が書きつられた用紙であった。

古代ベルカ語………騎士カリムの“予言”みたいだね。

「『旧き結晶と無限の欲望が集い交わる地

死せる王の下

聖地より彼の翼が蘇らん

死者たちは踊り 中つ法の大地は虚しく焼け落ち

それを先駆けに数多の法の船も砕け散る。』

………なんとも物騒な内容だね。」

「はい。それに当たって地上で動ける戦力が必要になります。」

地上の部隊は初動が遅いため、必ず後手に回ってしまう。

管理局システムの崩壊を意味しているのに、これでは予言が成就してしまうとカリムは考えているのだ。

「地上に新たな部隊を作るつもり？  
レジアスが黙っていないよ？」

「そこで陛下に部隊の後見人になってもらいたいです。」

なるほど……私の聖王の権力が……

リヴィアのことはあまり公になっていない（聖王が復活したことは公になっている。）が、それでも聖王教会の最高権力者。それを蔑ろにすれば、聖王教会が敵に回ってしまう。それは時空管理局も避けたい事態なのだ。

「別に構わない。」

「ありがとうございます、陛下。」

「さて、私も火災現場に行つて来るよ。」

「お氣をつけて。」

リヴィアは「ありがとうございます」というと空港火災が発生した場所まで跳んだ。

クイント視点

クイント・リーネの2人はリヴィアよりも一足先に大火災があった空港の地下に来ていた。

「かなり酷いわね。」

「此処が火災の元凶と見て間違いありません。」

クイントとリーネの居る場所では周りのコンクリートの壁は黒く焼け焦げ、金属すら融解していた。  
おそらく、此処等一帯の炎の温度は数千 を超えていたと考えられる。

これだけの温度の炎が人の手で起こせるわけがない。  
自然に発火するような環境でもないし……

「どう思う、リーネ？」

「十中八九ロストロギアが関与しているに違いありません。」

リーネは自信満々に答えた。

「そうね。これだけの大火災を人の手で起こせるわけがないものね。」

でも、どんなロストロギアを使ったらこんな事態に………あら？

クイントは不意に何かを見つけた。

透き通った紅い石だが、先の大火災でも焼け跡一つついた形跡がまったくない。

「リーネ、これを見て。」

「これは……レリックの欠片？」

「レリックの？」

レリックって言えば、水銀燈やリインフォースのコアになっているロストロギア……

「どうしたのじゃ？」

「陛下。」

クイントとリーネが歩いて来た道を辿るよつにやって来たのはリヴィアであった。

「実は、レリックの欠片らしき物を見つけて……」

リーネはリヴィアに欠片を渡した。

「……間違いなくレリックの欠片じゃな。」

レリックが此所にあつたなら、この惨状も納得できる。」

「??? どういうことですか？」

クイントはレリックの性質をよく知らないので、頭に疑問符をうかべた。

「レリックは強い衝撃を与えると強い爆発を起こす性質がある。安全性を確立するには特殊な術式を施す必要がある。」

ちなみに、水銀燈とフォルテシモに使われているレリックにはきちんと術式が施されている。

「でも、何でレリックがこんな場所に？」

リーネが問い掛けた。

「大方、管理局が裏取り引きしていたんじゃない？」

その引き渡しの際にレリックが暴走した……そして、先の空港火災が発生した。」

「辻褄が合いますね。」

「これ以上、手掛かりは残ってないでしょうから、もう帰りましょう。」

リヴィアたちは転移魔法で聖王邸に帰還した。

STS編 第2話 起動六課

空港火災から二年後

地上に新たな部隊が誕生した。

その名は……………

遺失物管理部『機動六課』

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

STS編 第2話 機動六課

ティアナ視点

海に面した場所に建てられた機動六課の隊舎。  
その隊舎前に1人の少女がやって来た。

「此処が機動六課か……」

【それにしても、ティアナも物好きだな。  
自分から立候補するなんて……】

「良いの。私が一番暇なんだから。」

リヴィアが後見人になった（名義上は騎士カリム）ことで機動六課から有能な騎士を派遣して欲しいという要請があった。  
しかし、教会騎士団の騎士は錬度が低いこととティアナが立候補したこともあってティアナが派遣されることになった。

「リヴィア姉さんから機動六課に関する資料渡されたけど……  
正直、あり得ないわ。」

【魔導師ランクは最低でもBランク。  
FWには伸びしろがありそうな新人が四人。  
バックアップ組も将来有望な奴ばかり。】

まったく……こんな人脈乱用した横柄な部隊の設立を地上本部が許したものですな。

【それよりティアナ。そろそろ時間だぞ？】

「あつ、本当だ。さすがに初日から遅刻はマズイから行きましょ。」

【おう♪】

“魔銃の騎士”ことティアナⅡⅡハートネットは機動六課隊舎に入って行った。

その頃、部隊長室では……………

「うゝん……………」

機動六課部隊長こと豆狸……………もとい、八神はやてが書類とにらめっこしていた。

「どうしたの？ はやてちゃん。」

「いやな、カリムが聖王教会から有能な騎士を送ってくれるっていう連絡があつたんやけどな……………」

「良いことじゃないの、はやて？」

現在、部隊長室には“金色の死神”ことフェイトⅡⅡハラオウンと“二代目エース・オブ・エース”こと獅子堂 奏の2人が偶々居

た。

「それが……………経歴も名前もわからないのや。」

「「はっ?」「」

2人の声が見事にハモった。

「えっと……………先方のミスじゃないの?」

「カリムがそんなミスするわけない。」

奏の意見をはやては切って捨てた。

コンッ    コンッ

ノック音が部隊長室に響いた。

はやてが「どうぞ。」と入室の許可を出すと1人の少女が「失礼します。」と言いながら、入室してきた。

「えっと……………君がカリムが派遣してくれた騎士なんか?」

騎士……………まあ、十中八九私のことか……………

「はい、私です。」

自己紹介がまだでしたね。

「この度聖王教会から派遣されたティアナⅡⅠⅡハートネットです。」

「あつ、獅子堂 奏一等空尉です。」

「フェイトⅡⅠⅡ<sup>デスタロッサ</sup>ハラOWN執務官です。」

ティアナの自己紹介に反応したのか、敬礼しながら自己紹介した。

「さて、筒がなく自己紹介が終わったところで……機動六課へようこそ！……！」

「ありがとうございます。」

ぐう〜

ほのぼのした部隊長室に可愛らしい腹の虫が聞こえてきた。

「笑うなら、堂々と笑ってください！！」

余計に恥ずかしいです！！」

奏・フェイト・はやての三人は肩を震わせて笑いを必死に堪えている。

うゝ…………寝坊したからって朝食を抜いて来るんじゃない  
！！

「食堂まで案内するよ？」

時間はちょうど12時。

昼食にはちょうど良い時間か。

「すみません、お願いします。」

ティアナは奏の案内で機動六課の食堂に向かった。

く機動六課 食堂く

食堂に着いたティアナは独りで昼食を摂っていた。  
白いテーブルにはパスタ料理とコーヒー。

「……………美味しい。」

【姫っちの料理とどっちが？】

「リヴィア姉さん。」

【即答かよ。】

食事しながらティアナはハーデイスと他愛ない会話をしていた。

獅子堂 奏。あの人がりヴィア姉さんの後釜か……………。  
私の方が強いけどね♪

【しかし……………暇だな。】

「リヴィア姉さんからの指令があるまでは待機よ。  
まあ、アラートが掛かったら、私も出るけどね。」

【お前が出たら、新人の訓練に……………ん？】

ハーデイスが途中で言葉を止めた。

「どうしたの？」

【ティアナ、2時の方向をしてみる。】

ティアナはハーデイスに言われた通りの方向に目を向けると奏と六課の制服を着た赤髪の少女が目に入った。

【あれが“夜天の書”の守護騎士の1人、鉄槌の騎士ヴィータだ。】

あの人が……創聖の書の姉妹本、夜天の書の守護騎士か……

……

聖王教会聖王邸のメンバーの一人であるティアナは当然『創聖の書』と『夜天の書』の関係を知っている。

そして、リヴィアやハーデイスから古代ベルカの歴史を掻い摘んで教えてもらったため、それなりには知っている。

「変に関わらない方が良いか………」

「あの………」

「ん？」

ティアナが振り向くと桃色の髪の少女が立っていた。

「すみません、相席させて貰って良いでしょうか？」

「ええ、構わないわ。」

了承の返事を出すと少女の顔はパアツと輝いた。

「みなさん！！ 席が見つかりましたよ♪」

他の人が居るなら、先に言って欲しかったけどね。

まあ、小さい仕方ないか………

「すみません、ありがとうございます。」

クリーム色の髪の少女がお礼を言って来た。

「気にしないで良いよ。」

そう言えば、君たちは？」

「私はアレス。アレス〓シュバルツ。

こっちが相棒のスバル〓ナカジマです。」

「よろしくね。」

人懐っこそうな笑みを浮かべる青髪の少女―スバル。

ん？ ナカジマ？

《どうやら、クイントの娘みたいだな。》

『そうみたいね。』

これはクイントさんに連絡を入れておいたほうが、いいかも。

「僕はエリオ〓モンディアルです。」

「キャロ〓ル〓ルシエです。」

「私はティアナ。 ティアナⅡⅡハートネットよ。」

この子たちが資料にあつた機動六課のFW4人か……魔力も申し分なし。

確かに伸びしろがありそうね。

「あの……ティアナさんって機動六課の方じゃありませんよね？」

キヤロが恐る恐る尋ねて来た。

「そうだよ。」

私は聖王教会から派遣された騎士だよ。」

「……へえ」「……」

ティアナの服装は普通の服の上に白い剣十字の刺繍が入った黒いロングコートを羽織っている。

機動六課の人間ではないの是一目瞭然だ。

ちなみに、白い剣十字の紋章は聖王邸の家紋のようなものである。

実を言えば、聖王教会の最高権力者の妹なんだけどね。

「騎士ってことはティアナさんは強いんですか？」

「さあね。 私は古代ベルカ式の騎士だから、あまり比べる相手が身内ぐらいしか居ないのよ。」

「……へえ」「……」

ティアナはしばらくの間、フォワード四人との会話を楽しんだ。

## S T S 編 第2話 起動六課（後書き）

長らくお待たせしてすいませんでした。

やはりなかなか筆が進まず苦戦していましたが、なんとか投稿することができました。

でも、また筆が詰まって・・・・・・もしかしたら、また更新が遅くなるかも知れませんが、ご了承ください。

STS編 第3話 黄金の剣の復活

聖王騎士が向かうは

精霊王の森

そして

黄金の剣が復活する。

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

STS編 第3話 黄金の剣の復活

ティアナが機動六課で食事を摂っている頃。

ティアナの姉であり、聖王教会最高権力者でもあるリヴィアスフィールⅡNⅡゼーゲブレヒトは精霊界に来ていた。

リヴィア視点

「此処が“トレントの森”か……………」

「空気が美味しい」

リヴィアは精霊界にある一番大きい森―トレントの森になのはとシルメリアを引き連れて訪問していた。

此処大気中の魔力が濃い。オリジンの影響かな？

「早く石盤の所まで行くよ。」

リヴィアたちはその神聖な森に立ち入った。

トレントの森は一言で言うなら“穏やか”だった。

凶暴な魔物は居らず、温厚な野生生物だけが生息している。

そして、神聖な木々が立ち並ぶ一角に太陽の光を一身に浴びて聳え立つ石盤があった。

「オリジン！！ リヴィアスフィールじゃ！！」

リヴィアが名乗ると石盤が光り出し、源を司る精霊たちの王――オリジンが現れた。

「何のようだ、リヴィアスフィール。」

「これです。」

リヴィアは柄と鍔だけになってしまったエクスカリバーを見せた。

「これは……………酷い有り様だな。」

「ええ。 ちょっと古龍の長と戦闘しまして……………」

「ふむ。これを修復すれば、いいのか？」

「お願いします。」

エクスカリバーはもともと精霊たちによって鍛えられた剣。だから、物質を再生させることのできるオリジンだったら、直せるはず。

「しかし、素材が足りないな。」

「素材？」

「そうだ。 “紅蓮の鉱石” に “絶対零度の神木” 。  
その2つがあれば、エクスカリバーを復活させることができる。」

“紅蓮の鉱石” に “絶対零度の神木” ……聞いた事がない  
ね。

「エクスカリバーは此处に置いていけ。再生の下準備をしておく。  
2つの素材を手に入れたら、戻って来い。」

それだけ言い残すとオリジンは石盤に戻ってしまった。

「「「えっ?」」」

三姉妹の声が見事にハモった。

素材のヒントは無し!?  
自分たちだけで探せと!!

オリジンが出てくることはなかった。

「仕方ない……自力で探そう。」

「「うん。」」

リヴィアの言葉になのはとシルメリアは頷いた。  
そして、エクスカリバーをオリジンの石盤の前に置いた。

「しばらくのお別れだね。」

【気にしないでください。】

「うん」

【戻ってきたか………】

トレントの森の入り口では鋼色の巨大な龍が待っていた。

「うん………」

【どうした？ 元気がないようだが………】

「実は………」

なのははオリジンに言われたをすべて話した。

【ふむ………“紅蓮の鉱石”に“絶対零度の神木”か………】

「何か知らない？」

シルメリアが尋ねた。

【知っている。】

「そつか……………つて、ええっ!？」

シルメリアは驚きの声を上げた。

なのはトリヴィアも声には出さないが、驚いた顔をしている。

【“紅蓮の鉱石”は此处から北北西の大陸にある“焰王の塔”にある。】

「じゃあ、グラム!! その塔まで私たちを運んで!!」

【承知した!!】

三人がグラムの背中に飛び乗ると同時にグラムは巨大な鋼の翼をはためかせ、大空に飛び上がった。

「焔王の塔」

焔王の塔は低い火山の火口の中心に建てられていた。ちょうどその塔の下だけ溶岩が固まり、大陸のようになっていた。

中はまるで真夏日のような空気が漂い、そこにいるだけで体力が奪われるような場所である。

「此処が焔王の塔………」

「此処に“紅蓮の鉱石”が………」

——人間風情が何のようじゃ。——

リヴィアたちの目の前に赤髪の女性が現れた。しかし、普通の人間ではないのは一目瞭然だ。

頭からは二本の角、背中にはコウモリの羽を生やしていた。まるで悪魔のようである。

【久しいな、フラムベルク。】

「お前はグラムか。」

何百年ぶりだ？　こうして会うのは。」

【精霊門が開く事がなかったからな。

正確な年数は覚えておらん。】

どうやら、フラムベルクとグラムは旧知の間柄らしい。

「それで。此処に何の用だ？」

「“紅蓮の鉱石”を分けてくださいー!!」

なのはが三人を代表して懇願した。

すると、フラムベルクは少し考えるような仕草をした。

【分けて貰えないか？】

「……………グラムが認めた者だ、悪いことには使わんだろう。」

フラムベルクは天井に手を掲げた。

すると、フラムベルクの手の中に紅く煌めく宝石があった。

「受け取れ。“紅蓮の鉱石”だ。」

宝石―紅蓮の鉱石はリヴィアの手に収まった。

「さらばだ。」

リヴィアに紅蓮の鉱石を渡すとフラムベルクはさっさと立ち去ってしまった。

「次は“絶対零度の神木”。」

【“絶対零度の神木”は“氷狼王の洞窟”にあるはずだ。】

一向はグラムの背中に乗り、“氷狼王の洞窟”に向かった。

なのは視点

寒い！！ 寒すぎる！！

バリアジャケットを纏ってるのに寒いつてどういうこと！？

なのははグラムの背中であえていた。  
正確には、シルメリアもバリアジャケットを纏っているが、寒そうにふるふると震えている。

【着いたぞ。】

暗くて見えないが、吹雪の中にひっそりと佇む洞窟が確かに存在した。

これが“氷狼王の洞窟”……………

「行こう。」

あつ、風がない分暖かい。

洞窟の中は吹雪く外とは違い、壁を氷が覆っているものの暖かい。

「アオーンッ！！！！！」

三人が感傷に浸っていると何処からともなく狼の遠吠えが聞こえて来た。

ザクツ  
ザクツ  
ザクツ

「！！！！」

三人は雪を踏みしめ、洞窟に近づいて来る足音を確かに聞いた。

ザクッ　ザクッ

足音は徐々に大きくなっていく。  
しかし、音源の正体は見えない。

【何のようだ、人間たちよ？】

リヴィアたちの前に姿を現したのは黒い体毛に覆われた体長2mほどの狼人間だった。

【久しぶりだな、氷狼王。】

【そっちな、風龍王。】

やっぱり知り合いなんだ。

【懐かしいマナを感じたが、お前だったのだな。  
会えて嬉しいぞ。】

【我也だ。】

二匹は笑い合った。

【こんな所に世間話をしに来たわけではないだろ？  
俺で良ければ、話を聞こう。】

「絶対零度の神木”を分けて貰えないでしょうか？」  
リヴィアが懇願した。

【“絶対零度の神木”を？  
別に構わんが……………】

「本当ですか!？」

見た目は怖いけど、この人？ 実は優しい？

なのははそんな事を考えていた。

【うむ。】

氷狼王が吠えるとリヴィアの手にいつの間にか氷で創られた一本の枝があった。

【それが“絶対零度の神木”だ。

“紅蓮の鉱石”とオリジンの協力があれば、どんな物でも再生できる。

さて、俺は奥で眠るとしよう。】

そういうと氷狼王は洞窟の奥に入って行った。

「オリジンの石盤」

氷狼王の洞窟からグラムに乗り、オリジンの石盤に戻ってきた時は日が傾き始めていた。

「取ってきたようだな。」

グラム「ダオラが居たからあまり時間は掛からなかっただろ？」

グラムの事を知ってたんだ。だから、何もヒントを出さなかったのか……

シルメリアはオリジンがまったくヒントを出さなかった理由を自己完結した。

「さて、私の石盤の前に“紅蓮の鉱石”と“絶対零度の神木”を置け。」

リヴィアがオリジンに言われた通りに2つの宝物を配置する。

「下がっておれ。」

三人が石盤から少し離れると石盤の周囲を目も開けられぬ程の閃光

が埋め尽くした。

閃光が収まると石盤の前には一振りの剣が突き刺さっていた。

夕焼けの光を受けて耀くその剣は間違いなく元のエクスカリバーであつた。

「修復は完了した。

我は少し力を使い過ぎた。  
少し眠るとしよう。」

それだけ言い残すとオリジンは石盤に戻った。

そして、リヴィアはエクスカリバーを引き抜いた。

「また…一緒に戦ってくれる？」

【もちろんですよ、リヴィア。

私は何処までも貴女に着いて行きます。】

「ありがとう……………」

**S T S 編 第3話 黄金の剣の復活（後書き）**

なんか、グダグダになってしまって申し訳ありません。

STS編 第4話 力試し

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

STS編 第4話 力試し

ティアナ視点

機動六課に派遣されたティアナは機動六課の教導担当である獅子堂奏に呼び出された。

「あつ、来たね。」

「何ですか、獅子堂一等空尉？」

「ちよつとティアナの实力を見たいから、ちよつと模擬戦をやつて貰いたいのか？」

まあ、腕が鈍らないようにするにはちよつど良いですね。  
特にリヴィア姉さんから制限も受けてないし…………

「構いませんよ。」

「ありがとう。」

奏がキーボードを叩くと訓練場にビルが生えて来た。

一年間の試験部隊なのにこんな最新式のシステムを持ってるだろっ…………

ティアナの頭にそんな疑問がよぎったが、心の中に止めておいた。

『じゃあ、バリアジャケットを展開して。』

「はい。」

ティアナの衣服が分解され、騎士甲冑を纏っていく。

黒いロングコートを翻し、黒い装飾銃を構える。

『ターゲットは全部で十体。』

魔法陣から十機の青い楕円形の兵器――型ガジェットが出てくる。

『それじゃあ……レーディ……ゴー!!』

奏の開始の合図と同時にガジェットは行動を開始した。

「攻撃してこないとか……なめてるわね。」

そういうやティアナはハーデイスに一発の通常弾丸を装填する。

ハーデイスからは黄色の電気が迸る。

一撃で決める。この程度の相手に無駄玉は必要ない。

【おいおい、ティアナ。ガジェットにはAMFがあるぞ?】

「発生した電撃は打ち消せないでしょ?」

【おっと。知ってたのか。】

ティアナは機動六課に派遣される前日に騎士カリムの元を訪れてガジェットの情報を知っている。

ゆえに、AMFの突破口を見つけることは容易かった。

身体強化魔法……OK

これぐらいチャージすれば、十分でしょ。

「サンダーバレット！……！」

ティアナが引き金を引いた瞬間、ハーデイスの銃口から一筋の閃光が放たれた。

閃光は瞬く間にすべてのガジェットを破壊した。

「楽勝ね。」

【まったく……ティアナ！！ 上だ！！】

ハーデイスが警告を放った瞬間、鉄球が降って来た。

「よう。久しぶりだな、魔銃の騎士。」

鉄球を打ってきたのは紅いゴスロリ服のような騎士甲冑を着たヴィータだった。

「ヴィータ副隊長、八神部隊長に怒られますよ？」

「大丈夫だ。はやてから許可を貰ったし、リミッターも外して貰った。」

これで心置き無く闘い会えるぜ……！」

あんの……豆狸がーッ！！  
本人の同意なしに進めるな！！！！！！

ティアナは心の中で憤慨した。

「惚けてる暇はないぜ！！」

「ちっ……面倒だけど……」

ハーデイスが電気の魔力刃を展開する。

グラーフアイゼンとハーデイスがぶつかり合い、火花を散らす。

【こうして正々堂々闘うのは数百年ぶりだな！！】

「へっ！ あの時には負けたが、あの時のあたしと思うなよ！！」

「私を………ほとつかないでよね！！」

とたんにハーデイスが凄まじい雷撃が無慈悲に放たれ、ヴィータは  
後退せざるをえなかった。

パンッ！！ パンッ！！ パンッ！！

三発の銃声が響く。

ティアナの得意技“速打ち”が炸裂した。

「ちっ！！」

ヴィータはティアナの放った三発の弾丸を防ごうとするが、三発目はシールドを貫通し、頬を掠めた。

【シュバルトフリーゲン】

「てえええい！！」

お返しと言わんばかりに五つの鉄球をティアナに向けて打って来た。

【気を付けろ、ティアナ！！ こいつは追尾性だ！！】

追尾性………なら、切り裂くのみ！！

「ブラッククロー！！」

ハーデイスを振るうと五つの鉄球は見事に真っ二つになった。

パンツ！！ パンツ！！

牽制としてストックしていた二発を撃つとティアナは建物の影に身

を潜めた。

ふう……………さすがに一筋縄では行かないか……………  
あまり力を使いたくないし……………デバイスを破壊しますか。

ティアナは方針を決めると空になったリボルバーに青い弾丸と赤い弾丸を装填した。

ヴィータ視点

「クソッ……………何処に行きやがったんだ？」

廃ビルの麓を歩き回るヴィータはイライラ気味に呟いた。

魔力が全然感じられねえ。

隠蔽魔法でも使ってたのか？

前に闘った時はそんな事できなかったはずだけど……………

「フレイムバレット!!」

ヴィータに向けて炎弾が迫っていた。

「しゃらくせえ!!」

あろう事がヴィータはゲートボールの要領で炎弾を打ち返した。

「フリージングバレット!!」

今度は氷弾が迫って来た。

「何度やって同じだ!!」

ヴィータは先ほどと同じようにフリージングバレットを打ち返した。

フレイムバレットと同じように明後日の方向に飛んでいく。

「今度は此方の番だ!!」

魔力を実体化させた鉄球を打ち出そうとした時……

パリーンッ!!

「えっ……………」

何で…………アイゼンが…………

グラフアイゼンの鎚の部分は片方が粉々に砕け散っていた。

「があっ！！」

ヴィータが認識した瞬間、強力な電撃がヴィータの身体を駆け巡り、意識を刈り取った。

ティアナ視点

ハーデイスから大方の性格を聞いてたけど……………こんなに簡単に引っ掛かるなんてね。

【急激な温度変化を利用してデバイスを破壊するなんて誰も思いつかねえぞ？】

ティアナが頑丈なグラフアイゼンを破壊できたのは急激な温度変

化を利用したからだ。

デバイスも所詮は金属。

急激に冷やしてやれば、脆くなるのは必然だ。

「さてと……獅子堂一等空尉の所まで運びますか。」

ティアナはヴィータを背負うと奏の元まで運ぶのだった。

## STS編 第4話 力試し（後書き）

前回に引き続きグダグダで本当に申し訳ありません。

なんとなくティアナとヴィータを戦わせて見たかったです。

さあ、これでストックがゼロに！！

STS編 第5話 ファーストアラート

若き魔導師に与えられた魔導機

その時に事件は動き出そうとしていた。

鳴り響くアラート

若き魔導師が初めての出撃が迫っていた。

魔法少女リリカルなのは      現代に蘇りし創聖の聖王騎士

STS編 第5話 ファーストアラート

ティアナの力試しとヴィータの突然な模擬戦から数日が経過した。

FW4人とも仲良くなり、何の問題もない。

ティアナ視点

FW4人が訓練に励んでいる頃、ティアナは六課に宛がわれた自室で端末を弄っていた。

「……………異常は特になし。

メンテナンス終了よ、ハーデイス。」

【悪いな、ティアナ。】

「気にしないで。相棒のメンテナンスチェックもパートナーである私の仕事よ。」

ティアナは自室でハーデイスのフルメンテナンスを行っていたのだ。

レディアントデバイスは管理局で言うロストログIA級の代物。

ゆえに、機動六課のデバースマスターなどに頼る事ができないのだ。

ちなみに、聖王邸の四騎士は全員デバイスマスターに相当する知識と技術を持っている。

## 閑話休題

機動六課に派遣されてからもう2週間。  
リヴィア姉さんからは何の指令もなし。  
当然、六課での仕事も無し。

「暇だな〜……………」

ティアナは思わず口に出した。  
もちろん、ティアナの自室には部屋の主であるティアナとその相棒のハーデイスしか居ない。

【何なら自動人形オートマターの設計でも考えたら、どうだ？】

「もう設計図の構築も終わってたわよ。  
レリックがないと完成できないわ。」

ティアナは、はあ〜 とため息を吐いた。

水銀燈の開発に協力していたティアナはその機構を元に完全補助型の自動人形を作ろうとしていたのだ。  
しかし、大質量の自動人形を動かし、尚且つ魔法も使用できるようにすると高純度の魔力結晶が必要なのだ。

~~~~~

ティアナが暇を持て余しているとティアナの通信用端末にメールが届いた。

？ リヴィア姉さんから…………

ティアナに送られて来たメールにはこう書かれていた。

『ティアナへ。

ミッドチルダにリックが密輸入された。

リニアレールで運搬中だが、ガジェットが探知するのも時間の問題。

多分、機動六課にも出勤要請が掛かるところから手伝ってあげて。

追伸 聖王邸からも数人を念のために派遣する。

リヴィアスフィールより』

ナイスタイミング♪ ちょうどレリックが必要だったんだよね  
♪

「ハーデイス、どうやら暇は潰せそうよ。」

【姫っちから任務でも来たのか？】

「その通り♪」

ティアナは戦闘支度を始めた。

く 聖王邸 く

リヴィア視点

聖王教会最高権力者リヴィアスフィールの居城、聖王邸執務室にはティアナを除く聖王邸メンバーが終結していた。

「どうしたんですか、陛下？ 急に全員を集めて。」

「急かすな、リーネ。 今から説明するのじゃ。」

カリムから連絡があつたな、レリックがミッドチルダに運び込まれた。」

リヴィアの言葉を聞いた全員が驚いた。

「まったく……レリックのせいで先の空港火災が起こったことを理解しておらんようじゃ。」

リヴィアは怒り半分、呆れ半分といった感じで呟いた。

「カリムの方でも機動六課に依頼を出したようじゃが……いかにせよ、向こうのまともな戦力にはリミッターが掛けられている。そこで我々の方からも増援を出す。」

「なら、私が行きます。」

一番最初に名乗りを上げたのはクイントだ。

真っ先に立候補すると思った。けど、クイントをまだ世間に出すわけには行かないんだよ。

「いや、まだクイントの生存を公にするわけには行かない。」

「でも……………」

「娘が心配なのはわかるが、我慢してくれ。」

向こうにはティアナも居る。だから、大丈夫じゃ。」

「……………わかりました。」

リヴィアの説得に応じて、クイントは渋々引き下がった。

「なら、私が行きましょう。」

次に名乗り出たのはリンフォース「フォルテシモだ。」

向こうには守護騎士たちが居るけど……………大丈夫かな？  
いや、今のフォルテシモの姿ではわからないか。

「頼む。」

「私も行きます、母上。」

そして、水銀燈も名乗り出た。

「うん。」

リーネ、あなたも着いて行ってくれないか？」

「陛下の命をあらば。」

リーネの返答にリヴィアは少し微笑んだ。

「なるべく手を出すな。」

危険だと思ったら、手を貸すこと。いいな？」

「了解！！」「」

「グラムに事情を話しておいた。  
グラムに乗って行け。」

「はい。」

「わかりました。」

「了解。」

三人は執務室をあとにした。

本当に……何も起こらないと良いんだけど……

リヴィアは三人が出ていった扉を見詰めながら、そう思った。

ティアナ視点

場所は変わって機動六課にあるデバイス整備室。

FW4人に新デバイスが手渡されることになったので、その現場にティアナも同席することになったのだ。

「これが……………新デバイス……………」

「そうです♪ 設計主任は私にリイン曹長、ルクシオンさん♪」

台の上には様々な形状の4つのデバイスが浮かんでいる。

カード状のデバイス。

青いペンダント型のデバイス

腕時計型のデバイス

ブレスレット型のデバイス

「ストラダとケリユケイオンは変化なしかな？」

「うん……………」

「違います!!」

同じなのは外見だけで中身は別物ですよ!!」

「リイン曹長♪」

「はいです」

FW4人は自分のデバイスにワイワイとはしゃいでいる。  
ティアナはその様子を壁にもたれ掛かって眺めていた。

あの子がアーチャーの力を受け継いだ二代目祝福の風 リイン  
フォース・ツヴァイか……………

リヴィア姉さんの話では自在に力を制御できないらしいけど…

……

「ごめん、遅れちゃった!!」

「ちょうど今からデバイスの説明をする所ですよ。」

空間モニターに4人のデバイスの映像が表示される。

「みんなのデバイスには出力リミッターが掛かってるから、いきなりパワーが上がるわけじゃないよ。」

だから、安心して全力全開で戦っても大丈夫だよ」

ピーッ!! ピーッ!! ピーッ!!

機動六課内に緊急事態を知らせるアラームが鳴り響いた。

やっとか……………

ティアナは人知れずデバイス整備室から退室するとヘリが待機しているであろう飛行場に向かった。

STS編 第6話 星と雷（前編）

ミッドチルダから少し離れた山岳地帯。

その山岳地帯の谷間に三人を乗せた鋼色の龍が滞空していた。

「あれが今回の任務の対象みたいだな。」

銀髪の少女ーリインフォースⅡフォルテシモが見下ろす先にはリニアレールがガジェットに襲撃されている。

「レリックは一番真ん中の部分のようです。」

「陛下から基本的に手は出さなって言われてるし……………」

【む？ どうやら来たようだ。】

グラムが見詰めるその先には羽音を轟かせて飛んでくる六課のヘリが見えた。

「さてと……………お手並みを拝見させてもらいますか!-!」

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

無印編 第6話 星と雷（前編）

ティアナ視点

機動六課のヘリにはティアナとFW4人、リイン曹長、奏の7人が乗り込んでいた。

『緊急事態発生！！ リニアール上空に航空型ガジェットが接近中！！』

あらら〜……………これではヘリをリニアールに近付けられませんね。

『現在、フェイト隊長がそちらに向かっています。』

「なら、私も出ます。」

「僭越ながら、私も手伝いましょう。」

それと同時にヘリのハッチが開いた。

「じゃあ、みんな。ぶっつけ本番になっちゃったけど、サクッと片付けちゃおう。」

「「はい！……！」」「はい！！」

三人の返事から一寸遅れてキャラが元気よく返事した。

動揺してる……いや、恐怖してる？ 初めての出勤なら突然か………

「そう言えば、ティアナは空飛べるの？」

「飛行魔法は使えませんが、代わりにこの子を使います。」

ティアナはハーデイスを振り上げた。すると、ティアナの足元に橙色の古代ベルカ式魔法陣が展開される。

―我が契約の言の葉に応えよ

かつて 魔銃の騎士と共に駆け抜けた魔獣

鉄の翼を広げ 空を駆けよ

我と共に天を駆けよ！――

「アオーンッ！……！」

ティアナが召喚呪文を唱えるとティアナの契約獣が姿を現した。

強靱な四肢に鋭利な爪。

全身を銀色の毛皮が覆い、その上から鋼色に輝く鎧を身に纏う。

そして、黒がねの翼を生やしていた。

まさにメタルウルフに相応しい姿だった

「よつと。」

ティアナは狼に飛び乗って大空に飛び出した。

うわ〜……………うじゃうじゃと。よくもこんだけ用意できたもんね。

「さあ、行くよー!」

【張り切り過ぎんなよー!】

ティアナはガジェットの大群に向かって突撃して行った。

### 三人称視点

「おい！！ 新人ども！！」

隊長たちが空を抑えてくれたお陰で無事に降下地点に到着だ！！」

ヘリのパイロット―ヴァイス陸曹が叫ぶ。

「スターズ3 スバル」ナカジマ！！」

「スターズ4 アレス」シュバルツ！！」

「「行きます！！」」

スバルとアレスのスターズコンビは勢いよく飛び降りた。

「行くよ、マツハキヤリバー！！」

「お願いね、クロスミラージュ。」

「「セットアップ！！」」

「チビども!! しっかりやれよ!!」

ライトニングコンビの番が来た。しかし、キャラはわずかながら身体が震えている。

「一緒に降りよっか？」

「えっ？」

エリオが手を差し出した。

「……………うん!!」

キャラは少し頬を赤らめながら、エリオの手を握った。

「ライトニング3 エリオ!! モンディアル!!」

「ライトニング4 キャロ!! ルシエとフリードリヒ!!……!!」

「「行きます!!」」

ライトニングコンビは2人同時に飛び降りた。

「ストラーダ!!」

「ケリユケイオン!!」

「セツトアップ!!」

4人の身体を魔力光が包んだ。

衣服が分解され、全員が自分のバリアジャケットを纏っていく。

「あれ? これって……………」

4人は自分のバリアジャケットをまじまじと見詰める。

4人のバリアジャケットは2人の隊長のバリアジャケットによく似ていた。

「バリアジャケットはそれぞれの分隊の隊長さんのモチーフにしています。

癖はありますが、高性能ですよ」

後から降下して来たリインが説明する。

「スバル!! 感激はあと!!」

来るわよ!!」

アレスが叫ぶのとほぼ同時にリニアールの天井を突き破ってガジエットが触手を伸ばして来た。

「ロード カートリッジ!!」

ガシュンッ!!という無骨な音が響く。

「リボルバー……シュート!!!!」

飛び出してきた数機のガジェットはスバルによって破壊された。

「よし!!」

「先に進むわよ!!」

「うん!!」

スバルとアレスはガジェットが挟じ開けた穴から前部車両に突入した。

そして、その様子はリーネたちが撮影媒体で記録していた。

【この映像をクイントに見せたら、どんな反応をするかしら?】

いや、正確にはブリューナクが独断で録画していた。  
なんとも楽しそうな様子で。

「血気盛んだな。一般の管理局員と違ってまだ純粹だ。」

「此処が陸の管轄であるのもその理由の一つと考えられます。」

リーネの言葉に付け足すように水銀燈は呟いた。

「だが、突撃思考が強すぎる。あれでは、いずれ危うい事態に陥るぞ。」

【我也同感だ。】

対して、グラムとフォルテシモは辛口なコメントを漏らした。

やはり戦歴が長い2人だからこそ思う事もあるのだろう。

【あら？】

「どうした？ ブリューナク。」

【さっきニアレール全体をスキャンしてみたら、後部車両の方に大型の反応があったの。】

「大型………念のため、後部車両の方にも注意を向けておこう。」

【承知した！！】

グラムは大きく旋回すると前部車両と後部車両の両方が見渡せる場所に移動した。

STS編 第6話 星と雷（前編）（後書き）

久しぶりの投稿なのにグダグダですいません・・・ORZ

STS編 第7話 星と雷（後編）

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

STS編 第7話 星と雷（後編）

アレス視点

アレスとスバルのコンビは二両目を順調に通過し、三両目に差し掛かった。

しかし、その三両目で足止めを喰らっていた。

「ねえ、ティアナ。ガジェットってあんなに連携良かったっけ？」

「そんな筈ないわ。多分、防衛用にチューニングされた特殊編隊だ

と思う。」

四両目の扉の前には10機のガジェットがピラミッド状に編隊の組み、鎮座していた。

あれだけ高密度のAMFを展開されたら、多重弾殻射撃も貫くのは無理。

でも、どうしたら？

「そうだー!!」

スバルはどこからともなく十字架を模した剣を取り出した。

「ていつー!!」

スバルは取り出した剣を力一杯ガジェットに向けて投擲した。剣はガジェットに突き刺さり、密集していた他のガジェットと連鎖的爆発を起こした。

「これで先に進めるよー!!」

「やっぱり凄い業物よね、あんたの“セイクリッドクロス（聖なる十字架）”は。」

まったく………何でロストロギア級の代物をあの子が持つてるんだか。

『セイクリッドクロス（聖なる十字架）』

管理局によりロストロギア指定されている意思を持つ十字剣。

スバルを主と認めているが、スバルが入手した経緯は不明。

『セイクリッドクロス？』

「はい、スバルが持っている十字剣の名称なのですが……」

サーチャーでリニアール内の戦闘を見学していたリーネはクイントに通信を繋いでいた。

『覚えがあるわ。管理局が裏で援助していた戦闘機人の実験施設に送られたロストログア。』

その研究所はスバルとギンガの2人を実験体に使っていた。

その研究所でスバルに与えられた固有武装。

それが“セイクリッドクロス（聖なる十字架）”。」

「ですが、そんな危険物を管理局がほっておくとは思えないのですか？」

水銀燈が口を挟んだ。

『スバルを養子にした時に管理局に申請して許可してもらったの。  
幸い危険性は皆無の代物だったから。』

「実際に調べてみないと詳しい事はわからないな……」

『古代ベルカの産物かもしれないから、一応調べておくわ。』

「お願いします。」

クイントとの回線が切れ、空間モニターが消える。

「この様子だとスターズの方は大丈夫だろう。  
ライトニングの向かうか。」

## 再び 三人称視点

一方、エリオとキャロのライトニングコンビは新型の大型ガジェットと対峙していた。

ガジェットのスーム攻撃を左右にかわしながら、ガジェットに接近するエリオ。

「サンダー……レイジ!!」

放電現象を起こすストラダをガジェットに叩き付ける。  
しかし、ガジェットのアーマーは硬く、破壊することができない。

その時、ガジェットがAMFを展開した。

「AMF!!」

「こんな遠くまで!!」

AMFは少し離れた地点に居たキャロにも影響を与えた。

「くっ!!」

ストラダを絡み捕られて身動きがとれないエリオ。

「あ、あの!!」

「大丈夫!!」

AMFの効果範囲内に居るため、魔法は発動できず助けも来ない四面楚歌の状況。

「ど、どうしよう……」

キャラがリニアレールの天井でおろおろと狼狽えている間にガジェットは天井を突き破り、エリオを谷間に投げ捨てた。

「エリオ君!!」

そして、エリオを追うようにしてキャラも飛び降りた。

落下中にエリオを抱き抱えることに成功するキャラ。  
しかし……………

「あれ？ 魔法が発動しな…………い？」

【エラー発生。魔法が正常に発動しません。】

なんと魔法が発動しないのだ。このままでは2人とも即死だろう。

キャラは目を瞑った。

ドサッ

「ふう…………危ない危ない。」

間一髪の所で不屈の四騎士の1人、リーネが駆け付けた。

## リーネ視点

「本当に間一髪だったな。  
仲間を助けるのは立派な事だが、僕が間に合わなかったら死んでいたぞ？」

「す、すいません……………」

リーネに叱られてシュンツとなるキャラ。

まったく……………ティアナはどんな教育を……………違った。ティアナは関係してないんだった。

現在、エリオとキャラはGRAMに乗っかっている状態だ。  
リーネは跨がったままだが、フォルテシモと水銀燈は空を飛んでいる。

「君、竜召喚士でしょ？  
どうして自分の竜を使わないの？」

「私……まだ上手く制御できなくて……」

おかしい……竜召喚士は真っ先に竜の制御訓練を行う筈なのに……

【ふん。それはお前が相棒の竜と心を通わしてないからだ。  
心に迷いがあれば、竜を制御することはできん。】

リーネとキャロの会話にグラムが口を挟んで来た。

「迷い……か。ねえ、君はどうしてこんな戦場に出てきたの？」

「えっ？」

「君たちみたいな子どもは戦場に出るべきではない。  
心が未成熟だからね。」

「私は……大切な人を守りたくて……私に笑いかけてくれるを……  
守りたいです……！」

おやおや……陛下といいこの子といい、最近の子供はどうしてこんなに意志が強いのかな？

「なら、その意思をしっかりと持ち続けないとね。」

「はい！！！！」

キャラのはっきりと答えた。

「これは僕からの餞別だ。」

すると、リーネはキャラの首に銀色のロザリオが付いたネックレスを掛けた。

「魔法発動媒体としては最適なアクセサリだよ。」

「あ、ありがとうございます！！！！！！」

すると、キャラの近くにフリードリヒが近寄って来た。

「不自由な思いさせてごめん。私、ちゃんと制御するから！！

行くよ、龍魂召喚！！」

桃色の魔力光が辺りを包み込んだ。

「蒼穹を渡る白き閃光

我が翼となり天を駆けよ！！

来よ、我が龍フリードリヒ　　龍魂召喚！！」

桃色の光を食い破って白銀の飛龍が姿を現した。

意識レベル ブルー。完全に制御状態だね。

「ほら。」

リーネは未だに意識を失ったままのエリオをフリードリヒに乗せる。

「フリード!!」

キャロの命令を受け取ったフリードはその大きな翼をはためかせて、再び大空に舞い上がった。

「結局、手を出してしまいましたね。」

「有事の際は手を出しても構わないって言ってたから、大丈夫でしょう。」

リニアレールの方向に視線を向けるとキャロの補助魔法を受けたエリオが新型ガジェットを見事に破壊していた。

「これで任務終了。帰るか？」

【うむ。】

グラムは方向を変えて、聖王邸に戻って行った。

STS編 第8話 初任務後

魔法少女リリカルなのは 現代に蘇りし創聖の聖王騎士

STS編 第8話 初任務後

キャラ視点

ファーストアラートから数日後。  
キャラ「ルルシエはデバイスマスターのシャーリーに呼び出されてデバイス整備室に来ていた。」

「シャーリーさん。」

「あつ、キャラ。ケリュケイオンの修理終わったよ。」

「ありがとうございます。」

「で、ちょっと着いて来てくれる？」

「？ はい。」

キャロがシャーリーに案内された場所は少し大きめのカプセルが鎮座していた。

私の目の前にあるカプセルにはあの男の人が私にくれた銀色の十字<sup>ロザリオ</sup>架が浮かんでいました。

「このロザリオがどうかしたんですか？」

「どうもこうもないわよ！！」

しばらくの間、シャーリーによるロザリオの説明が長々と続いた。

このロザリオは一見ただの銀製のロザリオに見えるが、使われてるのはただの鉱石ではなく、幻の鉱石『ソル・オリハルコニウム鉱石』らしい。

『ソル・オリハルコニウム鉱石』

“オリハルコン”という鉱物が長い間太陽の光にさらされ続けたために変質してしまった鉱石。

元々、オリハルコン自体が貴重な鉱石であるため、ソル・オリハル

コニウム鉱石は幻の鉱石と呼ばれる。

魔力伝導性が異常に高く、デバイスなどの魔法発動媒体には最適なものである。

本来、オレンジ色のオリハルコンだが、ソル・オリハルコニウム鉱石は美しい銀色をしているのが特徴である。

「私も名前しか聞いたことのない鉱石をふんだんに使った魔法発動媒体。」

これが興奮できずにいられるかーっ！！！！！！」

「は、はあ……………」

幻と謳われた鉱石と出会えてやたらとハイテンションなシャーリー。キヤロはそんなシャーリーに引いていた。

「それで！！ このロザリオは誰に貰ったの！？」

あれ？あの時の戦闘はモニタリングされてるんじゃないやあ……………

「あの…………… あの時の戦闘はモニタリングされてたんじゃあ？」

「その時だけ電波障害が発生してモニタリングできなかったんだよ……………」

キャロの身体を前後に揺らすシャーリー。

そういえば、あの男の人……誰だったんだろ？

シャーリーに泣きすがられながら、キャロはそんな事を考えていた。

ティアナ視点

自室に居るティアナは聖王邸に居るリーネ「バルク」アレイスターから寄越されたメールに目を通していた。

【どうしたんだ？】

「リーネからの頼み事。

ソル・オリハルコンウム鉱石製のロザリオを渡したから、キャロに“ルーン式魔法”を教えてあげてって。」

【おいおい、下手をすれば鉱山の場所が公になるぞ？】

「あの鉱山には聖王家縁の者しか解除できない結界があるから、大丈夫でしょ。」

幻の鉱石ソル・オリハルコニウム鉱石を大量に採掘するのは一般的には不可能。

しかし、聖王家にはそのソル・オリハルコニウム鉱石が大量に採掘できる夢のような場所がある。

聖王家の所有地であるその場所は誰にも気付かれることなく存在しているのだ。

「問題は“ルーン式魔法”。あれを一から習得させようとするのは骨が折れるわ。」

「僅か数ヶ月でルーン式魔法を完全に習得したお前が言っても説得力ねえよ。」

「私の場合は特殊弾を作る過程で必要だったからよ。」

余談だが、特殊弾はルーン式魔法を銃弾に刻むことで作り出すことができる。

リーネからの頼みを断るのも気が引けるし………しょうがない。可能な限り教えてあげましょ。

ティアナは通信用の端末を弄り始めるとリーネにある物を持ってく

るように連絡した。

く聖王邸 ？？？

三人称視点

夜よりも暗い漆黒のその部屋でリヴィアは通信していた。

「ホテルアグスタ？」

『そうだ。そこでオークションが開催されるのは知っているな？』

「ええ。」

四つの空間モニターが展開され、その内の一つには地上本部の高官  
ーレジアスⅡゲイズ中将が映っていた。

実はリヴィアとレジアス・伝説の三提督は裏で繋がっているのだ。

『そのオークションには密輸されたロストロギアも出典されるらし

い。』

「そのロストログアをレリックと誤認したガジェットが攻めて来るかも知れないのじゃな？」

『ああ。機動六課にも三提督経由で指令を出しておいた。だが、貴公にも防衛任務に就いて欲しいのだ。』

「機動六課が出動するのなら、十分ではないのか？」

リヴィアは反論した。

機動六課の戦力はリヴィアがレジアスを説得したので過剰すぎる戦力が集まっている。

わざわざ聖王陛下自身が出動する必要はないのだ。

『だが、戦闘機人が出てくる可能性もある。念には念を入れておきたいのだ。』

「……………」

リヴィアはしばらく考え込んだ。

「わかった。」

リヴィアはしばらく考え込んだ後、任務を承諾した。

「今回の任務は私一人で行う。」

『なっ！！ 危険だ！！』

最高評議会が動いたら……………」

レジアスは必死に止めた。

すると、リヴィアは小悪魔のような笑みを浮かべた。

「冗談じゃ。念のためにクイントを連れて行く。  
それでいいじゃろ？」

『ええ。この事を機動六課には？』

「連絡しなくてよい。」

それだけ言い残すとリヴィアは秘密の部屋から出ていった。

STS編 第8話 初任務後（後書き）

グダグダで本当にすいません!!

ついでに新キャラクター設定（一部）を乗せておきます。

獅子堂 奏

性別：女性

出身：日本海鳴市

容姿：黒色の髪に光沢のある黒色の瞳

魔力量：S+

魔導師ランク：S+

デバイス：『魔導師の盾』ルクシオン

魔力光：銀色に近い白色（ようは、白銀色）

使用術式：ミッドチルダ式

【経歴】

フェイトやはやてと同じ歳。

過剰魔力のせいで入院しがち。そのため、はやてとは古くからの馴染み。

海鳴市で再会した際、はやてから魔法の存在を知る。

14歳のときに管理局入り。

16歳で戦技教導官に。

現在、はやての頼みで六課に出向。

【備考】

原作のなのはと同じポジションの人。

性格もなのはに似ていたため、『不屈のエース・オブ・エース』と呼ばれる。

なのはとは面識はないが、はやてやフェイトの話で聞いている。

ルクシオン

奏の専用デバイス。

なのはのRHをモチーフにしているため、基本はRHと同じ。  
RHとは違い、宝石部分はエメラルド色になっている。

また、RHと違い、多弁。戦闘中は寡黙。

アレスⅡシュバルツ

性別：女性

容姿：クリーム色の髪に青色の瞳

髪は先端が黒くなっている。

SWに出てくるハルトマンそのもの。

性格：真面目で仲間を最優先に考える心優しい性格。

魔力量：AA

魔導師ランク：B

魔力光：クリーム色

使用術式：ミッドチルダ式

デバイス：クロスミラージュ

## 【経歴】

アルトセイム地方に生まれる。

1歳のとき、クラナガンに移住

5歳のとき、両親から魔法を教わり始める。

13歳のとき、訓練校でスバルと出会う。

16歳のとき、Bランク試験の結果により六課に引き抜き。

【備考】

ナカジマ家とは家族ぐるみでの付き合い。

スバルとは最高のパートナー。

訓練校でこの二人のペアに勝てたものは居ないとされる。

S T S 編 第9話 ホテルアグスタ

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

S T S 編 第9話 ホテルアグスタ

ティアナ視点

機動六課の隊長陣やフォワードを運ぶ六課のヘリの中にはフォワード4人を初め奏、はやて、フェイトの三人と医務官のシャマル、ザ

フィーラも同行していた。

その面子の中にはティアナの姿もあった。

「今回の任務は此処ホテルアグスタの警護や。」

「オークションに出品されるロストログアをレリックと誤認したガジェットからホテルを守るのが今回の私たちの任務。」

「現地にはすでにシグナム副隊長とヴィータ副隊長が到着してる。  
まあ、気楽な任務だから頑張って行こうね。」

「……はい!!!!!!」

はやて、フェイト、奏の説明にフォワード4人は元気よく頷いた。

まったく……前線メンバーを総動員してたかがオークションの警護に就く必要があるの？

あの部隊長、そこんところわかってるのかしら？

後ろに控えていたティアナは心底呆れていた。

現在、機動六課の守りは紙一重。ガジェットが十機ほど集まれば、十分攻め落とせるレベルなのだ。

「あの……シャルさん。ずっと気になってたんですが、そのカバンは？」

キャラはシャルマルの足元に置いてある少し大きめカバンを指差した。

「これ？ ふふ♪隊長さんたちのお仕事着」

シャルは笑顔で答えた。

リヴィア視点

機動六課よりも一足先にリヴィア、クイントはホテルアグスタに到着していた。

「人……多い……。」

「我慢なさい。」

リヴィアとクイントの他にも大きな鈴が付いた巫女服を着た久遠と黒い衣装に身を纏った妖猫の煉が居た。

当初はリヴィアとクイントだけが来るはずだったが、あんまり外に出てない久遠と煉が駄々を捏ねて同行してきたのだ。

【それにしても、本当にオリヴィエ様にそっくりだよねっ】

創聖の魔道書内部に居るアロンドイトが茶化すように言う。

現在のリヴィアは少しおめかしして白いドレスを着ている。

その姿は聖王教会に飾られている聖王オリヴィエの肖像画と瓜二つだった。

髪型も同じにしているため、まるでオリヴィエ本人が再誕したようだ。

「昔、オリヴィエ姉様とこっそり入れ換わってクラウドを困らしたこともあるからな。」

リヴィアは昔を懐かしむように呟いた。

不意にリヴィアの視線にドレス姿の三人の美少女が映った。

機動六課隊長陣の到着か。向こうは私たちの事を知らないし…

……少し話して来ようかな？

「こんな所で何をしているのじゃ？ 夜天の王。」

「……………貴女こそ何をしてるんや？」

「はやて、知り合い？」

「フェイトちゃんもよく知ってる筈や。」

現聖王教会最高権力者……………リヴィアスフィール。」

「「！！！！！！」」

奏とフェイトは驚いたような表情を浮かべた。

「ふふ」 そんなに邪険しなくてもいいのに。」

「よく言うわ。親友である私たちに何の連絡もしなかったくせに！」

「……………」

「なんとか言いや！！ 高町 なのは！！」

いつも物静かなはやてが珍しく怒鳴った。  
普通なら、出席者の視線を集める場面だが、煉が遮音結界を周囲に展開したため、なんとも無かった。

「今の私は聖王リヴィアスフィールだよ。  
それに前に言った筈だよ？」

『真実を知りたければ、力を示せ』って。」

それだけを言い残すとリヴィアはクイント・久遠・煉の三人を連れて去って行った。

「リヴィア……………」

「……………話したい。だけど、話せない。それがこんなに苦しいことなんてね。」

話したいけど、話せば管理局ははやてを殺す。はやてには私のような天下無双の力はない。

「はあ……………世界は何時だってこんな筈じゃないことばかりだよ。」

「あの……………陛下。」

窓の外の景色を見ながら、黄昏れるリヴィアにクイントが声を掛けた。

「娘の様子を見に行きたいのですが……………」

「あ……………かまわないよ。ただし、関係者以外に見付からないようにね?」

「はい!……………」

リヴィアの了解を得たクイントはサングラスを掛けて会場の外に向かった。

クイントが見えなくなると同時にリヴィアの端末に一通のメールが届いた。

ティアナ視点

ティアナはフォワードたちから離れて森の入り口に居た。

「ニンフ。」

「何？ティアナ。」

突如、空間が歪んだかと思うと1人の少女が現れた。

水色の髪を二本の尻尾のように結び、背中から半透明な虹色の翼を生やしている。

そして、耳に当たる部位には白い機械の突起がある。

「ガジェットの反応は？」

「かなり遠くの方だけど、それなりの数が此処に向かってるわ。」

「そう……………ニンフ、機動六課のシステムをダウンさせて。」

「はあ！？ そんな事やつちゃっていいの！？  
仮にも味方でしょ！？」

「最近、調子に乗りすぎてる狸にお仕置きするだけよ。  
リヴィア姉さんから許可ももらったし。」

「なら、いいけどね。」

「ハッキングにどれくらい掛かりそう？」

「あんなセキュリティなんてこのニンフ様に掛かれば、あっという  
間よ！！」

ニンフは強気な笑みを浮かべてキーボードを叩き始めた。

さすがは私が産み出した電腦戦専用エンジェロイド♪  
攻撃性能は極端に低いけど、補助やバックアップでこの子の右  
に出る者は居ないわ。

「ハッキング完了。あと数分後……………大体ガジェットがサーチ圏内  
に入る時間に六課の全システムがダウンするわ。」

「仕事が早いわね。ご苦労様。  
後で何か奢ってあげるわ。」

「やった〜」

さて、ロングアーチからのバックアップが無いこの状況をどうやって脱出するのかしら？

## ホテルアグスタ 屋上

ホテルアグスタの屋上では『雲の騎士（ヴォルケンリッター）』の一騎 湖の騎士シャマルが周辺警戒に当たっていた。

「…… クラールヴィントに反応……… ロングアーチ……！」

機動六課のロングアーチに中継しようとするが……… 応答がない。

「えっ……… こちらシャマル。 ロングアーチ、応答を……！」

シャマルが必死に呼び掛けるもウンともスンとも言わない。

「どうしようっ……… 『はやてちゃん……！』」

『シャマル？ どないしたん？』

『ロングアーチと通信が繋がらないの！！』

これじゃあ、ヴィータちゃんとシグナムのデバイスロックが外せない！！』

先行しているシグナムとヴィータの2人のデバイスにはロックが掛かっているため、そのロックを解除しないとデバイスが起動できないのだ。

『なんやて！！！』

ホテルアグスタ 正門

「ティアナ！！ 通信が繋がらないよ！！」

「こっちも。」

ホテルアグスタの正門に4人のフォワードたちが集合していた。

「……………！！ 転移反応！！」

4人が話している間にも敵が攻めて来た。

紫色の召喚魔法陣から現れたのは3機のカジエツト？型と12機編成のカジエツト？型の大軍だった。

「みんな！！ 隊長たちの援護は死にできないわ！！ 私たちだけで食い止めるわよ！！」

「……はい！！！！」

アレスの激励に他のフォワード三名は元気よく頷いた。

**S T S 編 第9話 ホテルアグスタ（後書き）**

久しぶりに投稿しました。

S T S 編 第10話 ホテルアグスタ防衛戦

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

S T S 編 第10話 ホテルアグスタ防衛戦

フリーサイド

ホテルアグスタ 正門

「クロスファイア……シュート!!」

アレスの弾丸がガジエツトの大軍に向かって放たれ、ガジエツトを撃ち抜いていく。

「うおおおお!! リボルバー……シュート!!」

スバルの魔法がガジエツトを潰す。

「サンダー……レイジ!!」

エリオの電気が周囲のガジエツトを薙ぎ払っていく。

しかし、ガジエツトの数は減る事がなくだんだんと戦線が押されて行っている。

バンツ!! バンツ!!

「まったく……切りがないわね。」

「こんな状態で奇襲なんかされたら、一発で終わりだね。」

「はあ……はあ……」

「また転移魔法です!!」

フォワードたちに休む暇を与えないように第2陣が攻めて来た。

今度は4機編隊が3編成の計12のガジェット？型が現れた。

キャラ以外は魔力を浪費してしまっている。

しかし、キャラはフリード以外の攻撃方法を持たない。

そう……………以前までは。

「塵は塵に！！」

灰は灰に！！

“吸血殺しの十字架”！！」

キャラの両手から炎の十字架が放たれ、ガジェットを破壊した。

ルーン式魔法は一般には知れ渡っていない古代ベルカに存在した特殊魔法。

『非殺傷設定』は存在しないが、威力が高く、ガジェットのような機械兵にはかなり有効な魔法である。

キャラを除く3人はその光景に啞然とした。

「焰は破滅！！」

焰の加護を纏いし矢を！！

“破滅の炎弓”！！」

キャラの指先から炎を纏った弓矢が放たれ、ガジェットを撃ち抜く。

『破滅の炎弓』

炎属性のルーン式魔法の一つで初級者が使う遠距離攻撃。  
貫通・破壊の属性を持つ。

絶対に人に向けて放ってはいけない魔法。

順調にガジェットを破壊していたキャラだが、残り2機になった所でキャラの魔力が限界を迎えた。

ティアナなら、魔力切れを起こすへまはしなかっただろう。

しかし、キャラは“ルーン式魔法”を習い出して僅か。

まあ、当然といえば、当然だろう。

そんな状況の時……………

——動くな！！ 未熟な魔法使いよ。——

聞き慣れない声がフォワードの耳に届いた。

次の瞬間、翡翠の閃光が残りのガジェットを撃ち抜いた。  
全員が閃光が放たれた場所を見た。

『危なかったな。』

正門から数100メートル離れた場所……絶景を見渡せるその場所に彼女は居た。

白いラインが入った黒い戦闘服に身を包み、大きなスナイパーライフルを構える妖猫の煉がそこにいた。

リヴィア視点

カキンッ！！ カキンッ！！

ホテルアグスタの東方面でも熾烈な戦闘が繰り広げられていた。

カキンッ！！ カキンッ！！

金属音が聞こえるだけで戦闘を行う者の姿は見えない。

「……………やりおる。」

戦闘と休止して再び相手を確認するリヴィア。  
その顔には笑みを浮かべていた。

対するは黒い鎧に身を包んだ人型の召喚蟲。

「これほど強い召喚蟲を従えさせることができる召喚師が居ると  
わね……………」

「だけど、この闘いは……………楽しい！！！！」

リヴィアは純粹に戦闘を楽しんでいた。

リヴィアは“マテリアライズ”で創造した双剣を破棄すると黄金に  
輝く聖剣―エクスカリバーを召喚した。

「お前に敬意を評して、私も少し本気を出させて貰おう。」

召喚蟲は無言で構えた。

一陣のそよ風が吹き、それを皮切りに再び両者の戦闘が開始された。

ガキンツ！！ ガキンツ！！ ガキンツ！！

無骨な金属音が幾度となく響き渡る。

しかし、スピードではリヴィアより召喚蟲の方が上回っていた。

『聖王の鎧』の恩恵で怪我1つないが、召喚蟲の攻撃は何度も命中している。

『リヴィア、タイムアップです。ガジェットの殲滅は終了しました。』

『クイントは？』

『召喚師を追跡していましたが、逃げられました。』

『そう………』

煉から届いた思念通話を切断するとリヴィアはエクスカリバーを構えた。

しかし、ただの構えではなくリヴィアの十八番“抜刀の構え”である。

「奥義………鎌鼬！！」

エクスカリバーから放たれた風の刃が召喚蟲の鎧の一部を切り裂いた。

『奥義 鎌鼬』

リヴィアが使う剣術の抜刀奥義。

御神流の『虎切』の元になった剣術である。

神速の領域に達する速度を剣を抜き、空気の刃を打ち出す。  
ちなみに、魔力はまったく使わない。

それとほぼ同時に黒混じりな赤色の魔法が展開された。

「なっ！！ 刹那！！ 闘いはまだ終わってないぞ！？」

『ダメ〜。六課の隊長陣が凄い勢いでリヴィの所に向かってるから、強制送還で〜す』

リヴィアの頭の中に陽気な刹那の声が響いた。

リヴィアはなんとかして脱出しようとするが、すでに発動しようとしている魔法を止めることはできない。

「刹那〜！！ 覚えてろ〜！！」

刹那に対する恨み言葉を吐きながら、リヴィアは聖王邸に強制送還された。

「……………」

リヴィアと戦っていた召喚蟲は姿を隠し、ホテルアグスタに向かった。

そして、数分後。

機動六課の隊長たちがやって来たが、そこにはだれも居なかった。

くホテルアグスタ レストランく

ホテルアグスタのレストランではティアナとニンフが悠々と食事を摂っていた。

「あらら、ガジェットが全部破壊されちゃった。」

「まあ、煉が手伝ったし、ティアナがルーン式魔法を教えた子も居たんですよ?」

「そうだけだね。隊長たちの命令なしにちゃんと動けたのは表彰もののね。」

「それに関しては同感。」

ハムツ。んん美味しいう」



が、STS編では「私」になっている。

これは数年の月日の内に先代との融合が完全に終了した事を示している。

また、口調は公私によって分けている。

ニンフ

性別：女性

元ネタ：「そらのお。しもの」

年齢：1歳未満

魔力量：『レリック』と同じ

ティアナが製作した電腦戦闘用エンジニアロイド。首輪はついていない。

甘いものが好きでよくティアナに強請っている。

戦闘は行えないが、電腦戦において彼女に勝てる者はどこにも存在しない。

デバイスへのハッキングも可。

さらに、ある程度の魔法なら、相手の魔法を自在にコントロールできる。

持っている能力は以下の通り。

#### 【電腦フィールド】

一定空間内に存在する電子機器を自分の支配下に置くフィールド。デバイス（インテリジェント・ユニゾンは除く）もハッキングできる。

また、ミッドチルダの魔法もプログラムなので操作できる。

ただし、集束砲や付加魔法は無理。

【一超々超音波振動子（パラダイスⅡソング）】

ニソフの唯一の攻撃武装。

一種の砲撃魔法に近いが、バリアを通り抜け相手を攻撃する危険極まりない武装。

ただし、範囲が狭い。

【一素粒子ジャミングシステム（アフロディーテ）】

さすがに危険すぎるため、ティアナが封印した武装。

かなりの魔力を消費する代わりに人間すら操れるらしいが詳細は不明。

【ステルスマント】

姿を消すことができる。

幻術などとは違い、絶対にセンサーに引っかかることがない。

STS編 第11話 お見合い!?

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

STS編 第11話 お見合い!?

〔聖王邸 執務室〕

「お見合い？」

「ええ。陛下ももう20。

そろそろ身を固めた方が良くと上層部がつるさいので……………」

カリムはため息を吐いた。

「まあ、会っただけ会って見るよ。」

「すみません……………」

## リヴィア視点

リヴィアはお見合い場所に指定された公園にやって来た。

現在の時刻は14:00。

約束の時間は15:00。

「一時間も早く来てしまったか……………」

かといって、お見合いの事が刹那にバレると面倒なことになるからな。

刹那は他人の恋愛感情にはかなり鼻が効く。

そんな刹那にお見合いの事がバレるとどんな事になるかわからない。だから、リヴィアは刹那にバレないようにするために一時間も早く来たのだ。

「はあ〜あ……………眠い……………」

リヴィアは大きな欠伸をした。

遅くまで仕事をするんじゃないかった。久しぶりにシルメリアとなのはを連れて買い物に行こうと思ったのに……………

【マスター、少し仮眠を取ったらどうですか？

相手が来たら、私が起こしますから。】

「ん……………お願いできる？」

【はい。】

リヴィアは瞼をゆっくりと閉じた。

瞬く間にリヴィアは眠りに落ち、安らかな寝息が聞こえてきた。

眠りについたリヴィアは公園を訪れる男女問わず人目を集めた。リヴィアの姿を見た人々は「その姿はまるで絵に書いた女神のようだった。」と口を揃えて言った。

時計が15:00を指し示した。

その時、公園に1人の男性が現れた。

「……………これはもうしばらく寝かせておくべきか……………」

リヴィアが目を覚ましたのはそれから30分後だった。

「ん……………」

リヴィアは瞼をゆっくり開けた。

目はとろんとしておき、明らかに寝惚けていた。

「起きた？」

しかし、隣人の声によって完全に意識が覚醒した。

「レ、レーヴェ！？」

リヴィアの隣には碧銀の長髪に藍色の瞳が特徴的な男性、レーヴェンシュルト＝ストラトスが座っていた。

レーヴェ視点

親父とお袋が勝手に仕組んだお見合いだったから、どんな相手かと思ったが……………まさか聖王陛下だとわな。

「お前も大変だな。」

「ああ。聖王教会上層部も聖王が途絶えるのは避けたいのだろう。」

「でも、上層部の言ってることも一理あるぜ？」

聖王はいつ死ぬかわからないくらい危険な仕事だ。  
そう考えたら、跡取りはなるべく早い方が良いだろ？」

レーヴェはリヴィアを諭すように言った。

「つか、リヴィアは好きな人とか居るのか？」

レーヴェがそう尋ねるとボンッ！という音を立ててリヴィアの顔がトマトのように真っ赤になった。

お？ この反応は図星だな♪

レーヴェは心の中で小悪魔のような笑みを浮かべた。

「なあなあ。誰なんだよ？」

「……………」

リヴィアは顔を赤らめながら、無言でレーヴェを指差した。

その意味を理解したレーヴェは思考が停止した。

「……………マジ？」

「本気と書いて本<sup>マジ</sup>気と読む。」

「えっと……………理由を聞いてもいいか？」

「……………一目惚れ……………」

「マジか？」

リヴィアはコクリと頷いた。

「……………」

二人は互いに黙り込んでしまった。

恥ずかしさのあまり二人は面と向かって話す事ができなかった。

どうする？ どうするよ、俺！？

やはり此処は……………いや！！リヴィアは腹をくくって告白したんだ！！

俺が逃げてどうする！！

レーヴェが緊急脳内会議を行った。その時間は僅か数十秒！！

意を決したレーヴェはゆっくりと口を開いた。

「俺も……好きだよ。」

「えっ？」

今度はレーヴェの顔がトマトのように赤くなった。

「聖王陛下として……じゃなくて、リヴィアスフィール個人として。」

リヴィアが再び赤くなった。

二人とも俯いて互いに直視できないようになった。

「リヴィア。」

レーヴェはリヴィアに声を掛けた。

そして、リヴィアに顔を近付けて行き……

「な、なに……ムグッ!!」

お互いの唇を重ねた。

「い、いきなりそうゆう事をするのはどうかと思います!!」

リヴィアはさつきにも増して顔を赤くしながら、レーヴェに抗議した。

「いいじゃねえか、恋人同士……なん……だしよ。」

当の本人もリヴィアに負けず劣らず顔を赤らめている。

衝動的にやってしまったとはいえ、恥ずかし過ぎる!!!!!!  
つか、いきなり何をしてるんだ俺は!!!!!!

レーヴェは若干自己嫌悪に陥っていた。

そして、冷静になるに連れて自分たちが周りの人たちの視線を集めていることに気付いた。

レーヴェたちは結界も張らずに白昼堂々と濃厚なキスを交わしていたのだ。

「リヴィア!! 場所を変えるぞ!!」

「わかってる!!」

リヴィアとレーヴェは手を繋いで公園から逃げ出した。

二人の頬は赤くなりながらも顔には笑顔が浮かんでいた。

STS編 第11話 お見合い！？（後書き）

レーヴェとリヴィアをくつつけてみた。

以下、レーヴェの設定。

レーヴェンシュルト＝ストラトス

性別：男性

年齢：21歳

瞳の色：紫と青の虹彩異色

頭髮：薄い茶色のロングストレート

デバイス：プロレマイオス

覇王の末裔ストラトス家の長男。

なのは（リヴィア）と出会ったときは武者修行の最中だった。しばらく本編に出てこなかったのは武者修行に戻ったから。

母親と父親に少し離れた妹が居る。

リヴィアの恋人。

STS編 第12話 休日

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

STS編 第12話 休日

ティアナ視点

ホテルアグスタでの防衛任務から2週間後（リヴィアのお見合いから数日後）

ティアナは珍しく機動六課のガレージに居た。

「久しぶりに出して来たけど、不具合はなさそうね。」

ティアナは赤と黒を基調としたマイバイクの整備をしながら、呟い

た。

「ティアナ。早く行こうよ。」

「もう少し待ちなさい。すぐに整備が終わるから。」

「むっ………」

ニンフは頬を膨らませた。

ニンフの人格を幼くし過ぎたかしら？ でも、水銀燈みたいに真面目すぎるのも………」

「ティアナさん!!」

ガレージにスバルの大声………とまではいかないが、大きめの声が響いた。

スバルが入って来たのでニンフはステルスマントを使って姿を消した。

「スバルにアレス？」

「まだ訓練の時間じゃないのか？」

「今日は訓練はお休みなんです。」

「奏さんがお休みをくれたんですよ。」

ふん……意外。

「私たち、これから街に行くんですけど、ティアナさんも一緒にどうですか？」

「ごめんなさいね。私も行く所があるから。」

ティアナは整備しながら、返事した。

「じゃあ、私は先に出掛けますね。」

ティアナはヘルメットも被らず、バイクに跨がった。

「ニンフ、ちゃんと捕まってなさいよ？」

『はい』

ティアナは感触だけでニンフが捕まっているのを確認するとバイクにエンジンを掛けた。

そして、勢いよく走り始めた。

「どこに行くの?」

「とりあえず美味しいケーキが食べたい♪」

ステルスマントを解除したニンフが笑顔で答えた。

ケーキ屋か……… そうですね、刹那さんが新しいケーキ屋が出来たって言ってたような………

「少し距離があるから飛ばすわよ!?!」

機動六課は首都クラナガンからそれなりに離れた場所にある。  
幸いクラナガンまでの道は交通量が少ない一本道なのでスピードを出しても無問題だ。

「おーっ!?!」

ティアナとニンフが乗るバイクはエンジン音を鳴らしてスピードを上げて行った。

リヴィア視点

ティアナとニンフが出掛けようとしている頃。

「シルメリア、なのは、行くよ？」

「はい」

聖王邸の正門にゼーゲブレヒト四姉妹の内の三姉妹リヴィア・シルメリア・なのはが揃っていた。

お見合いのせいで中止になったショッピングに出掛ける所なのだ。

「リズ、何かあったらすぐに連絡してください。」

「はい。」

「いつてらっしゃいませ、聖王陛下。」

「ふふ」何かお土産を買って来るよ。」

リヴィアは少し笑った。

リヴィアたちの足元に虹色のベルカ式魔法陣が展開され、3人はク  
ラナガンまで転移した。

## ティアナ視点

クラナガンに到着したティアナは刹那に紹介された新しいケーキ屋でケーキを食べていた。

「うーん、おいしい」

ニンフはたいそうご満悦な御様子だ。

対するティアナは財布の中身を見てため息を吐いた。

「おかげで私の財布は痩せ細ったわ。」

「？ ティアナはリヴィアからのお小遣いに給料も貰ってるんでしょ？」

「そうよ。口座からおろしてないだけ。」

「じゃあ、卸せばいいじゃん。（ボソツ）」

ニンフはティアナに聞こえないくらい小さな声で呟いた。

「あれ？ ティアナ？」

不意に後ろから聞き慣れた女性の攻撃が聞こえて来た。

「リヴィア姉さん？ それにシルメリアになのはも。」

「お久しぶり、ティアナ。」

「ティアナお姉ちゃん、久しぶりだね〜」

リヴィアたちはティアナたちと同じテーブルに座った。

「機動六課の方はどう？」

「まあまあ。新人たちも将来有望な者たちばかり。」

「レジアスに少々根回ししたからね。」

「道理で過剰戦力が揃えられたわけだ。」

裏でレジアスとのパイプラインを持っているリヴィアは機動六課の設立・人材確保の許可を要求していた。  
当然、レジアスは渋ったが、自動人形の製作方法の提供を交換条件に了承して貰ったのだ。

「お待たせしました。」

話が一区切りした時、リヴィアたちが頼んだケーキが到着した。

刹那視点

「こらっ……！待ちなさい……！」

「へん……！待てと言われて待つ馬鹿は居ねえよ……！」

「同感だね。それに僕たちは素直に勉強するのは性に合わない。」

刹那は孤児院アタラクシアの裏の森で熾烈な鬼ごっこを繰り広げていた。

刹那は灰色っぽい髪の毛が特徴的な男性と黒い衣装が特徴的な白髪を追い掛けていた。

「今だ、焰!!」

「わかった!!」

「焰」と呼ばれた少年が糸を切断すると無数の炎弾が刹那に向かって行った。

「あっ!! セツナ相手に炎なんか撃ったら!!」

「あっ……………」

「いい加減に……………しろや!!!!」

刹那は全身に炎を纏っていた。

刹那の魔力変換『煉獄』は他人の炎を吸収して、自分の力に変換する特性を持っていた。

「でやああああ!!!!!!」

刹那はレヴァンティンを振り上げた。

「霸道！！滅封！！」

レヴァンティンから強力な炎の波動が放たれた。

「まったく………あなたたちはいつもいつも脱走して………」

刹那が捕まえたディオと焰はリスのお説教を受けていた。

【主よ。騎士カリムから通信が届いている。】

「騎士カリムから？」

【ごきげんよう、騎士セツナ】

空間モニターが顕現し、騎士カリムの姿が映し出される。

「ごきげんよう、騎士カリム。  
何かありましたか？」

「ええ。機動六課がレリックとそれに繋がれた女の子を見つけたの。」

レリックと……そのレリックに繋がれた女の子？

「レリックという事はガジェットも？」

「ええ。空と地下水道の二グループに別れてね。」

「なら、私も出ます。」

【お願いします。】

通信が切断され、空間モニターに消失する。

「さて、レヴァンティン。」

刹那が呼び掛けると腰に付けたレヴァンティンのコアが光輝いた。  
すると、紅い軽装の鎧を身に纏った煉獄の騎士―飛燕 刹那が姿を現した。

さてと………久々の戦闘だ！！！！

**S T S 編 第13話 休日・2（前書き）**

リヴィアの口調を変えます。

爺言葉は書き難い。

STS編 第13話 休日・2

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

STS編 第13話 休日・2

刹那視点

「うわゝ…うじゃうじゃ居るね。」

【だが、足りんな。】

「だね。」

無数の航空機型を前に刹那は強気な笑みを浮かべた。

刹那には絶対的な自信があった。この圧倒的な戦力差を覆す絶対的な自信が……………

「カートリッジ ロード。」

ガシュンッ！！という無骨な音を立てて三発の薬莖が吐き出された。

「魔王……炎撃破！！」

炎を纏った剣で一閃。

すると編隊飛行していたガジェットが一撃で爆散した。

50機前後か……………少し鈍ったかな？

「レヴァンティン、残りは？」

【先ほど転移反応があった。あと30秒後で接触だ。】

「お……………雑魚が群がっても意味ないのにね。」

待ってるのも焦れたいね。こっちから仕掛けちゃお♪

「穿て！！」

刹那の右手に一本の炎の槍が握られた。

「炎帝の矛」！！」

トリガーワードを唱えた瞬間、槍は何倍にも膨れ上がった。そして、巨大化した炎の槍をガジェットの軍勢目掛けて力一杯投擲した。

投擲した槍は一直線に直進し、その直線上に飛行していたガジェットを焼き尽くした。

「よしつと。」

「時空管理局です！！無許可での魔法使用で貴女を逮捕します！！」  
いきなりフェイトがやって来てそう言った。

はあ？何言ってるの、こいつ。

「あんたたち……私にケンカうってるの？」

「市街地での魔法使用は原則禁止です！！ 貴女は管理局法に違反してるんです！！」

馬鹿だ、コイツ。

こんなのがリヴィの親友？うわ……信じられない。

「貴女、所属は？」

「機動六課ライトニグ分隊隊長フェイトⅡⅠⅡハラオウンです。」

「私は“聖王教会聖王邸”所属『レイジングリッター不屈の四騎士』セツナⅡヴァーミリオン。」

貴女……………この意味がわかる？」

刹那は「聖王教会聖王邸」という部分を強調しながら言った。

刹那の所属を聞いたフェイトの顔は青ざめていった。

「し、失礼しました!！」

フェイトは敬礼した。

刹那の地位は管理局に置き換えるとフェイトよりも二段階ほど高い地位に該当する。

つまり、フェイトは上官に対して杖を突き付けたのだ。

「まったく……………いくら執務官でも上官に杖を突き付けたら、罰則だぞ?」

「す、すいません……………」

さっきまで強気だったフェイトはすっかり縮こまってしまった。

「フェイトちゃん!！」

少し遅れて奏が到着した。

これだけの人数が居れば、ガジェットの掃討なんてすぐに終わるかな？

フェイトと刹那が揉めて？いる間にガジェットたちは3人の目の前に到達していた。

「フレイムランス……アタック!!」

炎の槍を形成し、ガジェットに放つが、『フレイムランス』はガジェットを通り抜けた。

幻影！？ レヴァンティンにも気づかれずに！？

【いや、この幻影はセンサーで透過できない!!  
おそらくかなり高位の術者だ!!】

「センサーでも感知できる幻影？ 面倒だね。」

幻影を見分けて高威力攻撃を撃てるのは……レムルスやなのはぐらいだし……

『刹那さん、右に避けてください。』

刹那が考え事していると念話が届いた。

念話の指示に従って少し右に避けた瞬間、桜色の閃光が駆け抜けた。

そして、同時に虹色の閃光がガジェットを撃ち抜いた。

「リヴィー！！ なっちゃん！！」

バスターライフルモードのレイジングハートを握ったリヴィアとライフルモードのスルトを握ったなのはがそこに居た。

「2人とも今日は休暇じゃなかったの？」

「散歩してたら、刹那さんが戦ってるのが見えたから。」

数分前

ケーキ屋を出たリヴィアたちは首都クラナガンを散策していた。

「？ あれは六課のヘリ……………」

「何かあったのかな？」

「行ってみようか？」

休暇中の六課のヘリが飛んでいた事に違和感を覚えたリヴィアたちはヘリが着陸した場所に向かった。

「あれは……………」

リヴィアたちが目撃したのは薄いボロ布のような服を着た少女を奏が運び込む光景だった。

「あの子、リヴィアに似てない？」

ニンフが不意に漏らした言葉に全員が頷いた。

「マスター、海上にて刹那がガジェットたちと戦闘を行っています。」

「レリックを追って来たんでしょう。」

シルメリア、貴女は地下水道に潜ってレリックの回収を。」

「了解。」

シルメリアは頷くとすぐにその場からすぐに姿を消した。

「ティアナ、ニンフ。

2人は騎士カリムに連絡を。」

「了解!!」

「なのはは私と空に。」

「了解。」

「騒動が収まったら、各自聖王邸に集合。  
それじゃあ、散!!」

そして、現在に至る。

ドウンッ!! ドウンッ!! ドウンッ!!

「東の二機!!」

ダウンッ！！　ダウンッ！！

なのはの指示に従って本物のガジェットのみを撃ち抜いて行く。

うひゃーっやっぱり凄いねえ。なっちゃんの固有魔法『アンチインビジブルアイ全てを見破る魔眼』は。

『全てを見破る魔眼（アンチインビジブルアイ）』

他の姉妹に比べて突出した能力がないのはが開発した固有魔法。ありとあらゆる幻影・幻術を見破る事ができる。

ただし、常に集中していないと精度が落ち込むのが問題点。

なのはとリヴィアの連係にフェイトと奏は呆然と立ち尽くしていた。

「六課の魔導師！！」

リヴィアが2人に声を掛けた。

「おそらく此方は陽動だ。敵の本当の目的は地下水道かヘリのレリツク。」

ガジェットは妾たちに任せてお前たちはヘリを守れ！！」

「わ、わかりました！！」

フェイトと奏の2人は素直に了承し、ヘリの方に向かった。

「さて、これでヘリの方は大丈夫だろう。」

「リヴィも優しいね。」

「元・親友としてのてむけだよ。  
それよりも目の前の雑魚を駆逐するよ!？」

「了解!!」

**S T S 編 第14話 休日・3（前書き）**

ちよつと描写不足ですが、基本的にアニメ版と大差ない箇所は飛ばしてゐるだけです。

STS編 第14話 休日・3

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

STS編 第14話 休日・3

く下水道く

クラナガンの下水道をフォワード四人はガジェットを駆逐しつつ  
レリックを搜索していた。

途中でスバルの姉、ギンガも加わり、順調にレリックの手前まで来ていた。

「っ……！ 待ってください……！」

突然、キャロがみんなを止めた。

「どうしたの？」

「この先……レリックの近くに魔導師が居ます。  
推定……Sランク……！」

フォワードたちの間に激震が走った。

「Sランク……でも、隊長たちが来るまでの足留めはできる筈よ。」

フォワード＋ギンガは意を決して死地？に飛び込んだ。

シルメリア視点

「……………あつた。」

地下水道のレリック回収を任された聖王家四姉妹の次女―シルメリア―ゼーゲブレヒトは一足先にレリックを回収していた。

『封印が解けていますね。取り扱いは慎重にお願いしますよ?』

脳内にオリヴィエの声が響く。

「わかつてる。」

これで私に与えられた任務は終了。早く聖王邸に戻ろう。

『むっ。』

「どうしたの? オリヴィエ。」

『魔力反応は小さいですが、数は5人。十中八九魔導師でしょう。』

魔導師? 敵対戦力の方が、それとも……一応味方の機動六課か……………

「止まりなさい!」

クリーム色の髪の色が特徴的な少女が銃口をシルメリアに向けながら叫んだ。

「時空管理局です。そのレリックを渡してください。」

『どうしよつか?』

『リヴィアに指示を扇ぐべきだと思います。』

聖王教会の名前を出せば、向こうも無理強いできないと思います。』

『それが最善だね。』

オリヴィエとの脳内会議が終了するとシルメリアはレリックを抱えたままアレスたちに向かいあった。

「それはできない。私は聖王教会からレリック回収するように任務を受けた。」

だから、このレリックを渡して欲しいなら、聖王教会に言うてくれ。」

「聖王教会……なら、仕方ないわね。銃を向けてすみませんでした。」

アレスは素直に謝った。

「いや、軍人なら当然の判断です。」

ダンッ!!

ダンッ!!      ダンッ!!

地下水道内に何かの足音が響いた。

次の瞬間、シルメリアの目の前にホテルアグスタでリヴィアが戦った召喚蟲が姿を現した。

「……！  
トランス  
変身ッ……！」

ガキンッ……！

爪とナイフがぶつかり合い、耳障りな金属音が地下水道に響き渡った。

この召喚蟲………そこら辺の召喚師が契約できるレベルじゃない……！

『私が変わりましょうか？』

「ごめん。お願いしてもいい？」

『わかりました……！』

シルメリアの瞳の色が黒色から翡翠と紅玉の虹彩異色へと豹変する。

「はあっ!!」

空いた右足で召喚蟲を蹴り飛ばす。

（さすがにレリックを持ったまま闘うのは厳しいですね。）

『ティアナとニンフがカリムさんに連絡しに行ってくれてるから、援軍を待てば……………』

（そんなに待つてられませんか。シルメリアの身体を動かすのは今回が初めてですし……………）

バンッ!! バンッ!!

「援護します!!」

「すまない!!」

「ハアアアアアッ!!!!」

ギンガが召喚蟲に向けて突撃して行く。

しかし、召喚蟲の身軽さと鎧の硬さもあってダメージは無いに等しい。

その時、紫色の閃光がシルメリア（オリヴィエ）に向けて放たれた。

「くっ！！」

オリヴィエはその攻撃を固有能力『聖王の鎧』で相殺する。

「それ……渡して。」

気付かない内にシルメリア（オリヴィエ）の前には薄い紫色の髪の毛が特徴的な少女が立っていた。

「“渡して”と言われて渡して貰えるほどこの世界は優しく出来ていませんよ。」

「そう………なら、強奪する。」

「くっ！！」

（最悪ですね。頼りになりそうな六課の魔導師たちは召喚蟲の方で手一杯？

教会の増援が来るまで耐えられますか………）

オリヴィエがシルメリアの身体を扱うことに慣れていたら、状況は変わっただろう。

かといって、シルメリアでは圧倒的な実戦経験の差が生じる。

『ねえ、さっきからモーターの駆動音が聞こえない？』

『駆動音？向こうで闘っているナカジマ姉妹の物ではないのですか？』

『うん。壁の向こう側から聞こえてくる。』

ドゴンッ！！！！！

地下水道の壁が物理的に破壊されて2人の人影が姿を現した。

「シルメリア、大丈夫？」

「助っ人を連れて来たよ♪」

「クイント！！ ニンフ！！」

ニンフとクイントが助っ人として駆け付けてくれた。

## クイント視点

まったく……アタラクシアの子供の世話をし、て急に呼び出されたから、急いで来てみれば……

「オリヴィエさん。貴女はレリックをニンフと一緒に運んでください。」

「わかりました。此処はお任せします。」

シルメリア（オリヴィエ）は了承し、ニンフと共に地上に向かった。

「……久しぶり……になるのかしらね、ルーテシア。」

「どうして……私の名前を……？」

「貴女の母親、メガーヌ＝アルピーノと私は同じ部隊に居た。だから、貴女のことよく知ってるわ。」

「私は……知らない。」

「貴女はまだ小さかったからね。それで、メガーヌは何処に居るの？」

「……ドクターのアジトで……眠ってる。」

「じゃあ、そのドクターのアジトの場所は？」

「それは……教えない。」

さすがにそう簡単には教えてくれないか……

「なら、無理矢理聞き出すだけだわ！！！！」

「っ！！」

クイントがあらかじめセットしておいた捕縛魔法が発動し、薄い水色の鎖がルーテシアを拘束した。

「“デレイバインド”。

私が何の準備をしてないとも思ったの？」

「……………」

——スターレンゲボイル——

そんな声が聞こえた瞬間、地上水道内は閃光と轟音によって埋め尽くされた。

「まったく……勝手に行っちゃ駄目じゃんかよ。  
ルールもガリユーム。」

「アギト……………」

「おう。」

炎の融合機……厄介ね。

仕方ない。アレを使いましょう。

「とんだ伏兵を隠してたものね。

でも、その程度で勝てると思わないでね。」

そう言うとクイントはアクアマリンの指輪を取り出し、自分の右手の指に嵌め込んだ。

「我が契約の言の葉に応えよ。

我との契約に従い顕現せよ。

来よ 清き水の乙女よ!!」

クイントの足元にミッドチルダ式でもベルカ式でもない、ましてや召喚魔法陣でもない魔法陣が現れる。

「な、何だよ……この巨大な魔力は………」

「精霊召喚!! 水精霊 ウンディーネ!!」

白と青の法衣に身を包み、水を纏った大剣を持つ女性「ウンディーネが姿を現した。

「この程度の相手に私を召喚したのですか？ クイント。」

「流石に2対1では歩が悪いからね。

少し手伝って貰うわよ？」

「契約者がそう言うなら、妾はそれに従うのみ。」

ウンディーネは大剣を振り上げた。

「逆巻け 水よ。」

ウンディーネがそう呟くとルーテシアとアギトの周囲にサイクロンが発生し、閉じ込めてしまった。

ウンディーネが2人の足留めをしている間にクイントはガリューに肉薄した。

「霸王……断空拳！！」

ガリューの腹部にレーヴェから教わった霸王流カイザーアーツの奥義を叩き込んだ。完成形に近い断空拳を受けたガリューは殴り飛ばされ、壁に叩き付けられた。

「かあ……さん……？」

スバルがおずおずと尋ねて来た。

フォワード全員がスバルの反応に驚いていた。

「久しぶりね。スバル、ギンガ。」

2人とも、ずいぶん大きくなったわね。」

クイントはニコリと笑って返答するが、肝心の2人はいきなりの事に戸惑っていた。

「お母さん……今までどうして……」

「ストップ。詳しい話は後でね。

ウンディーネ、そっちはどう？」

「すまぬ。逃げられてしまった。」

ウンディーネが申し訳なさそうな顔でクイントに寄って来た。

「流石はメガーヌの娘ね。

あの状況からガリユーも連れて逃げるなんて。

ありがとう、ウンディーネ。」

クイントがお礼の言葉を述べるとウンディーネは指輪の中に戻ってしまった。

「みんな〜！！大丈夫ですか〜！？」

地上水道の奥からリインフォースとヴィータが駆け付けた。

「大丈夫そうだな、お前ら。」

「……はい！！！！」

ヴィータの言葉に全員が元気よく頷いた。

しかし、安心したのもつかの間。

地上水道が大きく震え始めた。

闘いはまだ終わらない。

**S T S 編 第14話 休日・3（後書き）**

クイントとナカジマ姉妹がようやく接触できました。  
休日は次で終了です。

STS編 第15話 休日・4

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

STS編 第15話 休日・4

オリヴィエ視点

クイントの助太刀によって難を逃れたオリヴィエはニンフと共にク  
ラナガンの上空を駆けていた。

「此処まで来れば、大丈夫でしょう。」

「そうね。私も少し疲れちゃったよ。」

オリヴィエとニンフはとあるビルの屋上に着地した。

「そう言えば、ティアナはどうしました？」

「レムルスやリーネと一緒に聖王教会の防衛。」

流石に四騎士が2人も出たら、過剰戦力だからね。」

「違いありません。」

ニンフの言葉にオリヴィエは同意した。

2人がビルの屋上で腰を休めていると濃い紫色をした正方形の魔法陣が出現し、黒い甲殻に覆われた巨大な蟲が姿を現した。

あの位置は……さっきまで居た地下水道の真上ですね。

《クイントさん、大丈夫かな？》

理音を介してシルメリアが呟く。

「あの人はそう簡単にやられませんよ。」

……………ニンフ！！」

オリヴィエとニンフは直ぐ様上空に上がった。

2人が座っていた場所は炎弾が放たれ、焼け焦げていた。

「見つけたぜ!!」

炎弾を投げ付けたのは先ほど地下水道に居たアギトだった。

紅い髪に……悪魔のような紅い一對の翼……

「イグニス……どうして此処に……」

オリヴィエは驚いたように静かに呟いた。

「イグニス？ 私の名前はアギトだ!!」

「そんな筈はない!!」

紅い髪に一對の紅い翼!!

それは煉獄の騎士のユニゾンデバイス『イグニスⅡドラグーン』の証です!!」

「イグニス……ドラグーン……？」  
ぐっ!!!!」

『イグニスⅡドラグーン』という名前を聞いた途端、アギトは頭を押さえた。

「私は……私は……」

「私は……烈火の剣精……イグニスⅡドラグーンだ!!!!」

パキンッ！！という何かが割れるような音が響いた。

すると、溢れ出た炎がアギト……………いや、イグニスの身体を包み込み、強靱な衣服を形成する。

「あゝ…ようやく頭のもやもやが解けた。」

炎が収まるとイグニスは露出度の高い姿から炎のようなオレンジ色の法衣を纏った姿になった。

「早く新しいマスターの所に行つてあげたら、どうですか？」

「それなんだけどさ……………今、ちょーっと危なっかしい二人と一緒になんだ。」

流石にほつとくわけにもいかないから、マスターに……………現・煉獄の騎士に合流するのは遅くなるって伝えて。」

「わかりました。」

「じゃあ、またな。オリヴィエの姉御。」

そう言い残すとイグニスは戦闘の音が聞こえる場所に飛んで行つた。

イグニスは気付いていましたか……………まあ、隠すことでもないんですが。

さて、敵に捕捉される前に教会に帰還しますか。

### 三人称視点

地下水道から脱出したクイントたちはナカジマ親子の見事な連携でルーテシアを捕縛していた。

「さあ、スカリエツティの居場所を吐いて貰うわよ。」

「……………」

ルーテシアは何も喋らない。

その時、無数の焰の剣がクイントたちに襲い掛かった。

「ウンディーネー!!」

「ああ!!」

ウンディーネが剣を一振りすると水が発生し、焰の剣をすべて相殺した。

しかし、水が蒸発した影響で辺りが霧のように視界を遮ってしまっ  
た。

アギトはその霧に乗じてルーテシアを救出しようとしていた。が…

………

「ゼヒュロス風神結界！……！」

クイントが発生させた魔法によって霧は吹き飛ばされてしまった。

「しまった……！」

結局、アギトもリンのバインドによって捕らわれてしまった。

絶体絶命なその時に今まで黙っていたルーテシアが口を開いた。

「逮捕は……… 良いけど。」

大事なへりはほっておいていいの？」

リヴィア・なのは・刹那の助太刀によって手が空いた獅子堂 奏と

フェイトはヘリの下に向かってきた。

しかし、ヘリに向かってSランク級の砲撃が放たれた直後だった。

「ダメーッ!!」

奏の叫び声が無情な空にこだました。

砲撃は命中し、ヘリは破壊される………筈だった。

ヘリと砲撃の間に白い閃光が割り込み………

「投影開始 “ロー・アイアス 熾天覆う七枚の花弁” !!!!!」

白銀の花の盾を以て推定Sランク級の砲撃を完璧に防いでいた。

その光景を見ていた全員が自分の目を疑ったことだろう。

「私が居る限り………家族に手は出させません。」

砲撃を受け止めたのは八神家の裏切り札―アーチャー・リインだった。

アーチャー・リインは盾を消去すると和弓を投影し、さらに矢として柄の長い剣を投影した。

「私から逃げられません。」

アーチャー・リインは動かずに砲撃犯である2人に向けて剣を射る。アーチャー・リインが射た剣は寸分の狂いなく的確に敵を捉えている。

た。

「待ちなさい！！市街地での危険魔法使用、及び公務執行妨害で……逮捕します！！」

「今日は遠慮しときます。」

女性が何か呟くと2人は見えなくなってしまった。しかし、見えないからといって見逃すわけではない。

「はやて！！」

「位置確認。詠唱完了。  
発動まであと四秒！！」

「了解！！」

はやての魔法に巻き込まれないようにするため、その場所から離れた。

「遠き地にて闇に沈め……デアボリック・エミッショーン！！！！」

あらかじめ準備していた広域空間攻撃魔法『デアボリック・エミッショーン』が発動し、襲撃犯の2人を飲み込んだ。しかし、2人は土壇場で回避に成功した。が、先に待っていたのは絶望だった。

「イクシオン……バスターー！！！！」

「トライデント……スマツシャー……!!!!」

「穿て、“<sup>グングニール</sup>最高神の聖なる槍”……!!!!」

奏とフェイトの砲撃、アーチャー・リインが投影した槍が一斉に襲い掛かった。

爆発によって視界が遮られるが、3人の顔は陰しかった。

「避けられた……ね。」

「うん。直前で救援が入った。」

「……いや、完全には避けられなかったようです。」

アーチャー・リインは投擲したグングニールを見ながら呟いた。  
グングニールの矛先には少量の血液が付着していた。

「「……………」」

「どうかしましたか？」

「いや……………リイン……だよな？ 何か無意識の内に協力してたけど……………」

奏がアーチャー・リインに尋ねた。

「そう言えば、あなた方にこの姿で会うのは初めてでしたね。  
私は『アーチャー』と呼ばれる最終防衛プログラムです。」

「えっ？でも、防衛プログラムはあのクリスマスに消滅した筈……」

「あなた方が倒した防衛プログラムと私は別物。心配しなくても主はやてに危害は及ばない。」

こうして機動六課の休日とは事件よってふいになってしまったのだった。

ちなみに、イグニスとルーテシアは何とか逃げ延びたらしい。

STS編 第15話 休日・4（後書き）

というわけで、アギトは刹那のユニゾンデバイスにしました。  
複数の人が居て、剣を使うし、炎を使うし、原作で言っていた条件  
とぴったりでしたからね♪

STS編 第16話 予言

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

STS編 第16話 予言

それは……ある融合機の遠い過去の記憶……

—この戦いはどうすれば、終わるんだろうね……—

—敵である者をすべて滅ぼす。それが一番の近道だ。—

燃え上がる建物、屍に埋め尽くされた大地、灰色に染まった青空。  
そんな光景を見ながら、1人の女性とそれに付き従う融合機は言っ  
た。

―だけど、我等が王は闘いを嫌う。―

―あの人は優しいからな。あの人に従えてる私らは他の奴から幸せ者なんだろうな。―

―ふふ♪ そうね。私たちは不屈の四騎士。

この幸せを守るためなら、誰であっても闘ってやるわ。―

―この烈火の剣精 イグニスⅡドラグーン。主アスカⅡヴァーミリオンと久遠に共に居ましょう。―

古代ベルカ最高の主従であつた煉獄の騎士アスカⅡヴァーミリオンと烈火の剣精イグニスⅡドラグーンは互いに微笑みを浮かべた。

イグニス（アギト）視点

イグニスは旅の同行者であるルーテシアのフードの中で目を覚ました。

初めてだな、昔の夢を見るなんて。

イグニス は夜が明けたばかりの空に飛び上がった。

「うっっ…少し冷えるな……」

イグニスは自分の神具である『鳳凰の衣』を纏った。

「しかし……300年前の夢を見るなんてな。

300年の月日を経て蘇った古代ベルカ最強の四騎士どんな奴らなんだろうな。」

イグニスはまだ見ぬ同胞の事を考えて顔を綻ばせた。

「それにレヴァンティンの旦那に頼めば、ルーラーの母親を治療できるかも知れねえしな。」

く 聖王邸 く

場所は変わって聖王邸の執務室。

執務室では聖王リヴィアが書類と闘っていた。

「ふう……ようやく終わった。」

いや、ちょうど終わった所だった。

「お疲れ様、リヴィア。

はい、紅茶。」

「ああ、ありがとう。」

リヴィアはレーヴェが淹れてくれたミルクティーを口に含んだ。  
ミルクティーは少し甘めで糖分を欲しているリヴィアの身体には最適だ。

「検査結果はどうだったの？」

レーヴェは真剣な表情で尋ねた。

「今、リズに調べさせている。そろそろ結果が出ると思う。」

コンッ！！　コンッ！！

突然執務室のドアがノックされ、リヴィアの補佐リズ＝ヴァレンチ

ノが入って来た。

「陛下、DNA検査の結果が出ました。」

「どうだった？」

「……………」

リヴィアの質問にリズは押し黙った。

「……………六課が保護した少女のDNAを鑑定した結果、陛下のDNAと……………ほとんど一致しました。」

リズが結果を報告すると執務室の中に重苦しい沈黙が流れた。

やはり……………か。私の遺伝子とほとんど一致しているという事は……………オリヴィエ姉様のクローンか。

オリヴィエとリヴィアスフィールは一卵性双生児であり、遺伝子は90%一緒である。

そして、保護した少女はオリヴィエの幼少期によく似ていたため、リヴィアが遺伝子鑑定をお願いしたのだ。

「数年前に失われた聖遺物の遺伝子から生み出されたクローンか？」

「ああ、そうだろうな。」

おそらく、『聖王のゆりかご』も何処かに眠っているのだろっ。」

「なら、敵の狙いは『ゆりかご』か？」

「そうだろうな。」

「あと、陛下。騎士カリムから執務室に来て欲しいという伝言を承っています。」

「わかった。リズ、レーヴェ、私は少し席を外す。」

リヴィアは立ち上がり、聖王家の家紋が刺繍された上着を羽織った。

カリムからの呼び出しなんて珍しいね。私を呼ぶという事は……  
……予言関係か？

そんな事を考えながら、リズとレーヴェに後を任せてリヴィアは騎士カリムの執務室に向かった。

## 奏視点

騎士カリムの執務室にはとても豪華な面子が勢揃いしていた。

機動六課部隊長八神 はやて。

機動六課スターズ分隊隊長獅子堂 奏。

機動六課ライティング分隊隊長フェイトⅡⅠⅡハラオウン。

時空管理局次元航行艦クラウディア艦長クロノⅡハラオウン。

聖王教会教会騎士団カリムⅡグラシア。

「六課の設立目的はロストログニア…レリックの搜索と少数精鋭部隊の実験例。」

このメンバーが揃っているのは機動六課が設立された本当の目的を話すためである。

「後見人として僕とカリム、さらに僕とフェイトの母親のリンディⅡハラオウン。」

「非公式ではありますが、かの三提督とリヴィアスフィール聖王陛下も援助の約束をしてくれました。」

リヴィアスフィールという名前を聞いた瞬間、はやての表情は険しくなった。

「はやて。機動六課の設立に一番尽力してくださったのは聖王陛下なのよ?」

「えっ?」

はやては信じられないといった表情を浮かべた。

リヴィアは一般には公開されていないが、レジアスに人員確保の黙認を依頼したり、隊社の確保などなど六課建設の根本的なことはほとんど行った。

また、そのリヴィアを上層部とカリムが補助したのだ。

そして、不意に閉じられていた扉が解き放たれた。

「呼び出されたから来てみれば……………千客万来だな。」

まるでタイミングを見計らったように聖王リヴィアスフィールが執務室に入って来た。

リヴィア視点

「すみません、聖王陛下。」

急にお呼びだしてしまって……………」

「別に構わんよ。ちょうど仕事が終わった所だったからな。」

それで妾を呼び出した要件は？」

「予言の翻訳です。」

カリムは一枚の紙を取り出した。

その紙には予言の書き写したであろう内容が古代ベルカ語で書かれていた。

ん？前の予言と違って今回ののは長いな。

リヴィアは難解な古代ベルカ語で記されたカリムの予言を一字一句間違えることなく、すらすらと翻訳していった。

「旧き結晶と無限の欲望が集い交わる地

死せる王の下      聖地より彼の翼が蘇る

死者たちは踊り      中つ法の塔は虚しく焼け落ち

それを先駆けに数多の世界を守る法の船を砕け散る

悲しき王の悲痛の聲が響く時      聖王騎士は怒り

怒りに満ちた聖王騎士は自ら騎士を率いて方舟で天を昇る

大妖の牙が煌めく時      担い手は王の悲しき運命を打ち破らん

そして      無限の欲望は無惨に地に堕ちる。」

「これが最新の予言です。

一応、管理局滅亡を避ける方法は書き記されているのですが……

……」

「予言の示す物がわからない……ということですか。」

カリムたちが話している間、リヴィアは予言の内容を解釈していた。

死せる王……クローン……彼の翼……ゆりかご……！！！！

「そういうことが……」

リヴィアは思わず呟いた。

その呟きを耳にした面々はリヴィアに視線を集めた。

「彼の翼は『聖王のゆりかご』だ。」

「『聖王のゆりかご』？」

「古代ベルカの時代に存在した最凶の戦舟。まさか、この時代に存在しているとわな。」

リヴィアは少し悲しそうな表情を浮かべた。

『聖王のゆりかご』はオリヴィエ・ゼーゲブレヒトという犠牲によって永久に葬り去られる筈だった。

つまり、聖王のゆりかごはリヴィアスフィールの最愛の姉、オリヴィエが死んだ原因なのだ。

「そして、方舟はゆりかごに対抗するために作られた『聖王の方舟』

だ。」

「じゃあ、大妖の牙は？」

はやてが問い掛けて来た。

「<sup>てっさいが</sup>鉄碎牙”という最強のレディアントデバイスだ。」

「その二つは今、何処にあるのですか？」

「“聖王の方舟”は整備すれば、すぐにでも使える筈だ。問題は“鉄碎牙”。

あれは主が見付かっていないからな。」

「そうですか……………」

するとリヴィアはいきなり立ち上がった。

「妾は“聖王の方舟”を運んでくる。」

それだけ言い残すとリヴィアは執務室から立ち去っていった。

STS編 第17話

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

STS編 第17話

リヴィア視点

〈第97管理外世界〉

先の一件から数日後。

聖王リヴィアは四騎士全員を率いて太平洋に浮かぶとても小さな島を訪れた。  
その島には樹も生えておらず、ただ短い草が規則正しく生えているだけだった。

聖王家の紋章が入った石碑……………此处だな。

リヴィアたちの目の前には聖王家の紋章が刻まれた大きな石碑が悠然と直立していた。

「我、聖王の血族なり。」

リヴィアが石碑に手を当てると石碑を中心に正方形の魔法陣が浮き出てきた。

「みんな、魔法陣の上に。」

全員が頷き、魔法陣の頂点の上に乗る。

刹那は北の位置に。

レムルスは東の位置に。

ティアナは西の位置に。

リーネは南の位置に。

全員が東西南北についた時、石碑が光った。  
石碑が動き出し、石碑の下に地下へと続く階段が出現した。

「これが……………」

地下に安置されていた物体を見た四騎士全員が驚嘆の声を上げた。

「そっだよ。」

『聖王のゆりかご』に対抗するために先代たちが造り上げた兵器

……………

「ウラヌス・アーク  
聖王の方舟。」

「聖王邸」

「『方舟』の修理は終わったのか？」

「今は自己修復機能をフル稼働させている。  
そのあとは再起動してメンテナンスしなければならん。」

「すぐに使えるわけじゃないのか……………」

「念には念を。」

「300年間も地下に封印されていた物体だから、問題があってもおかしくないからね。」

「ごもつとも。」

会話が途切れると同時にリヴィアの元に通信が入って来た。

「聖王陛下、機動六課の獅子堂 奏がいらっしゃっています。」

「何でも聖王陛下に頼み事があるそうです。」

「頼み事？」

「一体、私に何を頼みに来たんだろ？」

「まあ、無下に追い返すわけにもいかないし……………」

『詳しいことを聞きたいから、執務室まで案内してあげて。』

『はい。』

しばらくすると奏を連れたリズがやって来た。

「突然のご訪問失礼いたしました、聖王陛下。」

奏は礼儀正しく挨拶した。

「それで要件は？」

「現在、六課に保護されて少女の事をご存知ですか？」

「ああ。」

「実は……私はその少女の保護責任者になりたいと思っています。そこで聖王陛下には後見人になって貰いたくて……」

「別に妾でなくても管理局に頼ればいいだろう？」

「私個人は管理局を信じていません。」

奏は堂々と爆弾発言を投下した。

うわ………こんな場所で堂々と……

「なら、なぜ管理局で働いている？」

「私はただ……はやてちゃんに恩返ししたかっただけです。  
それではやてちゃんの手伝いをしていたら、いつの間にかエースに………」

奏は自嘲するような笑みを浮かべながら、語った。

「じゃあ、なぜ管理局の事を信用していないのだ？」

「それは私が“二代目エース・オブ・エース”と呼ばれるようになった頃に遡ります。」

奏はゆっくりと経緯を話し始めた。

奏が“二代目エース・オブ・エース”と称されるようになって数日後。

奏は不意に「初代のエース・オブ・エース」の事を知りたくなった。

そして、奏ははやてから『高町 なのは』の存在を耳にした。

しかし、管理局のデータベースでナノハの最後の任務のことは綺麗

さっぱり削除されていた。

その事を不審に思った奏は相棒のイクシオンを使って管理局のデータベースをハッキングした。

そして、管理局の闇を知ってしまったのだ。

「なるほど……しかし、よく捕まらなかったな？」

黙って聞いていたレーヴエは問い掛けた。

「ミゼット提督の庇護下に入ったので大丈夫でした。」

ミゼットの庇護下にか……確かに管理局の中では一番安全な場所だね。

「話を戻そう。」

お前はその少女を養女に迎えるつもりか？」

「はい。あの子がそれを望むなら。」

「……………」

リヴィアは少し考え込んだ。

「後見人になるのは了承するが………養女に迎えるのは了承できない。」

「後者の方の理由を伺っても？」

「六課で保護している少女は妾の娘のような者だ。そう簡単に許可することはできない。」

「聖王陛下の娘？」

そうか・・・六課の人間にはまだ話してなかったな。

「あれは我が姉、オリヴィエの遺伝子を元にして生み出された者だ。血縁関係的にあの少女は妾の娘になる。」

「なら、どうすれば許可してくれますか？」

奏の言葉にリヴィアはニツコリと微笑みながら、一本の刀を取り出した。

そして、その一本の刀を奏に渡した。

鞘は薄汚れており、中の剣も美しい銀色の光を放つが、刃こぼれしており、かなり年季が入ったものであることは一目見ただけでわかる。

しかし、その剣に内包されている魔力は桁違いだった。

「このレディアントデバイスと呼ばれる特殊なデバイスでな。

魔導書のように担い手を選ぶ。

このデバイスの封印を解く事ができたら、養子縁組の件も承認しよう。」

「わかりました！！」

「それと……………少し待っておれ。」

リヴィアは机の棚から一枚の書類を取り出し、羽ペンで何かを書いた。

そして、その書類を丁寧に丸めて青い紐で留めた後、奏に渡した。

「あの………これは？」

「妾の署名入りの独立行動許可書だ。

これがあれば、部隊に縛られることなく行動することができる。」

「あ………ありがとうございます……！」

奏は深く深く御辞儀した。

「良かったのか？」

奏が去った後、レーヴェはリヴィアに問い掛けた。

「何が？」

「あの子に渡したレディアントデバイス………あれは“鉄碎牙”だ

る？」

「そうですよ。」

守りたい人間が使うと最強の力を発揮するという最強のレディアントデバイス“鉄砕牙”。」

『てっさいが  
鉄砕牙』

大昔に最強と謳われた大妖が使っていた剣。

守りたいものを持つ者を担い手にし、最強の力を発揮する。

その力は一振りで百の軍勢を薙ぎ払い、一振りで百を厄災を振り払うと言われている。

「あの少女の姿がかつての私のようだったから………きっと封印を解けると思う。」

「まあ、リヴィアがそう言うなら俺は何も言わないがな。」

ふふ♪期待しているよ？二代目エース・オブ・エース、獅子堂奏♪

ちなみに、この一件のあと、奏は少女―ヴィヴィオから「かなでマ」と呼ばれることになったという。

## STS編 第17話（後書き）

中々更新しなくて申し訳ありません。

テストやらモンハンに追われて少し多忙だったので……………

STS編 第18話 地上本部襲撃

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

STS編 第18話 地上本部襲撃

〜聖王邸〜

いつもは賑やかな聖王邸だが、公開意見陳述会開催に伴いピリピリした空気が流れていた。

執務室には四騎士だけでなく、『聖王騎士団』の副隊長陣も集まっていた。

『聖王騎士団』とは……  
四騎士がそれぞれ隊長を務め、能力によって引き抜かれた精鋭の騎士団。

命令権は聖王にあり、他の人では騎士団を動かす事ができない。

「管理局の高官が勢揃いする公開意見陳述会。

スカリエツィたちはこれを機に襲撃して来るだろう。」

「ですが、僕たちには関係ないのでは？」

「リーネの言うことも最もだ。

だが、同盟関係を結んでいる以上無視できん。  
すまないが、仕事だと思って割り切ってくれ。」

リヴィアは少し苦笑いしながら、そう言った。

「ディオ、メル、焰、暦。

お前たちは聖王教会の守護を任せる。」

「……はい！！」「」「」

リヴィアに名前を呼ばれた四人は元気よく返事した。

ディオ、メル、焰、暦の四人はかつて違法研究所からリヴィアが連れ出した子供たちだ。

アタクシアの中でもトップに躍り出る実力のため、聖王騎士団の副隊長の座についている。

「指揮官はメル、その補助として曆教会の守護は任せたぞ？」

「お任せください、聖王陛下。」

「クイントは先に現地向かっている。アタラクシアはシルメリアとなのはが固めている。

我々も現地に向かうぞ！！」

「「「「YES MY load！！」」」」

リヴィアの号令に四騎士は敬礼で返した。

## クイント視点

先に公開意見陳述会開催場所である地上本部に到着したクイントはギンガとスバルと話していた。

「あなたたち……………相変わらずよく食べるわね。」

クイントは少し呆れたような、懐かしむような感覚で呟いた。

まあ、私も他人から見れば大食いだったけどね。

「だって、これくらい食べないとお腹が空いて動けないんだもん。」

「それにお母さんもいっぱい食べてたでしょ？」

「今は戦線に出ることも少ないから、普通の人と同じぐらいよ。」

クイントの仕事は主にアトラクシアの子供たちの世話である。

大人が極めて少ない聖王邸では、リズやクイントのような年長者が重宝されるのだ。

『クイント、着いたよ。』

『わかりました。一旦、そちらに合流します。』

「陛下たちが到着したみたいだから、私も自分の持ち場に行くわ。」

そう言い残すとクイントは合流予定地点に急いだ。

しかし、角を曲がった所でクイントは足を止めた。

「シルフ、出てきて。」

ターコイズの指輪が光り輝き、シルフの三姉妹が召喚された。

「どうかしましたか？ クイント。」

「ええ、少し頼み事。」

ギンガとスバルの守護について欲しいの。」

「ギンガとスバルって、クイントの娘だよね？  
わざわざ守る必要がある？」

シルフ三姉妹の三女はめんどくさそうな表情を浮かべた。

「あの2人の身体は少し特殊なの。だから、敵が狙って来るかも知れないの。」

「わかりました。では、私と三女でこっそりと御守り致しましょう。」

「お願いね。」

長女と三女は頷くと姿を消した。

風を司るシルフにとって姿を消すことなど雑作もない。

何も……なければ、いいけど………

クイントは心の中でそう願った。

しかし、その願いが叶わない事を誰も知らない。

奏視点

機動六課の獅子堂 奏はフェイトとも地上本部の内部警備に当たっていた。

「此処も異常なし。中ではもう会議が始まってるかな？」

《予定通りなら、五分前に開催されている筈です。》

奏の首に掛けられているイクシオンが返答した。

本来なら、内部警備にデバイスは持ち込みは不可能だが、奏は聖王リヴィアの権限によってその対象にはならない。  
さらに、奏の腰には古びた日本刀が携えられている。

このまま何もなければ、嬉しいんだけど……………

そう言えば、ヴィヴィオは泣いてないかな？

全員がピリピリした雰囲気なのに関わらず奏は変わらずマイペースだった。

奏にとっては管理局の存亡よりも娘候補のヴィヴィオのほうが大切なのだ。

「心配なんですか？」

少し上の空になっていた奏に蒼い長髪が特徴的な男性が声を掛けた。

「えっと……………貴方は？」

「僕はリーネ。聖王邸四騎士の1人、蒼穹の騎士のリーネだよ。」

「はじめまして、獅子堂 奏です。」

奏とリーネは互いに握手した。

「でも、四騎士の1人であるリーネさんがなぜ此処に？」

聖王教会は今回の警備には参加しないはず……………

「陛下の命令だね。」

僕たちも警備に参加することになったんだ。」

「聖王陛下が？」

「ああ。」

数時間後……………

数時間の間、奏とリーネは一緒に地上本部を警備していた。

「中もそろそろ終わりだな。」

「簡単に終われば、良いのですが……………」

ドゴーンッ！……！

凄まじい轟音が響き渡った。

やっぱり……………そう簡単には終わらせてくれないか……！！

「イクシオン……！」

「ブリーユナク……！」

2人は轟音の意味を直ぐ様理解し、相棒に呼び掛けた。  
命令を受けた二機は機動し、奏はバリアジャケットを纏い、リーネは騎士甲冑をその身に纏う。

「やっぱり襲ってきましたね。」

「ああ。でも、不運だね。」

聖王邸のトップが集合している時に襲撃するなんて……………」

ピカッ！！！！

一瞬だけ視界が光に覆われた。

## アクエリオン視点

聖王の参加に伴い必然的に警備に参加することになったアクエリオンは地上本部の正面玄関に威風堂々と構えていた。

「まったく……………こんな雑魚をいくつも集めた所で……………」

アクエリオンは手を天に掲げて足元に古代ベルカ式の魔法陣を展開した。

「勝てる筈がないのに」

“グランドクロス”――！

アクエリオンが魔法を発動させると多数のガジェットは黒いロザリオによって串刺しになり、爆散した。

「あはははは」弱い――弱いよ――！

「アクエリオン、遊び過ぎです。」

高笑いするアクエリオンに上空から降りてきた水銀燈が注意した。

「しょうがないでしょ？」

私だってストレスが溜まってるの――！

アクエリオンは魔力弾でガジェットを撃ち抜いていく。

「“フェザーレイン”――！！！！」

水銀燈も『墮天使の翼』から黒羽の弾丸をスコールのように浴びせさせる。

さあ、研究の過程で溜まってるストレスを発散させてもらおうよ――！！

「断罪の剣!!」

腕に魔力を集中させて剣のような形を形成する。

そして、その剣でAMFなどお構い無しにガジェットを切り裂いていくアクエリオン。

うーん………いまいち切れ味が納得いかないな。

AMFで若干弱ってるのかな？

帰ったら、少し改良が必要ね。

「アクエリオン!! 考え事は後回しにしてください!!」

「はいはい。」

アクエリオンと水銀燈は剣を振るい、ガジェットを撃破する。

その光景を目撃していた局員たちは『天衣無縫の騎士』と2人を呼んだとか呼ばなかったとか。

STS編 第19話 古き大妖の牙の覚醒

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

STS編 第19話

イグニス視点

烈火の剣精イグニス「ドラグーンは同行者であるゼスト」グランガイツと共に地上本部に向かっていた。

「地上本部の方のガジェットはほとんど撃墜されてるようだな。」

「本<sup>マジ</sup>気かよ!？」

アークの姉さん、やり過ぎだよ。あんたが本気出したら、勝てる奴居ねえじゃねえか!!

イグニス（アギト）は心の中で叫んでいた。

イグニスの位置はアクエリオンが戦闘しているが慣れ親しんだ上司の魔力を感じ取ることなどイグニスにはどうということない。

ちなみに、イグニスにとってアクエリオンは育ての親である。

生まればかりで何もわからないイグニスを一人前の融合機に育て上げたのがアクエリオンである。

そのため、イグニスはアクエリオンに頭が上がらない。

「むっ!!」

ゼストは急に加速を止め、足を止めた。  
それに従い、イグニスも足を止める。

ゼストとイグニスの前に血のように紅い西洋剣を握り締めた1人の女性が立ちはだかった。

《久しいな、イグニス。》

「ああ、レヴァンティンの旦那。300年振りだな。」

「知り合いか？」

「知り合い………というか私のロードだよ。」

「そうか……………」

「なあ、レヴァンティンの旦那。助けて欲しい人が居るんだ。」

【ふむ。状態を見ない限り助かるという保証はないが、同胞の頼みを無下にせん。】

「サンキュー！！　レヴァンティンの旦那！！」

レヴァンティンの返答を聞いたイグニスは跳び跳ねて喜んだ。

「ゼストⅡグランガイツ。

貴方は地上本部に何をしに向かうつもりですか？」

今まで黙っていた刹那が口を開いた。

しかし、いつものぼわぼわしたような表情ではなく、戦士のような表情を浮かべていた。

「俺の友人……レジアスに話を聞きに行くだけだ。」

「その必要はありません。

我らが主はレジアスと同盟を結んでいます。

後日話し合いの場を設けますので、此处は引き下がって貰えませんか？」

「その言葉に偽りはないか？」

「我らが主、聖王リヴィアスフィールの名において誓いましょう。」

「……………わかった。信じよう。」

「ありがとうございます。」

刹那は感謝の言葉を述べた。

「アギト…いや、イグニス。お前はこれからどうするのだ？」

「私はロードに着いていくよ。」

「そうか……………では、此处でお別れだな。」

「ああ。旦那やルルーと過ごした日々、楽しかったぜ。」

イグニスの言葉にゼストは少し頬を緩めた。

そして、連絡先を伝えたゼストは地上本部とは真逆の方向に飛んでいった。

「ふ……………緊張した〜。」

張り詰めていた雰囲気途切れたので素の状態に戻る刹那。

「さてと……………早速で悪いけど、手伝って貰うよ、イグニス？」

刹那はイグニスに手を差し出した。

「おうよー!!」

そして、イグニスは小さな手を刹那の手に重ねた。

「ユニゾン・イン！！！！」

久遠視点

地上本部の東門で久遠は迫り来るガジェットをすべて薙ぎ払っていた。

「弱い……………」

九本のしっぽの内一本だけを器用に動かせてガジェットを叩き潰す。

弱いのに数が多いから……………面倒。獣形態になったら……………楽。

でも……………リヴィアが怒る……………

久遠はとてもめんどくさそうに迫り来るガジェットの大群を蹴散らしていく。

ちなみに、獣形態にならないのはリヴィアから目立ちすぎるという理由で使わないように厳命されてるからだ。

ドゴーンッ！！！！！

久遠がガジェットを食い止めていると地上本部から爆音が響いた。  
地上本部から黒い煙が立ち上っていた。

「突破………された？」

その事に危機感を覚えた久遠は幼い少女の姿から絶世の美女の姿に変えた。

『リヴィア！！ 地上本部が！！』

『こつちでも確認したよ。どうやら隠密性の高い戦闘機人が居たみたい。』

『どうしますか？』

『久遠はそのまま現在地でガジェットを食い止めて。』

中には煉が行って貰うから。』

『了解。』

ふん………煉が追撃に行ったのか。

中に侵入した戦闘機人の敗北は絶対だな。可哀想にな。

煉に見つかったから……………

久遠は心の中でこれから煉と戦闘するであろう戦闘機人たちに同情した。

煉視点

〔地上本部 地下〕

「こそそと地下から潜入とは……………」

「お前は……………何者だ？」

地上本部の地下空間で銀色の髪の毛が特徴的な戦闘機人と相対していた。

「私は煉。聖王陛下に仕える二尾の妖猫。  
覚えてくれなくて結構ですよ？」

貴女は……………此処で死ぬのですから。」

すると、煉は2mはあるであろう黒い刀身が特徴的な大剣を取り出した。

2人が動き出すのはほとんど同時だった。

しかし、2人の姿が交錯する瞬間に煉の姿は陽炎のように消え失せた。

次の瞬間には戦闘機人は地面に倒れていた。

「馬鹿だな」。遠距離戦が専門の私が剣なんて使っわけがないのにね。」

銀髪の戦闘機人のすぐ後ろには身体に不釣り合いなライフルを抱えた煉が立っていた。

煉の特技は幻術。煉はそれをフル活用して相手の心を決るような精神攻撃を与える手法を好む。

今回は闘いを楽しむ暇がなかったので、瞬殺しただけである。

『此方、煉。侵入してきたであろう戦闘機人を一体捕獲しました。指令を、聖王陛下。』

地上本部の外で全員に指示を出しているリヴィアに連絡をとる煉。

『ご苦労様。今、そっちにクイントの娘が向かってるから、引き渡して。』

その後、六課に向かつて。』

『？　なんで？』

『機動六課が戦闘機人の襲撃を受けてるの。』

奏がかなり怖い形相で駆け抜けて行ったけど……………」

『うん、わかった。』

リヴィアに了承の意を伝えると煉は思念通話を切断した。そして、ほとんど同じタイミングでギンガが到着した。

「ようやく来たね。」

この戦闘機人の護送をお願い。」

「わかりました。」

？？　上手く姿を消してるけど……………あれってクイントが契約してるシルフの次女だよね？

何でこの娘に……………クイントが護衛をお願いした時としか考えられないか。

「私は次の仕事があるので失礼します。」

そう言い残すと煉は転移魔法で姿を消した。

## 奏視点

騒がしい地上本部から随分と離れた静寂な夜空を二代目エース・オブ・エースが猛スピードで駆け抜けていた。

その顔にはいつもなら見せないような焦りの表情が浮かんでいた。

奏の頭の中は愛娘（候補）のヴィヴィオの事で埋め尽くされていた。

「急がないと……ヴィヴィオが……！」

何で気付かなかったんだろう……予言からして敵の狙いはヴィヴィオだってわかったのに……

私は……馬鹿だ……！！

奏は自分を罵りながら、夜空を駆け抜けて行く。

本来なら、任務放棄という罪状が掛かるのだが、リヴィアスフィー  
ル聖王陛下の庇護下にある奏にはそんなことは関係ない。

その時、奏の頭に直接話し掛けるような声が響いて来た。

―お前に守るべきものはあるか？―

在るよ。私のすべてを懸けても守り抜きたい人が。

不意に投げ掛けられた質問に戸惑いを覚えることなく、しっかりと答えた。

私には……今まで守りたいと思うものはなかった。信念すらも……

だけど、今は違う。今は守り抜きたいものがはつきりと……わかる。

―ふっ……―

“声”はそんな笑い声を上げた。

―良いだろう！―お前を主と認めてやろう！！

我が力を使ってお前の大切な者は守ってみせる！！―

すると、奏の腰に携えられている鉄砕牙が眩い光を放ち始めた。

思わず奏は足を止めた。

―さあ……我を抜け！！―

奏は“声”に従い、鉄砕牙を引き抜いた。

引き抜いた瞬間、鉄砕牙は古びた鉄剣ではなく、大きな三日月を描く大太刀に変化した。

「これは……………」

【我が名は鉄砕牙。最強のレディアントデバイスであり、お前の牙だ。】

「私の？」

【そうだ。それよりも急いだ方がいい。】

「っ！！ そうだった！！」

奏は鉄砕牙を抜刀したまま六課に急いだ。

六課は燃え盛る焰によって埋められていた。

「酷い……………」

奏は驚いたような表情を浮かべたが、すぐに真剣な表情に戻った。

「鉄砕牙、六課の火事を沈める事はできる？」

【お前がそれを望むなら。】

「わかった。」

奏は浮かんだ状態で鉄砕牙を高く掲げた。  
そして、目を閉じて集中力を高めていく。

鉄砕牙の刀身は嵐の如き風が唸り声を上げて逆巻いていた。

「風の……傷!!」

そして、鉄砕牙が纏った風を一気に解放した。  
奏の放った『風の傷』は海水を巻き上げ、六課の焰を鎮火していった。

「ヴィヴィオ!!」

結果を気にすることなく、奏は六課の隊舎の中に入って行った。

**S T S 編 第19話 古き大妖の牙の覚醒（後書き）**

ひさしぶりの更新になってしまい誠に申し訳ありません。

STS編 第20話

遂に目覚めた最強のレディアントデバイス

それ選ばれたのは二代目エース・オブ・エース

大妖の牙を以てすべての厄災を打ち砕け！！

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

STS編 第20話

ギンガ視点

奏が機動六課に到着する少し前。

ギンガは新たに現れた二体の戦闘機人と戦闘を繰り広げていた。

「はあ……はあ……はあ……」

ギンガは大きな瓦礫の影に身を潜めていた。

ギンガの相棒―ブリッツキャリバーはホイールが破損し、走ることはできない。

妹のスバルなら、固有武装の聖なる十字架による接近戦を思いつくのだが、残念なことにギンガは固有武装を所有していない。

「向こうはほとんど無傷。このままじゃあ………」

ドーンッ！

「きゃあっ！！」

突然、隠れ蓑にしていた瓦礫が爆発し、ギンガは吹き飛ばされてしまった。

ぐっ…………もう追い付かれたの？しかも、視界が歪む…………さ  
っきの衝撃で頭、打ったかも…………

ギンガは何とかして逃亡を図るが、瓦礫と瓦礫に左足が挟まれてしま  
い動けない。

ジャキッ！！

「ゲームオーバーッス」

ギンガに銃口が突き付けられた。

「あんたに恨みはないけど……………少し痛い目にあってもらっッス」

銃口の先にエネルギーが集束される。  
ギンガは覚悟して目を瞑った。

その時……………

「でえええいつ!!」

「ウエンディ!!」

何者がウエンディと呼ばれた戦闘機人を突進して突き飛ばした。

「セフィリア、さんじょうう」

ウエンディを突き飛ばしたのはクイントと契約を結ぶシルフの三姉妹の次女のセフィリアだった。

「いくらなんでも2対1は卑怯だと思うな。」

「お前……誰だ？」

「貴女たちので・き」

「はっ!! たった1人で何ができたよ!？」

短気な戦闘機人の女性がローラーを回転させてセフィリアに襲い掛かる。

しかし、セフィリアは動かず、その可愛い顔に細く笑むような笑みを浮かべた。

「ぐわっ!!」

突然、セフィリアに襲い掛かろうとした戦闘機人は地面にめり込んだ。

「馬鹿ですね。防御専門の私が単身で来るわけじゃないじゃないですか」

セフィリアが魔法を解除すると2人の人物が立っていた。

シルフ三姉妹が共通して持つ特殊能力は風を使い、相手に話しかけるというものだ。

『念話』や『思念通話』と違い、風を媒介にするため、宇宙空間に居ない限り連絡することができるのだ。

「クイントの詠みは正解だったようですね。」

「……………」

聖王陛下に仕える“不屈の四騎士”の二騎、蒼穹の騎士と黄昏の騎士がそこに立っていた。

「ノーヴェー!!」

「動くな。」

ウェンディが駆け寄ろうとするが、いつの間にか背後に回ったレムルスがカラドボルグを突き付けていた。

「少しでも動けば、その首を切り落とす。」

「っ!!!!!!!!!!」

凄い……………不意打ちとはいえ、一瞬で二機の戦闘機人を押さえ込んだ……………

「リーネ、こいつら……どうする？」

「聖王陛下に任せましょう。勝手に行動して怒られるのは勘弁願いたいですから。」

奏視点

奏は機動六課隊舎の中を右往左往していた。

「こつちも行き止まり………」

焼け落ちた瓦礫が奏の進行ルートを妨げ、思うようにヴィヴィオの下にたどり着くことができずに居た。

「イクシオン。残りのルートは？」

【No.5のみです。】

No.5………少し迂回しないといけないか………

【瓦礫を吹き飛ばせばいいのではないか？】

「ダメ。支柱が脆くなってるのに下手な刺激を与えたら、崩れてしまっ。」

せめてこの周辺の支柱の状態がわかれば……………そうだ！！

「イクシオン、エリアサーチで周囲の支柱の様子を探って。」

【もう終わってます。この周囲の支柱は比較的安全です。】

「さすが♪ “風の傷”！！」

安全であることを確認した奏は『風の傷』で瓦礫を吹き飛ばした。瓦礫を吹き飛ばした先は通路になっており、至るところにガジェットの残骸が転がっていた。

「か、奏さん！！」

「ヴァイスくん？」

奏が見つけたのは支給デバイスを握りしめているヴァイス「グランセニック」だった。

「奏さん、地上本部の防衛に行ってたんじゃないあ……………」

「六課が襲撃を受けてるっていう連絡を聞いて急いで戻ってきたの。ヴァイスくん、皆は？」

「シャルさんとザフィーラの旦那は六課の防衛に当たってたんですが……」

この有り様を見ると2人撃破されたかな……

「それ以外の皆はこの奥に？」

「ええ。………！！ 奏さん！！」

奏の後ろには三機の1型ガジェットが迫って来ていた。

「“風の傷”！！」

ヴァイスの警告を聞いた瞬間、振り返り際に鉄砕牙から“風の傷”が放たれた。

純粹な風の刃はAMFをもろともせずすべてのガジェットを藻屑に変えた。

「ヴァイスくん、私は奥の皆の様子を見てくるよ。」

「り、了解です！！」

最前線をヴァイスに任せて奏はより奥に向かった。

奥には機動六課のバックヤードスタッフやロングアチーのメンバーが勢揃いしていた。

当然、その中にはヴィヴィオの姿もあった。

「ヴィヴィオ!!」

「かなでママ」

奏が呼ぶとヴィヴィオはトテトテと奏に駆け寄って来た。

「大丈夫だった？」

「うん」怖かったけど、ヴィヴィオ、泣かなかったよ」

「そっか」偉いね。」

奏はヴィヴィオを頭を優しく撫でた。

「えへへ」

問題はヴィヴィオたちをどうやって聖王教会まで連れて行くこと？

その時、奏は異質な気配を感じた。

「その子とレリックを…渡して。」

奏の背後に立っていたのは、薄い紫色の髪の毛の少女とリヴィアと戦ったことがある黒い鎧の召喚蟲が立っていた。

黒い鎧の召喚蟲………聖王陛下の報告にあった召喚師か………

「それはできないよ。

ヴィヴィオは大切な私の娘だもん。」

奏は鉄砕牙を構えた。

『イクシオン。ヴィヴィオにいつでも転移魔法が発動できるようにしておいた。』

《転移先はどうしますか？》

『孤児院アタラクシア。』

あそこなら、スカリエッティも手を出せないはず。』

《了解しました。》

「ガリユー。」

ルーテシアの命令を受けたガリユーが奏に襲い掛かってきた。奏は皆を守るように前に立ち、ガリユーを迎え撃った。

カキンッ！！ カキンッ！！ カキンッ！！

鉄砕牙とガリユーの爪が衝突し、火花を散らす。

「切り裂け…“風の傷”!!」

「!!!!!!」

烈風の刃がガリユーに襲い掛かるが、持ち前の俊敏さを生かして回避した。

【さすがに素早い相手には分が悪いな。】

「うん。でも………負けるわけにはいかない!!」

再び鉄砕牙と爪がぶつかり合う。

「はあああああつ!!!!!!」

気合いを籠めて一閃。

しかし、爪によって防がれる。

奏はすぐさま距離を取る。

しかし、その時に不運な事故が起こった。

「しまった!!」

ひび割れた窪みに奏の足がぴったりと嵌まってしまったのだ。

ズブッ

肉を貫くような聞きたくない音が響いた。

ガリユーの爪は奏の心臓付近を貫いていた。

ガシッ!!

気を失いそうになる痛みに負けず、奏はガリユーの腕を離さないようにしっかりと掴んだ。

奏は不適な笑みを浮かべた。

「いくら素早くても……動きを止められたら、避けられないよね？」

「!!!!!!」

「遅いよ!! “風の傷”!!」

動けないガリユーに向けて『風の傷』を最大威力で放った。

ガリユーは吹き飛ばされ、壁に叩きつけられるが、同時に奏は膝をついてしまった。

「かなでママ!!」

ヴィヴィオがすぐに駆け寄る。

奏の純白のバリアジャケットは貫かれた箇所から流れ出る自分自身の血で赤く染まっていた。

血は勢いを緩めることなく奏の身体から流れ出る。

「イク……シオン。転移魔法の準備はできてるね？」

【はい。ヴィヴィオだけではなく、此処にいる全員を転移させることができます。】

「さすが……………」

奏は最後の力を振り絞って自分を除く全員に転移魔法を発動させた。

「かなでママ？　かなでママ！！！！」

ヴィヴィオが声をかけるが、奏はいつものどおりの優しい笑みを浮かべた。

「転送！！」

転移魔法陣が展開され、機動六課に残っていた非魔導師たちは次々と聖王教会に転送させられた。

【……………お前の意思はしかと見せてもらった。暫し、眠れ。】

鉄砕牙の言葉を聞く前に奏は倒れてしまった。

すると、鉄砕牙が眩い光を放ち、徐々に人の形を作っていく。

レディアントデバイスの最大の特徴である擬人化。

そこに立っていたのは、美しい銀髪の青年であった。

「虚無に……沈め、黒龍波。」

鉄碎牙は右手で腰に差していた剣を抜き、竜の形を取った黒い波動を放った。

## STS編 第21話

魔法少女リリカルなのは

現代に蘇りし創聖の聖王騎士

## STS編 第21話

リヴィア視点

公開意見陳述会から一夜あけた翌日。  
地上本部は致命的な打撃を受けるが、レジアスの手腕によってすでに立ち直っていた。

聖王教会に被害はなかったものの奏が逃がした機動六課の傷付いた隊員が運び込まれていた。

聖王リヴィアは獅子堂 奏の病室を訪れていた。

「奏の様子はどうか？」

「峠は抜けたけど……あまり思わしくないよ。  
心臓付近を貫かれたから、血液が足りないんだ。」

機動六課のメンバーの中で一番の重傷なのが奏である。

聖王教会の騎士が救助に到着した時、奏は致死量寸前の血液を流していた。

そのため、聖王教会最高の医療官である刹那が付きっきりで手当をしているのだ。

「それにしても……この子を見てると管理局の頃の自分を思い出すよ。」

「自分を犠牲に他人を助ける。聞こえはいいけど、自分の命を省みてないようなものだね。」

「そうだね。」

正確に言えば、この子はヴィヴィオを助けるために……母親と娘の関係のようなものだけだね。

「まあ、どっちにせよ目を覚ますのはもう少し後になりそう。」

「ごめんね、負担掛けちゃって……」

「別に気にしないよ。」

「なら、奏のことは任せたよ。」

リヴィアはそれだけ言い残すと奏の病室から出ていった。

「リヴィア。」

「レーヴェ？　どうかしたの？」

「いや、夜天の王が奏に会わせろって五月蠅くてさ。  
カリムに任せて逃亡して来たんだよ。」

「大方、警備を途中で投げ出したことに対するお説教だろうね。」

「そんなことを私がさせると思う？」

「いや。」

レーヴェは少し苦笑いを浮かべた。

「奏の活躍で『ゆりかご』の始動キーであるヴィヴィオは守られた。  
これで『ゆりかご』が浮上することはないんだよね？」

レーヴェの言葉にリヴィアは首を横に振った。

「まだカリムには話していませんでしたが、『ゆりかご』を復活させる方法は他にもあるの。」

「なんだって!？」

レーヴェは驚いた。

「『ゆりかご』を復活させるもう1つの道具……その名は《<sup>マスタ</sup>聖王の鍵<sup>！キ</sup>》。」

「聖王の……鍵？」

【聖王の鍵（マスター・キー）】

リヴィアスフィールドやオリヴィエが生まれる以前に創造された遺産。

かつて、『ゆりかご』の力を欲した者がいた。

しかし、『ゆりかご』を動かすことができるのは聖王のみ。

そこでその者は当時の聖王を拐い、その聖王の血肉を使って一本の鍵を創造した。それが《聖王の鍵》である。

その者は『聖王の鍵』を使い、古代ベルカを統一しようとした。

しかし、その野望は《聖王の方舟》とガレアの王《冥府の炎王イクスヴェリア》によって無残に打ち碎かれた。

「おそらくスカリエッティは聖王の鍵を手に入れていると思う。」

「どうしてだい？」

「ヴィヴィオを拐うのに失敗してから、すでに数日が経過している。いくら聖王教会でも、スカリエッティの戦力をすべて投入すれば、ヴィヴィオだけを拐うのは容易いことだと思うの。」

「そうか……………」

「そう言えば、リーネとレムルスが生け捕りにしかけた戦闘機人はどうなったの？」

「地上本部に潜入した戦闘機人が回収して行つたよ。」

「そうですか……………あつ。」

「？」

「レジアス中將に連絡するのを忘れてた……………」

## フォルテツシモ視点

一方、リンフォースⅡフォルテツシモは聖王教会系列の病院の一室にいた。  
目的は戦闘機人の戦闘によって負傷したシャマルとザフィーラに見舞いである。

「…………… 久しいな、青き狼。」

フォルテツシモが声を掛けるが、ザフィーラは何の反応も示さない。

「私が助けに行くのが早ければ、お前はこんな酷い怪我を負うことなどなかったのにな。」

フォルテツシモは悲しそうな表情を向けた。

「お前は休んでおけ。お前と湖の騎士が目覚めるまでに……………この事件を解決しよう。」

そう言ってフォルテツシモは踵を返した。

「今はゆっくり休め。そして……………あの優しい主を守ってやってくれ。」

そう言い残してフォルテツシモが立ち去ろうとした時、病室の扉が開いた。

「えっと……どちら様ですか？」

扉を開けたのはシグナム、ヴィータ、はやて、リインの4人だった。その内、フォルテッシモに質問したのはリインである。

迂闊だったな。どうやら闘いの勘が鈍っているようだな。

「聖王陛下に仕える騎士だ。聖王陛下に様子を見てこいと頼まれただけだ。」

「そうだったのですか……」

「さて、私にも仕事があるから、帰らせてもらおう。」

フォルテッシモが今度こそ病室から退室しようとした時

ガシッ

フォルテッシモの腕をはやてが掴んだ。

「久しぶりに会えた主に挨拶もなしかいな。」

はやての言葉にフォルテッシモは固まった。

「な、何のことでしょうか？」

「しらばっくれても無駄やで。さっきの独り言はきちんと聞かせてもらったで。」

ダメか……………まさかさっきの独り言が聞かれていたとはな。  
仕方ない。正直に話しますか。

「……………お久しぶりです、主はやて。」

はやてに向かい合ってフォルテツシモはそう言った。

「……………」

はやては無言でフォルテツシモに抱き付いた。  
フォルテツシモの身長の方が低いため、はやてがしゃがむ体勢にな  
っているが……………

「もう貴女とは会わないつもりだったのですが……………運命の神様は  
許してくれないようです。」

「当たり前や。主を悲しませる奴の言うことを聞いてくれる訳ない  
やん。」

はやての言葉にフォルテツシモは苦笑いを浮かべた。  
そして、戸惑う小さなラインに目をやった。

「約束を……………守ってくれたんですね。」

「リインフォースとの約束やったからな。」

「主はやて、私のことは“フォルテツシモ”とお呼びください。  
聖王邸では、フォルテツシモと呼ばれているので。」

「？ 何で、聖王邸に？」

「つか、何でお前は存在してられるんだ？」

フォルテツシモははやてたちに今まであつたことを話した。

「古代ベルカの王様って何でもありやな。」

「いえ、リヴィアスフィールドがかなり特殊なだけです。」

「あいつはロストログアに選ばれた聖人だからな。」

「そのおかげで私は生き永らえることができましたのですが……………  
そう言えば……………スカリエッティとの決戦に聖王教会が参戦するのをご存知ですか？」

フォルテツシモの言葉に四人は驚いたような表情を浮かべた。  
フォルテツシモが漏らしたことは四人としてはかなり予想外なことであるらしい。

「ど、どういうことや！？聖王教会が参戦するなんて話聞いてないで！？」

はやては狼狽した。

「スカリエッティは現聖王教会最高権力者の従姉妹に手を出した。聖王教会が参戦する理由には十分です。」

ぴんぽんぽん

『聖王邸メンバーは今すぐ執務室まで集合してください。  
繰り返します。聖王邸メンバーは——』

聖王邸メンバー全員に召集命令が下った。

「すいません、我が主。この事件が終わったら、ゆっくり話しましょう。」

フォルテッシモはそれだけ言い残すとザフィーラとシャルマルの病室をあとにした。

く聖王邸 執務室く

先の召集命令に従い、聖王邸全メンバーが執務室に集結した。

「全員集まったな。」

全メンバーが揃ったことを確認したリヴィアが口を開いた。

「聖王教会上層部と協議した結果、『聖王の方舟』の使用許可が下りた。」

メンバーはリヴィアの言葉にどよめいた。

『聖王の方舟』を使うということはリヴィアも上層部も超本気であるということと同義である。

「よって、聖王邸メンバーは『聖王の方舟』を活動拠点に今回の事件の根源、スカリエッティを潰す。」

ふふふ♪ 私の肉親に手を出したからには只じゃおかないわ。」

リヴィアは黒い笑みを浮かべた。

「『聖王の方舟』の浮上は明日の明朝。遅れた者は置いていくからな!」

—— Yes . My load ! ! ——

全員が元気よく返答した。

「聖王陛下。」

そんな中、1人のメンバーが手を挙げた。

「機動六課のメンバーはどうするのですか？」

「向こうの部隊長と私は馬が合わなくてな。別々に行動することになる。」

事情を知っている者たちは苦笑いを浮かべた。

馬が合わないのではなく、八神はやてが何も話してくれないリヴィアを一方的に嫌っているのだ。

リヴィアははやてたちを巻き込みたいために何も話さない。はやてはその事を知らないで一方的に嫌っている。

そのせいか、聖王邸メンバーははやくにあまり良い印象を持っていない。

「だが、向こうの戦技教導官は眠ったまま。

気が向いたら………フォワードの四人を鍛えてやってくれ。」

リヴィアは椅子に座り、頬杖をつきながら言った。

これ言葉によってフォワード四人には地獄のような訓練が課せられるのだが、誰もそのことを知らない。

スカリエッティの夢が潰えるのはそう遠くはないだろう。

STS編 第21話（後書き）

なんかもうグダグダ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2373/>

---

魔法少女リリカルなのは 現代に蘇りし創聖の聖王騎士

2011年9月28日21時44分発行